
バカとテストと転生者

佐遊樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと転生者

【Nコード】

N6143K

【作者名】

佐遊樹

【あらすじ】

有野悠夜は転生者。原作キャラ達と騒々しい日常を満喫しながらも、彼は己の存在意義に苦しんでいた。暗い過去を背負い、彼はこの世界で何を為すのだろうか。……とてもマトモなことはしそうにないが。

【「バカとテストと召喚獣」で、オリ主転生モノです。主人公変態です。キャラ崩壊多数です。嫌な方はかさずブラウザバックお願いします】

主人公設定（改訂版）（前書き）

ビックリするほどネタバレです。

主人公設定（改訂版）

主人公

名前
ありの
有野 悠夜
ゆうじや

身長

170センチ

体重

65キロ

特技

料理・勉学・ケンカ

総合得点

高橋先生の特訓により、5000点〜7000点に。最終的には9000〜10000点を予定。

得意科目

全て

性格

常に無表情だが、時々笑う。そのギャップに萌える（？）
（人多数）
自分の気持ちを素直に伝えるのが苦手。

家族などの特定のキーワードで自身の過去を抉られると発狂状態になる。

第16章でPTSD（心的外傷後ストレス障害）であることが発覚。
第38章ではトリガーハッピーのような状態に。

容姿

深い紺色の髪に赤目。

その他

両親は飛行機事故で死亡。朝ごはんなどは半同棲相手を作っている。

召還獣

漆黒の衣装に身を包んでいる。

固有技能として複数の武器を持ち、戦闘中に選ぶことが可能。

ある人物をモデルにしているとか。

武装については威力が大きくなればなるほど点数消費も激しい。☐

大和型戦艦^{シップ・オブ・ザ・ヤマト}は単発で500点以上持つていく。

女性関係

霧島翔子、高橋洋子と関係を持っている。

主人公設定（改訂版）（後書き）

最後の欄についてのツッコミは禁止で
言い方についてツッコンだら負けです。

〈開幕〉第0章 有野悠夜、22歳でへり落下事故に巻き込まれ死亡。(前書き)

今回は転生する前です。超ありきたりなんで、是非読み飛ばしてください。

〈開幕〉第0章 有野悠夜、22歳でヘリ落下事故に巻き込まれ死亡。

さて、もし君が人の死体を見たらどうする？

……まあ、普通なら発狂するだろう。

しかし俺は違う。俺はとある有名私立大の医学部4年生。人体解剖もしたことがあるし、グロイことには慣れなければやってられない。

だからこんな風に冷静に解説できるのか？ いや、さっきはホント酷かった。泣きながら喚いて喚いて。お前は何処の餓鬼だよ、というくらい。

……なぜなら、今俺の目の前にある死体は。

その千切れた右腕は。

剥がれた顔の肌は。

地面にポトリと落ちた眼球は。

紛れもなく、俺のものなのだから。

有野悠夜、22歳でヘリ落下事故に巻き込まれ死亡。

趣味は読書だった。といっても医学の専門書など、我ながらクソマジメな本ばかり。

そんなクソマジメな俺は、最期に小さな女の子を助けた。

その日。書店を出た俺は、人々が空を指差していたのでつられて見上げ。

……黒煙を撒き散らしながら、地面に落下してくるへりを見た。
無論その場からダッシュで退避。

ちなみに懐には「バカとテストと召喚獣」の4巻。最新刊だ。
余談ではあるが、俺が生涯の中で一番読み直した本は間違いなくバカテストだ。

何で読み始めたのかすら忘れたが、この本だけは娯楽として楽しめた。もう人生の一部かもしれない。

そして、ようやく安全地帯に辿り着く、というところで。

俺の後ろで、幼稚園児ほどの少女がこけた。

まさしく一瞬のことで、正直俺もあまり覚えていないのだが俺はその時、少女の腕を掴んで全力で投げ飛ばしたらしい。

俺よ、流石に幼女相手に全力投擲はないだろう。

なんて思ったりもしたが、直後俺がへりに押し潰されたのを考えると正解だったのだろう。

そしてヘリが爆発、俺は炎に焼かれ人の原型を留めなくなった。

というところで、時間が止まっている。

救急隊員の人も、野次馬も、全てが停止状態。

「いや……時間停止現象に出くわせるなんて俺はツイてるのか」

ヘリに落ちてこられた時点でツイてないが。

「おおありのよ、しんでしまつとはなさけない……」

「ん？」

と、この止まった世界で、俺と同様に動く者が約一名。

なんか頭には緑色の葉でできた冠を被って、真っ白な衣装に身を包んでいる。顔と声からして男だ。

「……誰だ？」

「おおありのよ、しんでしまつとはなさけない……」

なるほど、聞く耳持たずか。

「……ふっ、仕方ないな」

「おおありのよ、しんで《ビュオンツ！》ヒイッ！……」

時間が止まっても、周囲の物体には干渉できるらしい。

俺は落ちていたヘリのプロペラの一部を掴んで、そいつへと投げた。

「む、なんか力強くなってるな、俺」

「貴様、神に向かってプロペラを投げるとは痛いッ！」

瞬間、俺はそいつへの距離を詰め脳天にチョップを食らわせた。
頭を抑え、涙目で俺をにらむ男。

「で、神様とか言ったな？」

「うん？ まあそうだが」

俺は足元のアスファルトを、思いっきり踏みつけた。

ボゴッ！

瞬間、アスファルトにクレーターが一つ出来上がった。

「これはどういうことだ？」

「さ、さあ？」

しらばっくれる神様（自称）に、俺は適当な仮説を立ててみる。

「まあ、周囲が止まっているのに動いてるって事は、今の俺は光速を越えてるんだろうしな。身体能力強化は、恐らく今の俺が幽霊みたいなもんだから……あれか、『人間』という枠組みに囚われないのかもしれない」

「ッ、中々切れるやつじゃないか」

ニヤリと邪悪な笑みを浮かべる神様。

「で、お前はアレか、死んだ人の前には必ず現れるのか？」

「いや、ちよつとお前の死に不手際があつてな」

ん？ 特に不手際なんて……

「本来はあの娘が死ぬはずだったのにな」

瞬間、俺の中で何かが崩れた。

「ということ、今から時間を巻き戻す」

「って、おい。待て」

何を、何を言ってるんだ、こいつは？

「お主は数年後、とある論文を発表し 人類の医学を飛躍的に進歩させる。だから、死なせるわけにはいかん」

「だったらあの女の子は見捨てるのか!？」

納得できるわけない！ そんな、そんなの認められない！

「お主のおかげで、未来では多くの人々が救われる……一を捨てて九を救う、ということじゃ」

そ、んな……。

「……納得、できない……」

歯を食いしばる。拳を握り締める。くそつたれが！

「ならば、妥協案を出そう」

何？ と俺は男を見た。

「お主を別世界に飛ばす」

ッ！？

「そちらで、医学の発展に身を捧げるのだな」

「おい、待てよ！ あの女の子は」

そう言うと、男はニヤリと笑い。

「案ずるな。お主がアチラに行けば、すぐ時は動き出す」

よ、よかった……。

思わずその場に膝をつく。

「では有野悠夜よ。ごー・とう・ぎ・『バカテス』わーるど、だ」

……………ん？ 今なんと？

「ではさらばだ、フハハハハハ！！」

「待て。今お前、確かに、バカテスと……ッ！？」

と、突然俺が立っていたアスファルトが消えた。

真っ黒な穴。

まるで、俺を飲み込もうとするかのように大きく開いた穴に、俺は引きずりこまれた。

〈前奏編〉 第1章 彼女達は登場人物、俺は転生者。 (前書き)

申し訳ありませんでした！

あるうことか、第1章の投稿を忘れていました……

割り込み投稿があつて本当に助かった……

〈前奏編〉 第1章 彼女達は登場人物、俺は転生者。

有野悠夜、転生しても名前は変わりませんでした。

生まれた家の名前は有野。何たる偶然か、と愕然とした。

そして名前を付けられることになったのだが、その際俺にとって幸運だったのが、なんと両親は俺の前で議論を交わしたのだ。無論、二人の会話は理解できるが、入り込めない。

というわけで。

「うーん、そうね……裕紀、なんてのは？」

「お、それならいいかも」

「……………(ふるふる)」

首を横に振る。

「じゃあ、最初の文字は……あ？」

「……………(ふるふる)」

首を横に振る。

「うううー!!」

ちなみに、俺自身としては『悠』と伝えたいのだが。

「鵜卵？」

「……………(ふるふる)」

「空？」

「……………（ふるふる）」

「悠？」

「……………（こくこく）」

すごく疲れた、そうとしか言い様がない。

意外なことに、小学校の時点で既に原作メンバーと俺は遭遇した。まず、じーっと俺を見つめている黒髪の女子。こいつはかの霧島翔子様だ。原作では坂本にもはやヤンデレと言わんばかりの惚れっぷりだったのだが……

「……………（じろじろ）」

「……………霧島、あまり動くな。集中できない」

現在、霧島は俺の膝を枕にしてくつろいでらっしゃる。ちなみにここ、小学校の教室。

今は授業と授業の間の、休み時間だ。俺は数学のドリルを予習中。そして霧島はくつろぎ中。正直、クラスメイトからの視線が痛い。

ちなみに俺は『前』^{転生前}から、いまいち感情を表すのが得意じゃない。そのせいで、前も今もクールだの冷血だの冷酷だの散々な言われようである。

「悠夜、今日も派手にバカップルってるね」

「木下、バカップルは動詞じゃないぞ。……まあ、特に否定しないが」

頬を引き攣らせながら話しかけてきた木下優子に、俺は一瞥をくれると数式に視線を戻した。むう、小学校の教室で二次関数を解く

日が来るとは思わなかった。

「……なんで私にはしてくれないのよ……秀吉と違って、私はれっきとした女の子なのに……」

「姉上、さつきから呪詛のようにぶつぶつと何やら呟くのはやめてくれんか？」

俺はドリルを閉じ、霧島の髪を撫でた。そして耳元で口を開く。

「霧島、そろそろ授業が始まるぞ……？」

「……翔子って呼んで」

「却下だ」

「……ケチ」

これは、一種の境界線みたいなものだ。

彼女は登場人物^{レギュラー}。

俺は転生者^{イレギュラー}。

一線引いて、原作に影響が及ばないようにしている。……まあ、霧島は手遅れな感じがしなくもないが。

なんにしても、あの神様（自称）め……今度あったらぶつとばすしかあるまい。

俺は神への反逆を心に誓った。

〈前奏編〉 第2章 本当に、訳が分からない。(前書き)

2010年5月8日現在、20万PVオーバー！

ありがとうございます！ それでは改訂版の第2章、どうぞ！

〈前奏編〉 第2章 本当に、訳が分からない。

頭が痛い。

その日の朝、起きた時から俺はひどい頭痛に見舞われていた。

中学に入って出会った吉井明久や坂本に心配されはしたが、人の心配は頭痛薬にはならない。

てなわけで、俺はトボトボと通学路を歩いている。無論早退だ。ていうか一応今まで無遅刻無欠席の中学2年生です。

「あー、くっそ……」

これが頭痛だけだったらどれだけ良かっただろうか。

俺が感じるのは、頭痛だけではない。

幻覚。

思考では、それが幻だとは分かっているのだが、なぜか、別の思考が、懐かしむようにその幻覚を見ている。

まるで遠い昔の出来事のように。

ごく普通の人生を歩んだ『アリノユウヤ』。

普通にサラリーマンとして働いたそいつは、普通に家庭を築き、しかし家に侵入した強盗に命を奪われた。

傭兵として生きた『アリノユウヤ』。

紛争地帯を渡り歩き、戦いのプロを通り越して極みの境地に辿り

着いたそいつは、しかし戦車砲の前に最期を迎えた。

女として生まれた『アリノユウヤ』。

性染色体がXY型ではなくXX型として生まれたそいつは、中堅株式会社企業のOLとして働いていた。が、親友から借金を押し付けられ、体も心も犯され尽くした拳銃、最期は海に沈められていった。

訳が分からない。

その幻想に出てくる登場人物の名は、『アリノユウヤ』なのだ。けれど、俺じゃない。『アリノユウヤ』ではあるけれど、俺ではない。

『アリノユウヤ』って、誰だよ。俺じゃないのかよ。

本当に、訳が分からない。

いい加減にしてくれ。

この世界に俺を送り込んだ神とやら。俺にケンカ売ってんのかこの野郎。

「ああん？ さっきからガンつけやがって、ケンカ売ってんのか？」

「奇遇だな、俺もそう思っていたところだ」

もつとも相手はお前じゃなくて神様だが。

「んだとオ！？」

激昂する男。だらしなく着崩した制服と、染めた上にポマードでバリバリにキメてる髪形。ぶっちゃけあれだ、不良だ。

それがこいつの他にも4人いるんだが、そろいもそろってこいつらは

「女性に寄ってたかって何してんだか、男としてこれはいただけないな」

そう、こいつらはさっきまで一人の女性を路地裏で取り囲んでいたのだ。その女性は、壁に寄りかかり、怯えた表情で俺達を見ていた。

「大丈夫」

最近吉井が見始めたアニメの台詞を、使わせてもらおう。

「君は、俺が守るから」

ビバ、シン・アスカ！

鈴村さん大好きです、種デスも大好きです、負債以外は。

ごめんね嘘つきました、キラ様大嫌いです。保志さんは好きだけです。

話が逸れた。

「かつこつけてんじゃねえぞ、クレジット3番目に降ろされたくせに！」

「それは禁句だッ！」

ていうか、こいつも見てたのかよ。

一番最初に殴りかかってきた不良Aの拳を、俺は片腕で捌いた後、ガラあきの胴体めがけて肘鉄を繰り出す。

「ぐぶっ！」

「よ、よっちゃん！」

どうやらこいつはよっちゃんと言っらしい。まあ知ったこっちゃないが。

「よくもよっちゃんを！」

「五月蠅え、黙れ」

喚きながら突っ込んできた不良Bの額に頭突きを食らわして、動きを止める。

俺はそのまま、獲物を狙う獣の様に 体制を沈める。

「そっ、らッ！」

膝のバネを駆使し、全力で立ち上がりながら不良Bの顎を蹴り上げる。

ゴキッ、といやな音を立ててそいつは声も上げずに失神した。

「まだやるか？」

軽く首を鳴らしながら、俺は不良達を威嚇しようと思いを細め唐突に、脳内でカチリと音がした。

回る回る回る廻る廻る廻る。

トリガー
撃鉄が起こり、すべての景色が感情が思考が感覚が切り替わった。

殺せ。

自分に仇なす者、自分が気に入らない者、すべて殺せ！

殺せ殺せ殺せ！

「ッ!？」

ゾワリ、と。自分でも鳥肌が立つほどの殺気。他人が出していたら間違いない腰を抜かしていたであろうそれを、俺が出している。

俺は誰だ？

俺は、本当に『アリノユウヤ』なのか？

俺は……何だ？

「早く、立ち去れ」

ガチツ。感覚が元に戻る。

「あ、あああああああつ……」

4人の不良達は、失神した者を引きずりながら逃げていった。

「はあ、つ……」

深く息を吐いて、壁に背を預ける。

今のは何だ。

今は俺か。

今は 『アリノユウヤ』 なのか。

「あ、あの……」

と、そこで不良達に絡まれていた女性がこちらにゆっくりと歩いてきた。

栗色の長髪を肩に掛け、くるくるとカールに巻いている彼女は、遠慮がちに話しかけてきた。

「体調が良くないみたいですけど……大丈夫ですか？」

それが、彼女 島原しまはらいるりとの出会いだった。

「ここが有野君の家ですか」
「ええ」

俺は彼女に支えられながら、なんとか家まで辿り着くことができた。

ソファーに横たわりながら、俺は目を閉じた。

や、ば……もう、意識が……もた、な、い……

俺が目覚めたとき、一番最初に感じたのは温もりだった。

ふと見ると、いつのまにか体に毛布がかけられている。

横では、もう一つのソファーに彼女が寝ていた。すやすやと寝息

を立てる彼女は、毛布も何もかけていない。

あーあ。もう夜の9時だったのに。

俺は自分にかけられていた毛布を彼女にかけ直すと、いざキッチンへ向かおうとし……テーブルの上に置かれていたオムライスに気づいた。

『余りもので作ってみました。お口に合うかどうか分かりませんが、よろしければ召し上がってください』

畜生、惚れそうだぜ。

なんつー可愛いことしてくれてんだ。新婚かよ。

「……………いただきます」

ぶっちゃけ母さんのよりおいしかった。

「あれ、父さんと母さんどこに行ってるんだっけな……ま、そのうち帰ってくるか」

結局、俺の両親が家に帰ってくることはなかった。

「……っ、 は、 ははは」

普段なら学校に行っている時間なのに、俺は家のベッドの上で笑っていた。否、嗤って晒ってワラッテいた。

交差点での、交通事故により死亡。

ふぎ、けんなっ……………！

意味が分かんねえよ。何で、『また』俺の家族は死んでるんだ。なんで、なんでなんで……………ッッ！！

「あ、あの……………」

昨日出会った彼女。名前は島原いるりというらしいが……………何だよ、こいつは。

「なんだよ、アンタ。なんでまだ、ここにいるんだよ……………」

昨日、大学生だって言ってたじゃんか。だったら学校に行けよ。そう思ってるのに、声が出なくて。

気づく、この人が……………いや、もし傍に誰もいてくれなかったら、俺はきつと コワレテしまっていただろう、って。

だから、彼女が今ここにるのが嬉しくて。

「なんでなんよお……………ああああああ！　なんで、なんでなんでなんだ！-！」

思わず彼女に抱きつく。
胸に顔を埋め、無茶苦茶に泣き喚いた。

「なんで俺ばかり！俺が俺がどうして！なんだよ！『アリノユウヤ』ってなんだよ！どうしてこんなにも、こんなにもこんなにもおっ！」

幻想でも！

俺は、『アリノユウヤ』はろくな最期を迎えちゃいねえ！なんだよ！『アリノユウヤ』ってのは、何だっただよ！？」

「俺が何をした！？何をしたっていうんだ！？畜生！畜生畜生畜生うっ！」

子供みたいに泣き喚き、泣き叫び。

それを黙って受け止めてくれているのが、嬉しくて。

俺はこの時『島原いるり』という、生涯最も強いであろう枷をつけられたのだ。

《戦争編》 第3章 あ、言ってなかったか。俺はこのクラスだ。(前書き)

ようやく原作突入。主人公は基本無表情クールですが、中身は熱血ツッコミです。時々それが表に出たりしますが。

〈戦争編〉第3章 あ、言ってなかったか。俺はこのクラスだ。

「喜べ吉井。お前への疑いはなくなった」

ああ、目の前である名シーンが行われている……なんて感動的なんだ。

「お前はバカだ」

真つ白になる吉井。むう、ここはちょっとフォローすべきか。
俺は小走りに校門まで行くと、先生の前で立ち止まる。

「おはようございます、鉄人……いえ、Mr・インクレディブル」
「悠夜、言い直す必要性が見られないのだが……まあ、いいだろう。
ほら、受け取れ」
「ありがとうございます」

俺は封筒を受け取ると、中身を取り出すこともなくビリビリに破き、宙に放り投げる。

その様子をポカンと見ていた吉井の手を掴み、俺は告げた。

「ほら、行くぞバカ」

鉄人は少し微笑み、俺に対し口を開く。

「バカは貴様もだ、悠夜」
「テスト白紙提出ですもんね、話したときは霧島に怒られました。
あと木下にも」

「……貴様は、何故友人を下の名前で呼ばんのだ？」

「境界線、みたいなものですよ」

俺の言葉に何か悟ったのか、鉄人はもう追及はしてこなかった。まあ、俺も下の名前で呼ぶ相手ぐらいはいるのだが。

「ふむ、ではさっさと行け。二人ともFクラスだ」

「了解」

俺は気だるそうに敬礼すると、まだフリーズ中の吉井を引きずっていった。

「どういうことさ悠夜！ 君がFクラスって!？」

「聞いた通りだ。クラス振り分け試験を白紙で提出した」

廊下でしつこく俺に文句を言うてくる吉井。正直、うざったくて仕方ない。

しかし吉井の反応からして、どうやら表情には出ていないらしい。

……正直、自分でもちゃんと笑えるか不安だ。

「ん、ここらしいな」

俺は教室の前で一瞬立ち止まり、躊躇なくドアを開いた。

「すみません、遅れました」

「あ、す、すみません。ちょっと遅れちゃいましたっ」

このセリフは原作と変わらないのか。

俺は思わずはきたくなるため息をこらえつつ、教卓に立つ男を見る。

間違いなく、我が悪友　坂本雄二だ。
しかし彼は呆然と俺を見つめており、他のクラスメイトもまた同
様。

「おい、悠夜……お前何してんだ？」

「あ、言ってなかったか。俺はこのクラスだ」

……シン

おや？　なんだこの白けっぷりは。

そして数秒後。

『『えええええええーツツ！！？』』

Fクラスに、何故か絶叫が木霊した。

と、その時先生が扉を開けて教室に入ってきた。

俺と吉井と坂本は、すぐに適当な席に着く。要するに床だが。

「えー、おはようございます。二年F組担任の福原です。よろしく
お願いします」

福原先生は名前を書くこととし、何故か辞めた。……待て。チヨ一
クすらないって、ここは本当に教室か？

「皆さん全員に卓袱台と座布団は支給されてますか？不備があれば
申し出てください」

「先生、できれば学習机が欲しいです」

「無理です」

俺の提案は、あっさりと却下される。

すると俺の仇を討たんとはかりに、他の生徒達が申告を開始した。

「俺の座布団に綿が入ってないんですけどー」

「我慢してください」

綿のない座布団つて、ただの布じゃないか？

「俺の卓袱台脚折れてます」

「木工ボンドが支給されてるので、後で自分で直してください」

まず足が折れるほど酷使された卓袱台つてオカシイと思う。何があつたんだよ。

「窓が割れてて風が寒いんですけど」

「ビニール袋とセロハンテープを申請しておきますので後で直してください」

手直しかよ。これも学生として必要な経験なのか？ …… ありえない。

「では、自己紹介でも始めましょうか。そうですね。廊下側の人からお願いします」

指名を受けた生徒 美少女モドキはその場に立ち上がった。

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属してある。そこの有野悠夜はワシと、ワシの姉上の幼馴染じゃ」

木下のその言葉に、一瞬俺へと視線が集まる。なんだかもどかしくなり、俺は窓へぶいっと顔を背けた。

『今の態度……！それに、あの赤目はまさか……！』
『ああ、間違いねえ……！』

『『ツンデレエロ神だ……ッ！！』』

なんだその不名誉な名前は。

「おい坂本、なんだ『ツンデレエロ神』って」

「……詳細は省かせてもらう」

「主犯はお前か」

冷や汗を垂らして顔を背けるなんて、なんて分かりやすい奴。

「……………土屋康太」

次はムツツリーニか。高1の頃は危うく名前を忘れかけたからな。今年をよく覚えておくとしよう。

「島田美波です。海外育ちで日本語は会話はできるけど読み書きが苦手です」

次は 島田か。爽やかな笑みを浮かべながら、彼女は自己紹介を進める。

「あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので。趣味は吉井明久を殴ることです」

どんな危険人物だ。

「あれ？ 次の奴は……おい、誰だ？」

と、気づけば自己紹介は大分進んでいたが、次の人が立たない。

……ん？

「悠夜、お前だバカ」

「坂本、お前にだけはバカと言われたくない」

「明久に言われたらどうするんだ？」

「別に言っても構わないが、奴の家を燃やす」

「なんて物騒な会話をしてるんだよ、君達！ とうか悠夜、それは犯行予告なのかい！？」

ふと見ると、あの島田でさえもが表情を引き攣らせていた。ふむ、何かマズいことでも言っただろうか。

俺はひとまず席を立ち、クラスメイト達を眺める。

「あー、俺は有野悠夜。一応部活は何も入ってない。趣味は料理だが、最近はその機会がなくなっているのでもし料理を作る機会があればぜひ誘って欲しい」

何せ朝起きたら、合鍵を持つてる半同棲相手が朝ごはんを作っているのだ。

晩御飯も彼女 島原いるりに任せていることが多く、正直腕がなまってないか心配だ。

「さっき紹介にあつたが、木下姉弟やAクラスの霧島、ついでにその坂本とは幼馴染だ。こいつらが何かしでかした時は教えてくれ」

そして、ちょっと長めの自己紹介を締めくくると、俺は頑張つて頑張つて、必死に笑おうとする。

「まあ、楽しい思い出が欲しいのは皆同じだと思うから　これから1年間、よろしく頼む」

シン……

さっきと同じように、教室が静まり変える。
どうやらしくじったらしいな。無理しすぎて表情が硬くなりすぎたかもしれない。

「あ、えっと」

次の人の自己紹介が始まる。ふて腐れた俺は、自棄気味に机に突っ伏した。……もっとも、吉井の自己紹介のときの『ダーリン』大合唱に叩き起こされるわけだが。

「あの、遅れて、すいま、せん……」

と、扉が唐突に開いて、この小説のメインヒロインが登場する。
バカテス
姫路瑞希。

小学校の頃、ちょっと似たような子と出会った事はあるが、多分別人だろう。

それを考えると、俺が介入していない以上彼女は吉井に惚れていないはず。

だったら特に気を使う必要もない。純粹な『男友達』として接してやろう。

「お、姫路か。こっちこっち」

俺は特に気兼ねすることなく、自分の横の座布団をぼんぽんと叩く。

正直、姫路瑞樹というキャラクターはあまり好きじゃない。身体の一部のパーツが好みじゃないのだ。……まあ、アフロダイA的なものと言っておこう。

「ふえ？ ……………はうつ！？」

と、姫路は意味を飲み込むのに数秒かかり、次の瞬間林檎のように頬を染めた。効果音は『ボンッ』だな。…………何故？

「どうかしたのか？」

「い、いえ！」

やたらギクシャクした動きで俺の隣に腰を下ろす姫路。ちなみに席の位置からして、どうも俺と卓袱台を共有することになりそうだ。

「これから一年間、よろしくな」

「あ、……………はい」

ひとまず、返事が聞けただけよしとするか。

《戦争編》第3章 あ、言ってなかったか。俺はこのクラスだ。(後書き)

「ちょっとしたおまけ」

明「悠夜、あの表情は反則だよ……」

雄「ああ、自己紹介の最後にかました笑顔だろ？ あれは凄かったな……」

姫「?? なんのことです?」

土「……………これ(サツ)」

姫「……………!!? / / /」

霧「……………カツコイイ / /」

明・坂・姫「いつの間に!？」

土「……………例のブツ(ガサゴソ)」

霧「……………ありがとう」

雄「待て。翔子、それは何だ？ 心なしか悠夜の顔がチラッと見えた気がするんだが……」

土「……………世間一般に、枕カバーと呼ばれるもの」

明「ごめんムツツリーニ、それは『抱き』枕カバーだと思う」

秀「抱き枕カバーと普通の枕カバーじゃ、天と地の差じゃな」

雄「というか普通女がプリントされるべきものだろ。何故悠……あ

あ、そういうことか」

明「どうしたのさ雄ニ、霧島さんをじつと見て。ていうかホント、なんで悠夜なの？ 秀吉に替えて持ってきてよ」

秀「さり気なく人を巻き込むでない」

姫「……………(チラチラ)」

霧「……………欲しいの?」

姫「ツ / / い、いえ、そんな……」

土「……………一つ1200円」

姫「え、えっと……今2500円持ってるから……じゃ、じゃあニ

つ
雄「買うのか!? しかも二つ!？」

悠「……何を騒いでいるんだ?」 ケータイでいるりちゃんと通話中(教室)

い「分らないわ……あ、そういえばこの間、木下さんの家の近くに新しく喫茶店ができたみたいんだけど、その……」 上に同じ

(職員室)

悠「へえ。じゃあ行きましょっか」

い「うん。……つて、いいの!？」

悠「いや、行きたいんでしょ?」

い「う、うん。そうだけど……」

悠「じゃあ行きましょっよ」

悠「(実は俺も行きたかったなんて言えない……ウェイターの一人に狙い目の美人さんが居たからなんて言えない……)」

い「(なんかアツサリとOKが出たけど、こ、ここここれって、で、デデデデデデデ、デートよね?)」

霧「……今、嫌な予感がした」

姫「(何ででしょう? すっごく出し抜かれてる感じがします)」

一応、鉄人と主人公は昔に因縁があったりするのです。鉄人が主人公のことを悠夜と呼ぶのはそのせいなのです。

! 次回はいるりちゃん登場だぜ! 未だに彼女の教科が決まんないぜ!

〈戦争編〉第4章 なにしてんですか、いるりちゃん。(前書き)

今日の『バカへん(変態のへん)』は、

- ・ いるり、バカ達と出会う
- ・ 悠夜、オレンジ大事件
- ・ 雄二、コンパス修行の始まり

の3本でお送りします！

《戦争編》第4章 なにしてんですか、いるりちゃん。

ふと、俺は周囲の面子を見回してみた。

まずは、原作主人公 吉井明久。

次にFクラス代表 坂本雄二。

その他諸々。ぶっちゃけ他はどうでもいい。

「あー、最後は坂本。お前じゃないのか？」

「ん、そうだな」

俺の言葉に、坂本はふつと笑う。

すかさずアイコンタクト。

(坂本、試験召喚戦争……やるのか?)

(無論だ。明久もその気らしいしな)

どうやら俺と姫路が会話している間に、二人はもう廊下に出ていたようだ。

むう、あれはあれで名シーンだからな……見逃したのはもったいないな。

(そうか。なら俺は何も言わないが……)

坂本は教壇に立つと、周囲を見回した。

「この度Fクラス代表になった、坂本雄二だ。さてみんな、聞くところによるとAクラスはシステムデスクにリクライニングシートらし」

そこで言葉を切り、彼は言い放った。

「みんな、この設備に不満は無いか？」

『『『大ありじゃああつつ！！！』』』

Fクラス心の叫び。

俺は思わず耳をふさぎかけたが、何とかこらえる。するとギョッとしたりように姫路がこちらを見てきた。

「すごい……この大音量でもポーカーフェイスなんて……」

少しは働け俺の表情筋。

俺はふつと息を吐くと、自らの思考をフル回転させる。
恐らく、すぐにも坂本が戦争の引き金を引く。だが、結果

はFクラスの敗北。

原作のシナリオを 辿るか。回避するか。

今すぐ決める必要は無いか。これからゆつくりと決めればいい。

俺には知識がある、力もある 多分。

「そこで、俺たちFクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思っ」

さあ、戦争の始まりだ。

「すみません！ 遅れました！」

ガラツ（教室の扉が開く音）

ガタガタツ（俺が卓袱台を跳ね飛ばして立ち上がる音）

パタン（入ってきた人が持っていたノートを落とす音）

以上3秒のやりとり。

しかし、俺にとっちゃそんなもの気にするまでも無い。というか
気にする余裕が無い。

なにしてんですか、いるりちゃん。

教室に入ってきた女性を見て、俺は心の中で盛大にシャウトした。
俺とその女性、島原しまはらいるりは一瞬のうちにアイコンタクト。坂本
の時とはレベルが違う、ハイスピードな会話。

（何してるんだよ、いるりちゃん）

（それはこっちのセリフよ……悠夜君、ひよっとしてこの生徒…
…？）

（そうですよ……まさか、先生？）

コクリと頷くいるりちゃん。……オウ、シット。

「えっと、この度Fクラス副担任になりました、島原いるりです」

「あ、有野君、あの人知り合いなの？」

「いや、知り合いに似ていただけだ」

姫路の突き刺すような、否、抉るような視線が痛い。そういう視線は島田といちゃつく吉井にあげてくれ。

「……で、『試験召喚戦争』についてだが」

坂本の言葉に、Fクラス生徒はハツとしたように視線を坂本に戻す。

まあ、いるりちゃんはかなりの美人だから見惚れてしまうのも仕方ない。

『勝てるわけがない』

『これ以上設備を落とされるなんて嫌だ』

『姫路さんと島原先生がいたら何もいらぬ』

そんな悲鳴が教室のあちこちから上がった。……どうでもいいが、最後の奴って誰なんだろう？ 積極性に溢れすぎだ。

この文月学園では、科学とオカルトと偶然により開発されたという『試験召喚システム』を導入している。これはテストの点数（ちなみに文月学園のテストは点数に上限がないので、能力しだいではどこまでも成績を伸ばすことができる）に応じた強さを持つ『召喚獣』なるものを召喚できるというものだ。

早い話、勉強ができる奴ほど強いゲームと思ってきてく構わない。となれば当然、学年最下位クラスのFクラスが不利なのは明白なわけ。

「確かに……正直無謀だな」

俺もこそっと呟く。

二分に揃っている。……それを今から説明してやるっ」

俺達を見下ろしながらにやりと笑う坂本。

……なんかすごいムカツク。俺は原作知識があるため今後の展開も知っている。だから特にドキドキしたりしない。

ッ！

ふと気づいた。いるりちゃん、今日は普通のロングスカートとは違って若干短めのスカートを穿いている。

見える。あの長さなら、俺の技術をフル投入すれば 見える！

俺は即座に、スカートの中をみるため思考をフル回転させる。

「おい、康太。畳に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないで前に来い」

「……………！！（ブンブン）」

ひとまず畳に頬を押し付けるようにして低姿勢を維持。今は土屋に皆の視線が集まっているので気づかれぬ。

「土屋康太。こいつがああの有名な、ムツリーニ寡黙なる性職者だ」

「……………！！（ブンブン）」

「ムツリーニだと……………？」

「馬鹿な、ヤツがそうだというのか……………？」

「だが見る。あそこまで覗きの証拠をいまだに隠そうとしているぞ

……………」

「ああ。ムツリーの名に恥じない姿だ……………」

チラツと見えたが、どうやらオレンジ色らしい。ふむ、いるりちゃんにしては珍しいセレクトだ。

まあ、元気なカラーも似合っているのだが。

「姫路のことは説明する必要はないだろう。皆だってその力はよく知っているはずだ」

「わ、私ですか?」

「ああ。うちの主戦力の一人だ。期待してる」

『そうだ。俺たちには姫路さんがいるんだった』

『彼女ならAクラスにも引けをとらない』

『ああ。彼女と島原先生さえいれば何もいらさないな』

姫路はさつきチラツと見たが、どうも水色らしい。

しかし、いるりちゃん……オレンジ色だけではなく、まさかフリル付とはっ！　なんて豪華なオプションだ！　まったく、けしからん！

「木下秀吉だっている」

『おお……!』

『ああ。アイツ確か、木下優子の……』

「当然俺も全力を尽くす」

『確かになんだかやってくれそうな奴だ』

『坂本って、小学生の頃は神童とか呼ばれていなかったか?』

『実質、Aクラスレベルが二人もいるのか!』

やばい、脳内保存だけでは不安だ。バックアップとして、ケータイのカメラで撮る必要がある。

俺は懐から携帯電話を取り出すと、レンズをいるりちゃんのスカートの中に向けた。無論、シャッター音は消音にして。

「それに、吉井明久だっている」

……シン

「ちよつと雄二！ 僕の名前を呼ぶ必要あった！？ ていうか完全にオチ扱いだよね！」

「ちなみにこいつは《観察処分者》だ」

「ああーもう、折角上がった士気が凄い勢いで直下下降していくっ！」

ふふふ、このメモリーカードは永久保存だな。

……ん？ 気づけば話が半分進んでいる。

「まあ明久がオチつてのは冗談だ。本命は……お前だ、悠夜……つて」

ん？ 誰か俺の名を呼んだか？

俺が顔を上げると、周囲から冷たい視線が突き刺さった。

「……おい悠夜、その姿勢と手に持ったケータイは何だ？」

「いる……島原先生のスカートの中を覗いていたんだ」

口が勝手に動いた。何バカ正直に喋ってるんだろう。

「……！！」

いるりちゃんが顔を真っ赤にしてスカートを押さえ、凄い剣幕で俺を睨んでくる。

俺はソレをスルーして、土屋の隣に並んだ。にしてもこいつ、まだ頬を押さえている。俺なんて隠す気なしのフルオープンだったの

に。

『おい、見るよ……覗きの証拠をまったく隠さない、さすがに
ほどのオープンな態度』

『ああ、あのムツツリーニとは正反対だ』

『それじゃやはり、あいつがオープンスケベの頂点に立つ男……ツ
ンデレエロ神なのか……』

なんだかひどく不名誉なことを言われていないか？

俺はどことなく気落ちしながら、クラスの面子を見回す。

皆、俺達を信頼している。

そう思っただけで、思わず表情が緩んだ。

『『『ツ』』』

皆の顔が赤くなった。……何故に？

俺は坂本に目配せする。

(どうすんだ？　なんか、作戦前ブリーフィング的なことするのか
?)

(ああ。しようと思っていたが……お前がしてくれ)

(……マジで?)

(マジだ)

俺は恨めしげに坂本を睨む。と、今度は別方向からアイコンタク
トが。

(……ファイトよ、悠夜君)

若干顔が赤い、いるりちゃんのありがたいお言葉に、俺は覚悟を決める。

「皆。聞いてくれ」

教室中が静まり返った。この空間は、俺のために存在している。俺が語るために、俺が導くために。俺は一呼吸おいて、口を開いた。

「皆はこれから、格上の敵たちと戦うことになる」

Aクラスの代表なんて、それこそ化け物クラスだ。

「辛いことがあるだろう。悲しいことがあるだろう。痛いことがあるだろう」

観察処分者の吉井なんて悲惨だ。

「だが コレだけは覚えておけ！ 俺達が成さねばならない事ではないか！ 世の中勉強が全てじゃないと、あの忌々しい教師どもに思い知らせてやるんだ！」

教師と半同棲状態の俺が言えることじゃないけどな。

『『『う……おおーっつ！』』』

なんか成功したようだ。良かった良かった。

こうして、俺達の戦争は始まった。

〈戦争編〉第4章 なにしてんですか、いるりちゃん。(後書き)

悠夜君が笑ったらたいいの女子は落ちるよ！ ていうか普段無表情だから見れたら凄いラッキーだよ！

ここらでちよつとまとめ。

- ・悠夜君の目的 原作の鑑賞であり、介入ではない
- ・いるりちゃん 無自覚で悠夜に好意
- ・悠夜は下の名で呼ぶ人 いるりちゃんだけだよ！
- ・いるりちゃんって？ 悠夜が勝手につけた渾名だよ！ ていうか完全にまりもちゃ(自主規制)
- ・鉄人 しばらく出番ないよ！

こんなところです。

今回はDクラス編！ 例のアレが出るぜ！

〈戦争編〉第5章 ウチのクラスは、最強だ。(前書き)

以下の問いに答えなさい

『調理の為に火をかける鍋を制作する際、マグネシウムを選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この問題点と代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい』

姫路瑞希の答え

『問題点……マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険であること。』

合金の例……ジュラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』では駄目という引っ掛け問題なのですが、姫路さんは引っかかりませんでしたね。

有野悠夜

『まずマグネシウムで鍋を作ること自体が無謀です。マグネシウムの多くがマグネシウムイオンとして海水中に存在しますが、それを取り出すためには溶融塩電解などの複雑な分解方法をとらなければなりません。』

さらに、仮に鍋を作ったとしても、問題では調理を始めて問題が起こったとあります。マグネシウムは白い光を上げて激しく燃えますが、マグネシウムの発火を消火するには、特殊な消火薬剤を使わなくてはなりません。

仮に水をかけたとしたら、水素が発生し引火、爆発が発生します。

よってこの場合、問題を定義する人物は家を失ったか故人かのどち

らかと考えるべきです。

さらに使用すべき合金としては、ジュラルミンは水分や塩分などに対する腐食性に問題があり、調理していくうちに腐食していくことになります。

そのためジュラルミンよりも、ステンレスを使用すべきです。

問題点……マグネシウム火災の発生

合金の例……ステンレス』

教師のコメント

容赦ない指摘ありがとうございます。特例としてですが、丸としておきましょう。ただ、他の生徒にはジュラルミンと教えているのでこの問題は全員丸に

土屋康太の答え

『問題点……ガス代を払っていなかったこと』

吉井明久の答え

『合金の例……未来合金（すごく強い）』

坂本雄二の答え

『合金の例……ヒビイロノカネ』

教師のコメント

しようと思ったのですが、君達は特例としてバツにしておきましょう。

《戦争編》第5章 ウチのクラスは、最強だ。

……どうして、こうなった。

俺は今、試験召喚戦争の宣戦布告を行うため、Dクラスの前に来ていた。

もう一度言う。どうしてこうなった。

原作では吉井役割のはずだろッ!? なぜ俺がここに居る!?!
心の中で思いつきり叫ぶが、誰も答えてくれない。

《……仕方ない。悠夜は苦勞キャラ》

なぜだ。今、脳内に霧島の声が響いた。……気のせいか。
まあ、いつまでもウジウジしても時間の無駄だ。
……べ、別に、霧島の声を聞いてちよっと勇気付けられたとかじゃないんだからな!

《……ツンデレエロ神……》

スルー。完璧にスルー。だってそうしなきゃやってられないから。
ふと、こんなことになった過程を思い出す。

しばし時を遡る。

「おい坂本、ところで宣戦布告だが」
「ああ、お前が行け」

……ん？

『ああ、確かに有野ならFクラスの使者に相応しい』

『そうだな、どっかのバカに任せるより数千倍安心だ』

つまり俺に死ねと！？

「………すまない、俺が行く必要性が見られない」

「仕方ない、お前の愛の告白音声を翔子に」

「で？ Dクラスってどこだ？」

有野悠夜、敗北。

「………うっし、ひとまず坂本は処刑だな」

ロッカーの中に木下の下着でも入れておいてやろう。全学年の木下優子ファンから多大な折檻を食らうはずだ。激痛という名の海で溺れ死ね。

「さて、行くか」

俺はDクラスのドアに手をかけた。………よく考えれば進級初日に戦争を起こすのか。Fクラスの行動力はズバ抜けているな。

ガラッ！

勢いよくドアを開き、俺は教室の中に踏み入った。

周囲から視線が突き刺さるが、全てを無視し俺は誰も居ない教壇に上った。

『おい、あれって有野悠夜じゃないか？』
『え、有野悠夜って学年主席のあいつか？』
『確かツンデレエロ神とかいう……』』

最後のヤツは極刑だ。

俺は視線を教室中に巡らせ、一人一人の生徒と視線を合わせていく。

「俺はFクラス所属、有野悠夜だ」

ざわ……！

俺の言葉に、教室中へざわめきが広がった。

『バカな……！ Fクラスだと……！？』

『ありえない、ヤツは学年主席を余裕で勝ち取るような成績だぞ！』
『？』

『待て！ まさか、Fクラスが来るということは……！』

ほう、たったこれだけの言葉から感づく奴がいるとは。案外、このクラスは頭が切れるのかも知れん。原作でも、油断してるのを突いたって感じだったからな。

「ふっ、もう気づいてると思うが、我々Fクラスは お前達Dクラスに試験召喚戦争を申し込む。今日の午後に関戦予定だ」

吉井だったら、掴みかかれるだろう。現に、すでに椅子から腰を浮かせて俺を睨みつけている男子が数名いる。

だが、俺は 一気にまくし立て、こいつらを全員煙に巻く。

以下、有野悠夜によって展開された固有結界『無限の冷静』アンリミテッド・クール・ユウヤによって引き起こされた惨劇です。別に雛 沢とかは関係ないのでこゆるりと流し読みください。

「 いいか、俺達がお前達に戦争を挑むと言うことは、こちらに勝機があると判断したからだ。考えてみる、Fクラス代表は坂本雄二だ。かつて神童と呼ばれた男だぞ？ そんなやつを敵に回してお前達は戦争に勝てるのか？

何か勘違いしているようだから言っておくが、現在勢力ではこちらが圧倒的に強い。学年トップクラスの成績を持つ姫路、保健体育において学年最強の土屋、召喚獣の扱いのプロフェッショナルである吉井。どうだ？ 豪華なラインナップだろう？

そして、これに有野悠夜 俺が追加されるのだ。お前達は、それでも勝てるのか？ 士気を維持できるのか？ 恐らくお前達は戦地でこう思うだろう、果たして勝てるのかどうか……、と。

それこそが敗北の元なのだ！ 油断と慢心以上に、必要以上の不安は必ず不吉を呼ぶっ！ つまりっ！ お前達は、戦争が始まる前に、すでに敗北が確定しているのだっ！ そんなお前達には戦争を挑まれるような価値すらない！ どうしたどうした、最弱のFクラスを相手に何をビビッている！ Fクラスはバカの集まりじゃないのか？ 最弱にビビっているお前達は最弱以下、つまりはゴミ虫だっ！！ さあゴミ虫どもよ、筆ペンを取るがいい！ 勝利を望むか！？

栄光を望むか！？ ならば俺達と戦え！ 本気でかかって来い！ 油断しようものなら、一瞬でその喉笛を引き裂いてくれる！ そして俺達を打ち倒してみせろ！！ でなければお前達は、永久にゴミ虫以下、屑の中の屑だアアアアア！！！！」

暴走終了。

俺は久々の展開にいい汗を流しつつ、いつも通りの無表情（と思う）で教室を後にした。

屋上。

俺は意気揚々と扉を開け、フェンス傍に群がる集団にずんずんと歩いていく。

「……悠夜」

なぜか坂本の俺を見る目がとても生暖かい。他の皆もそうだ。

「ここに来るまでに、廊下中に響き渡るような大声が聞こえたんだ」

タラリ。冷や汗が俺の頬を伝う。

まさか、俺が展開した固有結界に皆も取り込まれていたというのか……？

「不思議な感覚だったわね。なんか自然に動けなくなるって言うか……」

「私も、身体が不思議と止まっていました」

女性陣二人の意見。ああ、やってしまったか。

「………実は熱血キャラ」

「悠夜、冷静さの殻を破ると、君はあそこまで熱血を昇華させることが出来るんだね……」

……もう、全てがどうでもよくなってきた。

「よし、ひとまず今日の午後開戦と伝えてきた。吉井、今日ぐらいはまともな昼飯を食えよ」

「あれだけ恥ずかしいセリフ聞かれても無表情なんですね」

違うぞ姫路。表情筋が強張りすぎてただけだ。

「流石に、水と塩と砂糖はないじゃろう」

「え、それって食べるって言うの？」

「島田、日本ではこれを舐めるといふんじゃ」

悲しいかな。吉井への仕送りはほとんど彼の趣味に消えるのだ。

「……あの、良かったら「仕方ない、今日はパンを奢る。明日は弁当を作ってくる」

「えっ？」

呆けたようにこちらを見る吉井。他の面子も意外そうに俺へ目を向ける。

「……相手はただでさえ格上なんだ。戦力の低下は望ましくない」「悠夜、いい加減そのツンデレ直したら？」

俺はツンデレなんかじゃないっ！

ただ単に、姫路の弁当イベントを回避したかったただけだ！

「ふふっ。有野君は、優しいんですね」

柔らかい笑顔で俺に話す姫路。……落ち着け有野悠夜。お前は美

乳派であって巨乳派じゃない。だから姫路にはときめかないはずだ。うん。この胸のどきどきは気のせいだ。

けれど、確か原作では明久が伝説のセリフを言っていたな。

おーけー。ここは空気を読んで俺が行く！

「姫路。実は俺、前からお前のこと好き」

「悠夜、今振られると傷心のお前を慰めようと翔子が家に戻り込んでくるぞ？」

「 にしたいと思って色々妄想してたんだ」

「……ごめん悠夜、僕にはツツ」ミきれないよ……」

バカか俺。正確には俺の口。

顔はおろか首まで真っ赤になった姫路を意図的に視界から追い出し、俺は立ち上がった。

「それはそうと……坂本、本当に勝てるのか？」

「当たり前だろ」

そう言って、坂本も立ち上がる。

不敵な笑みを浮かべるヤツと顔を合わせ、俺達は同時に言葉を紡いだ。

「ウチのクラスは 最強だ」

ああ、まったく愉快的奴らだ！

「よし、それじゃあ作戦を説明しよう」

再び地面に座りながら、俺は坂本の作戦に耳を傾けた。

〈戦争編〉第5章 ウチのクラスは、最強だ。(後書き)

固有結界 『アンリミテッド・クール・ユウヤ
無限の冷静』

有野悠夜が展開する固有結界。ただし、術者の心象風景で現実世界を塗りつぶし、世界そのものを変えてしまう結界ではなく、ただ単に本人のペースに巻き込めば絶対に相手を手玉に取れるパターンの方である。K1を想像してくればおk。

ただ、K1の方はエロスに重点を置いたセリフになっているが、悠夜の固有結界はその場にあわせ変幻自在であり、相手への暴言、叱咤激励などパターンは多種多様にわたる。無論、K1張りの萌え講座も可能。

以下、萌えバージョン

「いいか貴様ら！ 巨乳だろうと貧乳だろうと、それは意図的に改ざんされたものなのだ！ 考えてもみる、街中をバストFサイズの女の子が制服姿で歩いていたら、間違いなく見物の的だろう！？ 貧乳はまだリアリティがあるとして、巨乳など存在するはずがないのだ！

……何い！？ サンプルHはどうなるのかだとう！？ ふざけるな、貴様はFサイズごときにくっするほどのヤワな大和魂しか持ち合わせておらんのか！ どうせ作者がFクラスに引っ掛けて冗談半分にFサイズにただけであろう！ あんなまがい物のバストに騙される貴様は猿以下だ！ 後でじっくりしごいてやるう、補習だ補習！！

話を戻そう。では究極のバストとは何か！ 無論、形大きさとともにそろった『美乳』だ！ ではここで少したとえ話をしよう。スク水状態の少女が、こちらを覗き込むときに見える、奥ゆかしい二つ

の半球体！ 大きすぎてあふれ出ることもなければ、小さすぎて見えないこともない！ さらに形もそろい、色も艶やか！ どうだ、これでも美乳を『どっつかずの中途半端な位置』と言えるか？ ……何？ 大きなブツに顔を挟まれるのがいいだとう？ ふざけるな！ それはただ自ら窒息するだけではないか！ 自殺願望者が貴様は！

そして極めつけは、日常的に見える胸チラ行為！ 美乳ならではの絶妙なサイズだからこそ、見えるか見えないかの瀬戸際を日常的に味わえるのだ！ それが分からん貴様らはすでに死んでいる！ 男として！ 未だに両極端なバストに引きずりまわされる貴様らは日本人失格だ非国民めが！ 治安維持法に引つかかって銃殺刑に処されてしまえ！ You must die！！ You are crazy！！ You're an idiot！！ さつさと戦死して補習室に連れ込まれるがいい馬鹿どもがアアアアアアアアア！！！！」

作者は混乱していました。お騒がせして申し訳ありません。

こんなくだらない設定を必死に考えてたんだよ！ 労働意欲の無駄遣いだよ！

〈戦争編〉第6章 俺は、ただの傍観者なのだから。(前書き)

問 以下の文章の()に正しい言葉を入れなさい。

『光は波であって、() ()である』

姫路瑞希の答え

『粒子』

教師のコメント

よくできました。

土屋康太

『寄せては返すの』

教師のコメント

君の解答はいつも先生の度肝を抜きます。

吉井明久の答え

『勇者の武器』

教師のコメント

先生もRPGは好きです。

有野悠夜の答え

『太一の妹』

教師のコメント
それはヒカリです。

〈戦争編〉第6章 俺は、ただの傍観者なのだから。

「……暇だ」

渡り廊下で、吉井の部隊がDクラスと戦闘に入った。俺はそれを上から眺めている。

「つまり、屋上だ。」

正直、この戦争は俺なしでも勝てる。ついでに言えばBクラス戦も。

よって俺は本来の目的、原作を間近で観る、というのを遂行中である。

『全員突撃しろおーっ！』

しかし、こうして見ていると。

『布施先生側の人達は召喚獣を防御に専念させて！ 五十嵐先生側の人は総合科目の人と交代しながら効率よく勝負するように！ 藤堂君は可哀想だけど諦めるんだ！』

こうして見ていると。

『偽情報を流して欲しいんだ。時間を稼ぐために』

『先生たちに流すんだよ。他の場所に向かってくれるように』

吉井って 意外と優秀な指揮官なのかもしれん。

いかん、そんなこと考えてたら急に眠気が

ふと気づけば、辺りは真っ赤だった。
やけに地面が柔らかい。これは……おい、ちょっと待て。

「何をしているんだ、木下……」

俺は木下優子の膝を枕にして寝ていた。

「それはコッチのセリフよ悠夜。あんたのどこ、今戦争中じゃないの？」

「俺は用無しだそうだ」

「学年主席が何言ってるんだか」

「元をつけてくれ」

「どのみち学年最大の保有戦力でしようが」

上体を起こす。すでに夕暮れ。夕日に染まって優子の顔が赤く染まる。……ん？ 本当にこれって夕日だけの赤さか？ なんか別の赤さも混じってる気がするんだが……

「戦争は？」

「Fクラスの勝ちらしいわ……すごいわね、格上の相手を破るなんて」

そういえば、宣戦布告の時に『本気でやれ』と言ってしまったが、大丈夫だったのだろうか。

「なあ、詳しい状況とか知ってるか？」

「……壮絶の一言につきるらしいわ」

なぜか苦笑する木下。

俺は気づく。下の方からどんちゃん騒ぎがまったく聞こえてこないことに。

「当事者に聞くか」

「そうね」

木下に手を振りながら、俺は階段へと歩き始めた。

「おい坂本、なんだコレは」

教室には、死屍累々の山が積まれていた。

「……元凶が、何言ってるんだ」

ギクリ。

まさか、Dクラスの奴ら……本気できたのか。

『うおおおお！ 相手が何だろうと、全力を尽くせ！！』

『俺達はゴミ虫なんかじゃねエエエエ！！』

『全力全力ウウウ！ 有野悠夜に目のもの見せてやれエエエエエ
！！』

なんか幻聴が聞こえた。気のせいだろう、うん。

「……危なかった」

土屋の言葉に、皆が頷く。

なんでも、最後に代表の平賀に止めを刺したのは背後から不意打ちした吉井だったとか。

「異常なまでに堅い防衛網を敷いてきた上に、近衛部隊で代表の周囲360度をぐるりと囲む絶対防衛陣……」

心底疲れた、という風のため息をつく坂本。

俺は思わず心の中で合掌した。

「……有野悠夜」

と、後ろからぞろぞろとDクラスの連中が近づいてきた。先頭には代表、平賀源一。

「すまなかった」

突然、平賀が腰を90度に曲げて俺に頭を下げた。

「……は？」

思わず声が漏れる。

しかし平賀は構うことなく、言葉を続けた。

「お前の言うとおりだった。俺達は最初からビビってたんだ。学年

主席があそこまで言うクラス。一体どんな戦力なのか、どんな土気なのか。すべてが疑わしくて、結局俺達は護りに徹した。そして、負けた」

なんだろう、こいつが凄い良い奴に思えてきた。

平賀は顔を上げ、俺を真っ直ぐに見る。

「だがしかし、覚えておいて欲しい。お前らを倒すのは、俺達Dクラスだ！」

ああ、そうだな。

俺はしっかりと頷き、平賀と握手を交わした。

さあ、次はBクラス戦だ。

ちなみに、宣戦布告には今度こそ吉井を行かせた。俺は教室で、あの事態を未然に防ぐための行動中。

「…………お、あつた」

姫路のラブレター。何をどう間違ったのか、俺の卓袱台の上に置かれていた。…………いや、卓袱台共有してんだから置き忘れただけか。

とにかく、俺はこのラブレターをどうにかしなくては…………

「…………有野君？」

「姫路？」

と、教室の中に入ってきた姫路。息が切れてる辺り、どうやら走ってきたらしい。

俺の手元を凝視しているが、一体何が

あ、ラブレター。

場に沈黙が舞い降りた。

「……コレ、お前のだろ？」

「ッ」

姫路が顔を赤くする。

俺はラブレターを一瞬見やり、そつと卓袱台の上に置く。

「いい返事、来るといいな」

それだけだ。

俺が言えるのは、それだけだ。

俺は、ただの 傍観者なのだから。

家に、いるりちゃんは来ていなかった。

久々に晩御飯を作る機会だったのだが、俺はやかんにお湯を入れると火にかけ、自分は制服のままソファアの上に転がる。今日は…
…カップラーメンでいい。

親が死んでから、この家に入ったことがあるのは俺といりぢゃんだだけだ。

寂しい。寂しい、サミシイ。

いつの間に、俺はこんなにも弱くなったのだろうか。

その日、俺は制服のまま、ソファで寝てしまった。

〈戦争編〉第6章 俺は、ただの傍観者なのだから。(後書き)

前書きはデジ　ンネタです。未だにウオーグ　イモンファンなんだぜ！

〈その頃のいるりちゃん〉

「あ、島原先生。Fクラス生徒の点数処理を」

「Fクラス生徒が窓ガラスを」

「Fクラス生徒(略)」

「……ごめん悠夜君、今日は帰れそうにないわ……」

きつとFクラス副担任ってそうとう過酷だと思っただ！

ていうか鉄人すごいね！　3巻読み直したら、召喚獣とカラダで渡り合ってたよ！

ちよつと補足。

あくまで悠夜君は4巻を買った直後に死んでるので、3・5巻までの知識しかないのです。

そのことを知り合いに話したら、

「なんて中途半端な転生主人公だw」

と鼻で笑われました。上等じゃねえか！　ハンパな主人公でも！

ていうかバカテス自体がまだ完結してねえんだよ！

などと言いつつ訳をしたら知り合いが一言。

「まあ、作者が中途半端な人生送ってるからしかたなくね？」

その場で殴りあいになりました。
知り合いの妹が止めに入らなかつたら、あの忌々しいメガネを叩き割れたものを……！

あ、今回はバカテスの原作をかなりブレイクします。ご注意ください
い。

ていうか感想が全然こないよ！ 閑古鳥鳴きまくりだよ！
ブリーズ・ミー！！

《戦争編》第7章・・・本当に、いめん。(前書き)

問 以下の英文を答えなさい。

『 This is bookshelf that my grandmother had used regularly. 』

姫路瑞希の答え

『 これは私の祖母が愛用していた本棚です 』

教師のコメント

正解です。きちんと勉強していますね。

土屋康太の答え

『 これは 』

教師のコメント

訳せたのは This だけですか。

吉井明久の答え

『 』
× 『 』

教師のコメント

できれば地球の言語で。

有野悠夜の答え

『これは俺の祖母ちゃんが……』

教師のコメント

テスト用紙についた涙の跡は見なかったことにしておきます。
……辛いことがあったら、相談するのよ？（by高橋女史）

〈戦争編〉第7章・・・本当に、ごめん。

身体が痛い。

俺は通学路を歩きながら、学校へと向かっていた。

驚くべきことに、俺はあることが昨日丸一日をソファアの上でうたた寝をしていたのだ。弁当を持っていくと吉井に約束していたので、若干申し訳ない気持ち含みで俺はテンション低めである。

「さて、今日はBクラス戦か」

ちなみに時間は午後12時半。バリバリの遅刻だ。

「確か開戦が午後だったから、このままでも十分間に合うだろ」

間に合うのは開戦ではなく、試召戦争だが。

「……ハハツ、何してんだろ、俺」

強い風に、桜の花びらが舞う。否、散っていく。

俺は唇をかみ締めながら、桜吹雪の中を突っ切っていった。

廊下は混戦だった。

その最中、突然光線がほとばしったとか思えば、一体の召喚獣が炎に包まれる。

「姫路、だな……」

俺はカバンをぶら下げたまま、戦場のど真ん中を悠々と通り過ぎていく。

ふと、足を止めた。

誰も、俺に気づかない。

目の前の戦争に全てを傾けている。

俺は、原作には、存在しやしないんだ。

分かりきってた、はず、なの、に。な。

涙が溢れ出る。

その場に膝を着く。

周囲が騒がしい。

煩い。煩い。誰も、俺を認識しないで。

『怪我をした僕に止めを刺しに行くなんて、アンタは鬼か！』

『違うわよ！』

いつの間にか、戦場はこう着状態になっていた。

「あら、有野君？ どうしたのこんなところで……ッ、有野君？」

たまたま、高橋女史が俺の傍を通った。

「先生……フィールドを」

「え？」

俺は人垣を見やる。あの向こうには、人質の島田が居る。

違う。この騒音の原因が居る。

「サモン
試獣召喚」

試獣戦争としては、初めて呟いた言葉。

現れた召喚獣は、漆黒のカーゴパンツを穿き、漆黒の靴を履き、漆黒のシャツの上から漆黒のトレンチコートを羽織っていた。

そして手には、選択した武器『狙撃銃』スナイプ。

召喚獣はすばやくその場にうつぶせになり、手に持った狙撃銃ちなみに、デザインとしては『ウルサーWA2000』をモデルにしているという を構える。

銃口の向く先には、島田を人質にとるBクラス男子達の召喚獣。

「……標的、捕捉」

小さく呟いた後、俺は引き金を引く。

タンツ、タンツ。

瞬間、放たれた銃弾は人ごみの間を潜るよう通過し、2体の召喚獣の頭部を貫いた。

「なっ!？」

「バカな、どこから!？」

驚いたような声上がり、やがて全員の視線が俺に向く。

漆黒の召喚獣は立ち上がると、コートをはためかせながら衆目に背を向けた。

俺も同様に皆に背を向けると、高橋女史に礼を言ってから教室に歩き出す。

誰も、俺に賛美を送ろうとはしなかった。

「それで、BクラスとCクラスが繋がっていた、と」

翌日、俺はいるりちゃんを待ち続けた拳句夜を明かしてしまうと
いった失態を演じており、二日連続で食事抜きだった。

昨日は鉄人に断ってあの後即座に早退しており、吉井の活躍は目
にしていない。

そんなコンディションを悟られないよう、出来る限りいつも通り
に皆と接する。

「……………ああ」

しかし、なぜか俺を見る目がいつもより多い。

「ねえ悠、昨日、ウチのこと助けてくれたのよね？」

「まあな」

自分でも分かるほどの無表情。

「かつこよかったよね、あの無言で立ち去る様っていつかさ」

「へえー……………私も見たかったです」

姫路が目をキラキラさせながら、そう聞いてきた。

俺はイレギュラー転生者なのに。

居ないはずの存在なのに。

『ああ、あの時の有野はすごかったな』

『なんつーか……男が惚れる男っていつのか？』

『俺もあなりたいぜ……』

なんでそんな言葉、かけてくるんだよ。

「……………なあ」

消え入りそうな声で、俺は呟いた。

周囲の喧騒に打ち消されるそれを、姫路だけが聞き取る。

「えっ？」

「……………俺は、」

俺は。

「……………ココに居ても、いいのかな？」

俺は顔を上げる。

自分でも分かった。

俺は、泣いていながら、満面の笑みを浮かべていた。

《戦争編》第7章・・・本当に、ごめん。(後書き)

前書きの高橋女史は、廊下でボロ泣きしてた悠夜を見た後です。だから悠夜のことを気にかけてるんです。

悲しいけど、これ『フラグ』なのよね！

ちなみに悠夜が泣いたのは元の世界の祖母を思い出したからです。なにせもう一生会えない肉親ですから。

では、ここらで今回登場した悠夜の召喚獣を紹介。

上から下まで全て黒。

固有能力として武器の選択が可能。

今回出てきた狙撃銃は、単発とセミオートとフルオート、全てを使い分けることが可能。

ちなみに今回はフルオートで二発発砲した。

デザインのモデルは『ウルサーWA2000』。

他にも武装はあるが、今後出す予定。

ちゃんと近距離戦もこなせるらしい。

という設定。出してほしい武器とか合ったら是非、ご応募(?)ください！ いやマジで！ お願いします！

今回はBクラス戦終結。お楽しみに！

《戦争編》第8章 俺は冷静だ。ただ、冷静にキレているだけだ。(前書き)

問 以下の問いに答えなさい

『ベンゼンの化学式を書きなさい』

姫路瑞希の答え

『C?H?』

教師のコメント

簡単でしたかね。

有野悠夜の答え

『C?H?』

教師のコメント

同じく正解です。やはり簡単だったでしょうが。

土屋康太の答え

『ベン+ゼン=ベンゼン』

教師のコメント

君は化学をなめていませんか。

吉井明久の答え

『B・E・N・Z・E・N』

教師のコメント

後で土屋君と一緒に職員室に来るように。

坂本雄二の答え

『ゼアス』

教師のコメント

連想ゲームではありません。……個人的にはシャドーと書いてほしかったところです。

《戦争編》第8章 俺は冷静だ。ただ、冷静にキレているだけだ。

「Cクラスには、秀吉が行く」

原作通り、坂本の発案で木下秀吉がCクラスへ行くこととなった。女子用の制服に着替える秀吉。俺は思わず着替え中の姫路を妄想し

「……………有野君？」

姫路、頼むからそんな怖い笑顔で肩を掴むな。骨が碎ける。

「今、完全に女の子のこと妄想してましたよね……………」

「何を勘違いしてるかは知らんが……………スマン、それ以上は本気で腕が使用不能になる……………ッ」

外野から『おお、それでも無表情だぞ』などと聞こえた。働けよ、俺の表情筋。

「勘違いって……………」

「妄想してたのは、あくまでお前の着替えだ……………！」

バカか俺の口。

「……………悠夜、いくらなんでもオープンすぎ」

俺の横から、霧島がツツコム。

「うるさい、これが性分だ」

「……どうせなら、私の着替えを妄想してほしい」
「思春期真っ只中の女子高生のセリフじゃないな」
「……妄想できないなら、今度見せてあげる」
「安心しろ、俺は自分の気合で自在に妄想を操ることができる。お前の着替えなどコンマ3秒で妄想可能だ」
「……また、オープン」
「原因はお前だ」

マシンガンのようなスピードで続く会話。

「……そもそも悠夜は性格に難がありすぎ」
「まさかお前から性格について説かれる日が来るとは思わなかった」
「よ」
「……結論から言えば、悠夜を支えられるのはこの世でも私ぐらい」
「うん、もう話のオチが読めてた」
「……超能力者？」
「特殊なスキルなしでも十分お前の思考は読めると思う」
「……エスパー？」
「それ超能力者と変わらないし、人の話聞いているか？」

訂正、重機関銃張りのスピード。

「霧島、ついでに言っておくが今日木下の家に行かないか？」
「……謝罪？」
「さすが、分かっているじゃないか」
「……以心伝心」
「迂闊に否定できないところが怖いな。で、さっき俺を支えるといつたのだから、着いて来てくれるか？」
「……要するに、道連れ」
「……スマン」

「……確か優子の家の近くには、穴場の喫茶店があった」

「あそこか。あれは旨かった」

「……誰かに行ったこと、あるの？」

「いいや、一人で行った」

まさかクラスの副担任と行きました、なんて言えないしな。

いるりちゃん、今ほどあなたの立場を疎ましく思ったことはありません。

俺は肩をすくめると、その時店員さんから貰った割引券をヒラヒラと見せる。

「ほい、これ」

「……『カップル御優待』券？」

「ああ、なんでも男女一組で同じものを注文すれば、会計を半額にしてくれるらしい」

「……今日、何時に校門？」

「そうだな、6時でどうだ？」

コクツと頷く霧島。俺が彼女から視線をそらすと、ちょうど吉井達が帰ってきていた。

「坂本。どうだった？」

「完璧だ。……ん？なんで翔子がここにいるんだ？」

「……ちよつと思いつき。『そうだ、Fクラス行こう』って」

「そのネタ着いてこれる人、何人いるんだろうな」

ていうか京都じゃなくてFクラス。何をどう間違ったチョイスだろつか。

「……じゃあ、私はこれで」

「ああ。……あと」

「……？」

「薄いピンク、似合ってるぞ」

ぐつとサムスアツプ。霧島はしばし思考した後　ポンと音を立て、顔を真っ赤にした。

俺が右手に持った手鏡をヒラヒラとかざすと、霧島はスカートのすそを押さえてズザザツと後退。

「……………バカ」

と言い残して廊下を脱兎のごとく走り去っていった。

俺は懐に手鏡（ムツツリ商会のシールが貼ってあるのは余談だ）をしまう。

時刻は8時45分。

「　ねえ、悠夜と霧島さんって」

「幼馴染だ。ついでに俺と木下姉弟もな」

坂本の説明に、Fクラス男子はこくこくと頷き

「総員狙ええっ！！」

何故か臨戦態勢に入った。

『畜生あの野郎……！　我らがアイドル霧島さんと夫婦漫才を繰り広げやがって……！』

『見せびらかしてんじゃねえ！』

『……………クロス。九十九回殺して輪廻の輪から弾き飛ばす……………！』

「ちっ、坂本 いや、『悪鬼羅刹』さん、どうする……？」
「どうするもこうするも、分かってるだろ、『怪力乱神』……！」

そう、俺達の心は一つだった。

「任せたぜ悠夜……！ お前の固有結界^{チカラ}、見せてやれ！」
「ああ、任された」

さすがは元・神童だ。一回しか見たことのない俺の固有結界を早速利用するとは。

何にしても、この場を乗り切ることが重要か……

俺は息を吸い、Fクラスの連中の殺気籠る視線をまともに浴びながら 口を開いた。

固有結界 『アンリミテッド・クール・ユウヤ
無限の冷静』

「いいかつ！ 俺達は何のために戦っている！ 当然、大人達への復讐とシステムデスクだ！ では、ここで俺と坂本を失ったらどうなるか考えてみる……どうだ、絶望しないだろう？」

俺達は勝つ、勝たねばならない！ しかし、お前達の行いはその勝利を自らドブに捨てるような行為なのだ！！

今から戦うBクラスはDクラスよりも格上の相手だ！ それでもお前らは味方を裏切ることを選ぶかあつ！

ならば歯を食いしばれ！ 上官の命令を遂行できない奴は屑だ！
屑以下だ！！

戦闘が始まるまでの15分間、お前達が上官命令絶対服従遂行冷徹冷酷殺人マシーンになるまでじっくりと激しく矯正してくれるっ

！遺書を書いてちやぶ台の上に置いて来いイイイイ！！」

一呼吸。

「それがいやなら 俺に、ついて来い」

音が、死んだ。

そして数瞬後。

『お、おおおおおーっ！！』

『そうだ！ 仲間割れしてる暇はねえ！』

『行くぞお前ら！ 俺達のシステムデスクのためにーっ！！』

作戦成功。俺は皆に背を向け、Bクラスへと歩き出す。

後ろから、皆が何も言わずに着いてきてくれることが 嬉しかった。

「ドアと壁をうまく使っんじゃ！戦線を拡大させるでないぞ！」

木下の指示が響く。

展開された戦場から一歩引いた位置に、悠々とたたずんでいた。

こうして見てみると、召喚獣同士の戦いというのはなかなか迫力があって面白い。

だが、そこで俺はふと違和感に気づいた。

姫路？

姫路が動かない。

吉井も不審そうに彼女を見ている。

その時、だった。

Bクラス代表、根本恭二の手に、あるモノが握られている。その事実を、俺の眼球は確かに視認した。

それは、俺があの時姫路に返した、白い封筒……ラブレター……！

「は……はははっ」

笑ってしまう。そうか、俺は 変えられなかった、のか。

畜生……！

俺は手元の携帯電話を使い、坂本にメールを送る。
それは一方的な文章だった。

『俺 根本殺す 姫路 戦闘不可』

悪いな、坂本……俺は冷静だ。

ただ、冷静にキレているだけだ……！！

何が傍観者だ。

一步、戦地に近づく。

何が転生者だ。イレギュラー

また一步、戦地に近づく。

もついい。俺の全てをかなぐり捨ててでも、俺の全てを殺してでも、あの少女を守る。姫路瑞穂

「……ホント、吉井が羨ましいな」

その言葉は、戦場のざわめきにかき消された。

『おい、有野悠夜が出てきたぞ……!』

『全軍注意しろ!』

うるさい。俺が倒すべき相手はただ一人……!

「前原先生」

「ひゃ、ひゃいつ!?!」

近くにいたいるりちゃんに話しかける。確か彼女は高橋女史と同じで総合得点担当だったはず。

「Fクラス有野悠夜……この場にいるBクラス生徒全員に総合科目勝負を申し込みます」

『『『なっ!?!?』』』

かまわない。俺は、全員叩きのめす。

「サモン試獣召喚」

現れる召還獣。前と同じ漆黒の衣装。しかし手には何も持っていない。当然だ。選択武器は『暗殺道具^{アサシンセット}』、ナイフなどの持ち運びやすいもの限定である。

『なめやがって!』

次々と出てくる召還獣達。そして、得点が表示された。

《Fクラス 有野悠夜 VS Bクラス×10人
総合 4432点 平均2340点》

沈黙があたりを包む。 4400点か。まあまあだな。

そんな中、俺の召還獣がつけた腕輪が光り輝いた。

「スタート・アップ
透過」

瞬間、その場から俺の召還獣その姿が掻き消えた。

『ツツ!!?!?』
『エンド・アウト
透過終了』

そして、廊下の天井すれすれの上空に、俺の召喚獣が現れた。それが姿を現したとともに、Bクラス生徒の召喚獣達に既に突き立った状態のナイフが、突然姿を現す。

漆黒の召喚獣が地に足をつけるとともに、他の召喚獣は鮮血を撒き散らしながら廊下に倒れ伏した。

「ひ、いつ……!?!?」

残るは、根本恭二のみ。
返り血を浴びながら、なおも目標へと向かうその姿は、まさしく
虐殺者。

「根本恭二……一つ、言い忘れていた……」

漆黒の召喚獣と、根本の召喚獣が並び立つ。
俺の召喚獣はコートの中に両手を突っ込み、腰を屈めた。

「あまり、俺を怒らせないほうがいい」

《Fクラス 有野悠夜 VS Bクラス 根本恭二
総合 4232点 2520点》

瞬間、振りぬかれる召喚獣の両腕。

放たれた8本の煌くナイフは、寸分狂わず根本の召喚獣の四肢を
貫き、頭部を破砕した。

それと同時に、俺も駆け出す。

周囲がBクラス代表の戦死を叫ぼうとした瞬間、俺の拳は根本の
顔面に突き刺さった。

「ッ!?!?」

声すら出せず、吹き飛ばされ、廊下に転がる根本。

俺はぐつと膝を曲げると、跳躍。そのまま根本の腹に着地した。

「がぼっ！ げぼっ、げぼっ」

マウントポジションを取ると、根本と視線が合う。明らかに怯えたその表情に、俺は 口元を醜く歪めた。

「言ったはずだ。俺をあまり怒らせないほうがいい、と」

拳を振り下ろそうとして 腕を、誰かに掴まれた。

「そこまでだ、悠夜」

西村先生は、無表情で俺を見下ろしていた。

『さて、それじゃ嬉し恥ずかし戦後対談といくか。な、負け犬組代表？』

今から戦後処理らしい。俺はまだ熱い身体を冷やすため、屋上に
出ている。

「……さすがに、我ながらアツくなりすぎたな……」

自分で呟き、俺は自嘲げに口元を歪める。

恐らく、下では根本が無理矢理女子生徒の制服に着替えさせられ

ているのだろう。

「……次はAクラスか」

なあ、俺はどうすればいい？

答えは出ていなかった。

《戦争編》第8章 俺は冷静だ。ただ、冷静にキレているだけだ。(後書き)

明「……僕に！」

姫「……私に！」

雄「……俺に！」

秀「……ワシに！」

4人「感想を分けてくれー！ー！ー！」

悠「いるりちゃん、俺主人公だよね？　なんでハブられてるの？」

い「多分……日ごろの行いでしょ」

悠「いるりちゃんの裏切り者ー！」

有野悠夜の召喚獣(2nd)

腕輪『ステルス透過』

一時的に召喚獣の姿を見えなくする腕輪。

さらに透過中はある程度の『加速』を得られており、土屋康太の召喚獣ほどではなくが高速での移動が可能。

そして自身が投げたナイフなども透明になるため、相手が気づかない内に敵を倒すことが可能。

制限時間を過ぎると透過は終了し、ナイフなども実体化する。

今回の選択武器は『アサシンセット暗殺道具』。

いくつかの小物を同時に使う。

・ナイフ

投げるも切るもどちらでもできる。割と万能。

・ワイヤー

鋼でできたワイヤー。敵を絡め取ったり切り裂いたりできる。今回未使用。

・デリンジャー

手のひらサイズの拳銃。リンカーン暗殺などに使用された有名な超小型拳銃。今回未使用。

・針

相手の首筋などに打ち込む。毒針もあるらしい。今回未使用。

なぜか悠夜が姫路に片想いみたいな雰囲気になっちゃたんだ！ 後悔はしたけど反省はしてないぜ！ 後

〈戦争編〉第9章 だが断る！（前書き）

以下の問いに答えなさい。

『女性は（ ）（ ）を迎えることで第二性徴期になり、特有の体つきになり始める』

姫路瑞希の答え

『初潮』

教師のコメント

正解です。

吉井明久の答え

『明日』

教師のコメント

随分と急な話ですね。

土屋康太の答え

『初潮と呼ばれる生まれて初めての生理。医学用語では、生理のことを月経、初潮のことを初経という。初潮年齢は体重と密接な関係があり、体重が1.5kg に達するころに初潮をみるものが多い為、その訪れる年齢には個人差がある。日本では平均12歳。また、体重の他にも初潮年齢は人種、気候、社会的環境、栄養状態などに影響される』

教師のコメント
詳し過ぎです。

有野悠夜の答え

『回答：初潮

なお、初潮がきたからといってすぐ妊娠できる体になったというわけではない。初潮がきた後も1〜2年ほどは排卵の時期も不定期だからだ。

現にペルー出身のリナ・メディアは5歳7ヶ月21日で出産しており、他にも1910年には清において父親9歳、母親8歳という家族が誕生している。その後も1930年にはソビエト連邦で6歳の少女が母親となった上、記録のみなら日本にも、下総藤代村（茨城県取手市）でとやという8歳の女児が子供を生んだ話が記録されているなど、依然として女性の体の仕組みには不可解な点が多い』

教師のコメント

あとで土屋君と職員室に来るように。

〈戦争編〉第9章 だが断る！

対Aクラス戦。

ついに、俺達の戦いは最終ステージへとたどり着いた。

最終決戦へ向けた、最後の作戦の説明を　俺達はFクラスの教室で受けようとしていた。

……どうすればいいか、昨日一晩の間に考えた。

いるりちゃんと晩御飯を食べ。

いるりちゃんとテレビを見て。

いるりちゃんを家に送って。

あれ？　なんかもう俺、いるりちゃんに依存してない？

まあそれは置いて。

結論から言えば、俺は　Fクラスを勝たせようと思う。

「これで……正しいのか？」

原作への介入。

それは許されることなのか？

「くそっ……」

苛立ちをこめ、俺は卓袱台に拳を叩きつけた。

「まずは皆に礼を言いたい。周りの連中には不可能だと言われてい

たにも関わらずここまで来れたのは、他でもない皆の協力があったことだ。感謝している」

珍しいな、坂本が素直に礼を言うなんて。

「ゆ、雄二、どうしたのさ。らしくないよ?」

吉井、それについては俺も同感だ。

「ああ。自分でもそう思う。だが、これは偽らざる俺の気持ちだ」

……本当にこいつは、人を纏め上げる天才じゃないのだろうか。俺までもが、今までの戦いの日々を回想してしまう。

「ここまで来た以上、絶対にAクラスにも勝ちたい。勝って、生き残るには勉強すればいいってもんじゃないという現実を、教師どもに突きつけるんだ!」

……ああ、そうだな。

俺は 皆のためにも。

「 負けられないな」

俺の呟きは、クラスメイト達の雄叫びに掻き消された。

「皆ありがとう。そして残るAクラス戦だが、これは」

「……一騎打ち、を提案したいんだが」

坂本のセリフを遮り、俺は立ち上がる。

「最後の決戦だ。ここは、ウチの代表と相手の代表の一騎打ちで、雌雄を決しよう」

俺の言葉に、周囲はざわめきだす。

「ちょ、ちよつと悠夜！ 馬鹿の雄二が勝てるわけなあつ！？」

瞬時に発射されたカッターが、吉井の頬を掠めた。

「次は耳だ」

「ご丁寧な警告ありがとう。話を続けるぞ」

がたがたと震えている吉井は放置の方向だ。

「確かに霧島は強い。俺なら真つ向から戦ったらなんとか勝てるだろうが、それは相手に乗ってこないだろう。だから、相手が油断するような相手　つまり馬鹿の坂本を対戦相手にするへヒュオン！
》……俺を殺す気か」

雄二が投げつけたコンパスが、俺の眼前を通過する。

ちよつ！ 前髪がハラハラと舞ったって！ リアルに切れた！
なんか今リアルに髪切れたから！ メツチャ怖いんですけど！

「……僕としては、悠夜がここまで無表情なのは秀吉の真の性別並みに不思議だね」

「待つのじゃ明久。なぜそこでワシの性別を引き合いに出す？　ワシは真正正銘の「女」じゃと何度も言っておる」

……さすがだ土屋。^{ムッリーニ}寡黙なる性職者の名は伊達じゃない。

「木下秀吉。ついに自分は女であることを認めただか」

「？ 悠夜、何を言っておるのじゃ。ワシは「女」ではないぞ？」

こいつ、土屋の細工を予測して先回りしただと！？

「つと、話が逸れたな」

土屋が余計なことをするからだ。

「まあ確かに、坂本と霧島ではあちらが有利だろう。同じクラス代表でもAとFじゃ天と地の差だ。10センチと22.5センチの差は絶対に埋まらない」

「……………そのAとFじゃない」

話を理解できるあたり、土屋と俺はいい友達になれ　ぐふうっ！

一閃、目で追うことすらできない速さで俺の顎はアッパーカットに貫かれた。

馬鹿な、教室の隅にいたはずの島田が、瞬きした瞬間目の前に現れていただと……………？

「……………それは、ウチに対する挑戦状と受け取っていいのかしら？」

《健全な青少年を育成する学び舎での不健全な発言は良くないわよね、悠夜？》

「美波、本音と建前が逆だよ……………」

吉井が呆れたように声をかけるが、島田は俺への攻撃の手をゆるめない。

と、突如島田の右手が神々しい光を放ちだした。

「……………ッ！ まさかそれって　」

島田美波が雄雄しく叫ぶ。

「レム ア・イ パクトオオ ……！！」

「斬魔大聖っ！」

マイクロブラックホールをまともに叩きつけられ、俺は教室の壁に激突する。

しかし、島田のターンは終わらない！

「まだまだいくわよっ！」

卓袱台を踏み台にして、島田は再び俺へと飛び掛り、拳を俺の胸に叩き込んだ。

「ヒイイイト・エンドッ！！」

「ぐべあっ！」

炎の拳が俺を穿つ！ その威力によつて俺の体は壁にめり込み、くの字に折れ曲がった。

「す、すごい……あの悠夜を一瞬で撃沈するなんて……！」

「一撃目で体の自由を奪い取り、二撃目で息の根を止めたか……ありがちで読まれやすいコンボだが、一撃一撃の威力で十分にカバーできてるな」

「冷静に実況してる場合じゃないですよ坂本君！？ は、早く手当てしないと有野君が大変なことになっ！」

慌てて駆け寄ってくる姫時の姿を見やりながら、俺の意識はブラックアウトした。

そして、だ。

目が覚めたら、豪華なソファーに座っていた。

まあ分からないでもない。俺の目の前に座っているのは木下優子だ。

……そして、俺の膝を枕にして寝ているのは霧島だ。

横を見る。坂本が口元を引きつらせていた。

後ろを見る。姫路が微笑んでいた。目を除いて。

逆側に首を捻る。吉井が凍り付いていた。

「なんじゃこりゃあーっ!!」

このカオス状況に耐え切れず絶叫した俺を誰が責められよう。

「……悠夜、嫌い」

「ちよつとまで霧島！ お前はなぜそこで寝ている!？」

「……不可抗力」

「その割にはメチャクチャ気持ち良さ気に目を細めてるなあ！ ていつかもつと抗えよ！ その誘惑的なものに！」

「……不可抗力」

「そればかりだなチクショウ！」

と、ようやく周囲が再起動を果たす。

「……それでね、悠夜。一騎打ちって何が狙いの？」

スルーかよ。こいつ俺のこと見捨てやがったな。
俺も意図的に視界から霧島を排除しつつ、木下に話しかける。

「……当然、俺達の勝利だ」

「そう。面倒な戦争をする手間が省けるのはいいけど……だからと
いってわざわざリスクを冒す必要もないかな」

実に正しい判断だ。けど……俺がここで引き下がると思うな。

「ところで、Cクラスの連中との試召戦争はどうなった？」

「時間は取られたけど、それだけだったよ。何の問題もなし」

ここまでは想定範囲内。

「じゃあ、Bクラスとも戦ってみるか？」

「Bクラスって……、昨日来ていたあの……」

……心なしか木下の顔色が悪くなっている。可哀想に。

「ああ。アレが代表をやっているクラスだ。宣戦布告はまだされて
いないらしいが……」

「でも、BクラスはFクラスと戦争したから、三か月の準備期間を
取らない限り試召戦争はできないはずだよな？」

これは試召戦争のルールの一つである。負けた組は三ヶ月の間は
試召戦争を自ら挑む事はできない。これは試召戦争の敗者が、連続
で戦争を仕掛けることによる泥沼化を防ぐためだ。

「知らないとは言わせない、実情はどうあれ、あの戦争は『和平交
渉にて終結』となっている。規約には触れていないぞ？ …… Bク

ラスだけではなく、Dクラスもだがな」

「それって……脅しなの？ 悠夜」

うわあ、俺って結構悪いキャラじゃないか？

話してる内容もエゲつないし、てかモロ脅迫ですコレ。

「ああ、無論だ」

否定しないけどな！

考え込む木下。と、原作よりちよつと早く霧島が口をはさんだ。

……俺の膝の上から。

「……悠夜達の提案をのんでもいい」

「ッ、代表!？」

その言葉に、木下は驚いた。が、すぐに冷静さを取り戻し、一瞬の思考で結論を出す。

「わかったわよ。じゃあ、代表同士の一騎打ちじゃなくて、そうね、お互い五人ずつ選んで、一騎打ちで先に三回勝った方の勝ちってことにしてくれる?」

「ああ、いい」

と、坂本が頷こうとして。

「だが断るッ!」

『!?!?!?!?!』

……ハッ！ ついノリで叫んじゃったZ E！

思わず坂本の方を見るが、奇妙な生命体を見るかのような目が痛い。ごまかしに笑ってみたが、目を見開かれた。

「……すまない、忘れてくれ」

「悠夜……」

吉井からの視線が突き刺さる。うっ、我ながらなんてトチ狂った真似をしてしまったんだ……！

S i d e A k i h i s a - y o s h i i

『だが断るッ！！』

ああ……悠夜……もう、大分染まってきたね……。

最近は悠夜とアニメを見る機会も減ってるけど、僕が叩き込んだ知識はきつと脳髓に染み付いてるだろう。もしアニメ・ゲーム知識に致死量があったなら、僕や悠夜は間違いなく死んでいる。

「さすがだよ、悠夜……」

このタイミングでそれを口にするなんて、まったく。もう僕から教えることはないみたいだね。免許皆伝だ。

ところで、元ネタ知らない他の人たちには、今の台詞どんな風に聞こえたんだろ？

S i d e o u t

S i d e Y u z i - s a k a m o t o

『だが断るッ!!』

まるで冷水でもぶつかけられたような気分だった。

そうだ。今、俺はAクラス敵の要求をのもうとしていたんだ。

悠夜は、あいつは、遠回しにそのことを伝えてくれたんじゃないのか？

なんてバカなことをしていたんだ、俺は！

考える、使えるカードはすべて使え。『神童』と呼ばれていたころの俺は、相手を信じず、常に自分に保険をかけていた。

思い出すんだ、昔の感覚を。トレースしろ、昔の俺の思考を。

「さすがだよ、悠夜……」

その明久の言葉に、俺は思わず悠夜の方を見る。

視線が合った。悠夜が口元を歪める。

最も使えるカード、『有野悠夜』

……そうか。

俺は思わず目を見開いた。

この男は、親友は……自身すら利用させてでも、勝つ気なのだ。

そこまでして、なぜこいつが勝利を望むのかなど知らない、否
知る必要などない。

「……いいだろう、絶対に勝たせてやるよ」

ああ、そうだよ。俺は、坂本雄二は甘かった。

だが今、悠夜が気づかせてくれた。これで俺は、ようやく F
クラスの本当の指揮官として戦える。

そうだ。俺は、もう一度だけ がんばってみても、いいかもし
れない。

Side out

Side Mizuki-himezi

『だが断るッ！！』

唐突に、有野君が叫んだ言葉。

一瞬わけがわからなくなっただけど、吉井君の「さすがだよ、悠夜
……」という言葉から、きっとすごいことを言っているんだと思
います。

断るって……どうしても一騎打ちじゃなきゃダメな理由もある
んでしょうか……

「……いいだろう、絶対に勝たせてやるよ」

坂本君の言葉。

私の鼓膜がそれを脳に伝えた時、思わず混乱してしまいました。

え……勝たせるって……それじゃあまるで、有野君が戦うみたいじゃないですか……

ハッとしました。

有野君は、自分の手で戦争を終わらせようとしている？

そんな！私だって、今まで一緒に戦ってきたっていうのに！

どうして、最後の最後に、一人で……？

しかも、恐らく相手は学年主席の霧島翔子さん。私は次席レベルですけど、それでも彼女との差は大きい。

……いや、勝ち目なんてどうでもいいです。

問題は。

どうして、そこまでして……一人で背負い込もうとするんですか、有野君……

私には、貴方の背負う荷物を……分けてもらうことすらできないんですか……？

Side out

おいおい、何やら皆、深刻そうな表情で黙り込んだぞ。

やばい……俺、かなりハズしたみたいだ。

「……………木下優子」

坂本が、俯かせていた顔をゆっくりと上げる。

「すまないが、五本勝負の科目は、全てこちらに選ばせてもらっ
なッ!?」

「どういうことだ!? 原作と違うぞ!？」

「……………有野君だけに戦わせるなんて、させません」

姫路が視線を強くしながら、霧島をキッと睨み付けた。

結局その後、坂本の強気な交渉や姫路のメンチビームもあって、
五本勝負は全て俺たちに科目選択権が委ねられることとなった。

「……………俺が何をした」

思わずそうつぶやきながら、俺は夕暮れの通学路をトボトボと歩
いていった。

「あいつもよくやるな、まったく」

電柱の頂上、そこに男は佇んでいた。

上から下まで全てを黒で包んだ彼は。

「まあいいさ。せいぜい楽しませてくれよ、『転生者』君」

まさしく、有野悠夜の召喚獣そのものだった。

〈戦争編〉第9章 だが断る！（後書き）

復活しました。

……ただ、大分変更しましたw

あと3話ぐらい割り込みすると思うんで、お楽しみに！

《戦争編》第10章 だから、どうした？（前書き）

問 以下の意味を持つことわざを答えなさい。

- 『(1) 得意なことでも失敗してしまうこと』
- 『(2) 悪いことがあった上に更に更に悪いことが起きるとえ』

姫路瑞希・有野悠夜の答え

- 『(1) 弘方も筆の誤り』
- 『(2) 泣きつ面に蜂』

教師のコメント

正解です。他にも(1)なら『河童の川流れ』や『猿も木から落ちる』、(2)なら『踏んだり蹴ったり』や『弱り目に祟り目』などがありますね。

土屋康太の答え

- 『(1) 弘方の川流れ』

教師のコメント

シュールな光景ですね。

吉井明久の答え

- 『(1) ヒイロにも任務ゼルエルの失敗』
- 『(2) 泣きつ面に第14使徒』

教師のコメント

君は本当に高校生ですか。

〈戦争編〉第10章 だから、どうした？

Aクラス教室

「それでは、両名とも準備はよろしいですか？」

今回の立会人は学年担当の高橋先生だ。こちらをチラチラと見てきているが、恐らく、この間廊下で泣いていたのを見られたからだろう。

まったく、教育熱心な先生だ。生徒一人一人に気を配っている。

「ああ」

「……問題ない」

A、F両クラス代表が頷く。

「それでは一人目の方、どうぞ」

さて、トップバッターは……原作通り、じゃないッ！？

「私が出ます」

確か原作では二番手だったはずの佐藤美穂が、トップバッターとして名乗り出た。原作じゃ明かされていなかったが、なんでも学年第4位の学力を持っているらしい。

図解すると、

俺 > 霧島 > 姫路 > 久保 > 佐藤 > 以下略

つてとこだ。

ボブカットにキラーンと光るメガネがよく映える。うーん、美少女に認定……つてそうじゃない！

「よし。頼んだぞ、明久」

「え！？ 僕！？」

おいおい、木下姉弟の対決（私刑）がすっ飛ばされたぞ！？ どうなってるんだ！？

「科目は物理だ」

混乱状態の俺に構わず、坂本は話を進める。

「分かりました。では、早く始めましょうか」

「ああ。……明久、大丈夫だ。俺はお前を信じてる」

「ふう……。やれやれ、僕に本気を出せってこと？」

原作との相違点……まさか、俺の介入によるものか！？ だとしたら今後間違いが出る可能性が高い。今回は一部の消失だったが、下手すれば改変にもなりかねないぞ！？

「ああ。もう隠さなくてもいいだろう。この場にいる全員に、お前の本気を見せてやれ」

『おい、吉井つて実は凄いヤツなのか？』

『いや、そんな話は聞いたことないが』

『いつものジョークだろ？』

どうする、どうしたらいい。

これ以上の原作の改変は望ましくない。

「吉井君、でしたか？ あなた、まさか……」

例えば、清涼祭編。

途中で姫路たちが連れ去られる場面があつたが、もし俺の介入によつて連れて行かれた場所が変わつたら？ もし助けが間に合わなかつたら？

俺は、俺は、俺は

「あれ、気づいた？」
「ご名答。今までの僕は「やっぱりあなたも有野君のことが好きなんですわね！」

教室の空気が凍つた。

「……………うん？」

思考を現実に戻させると、なぜか教室中の視線が俺に突き刺さつている。

「……………吉井君、有野君は……………あなたには渡しません！」

「は？ え、あれ？」

流れが読めない。え、何？
俺が思考に埋没してる間に、何があつた？

「サモン試験召喚！」

「え、えっと……………サモン試験召喚」

点数が表示され　る前に、弓道着風の和装を着た佐藤の召喚獣が、手に持った鎖鎌で吉井の召喚獣を両断した。

《Fクラス　吉井明久　VS　佐藤美穂

物理　　62点　　　　　389点　》

なんかよくわからんが、吉井のご冥福をお祈りするでしょう。

BGM『吉井バカと島田ペツタンコの会話交響曲』

「このバカ！　なんで点数が表示される前に瞬殺されてんのよ！」
「み、美波！　フィードバックで痛んでるのに、更に殴るのは勘弁してー！」

直後に響く吉井の悲鳴……　もとい、断末魔。

「あ、有野君……その……」

と、戦闘を終えたばかりの佐藤がこつちに歩み寄ってくる。
こつして近くで見ると、やはり可愛い。
うーん、原作だとほぼモブキャラになってるから残念だ。もっと活躍の場があってもいいのに。

「え、えっと……その……け、ケータイのアドレス……うう……」
「……………?？」

なぜか急にどもり出す佐藤。さっきまで吉井に敵意むき出しだったのに。

しかたないな、ここは軽いジョークで緊張(?)をほぐしてやるう。

「問おう。……貴方が学年トップクラスの美少女か？」

「！！！！？」

なぜだろう、さらにテンパってる。

そうこうしているうちに、土屋と工藤の戦いが終わっていたのは愛嬌ということで。

「では、三人目の方どうぞ」

「おk把握」

「黙れにちゃんねーが」

世迷いことをのたまう吉井の頭に、俺はハリセンをお見舞いした。どこから取り出したとか聞いてはいけない。

「痛あつ！ ってどっから取り出したのソレ！？」

「第96平行確立分岐世界 ・ 散在記憶地点回収境界ラインからだ」

早口でまくし立て、吉井の頭脳をオーバーヒートさせる。

結果、吉井は頭から煙を上げて沈黙した。

「あ、は、はいっ」

姫路が手を上げ、前へ一歩進み出た。

まあ、Fクラスが所有する最大級の切り札だからな。Aクラスと

「対一で互角以上に戦えるっていうのは嬉しい限りだ。」

「それなら僕が相手をしよう」

対戦相手は久保利光。現在学年次席の座についている男だ。

「久保君は凄いですからね……」

「そんなに？」

佐藤の言葉に、俺はふと疑問を呈する。

すると彼女は振り返り、やんわりと微笑んだ。

「まあ、有野君には敵わないと思いますけど」

「……そうか」

俺は『結果』を知っているので心配する必要などないが、他のメンバーからすれば山場と言ってもいいだろう。

「科目はどうしますか？」

「総合科目でお願いします」

高橋先生の言葉に、即答する姫路。

誰も言葉を挟まない。彼女の真剣なまなざしを見て、横槍を入れることができるやつはそうそういないだろう。

だからこそ、信じるぜ、姫路。

《Aクラス

久保利光

V S

Fクラス

姫路瑞希

総合科目

3997点

4409

一瞬で決着がついた。

点数差400点オーバーか。さすがといったところだろう。

「ぐっ……！ 姫路さん、どうやってそんなに強くなったんだ……？」

悔しそうに久保が尋ねる。最近まで拮抗していたはずの実力をここまで離されたら、気になるのも当然だろう。

「……私、このクラスの皆が好きなんです。人の為に一生懸命な皆のいる、Fクラスが」

「Fクラスが好き？」

「はい。だから頑張れるんです」

……そっか。それが、お前の頑張るか^{戦う理由}……

「これで二対一です」

高橋先生の表情に若干の変化が。

へえ、この人こんな表情もするんだな。戸惑ってる。

まあ現時点じゃ俺たちが勝ってるんだし。天下のAクラスがFクラスに追い詰められてるんだ。驚かないわけがない。

「次は 俺だ」

そう宣言し、俺は決闘場へと足を踏み入れる。

教室内が静まり返る。

『……あれ？ 詰んでね？』

Aクラス生徒の言葉。うん、ぶっちゃけ俺勝つたらFクラスの勝利なんだよね。

そしてAクラス最大の保有戦力である霧島は代表同士の戦いがあるため使用不能。

学年2位の姫路はコチラ側だし、彼女に次ぐ久保、佐藤はもう戦った後だ。

……そんななか、一人の生徒が手を挙げた。

「私が、行きます」

お前誰だよ!?

頭の中で、俺がそんなツッコミを入れたのも無理はあるまい。

俺の前に姿を現したのは、金髪の長髪をツイテールに束ね、若干吊り気味の碧眼を俺に向ける美少女。

……天光院美月^{てんこういん みつき}。学年7位の学力を持つ少女。

発育もかなりよく、目測でCかDはあると俺は読んでいる。……何の話かは、推して考えるべし。

「……科目は総合でいいな？」
「ええ」

それだけ言っつて、彼女はふうと息をついた。
高橋先生がフィールドを展開する。
俺は迷うことなく召喚獣を召喚しようとした　　が。

「私は、負けられません」

その言葉に、思わずモーションを止める。

「私は、Aクラスが……私がいるクラスが、クラスメイトが、大好きです」

心を静かに打つ言霊。

「ですから、その大好きなクラスメイトを　　友達を守るためにも、私は負けられません！」

そう宣言し、彼女は自らの召喚獣を呼び出す！

「　　^{サモン}試獣召喚！」

現れたのは、気高き騎士王そのままの姿をした召喚獣。

気高き振る舞いと自愛に満ちた表情は、まさに『王』だった。

そして、点数が表示される。

《Aクラス　天光院美月　総合科目　4870点》

姫路との点数差、400オーバー！。

……正直、これは想定外だ。……久々に、ヤバい。

「何だとツ!？」

坂本の焦ったような声。あいつ、さてはここで決着をつける気だつたな？

まあ、いいさ。

『あいつ、いつの間にあんな実力を……!!』
『なんて奴だ……代表を凌駕するんじゃないか……?』
『すげえよ、天光院。ここまでやるなんて』

あちらこちらから、驚きの声上がる。

けれど俺は大して態度も崩さず、やや冷めた目でその召喚獣を見やった。

そして、目をつぶる。

イメージ。

自分にとって、最強にして最凶の存在。

それをイメージする。

漆黒の衣服、殺しの道具。

返り血は不要。なぜなら倒すのは人じゃないから。

俺にとって最大の災いでもあり、呪いでもある『あの男』
それを具現化する。そ

「さあ、頼むぜ」

目を開ける。
袖をまくり、軽く右手を スナップを利かせて 振る。軽い
準備体操だ。

「天光院、俺はお前とは違って、Fクラスが嫌いだ」
シン、と水を打ったような静けさ。

「毎日毎日、『何で俺がこんなところになくちゃいけないんだ』
って思ってるんだ」

俺はこいつらとは違う。そうずっと思ってる。

「だけど、さ」

Fクラスのみみんなと過ごしていて、分かった。

「あの教室は、こいつらとバカやるには狭すぎんだよ」

ふっと笑う。

「4870点だあ？ だから どうした？ そんなのに負けて
たまるか」

俺は天光院を軽く睨み、宣言する！

「俺も同じだ！ 友達のために、負けられない！」

試^{サモン}獣召喚。

刺殺斬殺断殺絞殺滅殺圧殺轢殺射殺銃殺撲殺抹殺強殺斬殺。
すべての殺し方で殺しても、殺し足りない。
それほど憎い存在。

それを、今、目の前に。

俺の力として。

俺の『召喚獣』として。

具現化する。

漆黒の衣服に身を包み。
彼の者は手にした『二丁拳銃^{ガンカク}』を構え、その場に佇む。

《Fクラス 有野悠夜 総合科目 4990点》

「さあこいよ騎士王^{セイバー}。軽くもんでやるさ」

「……分かりました。手加減せずに、往きます」

そうして、俺はこの決闘の引き金を引いた。

〈戦争編〉第10章 だから、どうした？（後書き）

復活しました。

天光院の召喚獣についてはまた次回！

〈戦争編〉第11章 負けてたまるか！（前書き）

以下の問いに答えなさい。

『バルト三国と呼ばれる国名をすべてあげなさい』

姫路瑞樹の答え

『リトアニア、エストニア、ラトビア』

教師のコメント

その通りです。

土屋康太の答え

『アジア、ヨーロッパ、浦安』

教師のコメント

土屋君にとつての国の定義が気になります。

坂本雄二の答え

『香川、徳島、愛媛、高地』

教師のコメント

正解不正解の前に、数が合っていないことに違和感を覚えましょう。

有野悠夜の答え

『日本、ドイツ、イタリア』

教師のコメント

それは日独伊三国軍事同盟です。しっかり覚えておくようにしましょう。

吉井明久の答え

『アークエンジェル、クサナギ、エターナル』

教師のコメント

それは三隻同盟です。

《戦争編》第11章 負けてたまるか！

「「「だあああああつつつ！」「」」

俺と天光院の召喚獣が交錯する。

一瞬の間に振られた剣を、俺の召喚獣はカスタムされた拳銃を使って受け流し、相手のわき腹に渾身の蹴りを叩き込む。

《Aクラス 天光院美月 総合科目 4870点 4770点》

しかしダメージはたった100点。どうやらあの鎧は想像以上に堅いらしい。

「ならっ！」

相手の得物は大きい。だからこそ、動作が大振りになる。

横に一閃された刃を上空に跳んで避け、真上から二丁拳銃をフルオートで乱射する。

ガガガガガガッ！！

マシンガン張りのスピードで放たれた銃弾は、虚空を裂くに留ま
った。

天光院の召喚獣は、すでに横へ飛びのいた後。想像以上に動きが
すばしっこい。

そして。

《Aクラス 天光院美月 総合科目 4770点 4570点》

「ッ!？」

何も攻撃を当てていないのに、彼女の点数は減っていく。

『なんだ!？ システムエラーか!？』

『いや、アレを見る!』

観客の声につられ、俺も見た。

爛々と輝く、天光院の腕に付けられた腕輪を !!

「マズい!」

本能が告げている。あれは食らうな。あれは避ける。あれには、あれだけは当たってはいけない！

俺も『透過』^{ステルス}を発動し、瞬間的な加速を乱発してその場から離脱。その時、天光院の点数の減少が止まった。

《Aクラス 天光院美月 総合科目 1070点》

そして。

召喚獣の手に持たれた両手剣が輝き輝きさらに輝き。

「約束された」^{エクス}

逃げる！ 逃げる！ あれには、絶対に勝てない！

「勝利の剣」^{カリバー} !!」

そして、部屋が金色の光に包まれた。

光が止んだ後、そこに立っていた俺の召喚獣は酷い有様だった。

《Fクラス 有野悠夜 総合科目 350点》

左腕は千切れ飛び、足は小鹿のように震え、着ていた服は切り裂かれた上にとろどろ焦げている。唯一残った武器の拳銃は、銃口が吹き飛ばされ使用不能。

「……最悪だ」

思わず悪態をつくほど、状況は悪かった。

しかし相手もそれなりに消耗しているようで、腕輪は輝きを失い、天光院も脂汗をかいている。

「……いけるな？」

返事など来るはずないが。

しかし、俺には、自分の召喚獣がこくりと頷いた、そんな気がした。

「武器破棄、選択……」

サムライ・ソード
『日本刀』！」

瞬間、残った右腕が握っていた拳銃が消え、代わりに白銀の刃が現れる。

「ッ！」

相手も剣を構えた、が。

俺の召喚獣は、たった300点台とは思えないほど俊敏な動きで相手に肉薄、右腕を切り飛ばす。

「きゃあっ!?!」

《Aクラス 天光院美月 総合科目 570点》

いつきに500点のダメージ。……だが。

「くっ、……このおっ！」

カウンター気味に振るわれた刃が、俺の召喚獣の左足の太ももを貫く。

《Fクラス 有野悠夜 総合科目 50点》

「だから……どうした!」

ガキイツ!!

手元の『サムライ・ソード日本刀』で、俺は同じように天光院の召喚獣の腹部を貫こうとした。

《Aクラス 天光院美月 総合科目 550点》

ダメだ、鎧が異常なほど固い上にこちらの点数が少なすぎる。

狙うとしたら 首！

しかし、気を取り直して刃を振るう頃には、あるうことか天光院は『エクスカリバー約束されし勝利の剣』を俺の脚に突き立てたままバックステップで距離をとっていた。

そして。

ユラリ、と、まるで塵気楼のように、相手の召喚獣の左手に、新たな剣が生成される！

「嘘たる……」

考える。この状況を打破する考えを！

左足が動かない以上、回避は不可！ なら、あれを食らう前に決着をつけるしかない！

思考を切り替え、俺は召喚獣に指示を出す。

「投擲……準備……」

打破する方法、それは刀を投げつけること！

《Aクラス 天光院美月 総合科目 550点 50点》

また、相手の点数が減った。

「勝利カリすべき」

今だッ！！

俺の召喚獣は、『日本刀』を振りかぶり、全力で投擲

「^{バーン}黄金の剣　　！！」
「負けて、たまるかああああアアアア！！」

瞬間、再び室内は黄金の輝きに満たされた。

《Aクラス　天光院美月　VS　Fクラス　有野悠夜
総合科目　　35点　　0点　　》

投げつけた『日本刀』は天光院の召喚獣の頬を浅く切り裂くに止まり。

あの『勝利すべき黄金の剣』は、俺の召喚獣の上半身を吹き飛ばした。

……俺の、……負け。だった……

〈戦争編〉第11章 負けてたまるか！（後書き）

天光院の召喚獣

外見はF a eのセイバー。

武器

・両手剣「エクスカリバー」
野太刀のように長い西洋剣。ちゃんと見える。

・両手剣「カリバーン」
隠し武器。エクスカリバーが使えなくなったときとかに使用。
どちらも両手剣なので、二つ同時に使うことはできない。

腕輪

・約束されし勝利の剣
自らの点数を意図的に消費して発動。武器がエクスカリバーの時に使用可能。
消費した点数の3倍のダメージを相手に与えるまさしく反則技。
今回は3700点消費したので直撃したら11100ダメージ。
オーバーキルにもほどがある。

・勝利すべき黄金の剣
大体は「約束されし勝利の剣」とほぼ同じ。
ただ、消費点数とダメージ比率は1：1。今回は500消費したので同じく500ダメージ。どの道オーバーキル。

風王結界は描写とか展開の都合上無理だったんだ！

ていうかもし不可視の剣だったら悠夜君即死。

……うん、勝つ見込みがない（笑）

前書きを見たらわかりますが、ウチの明久君は基本オタクです。

原作でゲームに費やしていた仕送りを間違った方向に使用していません。

アニメとか、まあ一般人とは遠縁なゲームとか。

番外編のエピソードが本気で欲しいです。オラに意見を分けてくれ
ー！！

《戦争編》第12章 は？ え、坂本じゃなくて俺？（前書き）

以下の問いに答えなさい。

『人が生きていく上で必要となる五大栄養素を全て書きなさい』

姫路瑞希の答え

『？脂質 ？炭水化物 ？タンパク質 ？ビタミン ？ミネラル』

教師のコメント

流石は姫路さん。優秀ですね。

吉井明久の答え

『？砂糖 ？塩 ？水道水 ？雨水 ？湧き水』

教師のコメント

それで生きていけるのは君だけです。

土屋康太の答え

『初潮年齢が十歳未満の時は早発月経という。また、十五歳になっても初潮がない時を遅発月経、さらに十八歳になっても初潮がない時を原発性無月経といい……』

教師のコメント

保健体育のテストは一時間前に終わりました。

有野悠夜の答え

『？女子　？面白い事　？思い出　？女子　？絆　あと、脂質に炭水化物にタンパク質にビタミン、ミネラルなど』

教師のコメント

思い出したように付け加えられても。あと、女子が二つある点に君の深層心理がよく表れていると思います。

〈戦争編〉第12章 は？ え、坂本じゃなくて俺？

『よくやったぞ、有野』

『アツい戦いだっただ』

『有野くーん！ 付き合っつてー！ー！』

そんな声が聞こえるが、俺はその場に膝をついた。負けた、絶対に負けてはいけない場面で、負けた。

「……………いい勝負、でしたね……………」

ふと視線を上げると、息も絶え絶えな天光院がその場にへたり込みながら、俺にイイ笑顔を向けてきている。

俺は立ち上がり、彼女の傍まで行くと、手を差し出した。

「俺の、完敗だ」

彼女がぎゅっと俺の手を掴む。

勢いよく引き上げたら、どうやら力を入れすぎたらしく。彼女が俺の胸に飛び込む形となった。

「ああ、悪い」

「い、いえ……………」

若干顔を赤らめ、天光院はすつと俺と距離をとる。

今、一瞬だけ彼女と身体が触れ合ったのだが。

いいブツ持ってるじゃねえか……………！

思わず彼女の胸部に視線が行く俺。
なめ回すようにじつくりと鑑賞

「さあ有野君、次は坂本君の試合ですよー。Fクラスの方に戻って
きましようねー」

「おぶじっ」

何故か姫路のチヨークスリーパー。

俺は引きずられるようにして、天光院と引き離された。

「（ッ、何、この胸の鼓動は……）」

「……美月」

「ひゃっ、代表！？ ……あ、次の試合、頑張ってくださいね！」

「……悠夜は、ダメ」

「え？」

「……なんでもない（プイッ）」

「では、最後の勝負、日本史を行います。参加者の霧島さんと坂本
君は視聴覚室へ向かって下さい」

準備を終え、戻ってきた高橋先生が言う。何故か俺とよく視線が
合うが……Bクラス戦の時、ひよっとしたら泣いているところを見
られたかもしれない。

「……はい」

霧島と一瞬目が合う。

ちよっと手を振られたので、軽く会釈した。

「じゃ、いつてくるか」

「坂本」

俺は拳を前に突き出す。

「任せろ」

同じように坂本も突き出し、俺の拳にぶつめた。

モニター観戦後、Fクラス男子は視聴覚室に特攻して行った。俺はその後ろを、悠々と歩いている。ただし、二人で。

「天光院、どっちが勝つと思う?」

「私としては、やはり代表かと。貴方は坂本君でしょう?」

そう言って微笑む天光院。……なかなかハイレベルだ、色んな意味で。

「いや、俺も霧島が勝つと思うな」

「え?」

俺は彼女と視線を合わせ、告げる。

「だって、君がそう言ったじゃないか」

ま、坂本は勉強サボってるしね、と付け加え。

そここうしているうちに、俺達も視聴覚室に着いた。

「さて、坂本が勝っていたら君と君の友達はその豚小屋行き」「代表が勝っていたら、貴方と貴方の友達はみかん箱ですね」

お互いにふっと笑う。……何故か天光院が顔を赤くした。

「じゃ」

俺はドアノブを掴み。

思いっきり、扉を開いた。

《日本史勝負 限定テスト 100点満点》

《Aクラス 霧島翔子 VS Fクラス 坂本雄二
97点 53点》

みかん箱、決定。

「……雄二、私の勝ち」

「……殺せ」

「いい覚悟だ、殺してやる！歯を食い縛れ！」

「吉井君、落ち着いてください！」

坂本に襲い掛かる吉井。それを必死に止める姫路。うん、健気だ。

「だいたい、53点ってなんだよ！ 0点なら名前の書き忘れとかも考えられるのに、この点数だと」

「いかにも俺の全力だ」

「この阿呆があーっ！」

そんなやり取りを聞き流しつつ、俺は隣の天光院に「ほらな」と言って笑った。繰り返す、笑った。

「ッ」

……やったぜ。俺、今自然な感じで笑えた。グツジョブ！俺！

「今俺、笑ったよな？」

そう天光院に尋ねると、何故か顔を赤くして俺と距離をとる天光院。

……まさか、笑顔がキモかったとか。

「……以後気をつける」

これからは行動を慎むことにしよう。

「ッ」

後ろから何か声をかけられた気がしたが、聞かなかったことにした。

「……ところで、約束」

「……………！（カチャカチャカチャ！）」

すごい勢いでカメラを構える土屋。何だろう、最近彼、影薄かった気がする……

「……………それじゃ」

一旦姫路に視線を送り。

次に俺に顔を向け。

ん？

「……悠夜、私と付き合って」

言い放った。

はい？

「は？ え、坂本じゃなくて俺？」

「……私が好きなのは、悠夜だけ」

ちょっと待て。これって原作と違いすぎないか？

「……拒否権は、ない」

待て。考えろ。

俺は転生者。^{イレギュラー}

彼女は登場人物。^{レギュラー}

「考えさせて、くれ」

霧島の瞳が揺れる。

俺は、俺は、なんでどうしてこんな

「……じゃあ、お願いを変える」

「？」

「……今から、買い物に付き合っ

ああ、それぐらいなら、きっと。

「分かった」

そういつた瞬間、俺の腕に抱きつく霧島。

……ひよっとして、原作であんなストーキングに出るのは、極度の甘えたがりやだからなのかもしれない。

「じゃあ、早く行くぞ」

「……うん」

なんにしても、試召戦争は終わった。

目下の問題は。

原作をどうにか成り立たせることと。

『 『 『 …… (ゴゴゴゴゴゴ) 『 『 『 Fクラス男子生徒

「 …… (じー) 「 姫路

「 …… (じとー) 「 いるりちゃん

「 …… (おろおろ) 「 天光院

身の安全を確保すること、ぐらいだろう。

〈戦争編〉第12章 は？ え、坂本じゃなくて俺？（後書き）

（幕間）

吉「僕が！」

悠「俺が！」

二人「ガンダムだ！」

姫「……何ですか、アレ？」

坂「明久は島田に、悠夜は翔子に一晩中連れ回されたらしい……」

土「………妬ましい……！」

秀「男とは辛いものなのじゃのう」

この小説は主人公がほぼチートです。

武装一覧

- ・狙撃銃 スナイプ
アサシンセツト
- ・暗殺道具 ガンリカタ
- ・二丁拳銃 サムライ・ソード
- ・日本刀

二丁拳銃はあれです。読み方のとおり、打突攻撃もできます。

これにて試獣戦争編は終了！

次は番外編を少しはさんでから、清涼祭編です！

あと、アンケートをとらせていただきます。

？清涼祭編で、いるりちゃんをメイン

? 同じく、天光院メイ
? 原作キャラメイ

この中で一つ、意見をご応募ください。? の場合は、そのキャラも指定していただけると助かります。

今後もバカへんをよろしくお願いします!

〈幕間編〉第13章 ……お前何してんの？（前書き）

以下の文章の（ ）にはいる正しい物質を答えなさい

『ハーバー法と呼ばれる方法にてアンモニアを生成する場合、用いられる材料は塩化アンモニウムと（ ）である』

姫路瑞樹・有野悠夜の答え

『水酸化カルシウム』

教師のコメント

正解です。アンモニアを生成するハーバー法は工業的にも重要な内容なので、確実に覚えておいてください。

土屋康太の答え

『塩化吸収材』

教師のコメント

勝手に便利な物質を作らないように。

坂本雄二の答え

『アンモニア』

教師のコメント

それは反則です。

吉井明久の答え

『黄金練成（アルスマグナ）』

教師のコメント

この小説はクロスオーバーではなく転生モノです。

〈幕間編〉第13章 ……お前何してんの？

「……起きて、悠夜」

「……お前何してんの？」

朝起きたら、幼馴染がベッドの中にいた。

「バカとギャルゲエの世界によっこ」……自主規制」

朝食が辛い。主犯は久々に帰ってきた我らが副担任、島原いるりだ。

今日はAクラス戦の翌日。結局、昨日は時間も時間だったので霧島とのデートは早々に切り上げたのだが、あるうことか霧島が俺の家に泊まると言い出し、晩御飯を作っていたいるりちゃんに遭遇。なぜか絶対零度の修羅場に突入した末に俺はそそくさと自室にこもって寝落ち。

けど、起きたら朝食が4人分あった。うん、いるりちゃんと霧島が別々に作ったらしい。俺が寝てる間に何があった。

「で、朝から二人前の朝食食べたので俺は激しい運動をしたくないのですが」

「……優柔不断」

俺が何をした。

「よっ、霧島。待たせたな」

「……いい」

時間は午後12時半。あれから霧島は一旦家に帰り、『デート』の準備をしてくるらしい。やけにその辺りを強調していたが。……いるりちゃん、痛い。そんな左腕を抓らないで。

「……で、その人は？」

「知らないのか？ Fクラス副担任で」

「悠夜君の同棲相手の島原いるりです」

「ちよつと待つんだいるりちゃん。いつの間に同棲しているのか小一時間ほど問い詰めたいとこなんだが……霧島、天下の往来でアイアンクローはイタタタタ！！ いるりちゃん、右肘が極まってる……！！」

駅前の噴水広場。カップルの待ち合わせ場所として有名な場所だが、到着した瞬間相手にアイアンクローをかまされた上に連れから右肘を破壊されたのは俺が始めてのはずだ。ていうか俺以外にいたら怖い。

「あれ？ 悠夜？」

「え、悠？」

「……吉井に島田か。デートか？」

アイアンクローと関節技を同時にくらってるにもかかわらず一発で見抜くとは、付き合いの長さの証拠だな。こんなかたちで証明し

てほしくなかったけど。

「あ、霧島さんに……島原先生？ 二人とも私服……ヤックデカル
チャー……」

「なんでだろう、今アキの左肘を無性にはずしたくなった」

「美波、それすでに実行してるからね？ とうか左腕だけではな
く右腕までもが裂けるように痛いっ！」

なんて丁寧な実況解説だろう。

両腕を完膚なきまでに破壊された吉井に同情の涙が止まらない。
俺も大して変わらない状況だが。

「（吉井。ここは5人で出かける方向性にするんだ）」

「（え、なんで？）」

「（あの2人と一緒に居たら、胃袋に穴が空く）」

もう手遅れかもしれんが。

「（……悠夜）」

「（その同情するような視線ヤメロ）」

結局、5人で映画を見る、ということとで皆納得した。

ちなみにセレクトした映画は『世界の中心で元気を分けてくれ！』
という訳の分からないタイトルの映画だった。だったのだが……

「……グスツ、ズズツ……」

いかん、あのストーリーは反則だ。泣くしかない。むしろ泣け。

泣き叫べ貴様ら。

隣ではいるりちゃんがおろおろとし、霧島が黙ってハンカチを差し出す。吉井と島田からは生温かい視線のプレゼント。後で覚えとけよ貴様ら。

「時間も時間だし、昼ごはんにしますか？」

いるりちゃんの提案で、俺達は近所の自然公園にやってきた。周りより一回り大きな木の下に、ビニールシートを敷く。

ふふふ、今日は俺が徐々に本気を出した昼ごはんセットだ！

「お、すごい豪華だね」

「……吉井の方も、見栄えがいい」

そう、俺も気になっていたんだが、吉井お前料理旨すぎないかなんていうか、こう……女の子のプライドを打ち砕くような感じの旨や。

「あはは、久々に財政的余裕があったから、奮発しちゃったよ」

「……もうウチ、一ヶ月ぐらい料理したくない……」

はいた的中。

ていうか、こんなデートイベントあったのだろうか。……まあ、書かれてないだけか。

「……悠夜、右手」

「ん？ ゲツ」

霧島に指差された先には、セミの死骸の上に置かれた俺の手が。

「悪い、洗ってくる」

「早く戻ってきてくださいねー」

いるりちゃんの声を背に受け、俺は洗面所へと向かったわけだが。

「……………天光院」

「……………」

木の陰で呆然と俺のほうを見る少女を見て、俺は深くため息をついた。

「……………お前何してんの？」

〈幕間編〉第13章 ……お前何してんの？（後書き）

前書きで吉井のはっちゃけっぷりが激しいぜ！

天光院が完全にサブヒロイン扱い。……ていうか彼女もすでに染まりつつあるね！ Fクラス病の感染率つてすごいね！

今回はこれの続きと天光院と悠夜君の出会いの話です。番外編はもう少し続くかと。

さあ、清涼祭編のアンケートをもう一度！

？清涼祭編で、いるりちゃんをメイン

？同じく、天光院メイン

？原作キャラメイン（姫路や霧島など。高橋先生もアリ）

今のところは2と3が同率です。いるりちゃん……君のことは忘れない！

ていうのは冗談で、清涼祭編での話です。

例えば、悠夜君と？？がコンビを組んで召喚獣大会に出たり。

例えば、悠夜君に？？が打ち上げの時酔っ払って絡んだり。

そんなところで、アンケートにご協力をお願いします！

次のバカへんは、天光院フルコースだッ！！

〈幕間編〉第14章 どうしちやっただる・・・私。(前書き)

アンケート

あなたが歴史の教科書について感じることを書きなさい。

姫路瑞樹の答え

『過去の偉人たちが残した功績を感じることができると、まるで自分がその時代にいるかのように知識をもらうことができます。私にとって歴史の教科書はタイムマシンです』

教師のコメント

タイムマシンとは、姫持さんらしい表現です。そうして歴史に興味を持ってくれるのは、教科書を製作した人も喜ぶことでしょう。

有野悠夜の答え

『教科書とは学生に正しい知識を教えるものだが、現状として教科書には誤った記述がよく見られる。たとえば1519年から1522年にかけてマゼランが世界を周航したとあるが、マゼラン本人はフィリピンで殺害されているのでおかしい。今後はより正確さを煮詰めてほしい』

教師のコメント

こちらはこちらで有野君らしい、容赦のない考察ですね。ですがその鋭い切り口は、個人的には好きです（by高橋女史）

土屋康太の答え

『女性の裸体画を増やしてほしい』

教師のコメント

土屋君の出血頻度も増えそうですね。

吉井明久の答え

『西暦だけじゃなく、コスミック・イラC・E・や皇暦も勉強すべき』

教師のコメント

そういったことの勉強は二次元と脳内で済ませてください。

〈幕間編〉第14章 どうしちやっただる・・・私。

きっかけは些細なことだった。

文月学園に入学して、初めての召喚実習。

「では、次に天光院美月と有野悠夜」

名を呼ばれ、私は前に出る。正面にいるのは、先ほどまで学年一のバカ 吉井明久と談笑していた男子生徒。

あの二人のコンビは学年はおるか学校中で有名だ。何せ学年最優の生徒と学年最悪の生徒のコンビなのだから。

「^{サモン}試獣召喚っ！」

私と彼の声が響き、次の瞬間、私たちの足元に幾何学的な魔方陣が現れた。そして出てくる召喚獣。

私の召喚獣はまるで騎士のような鎧を身に纏い、私と同じ金色の髪をお団子状にまとめ、西洋風の両手剣を持ち威風堂々と佇んでいる。

対する有野君の召喚獣は 漆黒。何から何まで黒。

周囲にもざわめきが広がっている。

だが、私には分かる、相対しているからこそ、この緊張感が伝わる。

……油断なんて論外。全力で挑まなければ、殺られる。

「^{スタート・アップ}いくぜ、天光院。『透過』」

その瞬間、彼が何か呟くと同時、彼の召喚獣はあろうことか消えてしまった。

『『『!?!?』』』』

周囲がざわめくと同時、私は気づく。

彼と真つ向から勝負を挑んだ時点で、私の敗北はすでに確定していたのだと。

《Aクラス 有野悠夜 VS Aクラス 天光院美月
総合科目 4380点 3785点 》

「『『エンド・アウト透過終了』』」

瞬間、私の召喚獣は四肢を切断され、敗北した。

「あの……」

実習後、私は吉井君達と立ち去ろうとする彼に声をかけた。

「ん？ どうかしたのか？」

「いえ、先ほどは一体何をされたんですか？」

姿が消えたのは腕輪の効果だろうが、攻撃方法が何だったのか皆目検討もつかない。

「ああ、ワイヤーだよ」

「ワイヤー？」

そう、と彼は頷く。

「鋼のワイヤーを君の召喚獣に絡めて、一気に引き千切ったんだ」

なんてグロテスクな説明。

と、彼めがけて飛来する物体多数。

「……食らうか」

華麗に、前へ後ろへ横へのステップでそれらを避ける有野君。ていつか飛んできてるのが上履きだったり生徒手帳だったりするのは私の見間違いだらうか。

『俺達の天光院さんとイチヤつくくなああー！ー！ーっ！』

『有野悠夜に断罪の裁きをオオオオオオオ！』

『天光院タン、ハアハア！』

すごく生理的に嫌な悪寒が走った。思わず有野君の制服の袖を掴んでしまう。

「ッ！？」

「こ、怖いです……（ギョッ）」

戸惑う有野君、涙目になる私。男子からのブーイングは増す一方だった。

この時点では、私はそこまで彼を意識したりはしていなかった。

廊下で彼の大声（やたらとDクラスを罵倒していた）を聞いたりBクラスの召喚獣をなぎ払っていたりその代表をぶん殴っていたりしているのは廊下の角に隠れて覗いていたのだが、それは別に彼と

会話したわけではないのでエンカウトとしては数えないし何よりわざわざ私から進んで彼と会話することもないだろうと思っていたりもするが彼とちよつと視線が合うだけで即座に逸らしたりその直後もうちよつと見詰め合つて置けばよかつたかもと思つたりもしたがやはりそんな勇氣もなく帰つてベッドの上で悶々と過ごすしかない以上私としては遠くから見つめるとというのが私と彼の理想的な関係だろうと自己完結していたりする。

ちなみに、上の内容を代表に話したら

『……悠夜と同じで、固有結界持ち?』

とわけのわからない言葉を頂いた。

「……天光院、お前何してんの?」

自然公園の洗面所の横で、そう問い詰められる私。まさか言えるわけない。

後をつけてました、なんて。

だって駅前で代表が噴水のオブジェに腰掛けて腕時計をチラチラ見てるだけでも気になるのにその直後有野君が、私服姿の有野君がやって来たらもう私は耐えられず素早く近くの物陰に移動し、その他の人たちが集まるのを見計らつてその場のノリで合流しようかとも思つたがやはり彼らの後ろをこつそりについて行くのが精一杯で今も木陰から食事時の風景をゴソつと覗き見ていて要するにストー

カーです、はい。

「ひょっとしてお腹空いてたか？」

「え？ あ、ちよっと……」

どういづことが、彼は私の手を引いて、皆の方へと歩いてきます。

「ちょっと驚くかもしれないけど、みんないいやつだから。多分、楽しいぞ」

嬉しい。

今、彼と手をつないでいるのが、彼に気遣ってもらえるのが。

そして何より 本人は分かかってないかもしれないけど 少し、ほんの少しだけ微笑んでる彼の表情を独占していることが。

嬉しい。

本当に、どうしちゃったんだろ……私。

〈幕間編〉第14章 どうしちゃったんだろ・・・私。(後書き)

時間空いた上に短いorz

次で第1章は終了です。

清涼祭編……まだだ！ まだ(アンケートは)終わらんよ！
てなわけでもう一度アンケートです。

? 清涼祭編で、いるりちゃんをメイン

? 同じく、天光院メイン

? 原作キャラメイン(姫路や霧島など。高橋先生もアリ)

ではでは、今後もバカへんをよろしくお願いします！

〈幕間編〉第15章 こんな世界、来るんじゃないかった。(前書き)

有野悠夜のアンケート

『あなたの趣味はなんですか？　そして、それは将来どのように役立つものですか？』

姫路瑞樹の答え

『私の趣味は料理です。これは将来、……家庭を支えることに役立つと思います』

有野悠夜のコメント

姫路と結婚するやつは苦労しそうだな。生命的な意味で。

吉井明久の答え

『アニメ鑑賞です。アニメから学ぶこともたくさんあり、どんな逆境でも挫けず、諦めない精神を主人公から得られることもあります』

有野悠夜のコメント

……初めて吉井がカツコよく見えた。

土屋康太の答え

『とつさ……隠しカメ……隠密行動』

有野悠夜のコメント

それが将来、どのように役立つか小一時間ほど問い詰めたいな。

霧島翔子の答え

『悠夜との添い寝。将来の子作りに役立つ』

有野悠夜のコメント

おい待て。その答えはどう考えても異端者扱いにな
液により文字判別不可）
（以下、血

島原いるりの答え

『上に同じ』

有野悠夜のコメント

だからどうしてそっとな……おっと、誰か来たようだ。

天光院美月の答え

『応急処置の練習。趣味というわけではありませんが、その……有野君が怪我をした時などに役立つと思います』

有野悠夜のコメント

お前はいいお嫁さんになるな。いやもう結婚してください。
ち
よっ、姫路、釘バットは、アッー！

《幕間編》 第15章 こんな世界、来るんじゃないかった。

「……………悠夜？」

「悠夜君、大丈夫ですか？」

天光院を連れて戻ったら、霧島というりちゃんから同時攻撃を食らった。全身がまんべんなくハンマーで叩き潰されたように痛い。

「あ、あの……………大丈夫ですか？」

天光院は本当に優しいな。

そうこうしているうちにまたもやいるりちゃんのガゼルパンチが俺のわき腹を抉る。この人の拳なら世界を狙える。

「悠夜君、顔がニヤけてますよ……………？」

いかん。いるりちゃんの目がおかしい。ハイライトが消えている。

「うわ、しらだ……………まさか実物を見れるなんて」

「？ アキ、何の話？」

時々、吉井が訳の分からないことを口走ることがある。何故だろう。

「……………悠夜？」

「霧島、この状態でお前が手を出せば俺の生命は……………」

こめかみへの凄まじい衝撃。

これが、原作で吉井や坂本が味わった苦しみ、痛みか。

そんなことを漠然と考えながら、俺の意識は闇に落ちた。

起きたら電車の中だった。

4人用のボックス席に、吉井と島田が隣り合い、その向かい側に俺が座っていた。

……誰だ、俺をここまで運んだのは。

「あ、悠夜起きた？」

吉井は心配そうに俺を覗き込む。 ん？ 何で俺、寝てるんだ？
やけに頭の下が柔らかい。

「……………」

顔を上げるのが怖い。

俺の背を嫌な悪寒が走る。

「ッ」

俺は恐る恐る上を見上げ……顔を上げる。

膝の感触は、しばらく俺の後頭部に残っていた。

頬を赤く染めた天光院は、それはもう反則気味に可愛かったと記しておく。

あと、いるりちゃんと霧島は別のボックス席でハリウッド映画もかくやと言わんばかりに激闘を繰り広げていたらしい。何でかは知らんが。女はみすてりー。

ところで、天光院はどうしてあそこに居たんだ？

「それで、何のようですか？ 昼休みがもう終わろうとしているんですけど……早く返してくれませんか？」

翌日。俺は貴重な昼休みの時間にもかかわらず、学園長妖怪ハバアに呼び出されていた。早くクラスに帰って姫路とほんわか食事タイム（弁当は俺作）を楽しみたい。

「あんたねえ。それ、この学校で一番偉い人間に対する態度かい？」
その言葉は吉井と坂本に送るべきだ。

「面倒なんで、さつさと用件を話してください」

学園長の机の上にはカップヌードル。あと3分でタイマーが鳴り響く。ていうか立場が立場なんだし、もっといい食事とれよ。

「せっかちだねえ。……それで、あんたにはコレのモニターになってほしいのさ」

「これは……？」

「これは、『白金の腕輪』って言うのさ」

……は？

「何でそれを俺に？」

「あんたが今んところ、2学年じゃ一番の成績なんだろう？ あんたがうってつけなのさ」

「……代理召喚型と同時召喚型は、点数が高いやつが使ったら暴走するはずじゃ？」

ほう、と学園長は俺を見る。

「そこまで知ってるとはね。ただ、あんたに使ってもらうのはその二つじゃない。これは『即時召喚型』さ」

聞きなれない単語。

俺は首を傾げる。

原作には出ていないはずだ。ということは、いるりちゃんや天光院のごとく、俺の介入によって誕生したものか。

「これは点数無消費によるフィールド形成、並びに召喚した召喚獣の実体化効果を兼ね備えたものさ」

つまり、代理召喚型の点数無消費版でもあり、臨時の観察処分者になれるってわけか。

チートだな。

けど、何となく分かる。

このババアのことだ。絶対に、何らかのデメリットがあるはずだ。

「それで、悪いことは何もないんですか？」

その問いに、珍しく、本当にめずらしく、学園長は表情を引き締めた。

「いいかい。これから話すことは他言無用。あんたの大事な友達にも絶対にバラすんじゃないよ」

その恐ろしいほどに真剣な声音。

俺は背筋を伸ばし、学園長の話に耳を傾けた。

こんな世界、来るんじゃないかった。

俺がその後悔したのは、きっかり3分後、カップヌードルのタイマーが鳴り響いた時だった。

〈幕間編〉 第15章 こんな世界、来るんじゃないかった。(後書き)

次回から、ようやく清涼祭編です。

さあ、アンケート結果は次回発表です！

果たして第2部のメインヒロインは誰なのか！

ではでは、今後も『バカへん』をよろしく願います！

第1部終了のお知らせ、並びに反省会。（前書き）

すいません……第2部ではなく、ちょっとした遊びと伏線です。
マブラヴとの微クロス要素あります。といっても武装とか用語とか
だけだったりしますが。

では、ごゆるりとお楽しみください。

第1部終了のお知らせ、並びに反省会。

「……どこだ、ここ」

目を覚ましたら、馬鹿でかい屋敷の前に立っていた。足が勝手に動き、屋敷の中に入っていく。そして俺も、そのことを特に疑問に感じたりしない。

何かがおかしい、と思ったのは（恐らく食事をとるためであろう）大きなテーブルの前に腰を下ろした時だった。

「ようこそ有野悠夜君。いや、オリジナル主人公と言うべきかな？」

俺の真正面に、同じように腰を下ろす男。

ふと、口が動く。

「そのジャージダサイな」

「余計なお世話だ！」

正直すぎたか。

「で、お前は誰だ？」

そう聞くと、目の前の男は目を丸くし、突然うつむいて肩を震わせ始めた。

「ククク……」

「お、おい。（頭）大丈夫か？」

『……なぜなら、今俺の目の前にある死体は。

その千切れた右腕は。

剥がれた顔の肌は。

地面にボトリと落ちた眼球は』

つて部分があるんだが、ここつて実はマブ　ヴオ　タのオマージユ
なんだよね」

「マ　ラヴ　ルタ？」

「ああ。俺が武ちゃんのかっこよさに惚れ込んだガチ燃え泣きゲー」

「良く分らんが、何？　この小説つて結構他作品をオマージユし
てんの？」

俺の質問に、作者は恭しく首を横に振った。

「逆だ。むしろ俺は、転生モノの中でちょっと変わった切り口から
物語を展開させてる」

「変わった切り口？」

「まず主人公が『自分イレギュラーは転生者』つてことに苦しむ点だ。他の転生
モノだったらオリ主は気楽に原作介入やハーレム形成してるけど、
お前は違う」

「まあ、原作はできるだけなぞろうとしてるけど……」

すると作者は、カップをテーブルにガシャンと叩きつけ、雄雄し
く叫ぶ。

「そこだっ！」

「……何が？」

「そこがお前のオリジナリティでもあり、欠点なんだよ！」

意味が分からない。

欠点って何、欠点って。

と、作者がまるで俺の心情を呼んだかのようにふっと笑う。

「ぶつちやけると、さつさとハーレム形成しろよ、お前！」

「今の俺なら戦闘力53万にも太刀打ちできる気がする」

パキポキと首を鳴らす。

「ちょ、落ち着け！ マジすんませんした！」

「弱いなお前」

瞬時に土下座する作者。何だコイツ。

「んでさ、ずっと思ってたんだけど、この章でお前はバカテスの4巻を買った直後に死んでるんだよね」

「ああ」

「ってことはさ」

「ああ、3・5巻までの知識しかない」

「……うわ、中途半端」

「黙れ元凶」

そう仕向けたのはお前だろうが。

「じゃ、第1章に行くぞ」

第1章。俺と霧島がメインじゃなかったか？

「なあ、俺と霧島の馴れ初めとかあるのか？」

「一応、番外編としては予定してるけど……正直メンドイ」
「おいコラ待て」

作者の襟首を掴み上げる俺。

「待て待て待て！ 全部暴力で解決するなんて人間のすることじゃねえよ！ 人間には言語解決って手段が与えられてるだろーが！ 島田を除いて！」
「最後の一言は余計だ」

まあ異論はないが。

「オホン。で、第2章」

「いるりちゃん初登場だったっけ」

「無論モデルはまりもちゃんだけだな」

「ホント好きだな、マブラ オル」

ていうか今気づけば外見もそれっぽいし。

「大丈夫。皆のトラウマ兵士級は出てこない。つーか出さねえ」

「出てきたら困る。ていうかバカテスにBETAはねえよ」

「いや、案外召喚獣サモンクリーチャーvs要撃級グラップラーとか……アリか？」

……………。

「おい。テメエ……………」

「ひっ!？」

「そんな軽いノリで皆を危険な目に合わせてみる……………ブチ殺すぞ……………」

「いっ、ごめん!」

……いかにいかに。軽いノリが売りの番外編でマジキレしてしま
うとは、我ながら大人気ない。

「次行こう、次」

「あ、ああ。第3章、ようやく本編に突入した回だ」

正門の前で、鉄人が初登場したんだっけ。

「思ったんだけど、姫路フラグがまだ説明されてないよな」

「？ 何の話だ？」

「ああ、いや……やっぱ番外編じゃないと書けそうにないな……」

さつきからコイツ、何やらブツブツと言っているが……（頭）大
丈夫か？

「おい、テメエ今俺のことを心の中で罵倒しただろ」

「滅相もございません」

なんて鋭いやつだ。

迂闊に悪口を言えないじゃないか。

「んで、第4章」

「何だっけ、副担任登場か」

「ああ、島原いるりが学校に出てきたな」

よく考えたら、俺といるりちゃんってあの時結構オーバーなリア
クションしてたんだよね。

「あとアレ、お前の変態さ加減が明らかになった」

「漢おとこが変態で何が悪い」
「少し黙れ」

むう。やはり世間は、『変態』を侮蔑用語として使っらしい。俺にとってはこれ以上ない褒め言葉なのに。

「ところで、最後にお前がFクラスの音頭を取るシーンがあったんだけど、お前なんであんなに人をまとめるの巧いの？」
「番外編に期待」
「おい主人公待てやコラ」

小一時間、殴りあつた。

……俺の過去編、いつかやってほしいな。

「……はい次、第5章」
「なんかお前面倒になってないか？」
「黙ってチキチキ働けや主人公！」

理不尽だ。

「こつから、前書きにバカテストを書き始めたんだ」
「バカテスト？」
「お前らの珍回答集みたいなものだ」

なるほどな。

「ちなみにお前はメチャクチャ長つたらしい文章書いてたな」
「……ああ、マグネシウム鍋のやつか？」
「うん」

「だっておかしいだろ。調理中に激しく鍋が燃え出したら危険にも

程がある。つーかシユール過ぎる」

考えても見る。

野菜を炒めてたら鍋が燃え出すんだぞ？ 都市伝説もいいところだ。

「んで本編で、お前がはっちゃけやがった」

「固有結界、だったっけ」

なんでも、俺が発動するあのマシンガントークは『リアルタイ・マーブル』と
呼称されているらしい。

「ああ。お前が発動する固有結界、その名は

『アンリミテッド・クール・ユウヤ
無限の冷静』だ」

ヤバい。凄まじいダサさだ。

「すまない、お前のネーミングセンスは……いや、なんでもない」

「おい teme 何を言おうとした？」

「さ、次の第6章行こうぜ」

「teme エエエエエエ！！」

P・S・後書きにあった、変態バージョンの固有結界は見なかったことにしてください。……あれは俺の黒歴史です。

「こっから鬱展開の始まりだったな」

「……ああ」

思い出すだけで反吐が出る。

あの時の俺は 自分の存在を希薄にししか感じられず、かなり参っていた。

「島原いるりの帰りを待つて、最終的に寝るつて……新婚夫婦かお前は」

「……それよりもっとタチが悪いな」

そして第7章。

「お前、姫路の弁当イベント潰しておきながら学校サボりつて……」
「わざとじゃない」

不可抗力だ。やる気も何も起きなかつたし。

「そして高橋女史にフラグを立てたと」

「……は？」

「なんでもない、こつちの話だ。んで、今回初めて出たんだよな、お前の召喚獣」

「ああ。確かあの時は『狙撃銃』^{スナイプ}だったか」

「初期設定だったら『重鉄槌』^{ハンマー}で無双する予定だったんだけどな」

「いやいや、実際に扱う側としては『光刃』^{ライトセイバー}とか使いたいけどな」

……うん、ごめん。暴走しすぎたな。

「それで、第1部最大の山場。姫路が完全にメインヒロインだったな」

「ああ。正直書いてる方も予想外だった」

そして俺号泣&謝罪。……もう何も語るまい。

「第8章。お前と霧島翔子の夫婦漫才はマジで殺意沸いた」
「……は？ 夫婦漫才？」

何のことだ？

「……作者権限で殺していい？」
「いや、だから何だよ夫婦漫才って」

「以下抜粋。」

『「妄想してたのは、あくまでお前の着替えだ……！」

「……悠夜、いくらなんでもオープンすぎ」

「うるさい、これが性分だ」

「……どうせなら、私の着替えを妄想してほしい」

「思春期真っ只中の女子高生のセリフじゃないな」

「……妄想できないなら、今度見せてあげる」

「安心しろ、俺は自分の気合で自在に妄想を操ることができる。お前の着替えなどコンマ3秒で妄想可能だ」

「……また、オープン」

「原因はお前だ」

「……そもそも悠夜は性格に難がありすぎ」

「まさかお前から性格について説かれる日が来るとは思わなかったよ」

「……結論から言えば、悠夜を支えられるのはこの世でも私ぐらい」

「うん、もう話のオチが読めてた」

「……超能力者？」

「特殊なスキルなしでも十分お前の思考は読めると思っ」

「……エスパー？」

「それ超能力者と変わらないし、人の話聞いているか？」

「霧島、ついでに言っておくが今日木下の家に行かないか？」

「……謝罪？」

「さすが、分かっているじゃないか」

「……以心伝心」

「迂闊に否定できないところが怖いな。で、さっき俺を支えるといつたのだから、着いて来てくれるか？」

「……要するに、道連れ」

「……スマン」

「……確か優子の家の近くには、穴場の喫茶店があった」

「あそこか。あれは旨かった」

「……誰かに行ったこと、あるの？」

「いいや、一人で行った」

「ほい、これ」

「……『カップル御優待』券？」

「ああ、なんでも男女一組で同じものを注文すれば、会計を半額にしてくれるらしい」

「……今日、何時に校門？」

「そっだな、6時でどうだ？」

「！」
「何この長ったらしい上に息のあった掛け合い！ ムカつくんだけど」

「おお、こんな会話してたのか俺。これが幼馴染補正ってヤツだろうか。」

「……んで、主人公として初無双」

「ああ、『アサシンセット暗殺道具』か？」

「あれは使い勝手がいいからな。」

「当初はムツツリー二とカブる、って問題があつたんだが、正直力
ブってもいいじゃんって開き直ったりしちやったりしたんだよね」

「コイツかなり適当なんだな。」

「けど、根本殴るのはやりすぎだろ」

「ああ、自分でも今考えたらどうかと思う」

西村先生が止めてくれなかったら、多分さらに殴り続けたと思う。

「そして腕輪の能力」

「自分で言うのもなんだが、かなり優秀な腕輪じゃないか？」

姿を消せる上に、少し移動速度が上がるのだ。

「つーかさ、ずっと思ってたけど、腕輪発動してる時どうやって召
喚獣扱ってたんの？」

「ん？ なんつーか……見えるつーか、何かを感じる」

「……どこのドラゴンだよ、お前」

実際そうなんだから仕方ないだろ！ ほとんど感覚で操ってるん
だから！

「んで、お前の最後のセリフ。さすがにあれはふざけすぎた」

「……えっと、『あまり俺を怒らせないほうがいい』だったっけ」

「うん。シリアスシーンが台無し」

自分で書いておきながら何を言う。

「そして第9章。天光院美月登場。ていうか召喚獣がマジチート」

「まったく、あの剣はどうなってるんだ？」

人造による武器ではなく、星に鍛えられた神造兵装なんて反則だ。

「……なんでお前が知ってるんだ」

「出典、吉井明久」

この小説で、吉井明久はアニメオタ……アニメファンです

「10章、俺敗北……」

「うん、初期設定の時点で、『オリ主はAクラス戦で負ける』って決めてたから」

「何故に？」

「だってこれ、『最強転生オリ主モノ』じゃなくて『転生オリ主モノ』だもん」

なるほど、俺は最強じゃない……準最強、ぐらいの位置づけか。と、作者がニコツと笑う。

「お前のハーレムデートイベントは飛ばすね」

「おい！」

丸々3話すつ飛ばしたぞ！

「で、最後に出てきた白金の腕輪なんだけど……」

「ああ、即時召喚型だな」

「あれって起動キーなんなんだ？」

あのババア、説明してくれなかったんだよな。

「ああ、『即時召喚』だ」
「オーケー。……即時召喚」

瞬間、俺の足元に幾何学的な魔法陣が描かれ、俺の召喚獣が姿を現した。

「いつも通り仏頂面だな」
「うるさい」

《Fクラス 有野悠夜 物理 512点》

「うっわ、何をどうしたらそんな点数がとれるんだ」
「いつも通りにしただけだ」

コートをためかせ、俺の召喚獣が構える武装は

「……選択武器、『87式突撃砲』並びに『74式近接戦闘長刀』」
「おいコラあつ！」

「ごめん、自重しきれなかった。」

俺の召喚獣は、左手に36ミリチェーングンと120ミリ滑空砲が一体化した、銃器。

右手にはスパーカーボン製の片刃型の長刀を握り、水色のコートを羽織っている。

「つておま、なんか召喚獣変わってんだけど！ 水色って何！？ 国連軍カラー！？ 何で水色のコート羽織っちゃってんの！？」
「安心しろ、跳躍ユニットもついてるから」

ゴォッ！ と、召喚獣の腰部に取り付けられたロケットエンジン

が火を噴く。そのまま召喚獣は空中へと舞い上がり、途中で推力をロケットエンジンからジェットエンジンに切り替えた。

「完成度高っ！」

「さすがは不知火だ」

驚きつばなしの作者。正直うるさい。

いや、不知火だけじゃなくて式型に武御雷、先行量産型ラプターとか、アクティヴ・イーグルやら、極めつけにはチエルミナートル、タイフーンもいけるぞ。

「え、何？ 戦術機だけじゃなくてモバイルスーツとかもいける感じ？」

「いや、戦術機しかできない」

まったくわがままな作者だ。

そのわがままな作者は、俺の視界の隅でずっとこけていた。

「で、これにて反省会は終了だ」

作者がそう締めくくり、俺は呆気なく屋敷からたたき出された。

しばらく歩くと、気づけば我が家の前。

……中から聞こえてくるのは、いるりちゃんの鼻歌。

「……ただいま」

「おかえりなさい、悠夜君」

玄関先で俺を待っていたのは、愛すべき家族だった。

オリ主こと有野悠夜を帰らせた後、俺はパソコンと向き合っていた。

「おい、作者」

後ろから聞こえた声に、俺は振り向きもせずに返事する。

「なんだよ、お前はまだ登場してないだろ」

「固いことを言うな」

ポン、と俺の肩に置かれる手。

「……またその格好か」

後ろを向けば、漆黒のコートを羽織った男が一人立っている。

「それにしても、全然変わっていなかったな、有野悠夜」

「ああ。あいつの、召喚獣の姿は……それなんだろう？」

そう、この男の服装は、悠夜の召喚獣そのままなのだ。いや、逆だろうか。

あいつの召喚獣が、コイツをモデルにしているんだ。

「しかし、あいつは『白金^{プラチナ}』だったか……」

そう呟く男の右腕には。

鈍く光る、『鋼^{アイアン}』の腕輪があった。

第1部終了のお知らせ、並びに反省会。（後書き）

・白金の腕輪『即時召喚型』

起動キー『即時召喚^{クイック}』の詠唱のともに、生徒を中心として召喚フィールドを点数無消費で展開する。大きさは教師のもの約0.7倍。

さらに、フィールド内で召喚された召喚獣は敵味方問わず実体化する。腕輪の主も召喚可能なため、臨時の観察処分者になることが可能。

しかしデメリットもあるらしいが、何のデメリットかは学園長と有野悠夜のみが知っている。

この腕輪の出番はもうチョイ後かと。

当初の予定では

- ・^{ゴールド}黄金の腕輪
- ・^{シルバー}白銀の腕輪
- ・^{プラチナ}白金の腕輪
- ・^{アイアン}鋼の腕輪

で四天王、とか妄想してたんですが高得点で得られる腕輪黄金じゃん、ってなわけでボツに。

じゃあ一つは出そうぜ、ってことでアイアンを選択。

今後はオリ展開もある程度含まれます。

ではでは、第2部も応援よろしくお願いします！

〈贖罪編〉 第16章 通達（前書き）

俺は信じてたのかもしれない。

この世界なら、俺は救われるって。

だけど 俺の罪は、増えるばかりだ。

誰でもいい。俺を……たす、けて……

《贖罪編》第16章 通達

桜は散った。若葉も芽生えつつあるが、俺としては地面に落ちた花びらを見つめるほうが情緒に浸れる。

「それで？ 結局何を投げるつもりだ？」

俺達Fクラスは現在グラウンドで野球をしている。清涼祭も近いが、まじめに話し合っているのは姫路と島田と木下秀吉ぐらいだ。

「それって反則だよね!？」

ピッチャーである吉井が大きな声を上げる。どうやらキャッチャーである坂本が妙な指示を出したらしい。確かバッターの頭にカーブを、だったか。……今バッター俺だから、危ないんじゃない？

「くおらあー！ 貴様ら何をやっとするかあー！」

と、グラウンドに鉄人乱入。

俺は手に持った金属バットを見、続いて鉄人を見やる。

鮮血に染まった金属バット。

血の池に映る、怯えた表情の俺。

俺に背を向け、頭から血を流す西村先生。

「ッ！」

頭が痛い。頭蓋骨に大きな音が響く。
痛い痛い痛い

「あれ？ 二二二二二？」

真っ白なベッドに、俺は寝かされていた。
ふと上体を起こせば、パタパタと誰かが駆けてくる。

「悠夜君！」

「あれ、いるりちゃん？」

そこにいたのは、カーデイガンを着たいるりちゃん。ベージュ色が良く似合ってる。

と、走ってくる勢いのままに、彼女は俺へとダイブ！

「ぐあっ！」

勢いを殺しきれず、ベッドに再び倒れこむ俺。

「突然倒れたって聞いて……それで……ッ」

「……あー」

突然倒れた、か。

「……悠夜」

いつの間にか、保健室の中に鉄人 否。西村宗一が入ってきていた。

「何の用ですか？ 西村先生」

「明らかなほどに警戒するいるりちゃん。」

「……島原先生。私も一応、関係者です」

「そつだ。西村先生も知ってる」

そう聞き、いるりちゃんは少しホツとしたように息をついた。

「で？ 悠夜、またフラツシユバックか？」

「ああ。いやになるよ、まったく」

ここしばらくは収まってたんだけどな。

「以前検査した病院から連絡だ。……正式に、お前は心的外傷後ストレス障害 PTSDと判断された」

そつか。

小さく息を吐き、俺は枕に頭を預ける。

「入院、というのも手だが……医者は現状でも十分療養になると言っている」

「私も、今のままでいいと思うわ」

慌てたように話すいるりちゃん。そんな風だからからかいたくなるんだ。

「そんなに、俺に傍に居て欲しいの？」

「……………（コクツ）」

……………あれ？

「はっはっは。随分と女性受けが良いようじゃないか」

「くっ、鉄人め……………人事だと思いやがって」

「現実に人事だからな」

この人、なんでモテないんだろう。以前勉強教えてもらった時とか恐ろしいほど分かりやすかったし、テストの成績で俺を軽々と抜く。どっかの大学の教授になったほうがいいと思うんだけど。

「ただ、お前は大事な生徒だ。生徒が幸せなら俺も幸せさ」

もう一度繰り返す。この人、なんでモテないんだろう。

「それと、すぐにでも教室に戻ってやれ。皆心配していたからな」

「人気者は辛いな」

「それ、自分で言う？」

いるりちゃんの容赦ないツツコミに、乾いた笑いを浮かべるしかない俺。

「ま、体には気をつける、ということだろうな……………ん？」

と、扉の前に立った鉄人が眉を寄せる。

「誰だ!？」

ガラツ! と勢い良く扉を開けたかと思うと、パタパタと廊下を走る音。

鉄人はそれを追いかけてようとして、やめた。

「すまん悠夜。どうやら今の話、誰かに聞かれたようだ」

「……あー」

マジかよ。

思わずいるりちゃんと顔を見合わせ、俺は深くため息をついた。

〈贖罪編〉第16章 通達（後書き）

第2部は、清涼祭が始まるまでの日々です。

前書きには登場人物の心情を。今回は……誰でしょうね？

清涼祭が始まるまで、割とドロドロした感じになると思いますが…

…この小説でのターニングポイントなので、どうぞじっくりとお楽しみください。

〈贖罪編〉 第17章 理由（前書き）

黒の反対は白ではなく、無色。

好きの反対は、嫌いではなく無関心。

始めるの反対は、何もしない。

じゃあ、希望の反対は。

……答え、何もない。

〈贖罪編〉第17章 理由

「そうか、姫路の転校か……」

教室に戻ると、坂本を中心に、主要メンバーがなにやらヒソヒソと話し合っていた。

ああ、姫路が転校させられそうになるんだっけ。

ここは吉井のためにも、何とか阻止しよう。

「転校を勧められる理由は、ざっと挙げて3つだな」

俺の言葉に、坂本以外が首を傾げる。

「いいか。まず一つ目」

畳に腰を下ろしながら人差し指を立て、俺は言葉を紡ぐ。

「ござとみかん箱という貧相な設備。どう考えても快適とは言えない学習環境だろ。まあ、これは金さえあればすぐにでも解決できる問題だ」

その言葉に、吉井が疑問を呈した。

「でも悠夜、その資金はどこから調達するのさ」

「簡単な話だ。清涼祭だ」

坂本も頷く。俺は続いて中指を立てた。

「次に二つ目。老朽化した教室。つーか廃屋。これは健康面で害が

あるな」

最後に薬指を立てる。

「最後にクラスメイト。レベルがあまりにも低くて、姫路本人に成長を促すことができない。まあこれも簡単な話だ。Fクラスの有能さを知ってもらえれば解決だ」

すると木下秀吉が頭の上にクエスチョンマークを浮かべた。

「しかし悠夜。その有能さとやらはどうやって証明するのじゃ？」

「簡単な話だ。召喚大会で優勝すればいい。無論Fクラス生徒がな」

そして俺は、坂本を真つ直ぐに見た。

ていうか簡単な話だ、って何回言ってるんだろ。

「最も優先すべきは二番目だな。教室の修繕は俺たちじゃどうにもならない。学園長の手を借りるべきだろう」

「待ちなさい悠。クソババアってまさか」

「学園長のことだが？」

「お主何を考えているのじゃ!？」

学校の最高権力者？ だからどうした？

坂本はニヤニヤしながら頷く。こいつもあんまり敬意は払っていなかったのだろう。

「よし、その交渉は俺に任せてくれ」

「あ、僕も着いていくよ」

「俺も行く」

学園長室には、俺と吉井と坂本が行くことになった。

「よし、じゃ行ってくる」

「うむ、任せたぞい悠夜……ん？」

と、木下秀吉がふと首を傾げ、島田を首を捻り、吉井も何かを思
い出すように上を見上げ、坂本は驚愕に目を見開き 全員が絶叫
した。

「「「悠夜あああああああああああああああああああああ！

?」」」

「気づくの遅いな」

タイムラグ長っ！ ていうか皆俺が介入しても何も反応しないか
ら、心配してくれてないのかとちよつと落ち込んでたよ！

「ちよつ、お前倒れたはずだろ!？」

「さっき目が覚めた」

「そうだよ、もう大丈夫なの!？」

「大丈夫じゃなかったらここにいない」

詰め寄る皆を適当にあしらい、俺は吉井を引きずって、坂本と
もに学園長室へと向かった。

〈贖罪編〉第17章 理由（後書き）

あれ？ 全然進んでない？

なぜなら、9章の復活に力を入れましたから（笑）

しかし改変のし過ぎで2章に分かれるという罫w

というわけで、今後は最新話更新と消失章の復帰は同時にしようと思えます！

ではでは、今後もご期待ください！

あと、アンケートの結果を発表します。

なんと、まさかの霧島と天光院が同率一位！！

しかし、絡ませやすさなどの理由から清涼祭は天光院メインで行きます！

……とはいえ、霧島も活躍させたいので、救済措置としてこの贖罪編で霧島をメインヒロインに抜擢しようかと。

今後は早めに更新するので、応援よろしくお願いします！

〈贖罪編〉 第18章 交渉（前書き）

うそだ、うそうそ嘘嘘嘘嘘嘘！

は死んでなんかない！

……殺されてなんか……ないっ！

絶対に……そんなこと 認めてたまるかつ！

〈贖罪編〉第18章 交渉

学園長室に辿り着いた俺達だったが、なにやら中で話し込んでい

る。

『……賞品の……として隠し……』

『……こそ……勝手に……如月ハイランドに……』

ああ、教頭と学園長だな。

「失礼しまーす」

俺はノックをすると、返事も待たずに中へと踏み込む。

「ちよつ、悠夜!?!」

「明久、俺達も行くぞ」

中では藤堂カヲル学園長と竹原教頭が向かい合っており、竹原教頭は俺達を一瞥し、ため息をついた。

「……観察処分者にA級戦犯、最後に悠夜ちゃんですか」

ちよつと待て。

「待ってくれ教頭。今悠夜の事をちゃん付けで呼ばなかったか?」

「あら、知り合いなのかい?」

驚きを隠せない坂本と、興味深そうに俺を教頭を交互に見やる学園長。

「……竹原先生。さすがにその呼び方はプライベート限定でお願いします」

「……傷つくよ、その嫌そうなりアクション」

胸の辺りを押さえてよるめく竹原先生。

周囲、特に学園長は気味悪そうに彼を見ている。元の竹原先生を知らない坂本と吉井には、『リアクションが面白い先生』のように見えるだろう。

「それで学園長、話があるのですが」

俺は竹原先生の屍を乗り越え、学園長と対峙した。

「そうですよ学園長！ ちょっとO H A N A S H Iしましよ
うー！」

「おい明久、それは完全にアウトだ」

いつの間に吉井はエースオブエースになったんだ。

「学園長、俺は2年F組の有野悠夜です」

「もう知ってるさね」

「いえ、まずは名を名乗るのが礼儀かと思いましたが」

「……なかなか出来た子じゃないか」

「当然です、私が手塩にかけて育てた子ですから」

いつの間にか復活した竹原先生が胸を張って言う。

俺は黙って竹原先生の鳩尾を殴りつつ、坂本達にも自己紹介するよう促す。

「ああ、俺はFクラス代表、坂本雄二です」

「えっと、僕は同じくFクラス所属の吉井明久です」

原作とは違い、こちらから自己紹介を行う。

「ああそれと、竹原先生はちょっと出て行ってください」

「……まあ仕方ないか。他ならぬ悠夜君の頼みだし」

眼鏡をキラーンと光らせながら、先生はぐっとサムスサップ。そのままの体制で学園長室から退出した。

「さて、邪魔者も居なくなりましたし」

「おや、育ての親を邪魔者扱いかい？」

「育ての親？」

吉井のささやかで慎ましい疑問に、俺は辛らつな言葉を浴びせる。

「お前には関係ない」

「おやまあ、ジャリ共同土で何険悪なムードをかもし出してるんだい？」

横槍を入れてくる学園長。クソババア俺は眉を寄せながら、右の拳を握り学園長の机に叩きつけた！

「ッ！？」

後ろで吉井が息を飲んだ。

俺はずいっと身を乗り出し、学園長を睨み付ける。

「……要求は一つ。Fクラス教室の改修だ」

「なんでそんなことをしなくちゃならないんだい？」

向こうも同様に、俺を真つ向から睨み返してきた。

「あの教室は学習環境として相応しくないからだ」

「建前なんてどうでもいい。本当の目的を話しな」

学園長の鋭い眼光に、俺は思わず嘆息した。……本当に、敵に回したくない人だ。

「ああ。このままじゃ姫路瑞樹が転校する」

「ちよ、ちよつと悠夜!？」

吉井が慌てて止めに入るが、俺は止まらずに言葉を続ける。

「学年でトップクラスの生徒が、『学校の学習環境が悪いから』なんて理由で転校なんて 『試験召喚獣システム』っていう新技術を導入した試験校にはずいぶんと厳しい風評じゃないか？」

学園長を相手に、口車で対抗なんて……無謀この上極まりない。それでも。

大切な友達のために、俺は……止まらない。

「おやおや、そんな脅迫まがいな言葉があたしに通じるとでも？」

余裕を見せ付けるように、口元を吊り上げる学園長。

俺は、この老婆の頭をカチ割りたい衝動を抑えつつ 小声で『交渉』を始める。

「代理召喚型と同時召喚型、回収してやるよ」

「……ほっ?」

面白い、とばかりに学園長が俺を見る。

「召喚大会には吉井坂本ペアが出る。俺も誰かと出ようとは思ってが……期待はしないでくれ」

「……あのジャリどもにできるんだろっね?」

俺は顔を離し、正面から藤堂カヲルを見つめた。

「あいつらならできる、そう言う俺を信じる」

学園長は数秒、天を仰いだ後、顔の角度を元に戻し、ニヤリと笑った。

「なかなか面白いじゃないかい。その言葉、乗ったよ」

俺は吉井と坂本を学園長室に残し、一人廊下を歩いていた。恐らく、今頃は原作通りに説明がなされているのだろう。

ただし、回収しろと言われるのは『如月ハイランド プレオーブ
ンプレミアムペアチケット』だろう。

その点、俺はある程度自由に行動できる。

目標は『白金の腕輪』の回収。

ただ、原作通りにおけば吉井と坂本が問題なくそれを果たせ

るだろう。

だが、そうは問屋が卸さない。否、俺が卸させない。

「……『主人公』なら、俺を超えて往けよ。……吉井」

学園長室を見ながら、俺は小さくそう呟いた。

「……『主人公』？ 吉井が？」

「突然背後に現れるな霧島っ！」

ビビった。派手にビビり散らした。

「……あ、ごめん」

ぺこりとお辞儀する霧島。いや、そこまでしなくても……
その時、だった。

「ッ」

天啓がひらめいた。まさしく発想の勝利。

「霧島」

がしり、と彼女の両肩を掴み、動きを封じる。

「……？ え？」

突然のことに、霧島が戸惑っている中、俺は迷わず言葉を紡ぐ。

「俺と、召喚大会に出てくれないか？」

こうして俺は、自ら原作への介入を開始した。

〈贖罪編〉第18章 交渉（後書き）

更新です。

贖罪編、書き進めていくうちにドロドロさがハンパじゃないことに

……

あと、オリキャラを募集しています。

クラスは自由ですが、学年は2年に限定します。

学力はトップ10に入るぐらいで。

性別は男女問いません。ただ、魔法使いとかぶっ飛んだのはなしにしてくださいね（笑）

それでは、今日はここまで！

〈贖罪編〉第20章 拒絶

高橋先生と別れ（何故か名残惜しそうにしていたが）、俺は霧島の家へと到着した。

路上では霧島がなぜか、緩みきった表情であさつての方向を向き、時折体をクネクネと捻りながら頬を染めて身悶えていた。

……正直気味が悪い。

「なあ霧島、晩御飯はどうするんだ？」

もうすぐ霧島家が見える、というところで、俺はかねてよりの懸念事項を尋ねた。

「……料理、したい？」

「ああ」

小首を傾げて聞き返してくる霧島。くう、可愛いな。お持ち帰りしたいぐらいだ。

「……むしろ私にお持ち帰りされてるけど」

「今ほど幼馴染特有の読心スキルを呪ったことはないぜ」

畜生、なんで聞かれたくないことばかり聞かれるんだ。

「……着いた」

と、そうこうしているうちに霧島宅に到着。いつ見てもご立派なお屋敷だな。

「……ただいま」
「お邪魔しまーす」

靴を脱いで、屋敷の奥へ俺はずけずけと踏み込む。

廊下を真っ直ぐ進んで、確か……手前から2番目の角を左に曲がり、すぐに右へ折れ長い廊下に出て、手前から3番目の扉を開き部屋の中へ入り、窓の横に配置されたタンスの下から2番目の引き出しを引けば女性物の下着が数着《スパーン!》 頭部への鋭い攻撃に、俺は思わずたたらを踏んだ。

「くっ、いきなり何をするんだ霧島……!」

「……それはこっちの台詞」

視線だけで俺を射殺さんとはかりに、霧島が睨み付けてくる。

「人の家が上がっていきなり下着泥棒まがいのことをするなんて非常識すぎ……それ以前にどうして私の下着がどこに置かれているのか正確に位置を把握しているのかを問い詰めたい……!」

おお、珍しく霧島がツツコミに回っている。

吉井と同様、丁寧で分かりやすいツツコミだなあ。……イジリがいがある。

「愚問だな、俺が幼馴染の生活パターンをまったく知らないとしても?」

「……さっきの甘い時間に巻き戻したい……」

なぜか声を殺してさめざめと泣く霧島。部屋の隅っこで三角座り状態だ。

……まあ、さっきの甘々空間には俺も……戻りたいこともないこ

ともないこともないこともないけど……って結局これじゃあ戻りた
いじゃんか！

「と、とにかく さっさと始めようぜ」

本来の目的を忘れかけているような気がした俺は、慌ててバッグ
の蓋を開けて。

物理の参考書を取り出した。

……疲れた。

時刻は7時。空はすでに無数の星が煌いており、部屋の中も人口
の光に満たされていた。

「……悠夜」

と、俺の膝を枕にして寝ていた霧島が、ふと俺の顔を見上げた。

「どうかしたか？」

「……どうして、急に勉強を？」

質問に質問で返すのかよ。

俺はそっと霧島の頭を撫でながら、決意表明をする。

「絶対、召喚大会で優勝する」

何の為に等、愚問。

戦う理由等、自己満足。

故に其の刃は狂い、されど鋭く血塗れ也。

悠久の夜闇を宿す瞳は、少女を射抜く。

黒髪の彼女もまた重い意思を込め、視線を叩き付けた。
必然にして当然。

二つの視線が交わり、ぶつかり、火花を

「……何この突然過ぎる古風描写」

「地の文にまでツッコムなよ」

料理。

なんて甘美な響きだろうか。

手にした刃包丁で獲物食材を切り裂き。

烈火コンロの如く燃え盛る火で獲物食材を苦しめ。

そうして屍夕食の山が積み上げられる。
完成する

「……その描写パターン、流行ってるの？」

「俺の中だけでな」

正直微妙なマイブームに、霧島は呆れたようにため息をついた。

俺は肩をすくめながらも、手元の作業に集中する。

じゃがいもは中までやわらかくなるよう切り口を大きく切り。

肉汁をそのままに、各野菜に味が染み渡るようじっくり煮込

み。

調味料は酒やみりんなどで甘みを重視し。

最後に皿に盛り付け、多少の煮込み汁をかければ完成。

「有野流の肉じゃがだ」

ゴトン、とテーブルに皿を置く。洋風のバカデカイテーブルの上に昔ながらのお袋の味とは、かなりシュールな光景だ。

……お袋、か。

『悠夜、すごいわねこれ！ 私が作ったのよりもおいしいんじゃない！？』

転生前
前も。

『あらおいしい。いつの間にこんな美味く作れるようになったのよ。今度教えなさい』

転生後
今も。

母さんは、優しくて強い人だった。

「……………いただきます」

霧島が肉じゃがを口に運ぶ。それを口内に含み、二度二度ゆっくりと咀嚼した後　大輪の花が咲いた。

「　　すごい……………悠夜の作った肉じゃが、すごく美味しい……………！」
『　　すごい！　　おにーちゃんの作った』にくじゃが』、すっごくおいしいよー！』

……………え？

「……………ちくちく……………」

頭脳が悲鳴を上げる。

ギシリ、と心にひびが入る。

違う！ 彼女は、さくらじゃない！

違う違う違う！ 絶対に違う！ 二人は……別人……だろ……！

霧島がこちらを振り向く。

その満面の笑みは、さくらのものにそっくりで。

「あ……………」

違う、だって。

だって、さくらは目の前で されたじゃないか……

フラッシュバック。直接刃に貫かれたかのように、脳を痛みが走った。

「悠夜……!?!」

手を伸ばせ! さくらを、妹を助けるよ! 動け、俺の体! 頼む、動いてくれ!

残った左腕で、必死にさくらを助けようとし 俺は、自分にかかっていた掛け布団を跳ね飛ばした。

「え?」

周囲を見る。広い部屋のご真ん中。布団に寝かされていたらしい隣を見れば、霧島が心配そうに俺を見ていた。

「きり、しま……」

なんでだ? なんだ霧島がいる? さくらは? さくらは

「 さくらはどこだよツ! どこにやったんだよ!?!」

霧島の胸倉を掴み、大声で叫んだ後 俺は、ハッと手を放した。俺は今、何をしていた?

……最低だ、俺。

腕をダラリと下げ、俺は力なく俯く。

「……ゆう、や……どうかしたの?」

そつと、霧島が俺の手を握る。

「……力に、なれる？」

頭の中に、白熱する空間が生まれた。

……力になれるかって？

「……言えないことなら……今じゃなくてもいいから……いつか話して欲しい……」

……、はははは……

「……苦しみとか悲しみも、共有できると思っから……」

……きょう、ゆう？

「だから、一人で抱えこんじゃだめ」

うる、さい。

「……うる、せえ………！」

何が分かる。お前に、何が分かる。

「……悠夜？」

「……うるせえ、って言ってたんだよ……」

手を勢いよく振り放し、俺は布団を跳ね飛ばす勢いで立ち上がった。

「共有だあ！？ ふざけんなっ！ お前に何が分かるんだよ！ 共有なんて、できるわけねえだろっ！」

霧島を見下ろしながら、俺は 拳を硬く堅く固く、握り締めた。

「そんな偽善的なセリフ、うんざりなんだよっ！ 誰も助けなくてもいい！ 誰も俺を分かってほしい！ 誰も、誰も俺とは気持ち共有できないっ！」

お前に分かるのかよ！ 大切な人を失う悲しみが！ そして、それを 二度も味わう苦しみがッ！！

「お前には関係ないんだよ！ 首を突っ込んでくるんじゃないよ！」

かけられた言葉は、救い。

吐き出した言葉は、拒絶。

「……何言ってるんだろうな、俺」

ははっ……俺、マジ最低だ。

霧島の瞳から、涙が零れ落ちる。

その日、俺と霧島は一言も会話を交わさなかった。

〈贖罪編〉第20章 拒絶（後書き）

今回は前書きはお休みです。

第2章と9章復活しました。これでバカへん完全復帰です。

清涼祭編が始まるのもう少し先になりそうなので、ごゆるりと贖罪編、お楽しみください。

なお、オリキャラ募集は打ち切らせてもらいます。ご応募ありがとうございました。

〈贖罪編〉 第21章 日常（前書き）

……おとぎばなしなんて、ない。

救いなんて、ない。

俺には、希望なんて、ない。

《贖罪編》第21章 日常

Fクラス喫茶店の準備は、大分進んでいる。

中華喫茶『ヨーロッパ』とは、来る人の度肝を抜く店名だろう。中華なのかヨーロッパなのかはつきりしろよ、まったく。

まあ、喫茶店の準備は姫路や島田、木下秀吉らが頑張っているの
で、中途半端なやる気しかない俺はむしろ邪魔者なわけで。

「「暇だな」」

屋上で寝転んでいた俺は、ふと重なった声に違和感を感じた。

上体だけを起こして視線を巡らせると、俺と垂直に交わるような
角度で寝ている男子生徒が一名。

「土門か」

「有野じゃねえか。お前も暇人か？」

へへっ、と軽い笑みを浮かべるのは、2年Bクラス所属の土門源
十郎だ。1年のころクラスメイトだったので、意外と近い関係であ
る。

ツンツンに立てた金髪は市販の整髪料で染められたものだ。普段
の態度が乱暴なので、疎遠な関係のやつらからはヤンキーと思われ
ているのだが、それでも学年8位の實力を持つ男。成績をまったく
鼻にかけない態度には好感が持てる。

「Fクラスは喫茶店だったよな。メシお前が作んのか？」

「さあな」

適当にごまかしながら、俺はすつくと立ち上がった。

フェンスに寄りかかりながら、校庭のライブステージを見やる。
あそこで清涼祭名物、学生バンドのステージがあるのだ。

「ふうん、やっぱ今年もすげえ気合の入りようだな」

俺と同じようにフェンスにもたれながら、土門はすつと目を細めた後　唐突に吐血した。

「がはあっ！」

「いきなりどうした」

あまりに突然だったので、反射的にツツコンでしまった。

土門は小刻みに痙攣しながら、人差し指で校庭の隅を指差す。

「……あ、……あれを……！」

「ああん？　一体何が　ごぶっ」

指差された先の光景を見やり　俺も口から鮮血を吐き出した。
ば、ばかな……そんなことがあっていいのか……！

俺達が目撃したのは　イチヤイチヤしながら作業を進める、B
クラス代表根本恭二とCクラス代表小山友香ゆづかの姿だった。

「み、見せつけてんのかあの野郎……！」

「くっ、なんて卑劣な……！」

虫の息となりながらも、俺と土門は根本への怨念の言葉を吐き続ける。

「あれ？ 悠夜、こんなとこで何してんのさ？ ……あれ？ こ、これって血！？」

「ああん？ ……おお、悠夜じゃないか。 ……っておい！ 何があった！？」

と、吉井と坂本が、俺と同じように暇を持って余したのか、屋上に上がってきた。

俺と土門は、口元から溢れ出る血を拭いながら、死力を尽くして根本を指差す。

「うん？ 一体何が ふごおっ！」

「お、おい明久！ そんなにシヨックを受けるものなのか！？ 眩しくてよく見えな かはっ！」

二人も同様に、嫉妬の血を辺りに撒き散らしながらその場に沈んだ。

「……………ネエモトオ、恭ニイーーーーー！！」「」「」

負け犬達の遠吠えが、雲一つない青空に吸い込まれた。

その後、俺は霧島の家をすぐに出た。

霧島の泣き顔なんて見たくなかったし、何よりそんな表情にさせたのが自分だということに腹が立って ……なんてのは、詭弁だ。

早い話、逃げちまったわけだ。

けれど、俺は悪くない。

あれは霧島が悪いんだ。

俺のことを何にも分かってないくせに、ずけずけと俺の中に土足で踏み込んできたあいつが悪い。

俺は……悪くなんか、ない。

「ねえ悠夜」

復活したのか、吉井が口を開いた。

俺と土門と坂本と吉井。高校1年生のころは四人で悪ふざけをよくしたものだ。

「悠夜って、ナンパされたことある？」

「……ないな」

悔しいが、事実だ。

俺は屋上に仰向けで寝転びながら、じっと青空と睨めっこをしていた。他の3人も同様だ。

ぶっちゃけ聞きたい。

「なあ。……ひよつとして、俺達って、モテない？」

「……そんなわけあるかっ！」「」

おおっ、すげえ過剰反応。
俺は思わず引きながらも、淡々と事実を告げる。

「けど、正直モテてる根拠ってないだろ？」
「」「」「……」「」

正直俺もそうだが。

「それじゃあよ」

すつくと土門が立ち上がり、俺達を眺め回し……ニヤリと「無体な笑みを浮かべた。

「証明しようぜ。俺達がモテるってことを！」

今思う。あの時の俺達は　かなりトチ狂ってたんだろう。

「と、いうわけで！」　土門の大声

「第1回！」　坂本の雄叫び

「チキチキ、文月ナンパ大会いーいーっ!!」　吉井のタイト
ルコール

「いえーい、ぱふぱふー」　俺の合いの手

うん、どっからどう見ても変態の集団だ。

「ルールの説明を、実行委員長こと有野悠夜君！　お願いするよ！」

「ああ。ルールは簡単だ。今から30分の間に、現在清涼祭の準備に励んでいる本校女子生徒に声をかけお茶に誘うこと。成功したやつは相手を連れて、30分後の11時45分にAクラスのメイドカフェに集合だ」

なんて単純明快なゲームだ。
だがしかし、駄菓子菓子。

男として、負けるわけにはいかない！

「それじゃあ 開始ッ！」

坂本の合図とともに、俺達は屋上から校舎内へと続く階段を駆け下りた。

「あ、有野君？」

俺が真っ先に向かったのは、Aクラス。上位クラスになると勉強に打ち込んでいる子が多く、手を付け難いと思われがちだが……実際はそうでもないのだ。

「よう佐藤。早速だがナンパしてもいいか？」

「はい？」

例えば佐藤美穂。霧島目当てでAクラスに遊びに来る俺は、ちょくちょくこいつとも話したりしているのだが、そのうちにこいつの性格 もとい、性癖が露呈するようになってきた。

「そ、そんな……今は、皆もいますし……」

そこで俺は別の人を見つけられるべく、視線を辺りに巡らせ

「あれ、悠夜？」

木下優子
イケニエ、発見。

〜以下、本気モード発動〜

「木下か。どうしたんだ、いつもと違うヘアピンだな。よく似合ってるぞ」

まずは小手調べにジャブ。外見を褒めて、相手の対応を伺う。

「あ、そ、そう？」

顔をちよつと赤くして、木下は俺を上目遣いに見る。

ぐう、かなり可愛い。しかしだ　俺は、負けるわけにはいかんのだ！

「ああ。すげえ可愛い」

ここは余計な飾りを省き、ストレートな愛情表現。

もうオープニングは終了だ。ここからはラッシュ。ずっと俺のターン！

「そ、そう。……ありがとう」

「ん？ 照れてんのか？」

「や、そ、そんなわけが」

「まあいいさ。お前が可愛いのにには変わらないしな」

「う、うう……」

「ところで、だ。ちょっと時間あるか？」

「……え？」

「そんな可愛い木下に、コーヒーを一杯ご馳走しようかな、って」
「ッ」

顔どころか首まで真っ赤にして、木下は俯いた。

轟沈完了。

『す、すごい……あれが『ツンデレエロ神』の本気……！？』

『さすがね、有野君。あの木下さんを意図も簡単に……』

ふっ、これが俺の本気だ。

んで、ここで計算外の事態が。

「（ガシッ）……有野君？」

「＼（＾o＾）／」

俺の左肩に、まるで万力のような圧力。

振り向いた俺の目に飛び込んできたのは、背後に阿修羅のオーラを纏った佐藤の姿だった。

『え、ちよおま、ここって女子トイレ……ていうか個室に二人きり
つて、狭いんだけど……』

『……ハアハア』

『おい、目がギラついてんぞ。　　待て、ベルトに手をかけるな。』

おま、ちよ、これってヤバ　　待て待て待て！　　おいおいおい
嘘だろ！？　　嘘って言うてくれよ？　　ねえちよっとまっ

」

11時45分。

俺はメイドカフェのど真ん中のテーブルに突っ伏していた。

「……………あがー……………」

30分間かけて、俺は女子トイレの一室で佐藤と激戦を繰り広げていた。

ズボンは下ろされかけたが、下着は死守したぞ。危ない危ない。

こういうことって、女子がすることじゃないよなあ。

そんなことを呟きながら、俺は他の面子の到着を待つ。

「……………有野お」

「……………何があつた」

と、どす黒いオーラを身に纏った土門が、俯いたまま教室に入ってきた。正直かなり怖い。

「…………………………」

土門は無言のまま、すつと右腕を見せてきた。

痛々しいみみず腫れ、火傷のあと。

「おい、本当に何があった」

「こ、こんな傷は普通できないぞ!? 何をしたらこうなるんだ!?

……まさか、こいつ。

「……美人の先輩だと思って声掛けたら、調教されかけた」

そう言っつて、土門は何かを思い出したかのように自分の肩を抱いた。

身長200センチメートル近くの金髪大男が身を縮こめてブルブルと震え上がっているのは、ぶつちゃけ気味が悪い。

ああ、そうか。DMの次はDSか。

「ちなみに名前は?」

「……小暮、葵」

なるほどね。覚えておくとしよう。

不用意に近づいたら、火傷じゃ済みそうにないからな。

「あれ、そういえば吉井と坂本はどうし」

『ピンポンパンポン。生徒の皆さんにお知らせします。本日11時20分ごろ、2年F組生徒の坂本雄二君が不慮の事故によって負傷しました。病院へ搬送されましたが、「止めてくれ、俺には女装趣味なんてないんだ」と何度もうわ言を言っていたそうです。生徒の皆さんも気をつけましょう』

「何があった!?!」

女装趣味で、おい。

ナンパした相手にメイド服を着させられる坂本姿がすぐに浮かび俺はゆっくりと両手を合わせた。ご冥福をお祈りしましょう。

ていうか怪我って何だよ。何があったんだよ、本当に。

『なお、吉井明久君が行方不明となっており、当学園は警察への届出も検討中です』

……もはや何も言うまい。

ただ、一つ。

俺と土門は顔を合わせ、同時に呟いた。

「文月学園、恐るべし」

一歩間違えば俺の身にも降りかかった惨劇かと思うと、体の震えが止まらなかった。

〈贖罪編〉第21章 日常（後書き）

今回はオリキャラ追加です。

土門君は扱いやすい！ ギャグにフルで活用できるぜ！

赫い札さん、ありがとうございました！

今回はかなり長めで、一週間後ぐらいに投稿する予定です。

小暮先輩はあれです、6巻で出てきたレオタード姿の先輩です。しかし佐藤さんといい小暮先輩といい、派手にキャラ崩壊してるなあ

……

こんな感じでこの小説は、タイトルにあるように変態ばかりです。お気をつけください。

この二人について苦情があれば、どしどし言うてください！ それでは！

〈贖罪編〉第22章 告白

「…………悠夜」

俺が帰りの準備をしていると、Fクラスの教室に入ってきた少女がいた。

いつもと同じ、長い黒髪をそのままに垂らす彼女　霧島翔子は、俺の名を呼ぶ。

「…………悠夜」

けれど、俺は答えない、目を合わそうともしない。

正直、気まずい。

霧島も黙り込み、会話が続かない。周囲も周囲もいつもと違う俺達の様子に、ざわざわと騒ぎ始めた。

『なんだ…………珍しく夫婦漫才が始まらないぞ…………？』

『ひょっとして喧嘩か？』

俺は、何も言えない。霧島も、何も言わない。

沈黙がしばし続いた後。

「…………これ」

霧島が俺に、一枚のチケットを差し出してきた。

「『文月テーマパーク ペアご優待券』…………？」

「…………明日は土曜日、だから」

ッ……………

「……………わかつ、た」

「……………うん」

周囲から、結局バカップルじゃねーかと声が上がるとはなかつた。けれど、俺達の視線は、ついぞ最後まで合うことはなかつた。

土曜日。

俺はダメージ入りのジーンズを穿き、上に黒いＴシャツを着て、駅前の噴水公園に居た。

周囲にも、俺と同じなのだろうか……………私服姿の男性が何名かウロウロしている。

「……………待った？」

「いや、今来たところだ」

定番のやり取りを済ませつつ、俺は後ろに振り向く。そこにいたのは、可愛い花のデザインがプリントされたＴシャツの上に薄いピンクのベストを羽織り、下は短めのデニムスカートを着た霧島。俺は腕時計を見て、俺が到着してからちょうど5分だったことを確認して、かるく霧島に会釈した。

「それじゃあ、行くか」

「……………うん」

手を繋いだりはしない。

俺達は黙って、駅へと歩き出した。

背後から、とある一団が

ついてきている事にも気づかずに。

「……悠夜、ここ空いてる」

「おう」

電車の中は、休日ということもあってか割と混雑していた。

思わず返事をしてしまったので、そのまま霧島が手招くほうへと歩を進める。

確かに、一つだけポツンと席が空いていた。

「じゃ、お隣失礼しますね」

隣に座る白髪のお婆さんに一言断ってから、俺は席に座った。電車の揺れにさつきまで耐えていたので、大分楽だ。

「……（ポスン）」

『!?!?!?』

と、霧島が俺の膝の上に座ってきた。最近こいつが俺の家に遊びに来る度この体勢になっているので、もう慣れて違和感がない。

周囲は俺達を見て啞然としているが、それでも動じないあたり俺も毒されてきているのだろう。いや、元々バカップルの素質があったとか。 大正解

なんにしても、この体勢だ。楽しむべきことは山ほどある。

ひとまず霧島の腰に腕を回した後、右手でそっとお腹を撫でた。

彼女の口から「んっ……」という声が漏れる。俺はそれにふっと口元を歪め、霧島の長髪をかき上げた。

「あ……」

俺がうなじに舌を這わせると、霧島は身を固くする。その反応にますます愉悦を覚えながら、俺は陵辱を再開する。

左手で霧島の太ももを直に揉みしだきながら、耳にふつと息を吹きかける。幼馴染としての知識その一、霧島は耳が弱い。

「ひゃんっ」

くくく、声が出てるぜ霧島さん。

そのまま舌を這わせ、ながら、俺は霧島の反応を楽しむ。

「ひゃっ、んんっ……ふぁっ」

だんだんと霧島の体が火照るのを感じ取りながら、俺は耳たぶを軽く噛んだ。

「ひゃあ！」

噛む位置を微妙にずらしながら、俺はそっと太ももを揉むパターンを変える。

股の内側に爪を立てつつ、耳の中に舌を突っ込んだ。

「あ……ああ……」

顔を赤らめて、必死に身をよじる霧島。可愛い。

『次はー、文月テーマパーク前ー、開くドアは左側ですー、バカッ
プルはさっさと降りて下さいー』

と、その時空気を読まずに車内アナウンスが流れた。ていうか最後の言葉は完全に俺達のことだろ。どっから見ってた。

「だ、そつだぞ霧島」

「……うん」

まだ息の荒い霧島。俺は周囲から浴びせられる視線をスルーしながら、開いたドアの向こうへと足を踏み入れた。

「へえ、結構大きな遊園地だな」

「……うん」

霧島も落ち着き、俺達はようやく遊園地へとたどり着いた。

しかしこの広さは好奇心をそそるぜ。

そこまで体力があるのか、という点だが、この世界に来てから基礎的な体力が格段に上がっているのだ。

「転生者を、無礼るな」

「……は？」

「あ、ああ。いや、なんでもない」

いかん。つい、この間吉井の家に泊りがけでやったゲームをセリフを言ってしまった。まったく、パソコンの前で何度泣かされたことやら。吉井と俺と、いつの間にか来ていた土屋と三人で号泣した。ティッシュを6箱使い切った。一人2箱使った計算だ。

「それじゃ、入るか」

「……うん」

俺は霧島からチケットをもらつと、係員に見せる。

「はい、ご来場ありがとうございます。お二方とも美男美女で、羨ましいですよ」

「……ありがとうございます」

「ええ、楽しませてもらいます」

霧島はちよつと俺を見ると、満足げに微笑んだ。

「……これ」

「おう」

入園してから最初に足を止めたのが、園内唯一のお化け屋敷。県内で怖いお化け屋敷ランキングのベスト10に入っていた。なのでよほど怖いらしいのだが……

『ウ~~~~バ~~~~ア~~~~』

「……ゾンビって、何で同じような外見してるの？」

「死体っていうか、出てきたとしてもほとんどモブな扱いだから、だろ」

『……お皿がいちまいい、にーまいー、さんまいー……』

「お、あの人結構美人……《メメターア！》……痛い」

と、こんな感じで楽々スルー。ていうか途中でくらったハートブレイクショットがマジで痛かった。

「お、あのジェットコースターなんてどうだ？」

俺が指差した先には、傾斜角度90度のジェットコースター。長さ・速さどちらも国内有数の代物らしい。

「……わかった」

というわけで、行ってみる。

フリーパスで入り口を通過した後、混雑する人ごみを掻き分けて列に潜り込み、そのままコースターの座席に並んで座った。

肩に安全バーを下ろし、ベルトをしっかりと閉める。

「いくぞ学年主席 体力の貯蔵は十分か？」

「……私は英雄王じゃない」

そんな馬鹿馬鹿しい会話とともに、ジェットコースターは射出された。

ありのままに言おう。

気づいたら霧島が失神してた。俺も放心してた。

ホームに戻った後も、乗ってた人が5分ほど動けないってどういうことだよ。

滅茶苦茶だ。上下がやったらめったら変動してバーがなかったら落下確定だし、途中で座席が角度変わって脳味噌揺さぶられるしコースターの辿るコースが木で組み立てられててメキメキ聞こえるし360度スクリー3連でキメられて方向感覚失うしで最高すぎる

よこのコースター。

「こちらユウヤ。キリシマ大佐、聞こえるか？」

「……こちらHQ、通信は良好」
ヘッドクォーター

「よかった、意識を取り戻したようだな大佐」

「……私が意識を失っている間に何があった、ユウヤ」

「ひとまず大佐をおんぶして近くのベンチに運んだが、直に寝かせたら痛そうだったので頭部のみは俺の膝に乗せておいた」

「……よくやった、ユウヤ」

最近霧島のノリが良すぎて困る。

長い黒髪を撫でながら、暇つぶしに空を見上げてみた。

近くでは遊園地のマスコットキャラの着ぐるみが子供達に風船を配っており、非常に微笑ましい。

ああ、そうだな。

俺はきつと、こんな日常を待っていたんだ。

「霧島」

視線を下げ、彼女と目を合わせる。

「観覧車、乗らないか？」

ゴウンゴウン、そんな音を立てて観覧車は回る。

まだ夕暮れには程遠いが、観覧車から見る景色は絶景だった。

こここの観覧車は、頂点に来た人がタイミングよく、設置してある

ボタンを押すと3分間停止するシステムがある。ここで告白する男子のいい道具だ。

そして、俺もそれを使う。

「…………霧島」

頂点に辿りついた瞬間、俺は壁に取り付けられた赤いボタンを押した。

ガタン、と観覧車が動きを止める。

俺と霧島は同じ座席に座り、肩が擦れ合っていた。

「…………悠夜？」

首を傾げながら、霧島は俺の顔を覗き込んでくる。

俺は息を深く吸って、それを告げる。

「…………もう、止めないか」

「……………」

霧島は、何も答えない。

今日一日、俺達は以前、霧島の家であったことを意図的に忘れていた。

それは学校でも同じだった。

いつも通りの、接し方。

だからこそ、俺は耐えられない。

「霧島、俺の苦しみを、背負う覚悟はあるか？」

「…………ある」

俺は、その答えを聞くと、ゆっくりと口を開く。

「荒唐無稽と笑うかもしれない。信じられないと拒絶するかもしれない。それでも聞いてくれ。」

俺は、この世界の人間じゃない」

〈贖罪編〉第22章 告白（後書き）

久々の更新です。遅れてすみません。

第2部のサブタイを変えました。まあ失敗して19章消えたんですけど……orz

というわけで、今回はえらい中途半端に終わってしまいましたけど、次回は回想メインになるっぽいです。

ファンタ ア文庫的に言えば、

『その男は、ある嵐の日にやって来た……全身に無数の傷を負い、今にも力尽きようとしてつつも、その眼光には確かな闘志と信念が宿っていた。手に持った、身の丈以上の大剣に身を預け、必死に、少しずつ、歩みを進めていた……』

みたいな。

現在なのは×種デスを執筆中です。シン最高！ あいつは幸せになるべき主人公（強調）だよ！

《贖罪編》第23章 回想

『……俺は、この世界の人間じゃないんだ』

そう言い切って、俺は深く息をつく。

……言った。言ってしまったんだ。

もう後には引けない、今までのようには戻れない。
覚悟を決める、有野悠夜。

もう騙し続ける時間は終わりだ。

こっからは 本当に、俺を見せなきゃいけないんだ。

「……どういう、こと？」

霧島は首をかしげ、俺をじっと見つめた。

「言った通りだ。俺は、この世界の人間じゃない」

それでも分からない、というように霧島は俺の目を覗き込む。

「こっつ言えばわかるかな。俺は、一度死んだ」

ありえないかもしれないけど、いつか話すときがくるんじゃないかって。

絶望と悔恨にまみれた、泥だらけの。

だから、俺は。

たった一人の、全てを失った男の『おとぎばなし』。

有野悠夜は、いつか聞かれた。

『好きな人はいるのか』

迷うことなく、彼はこう答えた。

「妹だ」

周囲がドン引きしたのは言うまでもない。

有野桜。

俺の自慢すべき妹の名だ。

彼女は俺と同じ紺色の髪を肩にかかるほど伸ばしている。

「おはよう、お兄ちゃん」

そんな妹は、今日も今日とて、朝から俺のベッドに潜り込んでいた。

こんなこと普段からあることなので、特に驚きはしない。寝てるふりしてそっと抱きしめるだけだ。

「……お、おおおおお兄ちゃん？」

ひどく動揺したように、さくらが声を上げる。

そついえば今日は学校だ。本当面倒だなあ。

「……うーん、おはよう。さくら」

「え、えあ、うん」

名残惜しそつにさくらの肢体から手を離すと、俺はベッドから降りた。

俺の母親は、自称40代のはずである。

ただし、外見がマジでロリっ娘なのだが。

ビビる、マジビビる。だって朝起きたら、小学生っぽい女の子がキッチンにいるんだぜ？ しかもコンロの上の鍋に手が届かず、小さな台の上に立ってから大人っぽく味噌汁の味見してるんだぜ？

これで萌えないほうがおかしいだろ！？

「あ、悠夜！ おはよう！」

そつ言つて、ロリ母は俺に抱きついてくる。ちなみに父とは離婚してる。何でも、父さんとの結婚は『生涯最大の汚点』らしい。

あ、一応言つとくけど俺とさくらは血が繋がってるからな？ 実の兄妹だよ？

「母さんおはよう。今日も元気に可愛いな」

「あら、もう悠夜ったらヤダ」

そつ言つてグリグリと俺の腹を肘でえぐってくる母さん。地味に

痛い。

俺と同じ紺色の髪は腰ほどまで垂らされ、赤目は俺と同様だ。ていうか俺と母さんと妹は紺髪赤目が共通なのだ。

学生服に着替えて、俺は朝食を摂取すべく食卓に着いた。

母がいつも通り、お皿をテーブルに並べていくが……今日はちょっとサプライズがある。

「母さん」

「? どうかしたの?」

俺は、背中に隠していたタッパーをテーブルの上に置いた。コトリ、という軽い音とともに、タッパーの中身が揺れる。

「ハッピーバースデー」

ふたを開けると、湯気を上げる肉じゃがが姿を現した。さっき電子レンジで温めたので、ホカホカだ。

「母さん、肉じゃが好きだったろ?」

いつもいつも、母さんには迷惑かけっぱなしだからな。

「悠夜……」

目をウルウルさせながら、母さんはタッパーを手にとった。

ふたを開け、中に入ってる肉じゃがを見て、ふうと息をついた。

箸を手に取り、母さんは一口、それをとって口に含み 目を見開いた。

「悠夜、すごいわねこれ！ 私が作ったのよりもおいしいんじゃない！？」

なんとも母さんらしい感想である。無邪気、という言葉が体言するかのようだ。

「喜んでもらえて何よりだよ」

「えへへ」

頭を撫でてやると、いつも母さんは気持ちよさそうに目を閉じる。そうしてじっくりと母さんの蕩けきった顔を鑑賞していると、ふと凄まじい殺気&視線を感じた。

「おおっとー！」

慌てて上体を捻ると、さっきまで俺の喉があつた所を高速で包丁が通過していく。そのまま包丁は壁に突き刺さり、十分な切れ味の鋭さを示してくれた。

「……危うく死ぬところだった」

頬を伝う冷や汗をぬぐいながら、俺は包丁が射出された大元を見る。やる。

「さくら、俺に何の恨みがある？」

「……お兄ちゃんが悪いの。お兄ちゃんが他の女（実の母親）と楽しそうに話してるのが悪いの。私にはあんな笑顔見せてくれない。何で？ 何で私だけ違う態度なの？ ねえどうして？ 答えてよ。」

答えてよ、ねえ、お兄ちゃん！ お兄ちゃん！ お兄ちゃんああああん！

ちよ、マジ怖いんだけど！

あんまりにも怖いんで思わずすると後退。ていうか顔とオラが怖すぎてほとんど聞き取れなかったよ。

「うがああああ！ いくら娘とはいえ、悠夜に（性的な意味で）手を出すなんて、許さないわよ！」

ビシイッ！ と背後に擬音が浮かぶような勢いで、母はさくらに指を突きつける。

するとさくらは腰を落とし、ゆっくりと重心を前に傾けた。なるほど、これなら相手に警戒されることもなくすぐ攻撃を始めることが って待て！ 目がヤバイ！ ハイライトが消えてる！ あれは、殺る目だ！！

「二人とも落ちつ」「悠夜（お兄ちゃん）は黙ってて！」「……了解した」

俺は自分の無力さを呪った。無論、アホらしくもあったが。

「バカな……この俺が……悠夜に負けた？」
「むしろ俺がお前に負けるほうが稀だがな」

廊下に張り出された期末考査の成績優秀者一覧。俺の隣でうなだ

れている男は学年一のお調子者兼学年一の秀才だったのだが……今回は2位だ。

そして俺1位。がんばった。超がんばった。

「さっすがお兄ちゃん！ 学年1位なんてすごい！」

「うん。さくら、ほめて貰えるのは嬉しいがここはお前の学年の廊下じゃないからな？」

いつのまにか俺の後ろにいた妹。恐ろしい存在だぜ。

「あがー、お兄ちゃんがいじめるー」

「むしろ俺がいじめられてるんじゃないのか？」

思わず嘆息するが、妹は嘆きを止めない。

この状況をどう打開すればいいのか考えながら、俺は思わず笑っていた。

こんなにも楽しい日常が続いていることに。

……それがもうすぐ終わりを迎えることも知らずに。

〈贖罪編〉 第23章 回想（後書き）

次回は今週中に更新する予定です。

《贖罪編》第24章 咆哮

「俺には守りたいものがあつた」

夕日を見つめながら、俺は回想を一旦打ち切つた。

「……………」

霧島は、何も話さない。

俺も、何も話さない。

否、話す必要がなかつた。

「さくらは……………多分だけど、俺のことが好きだつたんだと思つ」
「……………」

霧島からの視線がキツくなつた。

そ、そんな目で俺を見ないで！

「……………一応言っておくけど、俺そこまで鈍感じゃないからな」

「……………じゃあ、今悠夜のことを好きな人って誰がいる？」

そんな質問、簡単だ。

「お前だけ」

「……………違つけど、嬉しい。……………けど、他の人が不憫」

あれ？　なんか間違つてるか？

「……まあ、いいさ。それで、話を続けるぞ」

そう言って、俺は目を閉じる。

思い出す。俺にとって最大の『災い』。

思い出す。俺にとって最悪の『呪い』。

きつと忘れないのだろう。
いつまでも、あの光景を、この感情を、引きずり続けていくのだ
ろう。

心はもう、熱くならない。

ずっとずっと、底なし沼のように、ズブリズブリと沈んでいく。

何が？

自分が。

そうだ、俺は必要ない。

俺は必要ない。必要ない。必要ない！

割れたガラスには。

動かないおもちゃには。

コフレタ心には。

もう役目なんて、ないから。

「……は？」

カバンが、手から落ちた。

ギシリ、と心に亀裂が入る。

何だ、コレは。

隣のさくらも同様に、口を開けて呆けていた。

ここはどこだ？

俺の家だ。

学校から帰る学生達の笑い声が、街中に響く。

けれど、俺の耳にはそんなもの入らない。

何だ、コレは。

膝から力が抜けた。そのままその場に座り込む。

さくらはカバンを放り投げ、何かを叫びながら、ソレに走っていった。

何だ、コレは。

壁を彩る、真紅の鮮血。

辺りに撒き散らされた、グロテスクなナニカ。まるで人の臓物の

何だ！？ 何だ、これは！？

止せ、止せ、やめろ！ 見るな！ あれを、見るんじゃない！

「お母さん！ お母さんっ！ お母さん！」

ひたすらに、さくらの絶叫が辺りに響く。

そして。その絶叫に呼応するかのように、壁にぶちまけられた鮮血が、ゆっくりと壁を伝って床に落ちた。

「お母さんっ！！ お母さん、お母さんお母さんお母さんお母さんお母さん！！」

急激に、思考が冷静になった。クールダウンした思考回路を必死に働かせ、一瞬だけ、何かに気づいた。

ああ。

「お母さんお母さん！ 返事してよ！ ねえ！ お母さんってば！」

そうか、そうだ。

「お母さんお母さんお母さん！ ねえ、うそでしょ！？ ねえ、お母さん！ 目を開けてよ！ お母さん！」

血が滴るってことは。

部屋がこうなってから、そんなに時間はたっていないってことだ。

もはや母さんでないそれに、俺はゆっくりと歩み寄る。

コッソ。

響く足音に、冷静な思考を奪われながら。

コッソ。

まるで泥の中で足掻くように、体がゆっくりとしか動かない。

コッソ。

悪夢なら、目覚めてくれ。また、俺に、いつも通りの
いつも通りの日常を、見せてくれよ。

いつもみたいに、朝起きたらさくらがベッドの中に入り込んでき
て。

母さんが笑顔で俺の名前を呼んで。

学校で友達とバカやって。

そうして、家に帰って、俺とさくらと母さんでゆっくりして。

それは一瞬だった。

まばたきをすれば、俺は床に倒れ付していた。
すさまじい激痛　　などなく、すでに神経が焼ききれたのか、床
の感触すら感じない。

目を動かしてみれば、まるで内側から弾け飛んだような右足。肉
はえぐれ、辺りに血が飛び散り、骨が直に見えている。

左足も同様、右腕は骨がイカれたのか、動きすらしない。

首だけで視線を上げ、突然現れたそいつに目を向ける。

黒いズボン、黒いコート。何から何まで、全て黒いそいつを、睨
み付ける。

さくらがそれを見て、その場に尻餅をついた。

思考が明滅し、白熱し、灼熱する。

「ふ、ざけんな……」

男は俺を一瞥すると、つまらなさそうに嗤った。嘲るかのように、口元を歪めた。

男の手に持った刃物が、鈍い銀色の光を反射する。

よせ。

止める。

止めてくれ。

さくらは、いやいやと首をふりながら後ずさる。

男は狂気の笑みを、狂喜の声を上げながら、凶器を振りかぶった。

「止めるっ！！」

俺の絶叫などには耳も貸さず、男はそれを振り下ろした。

肉を断つ音。

骨を挟る音。

命を奪う音。

一気に聞こえてきたそれが、俺の鼓膜を震わせた。

何も考えられなくて、何も考えたくなくて。そして、最後に。

《贖罪編》第24章 咆哮（後書き）

やっと、主人公の過去が終わりました……

いやー、他のバカテス作品って、結構ブラコンの妹が登場してるんですけど、実際に書いてみて理由がわかりました。

楽しいですね、これ。

まあもつとも、ウチのは半分ヤンデレでしたけど。その上故人ですけど。

ていうか今まで作者の妄想に付き合ってくださってありがとうございました！
もうすぐ、本当に清涼祭が始まるのでご辛抱下さい！

……と言いたいのですが、この《贖罪編》と《清涼祭編》の間に、
一つか二つ幕間を挟むことになりました。

その名は 《異性関係編》！

はい、タイトルからして地雷ですね。まあ主人公の爛れた異性関係に関することは全部このタイトルになるので、まあさらっと流し読みしていただければ幸いです。

あと、今のうちに宣言しておきますね。

宣言の内容が気に入らない、という方はブラウザバックお願いします。

この小説のオリ主ハーレムに 吉井玲さんは入りません。

だってキャラ被りますし。いるりちゃんとか、今後登場予定のオリキャラとか。

さすがにオリキャラ飽和状態かもしれませんが、あと一人……作者考案のオリキャラで、キーマン（いや、キーウーマン？）が一人いるのです。

もしそれでもよろしい方は、気長に、そしてゆるく、今後の『バカへん』をお読みください。

では、次回の更新で会いましょう！

〈贖罪編〉第25章 出現

「……………そして、そいつは俺を殺さず……………立ち去っていった……………」

ガタリ、と観覧車が揺れた。どうやら動き出したらしい。
霧島は唇を噛んで、ずっと俯いていた。

「なあ、霧し……………」

声をかけようとした瞬間　俺の体は、ふわりとした、温かい感
触に包まれた。

ああ、まったく、何だっただよ。

俺の肩に、ポツポツ、と、水滴が落ちる。

ああ、もう、ちくしょう。

泣くなよ。

俺も耐えてんだから。

泣くなっば……………

オレンジ色に染まったアスファルトに足を付け、俺は観覧車の係

員さんに礼を言った。

「うっし、霧島！ 次はどこに行く！？」

俺の言葉に、霧島は一瞬だけ 本当に、一瞬だけ 表情を曇らせ、すぐに笑顔を取り戻した。

「……分かった」

満面の笑みを浮かべる彼女。空元気の二人、そして落ちる夕日。いざ次のアトラクション、と足を踏み出そうとしたところで、俺はふと歩を止めた。

「……悠夜？」

「そこにいるのは分かってる……さっさと出て来い」

そう言い放ち、俺は観覧車の傍にある草むらを覗んだ。

数秒の沈黙の後、がさがさという音の後、そこから数人の学生が出てきた。

吉井明久は、バツが悪そうに頬を掻きながら。

坂本雄二は、じつと俺を見ながら。

木下秀吉は、髪をやや乱暴に掻きながら。

土屋康太は、手にした盗聴器を握り締めながら。

「とりあえず言わせてもらおうが……」

その言葉に、4人は身を固くする。まあこいつらがしたことはスニーカーと大差ない……っ！か犯罪だしな。

「木下秀吉。地肌にダメージを与えすぎると、ハゲるぞ?」
『そこかよ!』

全員からツッコミが返ってきた。

「それで、この盗聴器からして、聞いていたな?」

言いながら、霧島の長い髪を一撫で。

一瞬霧島が気持ちよさ気に目を細めた。俺はそのまま手を下ろし
……人差し指についた盗聴器を握り潰す。

「オーケー土屋。ちょっとツラ貸せ」

「……悠夜、K O O Lになって。キャラ崩壊しすぎ」
「嘘だっ!」

「……明久、あの二人は何を話しているのじゃ?」
「秀吉にはまだ早いよ」

爽やかに前髪を書き上げる吉井。全然似合っていない。

「ま、というわけで俺は異常な存在なんだ。OK?」

盗聴器の残骸を地面に落としながら、俺はみんなから顔を背ける。

……怖え。なんで、吉井達まで聞いてるんだ。何でだよ。

「悠夜」

視線を、合わせられない。

「おい、お前、何か勘違いしてねえか？」

「勘違い？」

「そつじゃ」

「してるつもりはないけどな」

「……………あくまで『つもり』」

「……………何が言いた、い……………」

思わず振り向いたところで、俺の動きは止まった、いや、止めざるを得なかった。

「ハハツ。何で、何で、泣いてるんだよ、お前ら」

「……………悠夜が、泣かないからだよ」

みんなから、一斉に抱きつかれた。
すごく重くて、すごく暑苦しくて……

すっげえ温かった。

「ちなみに、木下秀吉に抱きつかれてちょっとドキッとしたのはこ
こだけの秘密だ」
「……台無し」

「それで、お前らは何も思わないのか？」

遊園地を出て、オレンジ色に染まったアスファルトの道を歩きな

がら、ふと俺は質問した。

「思いつて？」

「俺一応一回死んだんだぞ？　そして蘇ってるんだぞ？」

「……おお、今思えばすごい！」

「タイムラグ長いな」

明久との会話は、幼稚園児と話してるみたいで疲れる。

「ふむ、一度死んだ人間というのは中々興味深いものじゃのう」

「いやだからさ、もっとこう……『怖い』とかさ」

そう言つと、霧島が俺の正面に歩み、くるりと回つて、俺と向き合った。

歩くのを止める。霧島が髪を掻き上げ、黒髪が夕日を弾き煌く。漆黒の、まるで星々の輝きにも似た艶やかなそれが、彼女の魅力を最大限に引き出している。

「じゃあ、悠夜は皆から嫌われないの？」

……ははっ。

そつだ、そつだよな。

どうして気づかなかつたんだ。

「……それは……御免、だな」

俺はここに在る。そして、皆から認められている。

逃げたっていいのかな？

怯えたっていいのかな？

後回しにしても　いいのか、な？

けれど。

少なくとも、こいつらみたいは、俺のことをまっすぐに想ってくれているやつらには。

「みんな」

親友たちの目を見て。
自分の喉を震わせて。

「
ありがとう」

「それで、ハッピーエンド、めでたしめでたし、というわけか？」

一瞬だった。
体が勝手に動く。
俺の中の、『ナニカ』が、勝手に体を動かす。
声が出たほうへ素早く体を向け、体の重心を前傾に。いつでも踏
み出せるように

ま、て、っ！
な、ん、だ、こ、れ、は！？

また、だよ。
これは 『アリノウウヤ』であって、『俺』じゃない。

「ほう、その動き……多少はできるようだな」
そいつは、そこに居た。
そいつは、そこに在った。
まるで自分の存在を誇るように示すように、隠すようにまぎれる
ように。

「久しいな 『イレギュラー
転生者』」

電柱の頂上。常人なら、上ることも上った後の姿勢維持も難しいところに、男は佇んでいた。

黒いコートに黒いパンツ、黒い靴

「なっ あれって、悠夜の召喚獣じゃないか！」

吉井が驚いたように声を上げる。が、俺は男の一挙一動から目が放せない。

どう来る……！？ 得物は！？ 銃か！？ 刀か！？

「……武人として、敵の観察は結構。だがしかし、その前に自分の得物を確認するんだな」

「ッ！？ しまったッ！ 俺自身の武器が一切ねえ！ バカヤロウ、『戦場』に素手で出撃するやつがどこに

「いい加減ひっこめよ、『アリノウウヤ』あっ！」
『！っ。』

汗に脂汗が滲む。くっそ、なんだ、これ。

ふと視線を上げれば、男はすでに地面に立っていた。

手にした日本刀。

「『皆琉神威』^{みなるかむい}。知らない、というわけではなさそうだな」

その名を聞いた瞬間、俺と吉井と土屋の動きが止まった。

「それって……マブラヴの!?!」

「ありえない、ってわけじゃなさそうだな……」

つい先日、テキストで散々読んだ後だ。

俺は男と何気ない会話をしつつ、ポケットから慎重に、腕輪を取り出していく。

「いくぞ、無現鬼道流奥義『月の輪』」

「即時召喚!」

瞬間、一気に腕輪を取り出し、自分に取り付けると同時に召喚獣を召喚する!

幾何学的な魔方陣が描かれる前に。

圧倒的にして絶望的。

振り抜かれた刃は大気を裂き、巻き込み、辺りに一方的な旋風を巻き起こした。

「だから、どうしたあっ!」

俺の中の『アリノユウヤ』が叫んでいる。逃げろ、と。勝てない、と。

「知るかつ! 少し黙ってる、『アリノユウヤ』!」

姿を現す俺の召喚獣。
と、男は口元を吊り上げ。

「
オーバーアッパー
強化召喚」

《Fクラス 有野悠夜 VS ????
総合 5042点 12603点》

「……………え？」

現れた召喚獣は、召喚されて3秒もかけずに、手にした円柱型の
剣で俺の召喚獣を切り刻んだ。

「何だ、この程度か」

「ッ、^{サモン}試獣召喚！」

「ッ、^{サモン}試獣召喚！」

と、他のみんなも次々と召喚獣を召喚していく。

《Aクラス 霧島翔子 総合科目 4673点》

《Fクラス 吉井明久 総合科目 708点》

《Fクラス 坂本雄二 総合科目 645点》
《Fクラス 木下秀吉 総合科目 1087点》
《Fクラス 土屋康太 総合科目 828点》

「ほう、数さえそろえれば勝てるっても？」

各々の召喚獣が武器を構える、が、しかし

「エヌマ・エリシユ『天地乖離す開闢の星』！！」

一撃。

円柱のような剣が回転を始めたと思いきや、たった一撃。

空間すら切り裂くそれは、5体の召喚獣をあっさりと飲み込んだ。

6人、全員が相手にすらなっていない。

背筋を悪寒が駆けた。

何だ、あいつは。

何なんだ、あいつは。

否。俺は知っている。

「どついた転生者」

男は俺に顔を向け、不敵な笑みを浮かべ。

「母と妹の敵討ちは、しなくていいのか？」

言い放った。

「……お前ええええええええええつ！！！」

雄たけびを上げながら、俺は男へと突っ込む。がしかし、もはや笑うしかないほどの速度で繰り出された拳が、俺の肋骨を砕いた。反応できない。俺の中のナニカはかろうじて見切ったが、体がついていけない。

「ぐふ、ごほつ……」

口から血が溢れ出る。誰かの叫びが遠くに聞こえる。そのまま膝から力が抜け、地面に倒れこんだ。

「まあいい。次に会う時が楽しみだよ、転生者君」

「待ちやがれ……！！」

首だけを動かしてそいつを睨み、俺は言葉を紡ぐ。

「名前は……？」

「ああ、名前か。いいだろう。私の、いや　俺の名は」

一呼吸。

「 『アリノユウヤ』。その成れの果てだ」

「……………は？」

男は一足で電柱を駆け上がると、そのまま民家の屋上を疾走していく。

後ろから走ってくる親友たちの足音を聞きながら、俺の意識はブ
ラックアウトしていった。

〈贖罪編〉第25章 出現（後書き）

・即時召喚型白金の腕輪について

まず、これは点数を消費せずにフィールドを展開させることができます。これは一度展開すれば、『干渉』は一切受け付けず、腕輪の使用主の召喚獣が戦死してもフィールド内に召喚獣が居続ければ、半永久的に展開できます。

次回からは高橋先生のターン！ お楽しみに！

……いや、冗談じゃないですよ？

〈異性関係編〉第26章 霧島翔子&高橋洋子(表)

目覚めると、そこは真つ白な部屋だった。

「……あー」

知らない天井……かすかな薬品の香り……体に走る痛み……

「 エヌマ・エリシュ」

そつだ、冷静になって思い出せば、俺はあれを知っている。

そう、『天地乖離す開闢の星』 かの英雄王が誇る、唯一無二の、究極にして絶対の刃。

なんだそれ。

防げるわけねえよ。

「あー、あの野郎……」

吉井から聞いたことがある。二次創作物で、一度死んだ主人公が別の世界に転生する、という作品。

まんま俺だが、こついつた作品には別のパターンがある。それは複数の世界を巡る、というものだ。

英雄王の宝具。

無現鬼道流の技。

これらは恐らく、その世界を回った時に得たもの……そう解釈していいだろう。

いやしかし、吉井の話だと転生する時に神様が何らかの異能を付与してくれるらしい。……俺には一切なかったんだが。

それを考えると、最初に神様に

『金ぴかの宝具をくれ！ あとあれだよ、マブラヴで冥 が使ってる剣術あるじゃん！ あれ完璧に扱えるようにして！』

てなことを頼んだのかもしれない。

「ちくせう、羨ましいであります」

なんだこの待遇の差。俺なんて問答無用でワームホールだぞ？

「しかし、わけわかんねえな……」

思い返せば、あの男は、確かに、『アリノユウヤ』と名乗っていた。

ふむ、どうやら……あれだな。

『そつだ、女の子を触りたいという願いが魅力的だったから憧れた』！

『故に、自身から堕ちた気持ちなどない。これを変態と言わずなんと言っ！』

『この身は女子の為にならなければならぬと、強迫観念につき動

かされてきた。それが快感だと思つ事も、違法と気付く間もなく、ただ走り続けた！ だが所詮は変態だ。そんな変態では誰とも付き合えない。否、もとより、誰が好きかも定まらない ！』

……なんだこれ。すっげえカオス。

「悠夜ッ！」

「目が覚めたのか！？」

いやまて落ち着け俺。何だ今の変な電波は？
妄想か。そうか妄想か。そうに違いない。

「……悠夜あ……悠夜あ……」

「……霧島さん」

この胸の重みは、きつと俺の苦悩だ。くっ、あの黒々野郎め、俺にこんな電波を置いていきやがって。

「悠夜……？ どうしたのじゃ？」

あの野郎……絶対にブチ殺す。そのためにもまずは必殺技を習得しなくては。

候補としてはやはり黄金のローキックとかか。厨二じゃない魂を見せ付けてやるぜ。

「おーい悠夜。無事ならしっかりするのじゃ」

「……？ 何だ、木下秀吉か」

と、一気に現実へ引き戻された。

「体は？」

「肋骨が2本やられておる。明久はフィードバックで失神じゃ」

「サンキユ」

それだけ言つて、俺はベッドから起き上がった。

俺の胸に顔を埋めていた霧島がズルツと滑る。

「つて、悠夜！？ 何考えてるのさ！」

「何つて……退院だが？」

吉井の言っている意味がわからない。

「お、おい悠夜。さすがにその怪我は無理しないほうがいいと思つぞ」

なぜか冷や汗をかきながら、坂本までもが俺をベッドに押し戻そうとする。

まあこの怪我で出かけるのは無理か。

「……なら学園長クンババアと連絡を取ってくれ」

キングクリームゾン！ ゆうや は たいいんした！

「いや、何だ今の電波は」

「どつしたの悠？」

「……何でもない」

さて、清涼祭まで後約1ヶ月。
そろそろカードを切らせてもらいますか！

「というわけで高橋女史の家にお邪魔しております」
「……何そのアナウンス」

テーブルを囲んでテキストを開いているのは、俺と霧島と高橋先生。

ちなみに高橋先生の家は学校から電車で3駅だった。普段は自動車で登校しているらしいが、車がレクス（定価約600万）だったのはには驚いた。結構見る目あるんですね。

「すみません、仮定法過去の書き換えなんですけど」
「……ここ、関係副詞の抜き出し問題で」
「ああ、そこはちょっとしたひっかけで」

俺と霧島が同時に質問しても、高橋先生は平行して答えてくれる。本人曰く、昔友人に勧められて習得した『平行分離思考』マルチタスクなるもののおかげらしい。

「……すみません、それはコンピューターのシステムです。貴女の脳みそはどうなってるんですか……？」

まあ、それはともかく、言える事は一つ。

「ああ、有野君はそのページが終わったら52ページの応用問題を解いておいてください。霧島さんは長文読解が弱点のようなので、

別テキストですがこれを」

詰め込みってレベルじゃねーぞ。
すでに脳内はパンク状態。あの霧島さえもが頭から煙をあげている。これはひどい。

ちなみに、これでもう高橋家お泊り勉強会は6回目である。

「もう無理だ……」
「……………」

高橋先生は現在シャワーを浴びている。

初日こそ覗きに行こうかと思いましたが、霧島から4分の5殺しにされたので自重している。オーバーキルだ。ていうか、もう覗く気力すら起きん。霧島もテーブルに突っ伏してるし。

「のど渴いたな」

冷蔵庫を開け、ぼーっとした思考のまま適当に飲み物をチョイス、グラスに注いで一気に飲み干す。

ウイスキーでした

S i d e S y o k o - k i r i s h i m a

疲れた。ただ、それしか言いようがない。

それは悠夜も同じようで、「のど乾いたな」と呟いて冷蔵庫へと向かった。

突然悠夜が勉強を始めたのは、おそらくこの間であつたあの男の人に勝ためだろう。そして教師役として、この学校でもトップレベルの学力を持つ高橋洋子が選ばれたのだ。

……なぜよりも寄つてあの高橋女史なのか。

最近の高橋女史は、明らかに悠夜を意識している。
恋する乙女、とはいかないが、チラチラと横目で見たり。

ちなみに、悠夜が風呂から上がった時は私と二人そろって赤面した。どうして上半身裸で出たのだろう。束ね、限界まで引き絞ったワイヤーのように引き締まった筋肉。額にペツタリとついた前髪。

ドキドキしない方がおかしい。

そうこうしているうちに彼が帰ってきた そして。

「霧島」

名を呼ばれ。

「……何？」

肩を掴まれ。

「 やらないか? 」

..... What?

声を出す前に、口を塞がれた。悠夜の、唇で。

S i d e
o u t

翌朝、霧島と高橋先生と俺は揃って服を着ていなかった。……ど
うしてこうなったorz

〈異性関係編〉 第26章 霧島翔子&高橋洋子(表) (後書き)

はい、やっちまった感あふれる投稿です。

次回は(裏)、悠夜君の暗躍とかその辺です。

次回こそ高橋先生のターンだぜ！

〈異性関係編〉 第27章 霧島翔子&高橋洋子(裏) (前書き)

ユーザーネーム変えました。あと性的描写注意です。結構露骨に入ってるんでご了承ください。

〈異性関係編〉 第27章 霧島翔子&高橋洋子(裏)

「それで、一体何のようだい？ このクソジャリ」
「随分なご挨拶だな、オイ」

高橋先生の地獄特訓フルコースの3日目を終え、俺は少し早めに学校へと来ていた。向かう場所は学園長室。
あの妖怪ババアとちよつとした話し合いだ。

「それで、学園長^{アンタ}の失脚を狙うどっかのバカは見つかったか？」
「……どっから嗅ぎ付けたんだい？」

あからさまに嫌そうな表情のババア。
俺は豪華なソファに腰を降ろし、置いてある葉巻に自前の100円ライターで火をつける。

「アンタ学生じゃなかったのかい？」
「臨時休業だ」

煙をカツコ良く吐き出そうとし、むせた。

「げほっ、げほっ」
「慣れないことするからさね」

肩をすくめるババア。むかつく。前世では吸ったことあるんだよ。
……結局むせてはいたが。

「……竹原教頭は、3年の夏川と常村って奴らを買収したそうだ」
「大方、大学への推薦状かねえ。あの二人は自分の力だけで十分志

望校を突破できる学力だつてのに」

「意外だな、アンタそこまで見てるのか」

「これでも教師だからさね」

肩をすくめるババア。

俺は葉巻の灰を落とすと、ソファアの正面に座る彼女へと話しかけた。

「それじゃ、ようこそいるりちゃん。欲望と裏切り渦巻く裏の世界

へ」

「……………え？」

まだイマイチ状況を理解できてない様子で、いるりちゃんは首をひねった。

葉巻をもう一度くわえて、俺はゆっくりと煙を吸い込む。

「じほっ」

「結局むせてんじゃないかい」

ババアの言葉に胸を深く抉られながら、俺はいさぎよく葉巻をポケットに直す。

「どの辺りがいさぎよいのか教えてくれないかねえ？」

「地の文にツッコまないでください」

仕方なく葉巻をテーブルの上に戻し、俺はいるりちゃんに向き直る。

「それで、いるりちゃん。俺に協力してほしい」

「……………え、え？」

俺はずいつと身を乗り出し、いるりちゃんの瞳を見つめる。

「いい？ 父さ 竹原教頭は、俺たちの敵だ。学園の転覆を狙ってる」

「ッ、学園の転覆!？」

驚いたようにいるりちゃんが声を上げる。

「ああ。学園長の失脚を起こし、この学園をつぶす……それが教頭の目的らしい」

目を見開くいるりちゃん。

「けど、そんなの、一体どうやつ……て……」
「気づいたみたいだね」

さすがは高橋女史と同じレベルの天才だ。
え、なんでいるりちゃんに勉強を頼まなかったのか、って？

……いや、あの日(13, 14章参照)以来、霧島といるりちゃん、顔を合わせる度にすさまじいオーラを放ってるんだよ……なんていうかこう、世紀末救世主的な。

怖い。放っておいたら世界の命運を懸ける戦いが始まってしまっ
そうで。いやそういう小説じゃねえからこれ!

「……『試験召喚システム』」

「ゴング」

その通り。この最新式のシステムを試験的に導入している以上、この学園は世間の風評に敏感かつ弱い。

「大方、召喚大会で教頭に抱き込まれた生徒が優勝し、観客の前で白金の腕輪を暴走させれば――」
「召喚システムは欠陥品扱い、その開発者である学園長の立場もなくなるってわけね」

俺の言葉を引き継ぐいるりちゃん。是非お嫁にほしい人材だ。結婚してください。

「……こ、こちらこそ……ふ、不束者ですが、よろしく、お、お願いします……」

なぜか顔を真っ赤にしながら、いるりちゃんが何やら言ってきた。まさか心読まれた？

「……どうでもいいけど、学園長室でいちゃいちゃするのは止めてくれないかねえ」

机に頬杖をつきながら、学園長が何か呟いた。しかし視線は窓の外。どうかしたのだろうか。

「で、いるりちゃん。俺に協力してほしい」

俺に課された任務は、教頭サイドへの妨害とあちらからの妨害へのけん制。

要するに竹原教頭を抑えてろ、ってことだ。

「わ、わかったわ」
「本当に？」

意外だな。ここまでスムーズに協力を決めてくれるなんて。こちらとしても戦力増加は望ましい

「そ、それで、子供は2人ぐらいがいいかしら？」

「はいダウト。何それ？ 何の話？ どっからでてきたのそれ？」

「……結婚式は誰も知らない、山奥の協会。そこで二人はそつと口付けを交わして……」

「もしもーし？ 生きてる？ ……3つ数えて戻ってこなかったら姫路は俺の嫁。はい3, 2, 1！」

「ハッ！ 私は今まで何を！？」

いるりちゃん帰還。

「……それで戻ってくるのかい」

呆れたようにため息をつくババア。

しかしすぐに表情を引き締めると、学園長は両手をあごの前で組んだ。

「この件に関しては、現場での指揮を有野悠夜に託す」
「了解した」

俺も同様に真剣な表情をして、ポケットに葉巻を押し込む。

「って何盗ろうとしてんだい」

「気のせいでしょう」

二人からの視線が痛い。

俺はこの場を誤魔化しきるため、とりあえず学園長室のドアの所まで歩いていく。

そして勢いよく振り返ると、口を開いた。

「俺は教頭を叩く、徹底的にな！」

残念なことに教頭はサイド3ではない。

そのまま勢いで退出。廊下を疾走。べ、別に急に恥ずかしくなつたわけじゃないんだからね！

そんな風にして立ち去つた俺だったが、学園長室の中で

『どうして、あんなことを言つたんでしょ』

『……竹原教頭つてのは、あのジャリを育てた男だからねえ。父親みたいなもんなのさ』

『ッ……それじゃあ、悠夜君もつらいはずじゃ』

『それを誤魔化すために、あんなこと言つたんだろうねえ』 不
正解

こんなやり取りがあつたとは、知る由もなかったのだ。

時は経って、高橋先生宅での合宿6回目の朝。

俺はパンツ一丁で正座させられていた。

「それで有野君。あなたは昨晚、何をしましたか？」

冷や汗が頬を伝う。

俺の前にいるのは、ベッドの上でシーツに包まる高橋女史と霧島。二人とも顔が真っ赤である。

そして二人とも全裸。シーツの隙間から白い柔肌が見えていてなんと目の毒……もとい、保養である。眼福眼福。

「どこ見てるんですか？」

「申し訳ありません」

すぐさま土下座。今の俺に人権などない。

だって、二人ともに手を出してしまったのだから。

ちなみに霧島は当然だったが、高橋先生も初めてだった。ご馳走様でした。

「……そ、それで」

高橋先生は、顔を真っ赤にしながらも。霧島は無表情のまま、自分の体を眺めていた。まだ白かったり透明だったりするナニで汚れているのだが。

「せ、せ、せ……」

せ……センチメンタルジャーニー？

次に出る言葉を予想しながら、俺はぐっと拳を握った。

「せ、責任は……取ってもらいますからね？」

そう言って首まで赤くして俯く高橋先生があまりにも可愛く、その場でもう一度イタしてしまったのは、まあ笑い話だ。

〈異性関係編〉 第27章 霧島翔子&高橋洋子(裏) (後書き)

あるえー？ 霧島はいいとして、なぜに高橋先生まで犠牲者に？

残念なことに、悠夜君は恋愛原子核を持っていません。

なので、この調子でハーレムメンバーを増やしていても、いずれは関係が壊れます。

ていうかバッドエンド確立99%です。

まあ、トゥルーエンドにたどり着くまでには回収すべきイベントが大量にありますから。

ではではこの辺で。感想・評価待ってます！

〈清涼祭編〉 第28章 オリ主の殆どが料理できるっていつ謎(前書き)

連続投稿です。一気に清涼祭編へ突入。

《清涼祭編》第28章 オリ主の殆どが料理できるっていう謎

「……坂本」

「悠夜か。どうした？」

「『如月ハイランド』って知ってるか？」

「ああ。いま建設中の巨大テーマパークだろ？ もうすぐプレオープンって話の」

「とても怖い幽霊屋敷があるらしい」

「廃病院を改造したっていうアレか？ 面白そうだよな」

「日本一高い観覧車とか」

「おお、相当デカいみたいだな。聞いた話だけでも凄そうだ」

「世界で三番目に早いジェットコースターも」

「速い上に色々な方向を向いたり、ぐるぐる回ったりするってヤツか。どんなモンなのかかわからんが、考えるだけでワクワクしてくるな」

「……それで、今度の『召喚大会』に賞品としてプレオープンチケットが出されるらしい」

「……あの入手困難なチケットがか？」

「ああ」

「……翔子、死ぬ気で取りに行くだろうな」

「そこでだ、坂本。俺に協力してくれ」

「だが断る」

「あ、もしもし？ 坂本が吉井と一緒に『如月ハイランド』に二人

つきりで行こうって……」

「や、やめてくれ悠夜！ 最近ただでさえそんな感じの噂が流れてるんだ！ これ以上勘違いされたら俺はもう」

「安心しろ、俺はそこまで鬼じゃない」

「そうか。それは良かった」

「電話の相手は島田だ」

ダツ（坂本が逃げ出す音）

ガシツ（現れた島田が坂本の襟を掴む音）

ズルズル（坂本が島田に引きずられていく音）

「安心しろ、骨は拾ってやる」

「この鬼畜めっ……！」

「違うぞ坂本。そういう時は『今日の俺は、阿修羅すら凌駕する存在だ！』と叫んで島田を振り払うんだ」

「つまり悠は、ウチが阿修羅だと遠まわしに言いたいわけね？」

「滅相もございません」

清涼祭初日。我らがFクラスの教室は、廃屋から小綺麗な喫茶店へと超進化を遂げていた。

「すごいな、吉井。あの豚小屋がこんなにも変わるとは思わなかつ

たぞ

「僕としては悠夜の口の悪さがこんなにも変わらないとは思わなかったよ」

失礼な。お前とは違って頭は悪くないんだよ。

俺はすぐそばのテーブルに手を置く。クロスをそつとめくると、下から姿を現すのは毎度おなじみの汚いみかん箱。

「これは木下秀吉が作ったのか？　すごいな」

「ええ、なんていうかこう、手際よくテキパキと」

尊敬の目で木下秀吉を見る姫路。なるほど、このクロスは演劇部の小道具か。どうりで綺麗だと思った。

「部屋の方は完璧パーフェクトだな。後は厨房だが」

「……………飲茶ヤムチャもパーペキ」

「「おわっ」」

若干死語と化しつつある台詞とともに登場したのは、厨房班リーダー土屋。

突然背後に現れるもんだから、吉井と同じように声を出してしまった。

「土屋、厨房は大丈夫か？」

「……………味見用」

そう言つて土屋が差し出したのは、胡麻団子。陶器のティーセットとあいまって、高級感あふれる仕様だ。

「食べていいんですか？」

姫路が俺の横から団子を覗き込み、つばを飲み込む。

「ははっ、姫路は食いしん坊だな」

「なっ！　そ、そんなことないです！」

顔を赤くして叫ぶ姫路。ムキになっていて可愛い。

俺は団子を一つ手に取ると、温かいうちにと　姫路の口の中に
放り込んだ。

『！？』

「あ……………」

一瞬真っ赤になった姫路だが、すぐにもぐもぐと団子を咀嚼する。

「お、美味しいです！」

「本当か？　どれどれ……………表面はカリカリで中はモチモチ、食感もよし。甘すぎず、だからといって堅苦しい味でもない　及第点だな、土屋」

「……………悠夜には遠く及ばない」

その言葉に、みんなが意外そうに俺を見た。

「へえ、そんなに悠夜のもって美味しいの？」

「……………これ」

土屋がもう一つ、ティーセットを取り出した。
その上に乗っているのは、同じく胡麻団子。
楊枝で一つを刺すと、吉井はひょいと頬張る。

「どれどれ……表面はほどよくカリカリだが柔らかく、中はモチモチだがトロリととろける食感。味も甘みを絶妙に抑えていて、デザートでなく飲茶であることを追求しているね……」

「あ、アキ!? 目がトリップしてるけど大丈夫!？」

「……………料理漫画風の解説」

良かった。好評のようだ。
……………問題は。

「どうだ土屋、余ってる最後の一つ、お前が食べないか？」

「……………作る側は食い意地を張らない」

「いやいや、実際に食べてみなきゃ分からないことがあるだろう？」

「……………なら悠夜が食べるべき」

「遠慮するな」

最後の団子を押し付けあう俺と土屋。
他の人たちは不思議そうにそれを見ていたが、だんだんと吉井と木下秀吉の顔が青ざめていった。

「ま、まさか」

「あの兵器じゃというのか……………!？」

すでに兵器扱い確定である。間違っではないが。

「うーっす。戻ってきたぞー」

と、そんなところに坂本……………否、生贄が戻ってきた。

「どうだ坂本、団子最後の一つ。お前のためにとっておいたんだぞ」

「ん？ マジか。サンキュな。どれどれ？」

「……たいした男じゃ」

「雄二。君は今、最高に輝いているよ」

「案ずるな。骨は拾ってやるさ」

口々に坂本を褒め称える俺たち。土屋に至ってはすでに涙を流していた。

「お前らが何を言っているのかわからんが……ふむふむ。ごつごつとした表面が歯を削り、噛み砕いた中身はネバナバと歯と舌に絡みつく。甘すぎず、辛すぎる上に苦すぎる味がなんとも言えない嘔吐物感をかもし出し　んごぱっ」

命という名の花が、また一輪、散っていった。

「　坂本雄二艦長に、敬礼！」

『（ビシッ！）』

そろって敬礼する俺とFクラス男子。ありがとう坂本。君の事は忘れない、多分。

《清涼祭編》 第28章 オリ主の殆どが料理できるっていう謎（後書き）

久々のギャグ。これがバカテスってやつですよ。

ところどころ悠夜君の存在によって、会話が変わっています。

召喚大会は次回から。

《予告》

召喚大会開始！

悠夜と霧島の二人は、1回戦で久保利光&佐藤美穂という強敵と戦う。

一週間弱の、高橋家での成果を見せることはできるのか！？

「見てろ。これが俺の^{フルバースト}全力全開だ」

次回予告は2割ほどが嘘で出来上がっています。ご注意ください。

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力ください

『あなたが今欲しい物はなんですか？』

姫路瑞樹の答え

『クラスメイトとの思い出』

教師のコメント

成程、お客さんの思い出になる様な、そういった出し物も良いかも
しれませんね。

写真館とかも候補になり得ると覚えておきます。

土屋康太の答え

『取り消しHな本 成人向けの本』

教師のコメント

取り消し線の意味があるのでしょうか。

吉井明久の答え

『カロリー』

教師のコメント

この回答に、君の生命の危機が感じられます。

有野悠夜

『タイムマシン』

教師のコメント

やり直したいことでもあるのでしょうか。

《清涼祭編》 第29章 オリ主の台詞にはやたらとルビが振られる謎

「……それで、坂本。生きてるか？」

さすがに友人を殺すのは忍びないので、とりあえず生死を確認。

「ふっ。何の問題もない」

床に突っ伏したまま、坂本は返事をしてきた。

「あの川を渡ればいいんだろう？」

「ご臨終だ」

俺は白い布を遺体に被せる。遺族の元には、清涼祭が終わってから届けよう。

323

「ゆ、雄二！ その川は渡っちゃだめだ！ ていうか悠夜も手伝ってよ！ このままじゃ、雄二が死んじゃう！」

「なるほど。だが断る」

「え？ あれ？ 坂本君はどうかしたんですか？」

と、俺たちが騒いでいる間に姫路と島田が戻ってきた。ここまでトリップさせるとは、かなり期待できる。

「問題ない。足が攣っただけのようだからな」

「そうそう。おい、ゆーじー、おきろー」

「生きるの間違いじゃろ」

「ギ スの呪いだな」

「……そういえばお主は白兜派じゃったな。なぜ紅蓮のかっこ良さ

「が分からんものか」

俺と木下秀吉がアニメタで盛り上がる中、吉井は必死に心臓マッサージを施す。こうなると生死は五分五分だな……仕方ない。

「六万だと？ バカを言え。普通渡し賃は六文と相場が決まって

」

「起きろ（ゲシッ）」

「ごぶっ ハッ！？」

キックによつて蘇生成功。やはりショック療法は人類が生み出した医学の至高だ。

「坂本、足が攣ったんだよな」

「足が攣った？ バカを言うな！ あれは明らかにあの団子の

」

「もう一つ食わせるぞ」

「足が攣ったんだ。運動不足だからな」

坂本が頭の回転の速い奴で良かったよ。さすがに開店前から殺人事件が起きてたら、客が来なくなっちゃう。

（……明久に悠夜、いつかキサマらを殺す）

（……上等だ。殺られる前に殺つてやる）

（……いいぜ。死合おうじゃねえか）

（（謹んで遠慮させていただきます））

薄っぺらい笑顔を顔に貼り付けてのやり取り。こんな俺たちは仲良し三人組……とは言えないよなあ。

「ふーん。坂本ってよく足が攣るのね？」

「ほら、雄二って余計な脂肪がついてないでしょう？ そっいう身体って、筋が攣りやすいんだよ。美波も胸がよく攣るからわかるとぐべあっ！」

「……俺が手を下すまでもなかったな」

「まったくだ」

吉井轟沈。こいつって島田に対しては自爆率高いな。

「ところで、雄二は何処に行っておったのじゃ？」

木下秀吉がそれとなく話題を逸らす。

「ああ、ちよつと話し合いにな」

坂本にしては珍しく歯切れの悪い返事だが、実は学園長室に行つて試験科目の指定をしてきたところだ、なんて言えるはずもない。

「そうですか。それはお疲れ様でした」

姫路の信じきつたような言葉が坂本の心を抉る。あ、ちよつと顔をしかめた。

「いやいや、気にするな。それより、喫茶店はいつでもいけるな？」

「バッチリじゃ」

「……………お茶も飲茶も大丈夫」

姫路の胡麻団子、もとい御魔墮酬さえなければな。

「よし。少しの間、喫茶店は秀吉とムツツリー二に任せる。俺は明久と召喚大会の一回戦を済ませてくるからな」

「じゃ、俺も行くか」

かばんを厨房の奥に投げ込んで、俺は軽く手首を振る。

「あれ？ アンタたちも召喚大会に出るの？」

「え？ あ、うん。色々あってね」

「俺もだ。本当に色々あった」

学園長からチケットのことについては嚴重に口止めされているからな。……まあ本当の目的は腕輪の回収なんだけど。

ちなみに俺は吉井たちのサポートとして、純粹に高得点の奴らを潰すために出場する。

もつとも、従う気など皆無だがな。

「もしかして、賞品が目的とか……？」

「ああ、まあな」

「うん。一応そついうことになるかな」

と、ここで島田が腰を落とし攻撃の態勢を取る。姫路も戦闘モードになり、殺気を叩きつけてくる。……なぜか俺に。

「……誰と行くつもり？」

「有野君。誰と行くこうと思ってたんですか？」

「こ、これはヤバイ！ まさか吉井の殴られ役が一部俺にシフトしているのか！？」

「明久は俺と、悠夜は翔子と一緒に行くつもりなんだ」

島田と姫路が驚く。無理もない。

「何言ってるのさ雄二!？」

「俺も初耳だぞ坂本！」

くっ、なんとという大嘘だ。

どうやらこいつとは白黒つける必要があるらしい。

「明久はまだしも俺の方は明らかにおかしいだろう！俺は霧島から逃れるために」

「おっと時間だ」

「キサマアーツ！」

何だこの展開。嫌がらせ？

「……くっ、いつか決着をつけてやるからな、坂本！」

吉井を連れ立って歩いていく坂本の背中に罵倒を浴びせながら、俺も召喚大会の特設ステージへと歩いてった。

召喚大会第1回戦、Bブロック第5試合。

霧島と合流した後、俺は特設会場にいた。

「よりもよってお前たちか……」

「すみませんが、全力で勝たせてもらいます」

「いくら代表が相手でも、容赦はしませんよ」

「……悠夜、油断しちゃダメ」

相手は久保利光と佐藤美穂。学年3、4位コンビだ。確かに、普通の学生ならこいつらを相手にした時点で諦めるだろう。

だがしかし、俺と霧島のコンビが負けるはずなどない。

これは油断でも慢心でもなく、当然。

「行くぜ、佐藤。容赦はしないってのはコッチのせりふだ」

「ハッ、吼えましたね有野君」

闘る気まんまんの俺と佐藤。こいつもチケット狙いか。

「優勝して、絶対に有野君と幸せに……！」

「……絶対にさせない……！」

なぜか霧島までもが燃え出した。

俺は久保と視線を合わせ、肩をすくめる。

「で、では、初めてください」

数学担当で、立会人を務める木内先生の言葉と同時に、佐藤と久保が同時に動く。

「「^{サモン}試獣召喚！」」

久保の召喚獣は、二振りの大鎌を構えた全体的に落ち着いた色調の召喚獣。

一方で佐藤が呼び出したのは、鎖鎌を手に持つネイティブアメリカン風の衣装をまとった召喚獣だった。

《Aクラス 久保利光 & Aクラス 佐藤美穂
数学 402点 389点 》

400点越えをした久保の召喚獣の腕には、腕輪がある。
二人とも平均をはるかに超える得点 だが！

「行くぞ、霧島」
「……うん」

コクリとうなずく霧島。
目の前に強敵が立ちふさがろうとも、まったく怖気づかない。本
当、いい女だよ。

……よく考えると、そのいい女をキズモノにしたのは俺なんだよ
なあ。

思い出すだけで顔が赤くなる。霧島はあの日から一夜明けたら、
もう普段どおりになっていた。
そのポーカーフェイスを分けてくれよチクシヨウ。

「^{サモン}試獣召喚」
「^{サモン}つと、試獣召喚」

慌てて俺も召喚獣を出す。
そして、点数が表示された。

《Fクラス 有野悠夜 & Aクラス 霧島翔子
数学 574点 512点 》

我ながら無茶苦茶な点数である。しかし後悔はしてない。

「さあ、せいぜい死合おうぜ……？」 スタート・アップ 『透過』！」

……『掌握』」

俺と霧島の召喚獣が、同時に腕輪を発光させる。

漆黒の召喚獣が掻き消える。無論、俺の腕輪の効果だ。

そして、もう一方、霧島の召喚獣は、手にした日本刀を地に突き立てた。それと同時に、久保と佐藤の召喚獣の動きが止まる。

「なっ!？」

「一体何が!？」

霧島の腕輪の能力は『掌握』。対戦相手の召喚獣を10秒間だけ手中に収めるといふ最悪の腕輪だ。

無論、その召喚獣の武器で自身を貫くこともでき、タイマンで使われたら勝ち目がない。

といつても使用までには30秒ほどの精神統一や相手の正確な位置などを把握していなければならぬ。その上自分の召喚獣とは別の動きを行わなければならないので、限界を超えた集中が必要である。

さすがに3体の召喚獣を同時に操るのは無理なので、霧島には何もさせない。

何もさせない、つまり相手は何もできない。

「『エンド・アウト透過終了』。……見てろ。これが俺のフルバースト全力全開だ」

武器選択、シップ・オブ・ザ・ヤマト『大和型戦艦』

瞬間、空が暗転した。

上空に突如現れた、巨大な戦艦。それは浮いていた。

「……規格外」

「お褒めに預かり光栄だな」

佐藤も久保も木内先生も、口をあんぐりと開けて呆けている。

「46センチ主砲装填、15・5センチ副砲装填、25ミリ機銃装填、12・7ミリ高角砲装填 完了」

その『大和』が、上下を反転させる。バレルロール。それを終えるころには、砲口という砲口が、佐藤と久保の召喚獣に狙いを定めていた。

万有引力の法則にならって落下する砲塔を点数を消費して無理やりにつなぎとめ、主砲など仰角に無理のあるものはこれまた点数を消費し設計を捻じ曲げ、全砲口を対象へ突きつける。

「ファイア全弾発射！」

轟音と爆炎が、辺りを覆いつくした。

《清涼祭編》 第29章 オリ主の台詞にはやたらとルビが振られる謎（後書き）

大和は趣味です。まったく自重してないんだぜ！

学園祭の出し物を決める為のアンケートに御協力ください

『喫茶店を経営する場合、制服はどんなものが良いですか？』

土屋康太の答え

『スカートは膝上15センチ、胸元はエプロンドレスの様に若干の強調をしながらも品を保つ。色は白を基調とした薄い青が望ましい。トレイは輝く銀で照り返しが得られる位のものを用意し、裏には口ゴを入れる。靴は5センチ程度のヒールを……』

教師のコメント

裏面にまでびっしりと書き込まなくても。

吉井明久の答え

『ブラジャー』

教師のコメント

ブレザーの間違いだと信じています。

有野悠夜の答え

『シンプル・イズ・ザ・ベストでメイド服。』

そもそもメイド服というのはあくまでメイドの象徴であり、メイド服そのものに萌えている者はメイドをまったく理解していない。メイドとはご主人様に健気に仕えるからこそ魅力的なのであって、胸元の開いたメイド服はただの出来損ないだしミニスカメイドは滅

べばいい。メイド喫茶も近年はメイド服を楽しむ場と化しつつあり、本物のメイドは絶滅の危機に瀕している。そこでクラスの出し物とはいえ、メイド教育を一から叩き込めば俺の……ではなく理想のメイドが完成する。日本のメイド業界を救うためにもメイド服を採用したほうがいい』

教師のコメント

なんとなく情熱は伝わりました。……後で職員室に来るように。

姫路瑞樹の答え

『メイド服』

霧島翔子の答え

『メイド服』

木下優子の答え

『メイド服』

佐藤美穂の答え

『メイド服』

教師のコメント

期待に応えたいのは分かりますが、紙が破れるほど筆圧をこめなくても。

島原いるりの答え

『メイド服』

高橋洋子の答え

『メイド服』

教師のコメント

貴方達は何をしているんですか!?

坂本雄二の答え

『シヨーツ』

教師のコメント

シヨールの間違いだと信じています。

《清涼祭編》 第30章 オリ主が傷つくと周囲のヒロインが異様にキレル謎

「勝ってきたぞ」

「……どう考えてもオーバーキル」

意気揚々と2-Fに戻ってきたが、明らかに怯えられた。

「いや、悠夜？ さっきのアレ、何？」

「何って……戦艦大和だけど？」

大艦巨砲主義は日本の夢です。

「マジでできたねえ机だな！ これで食い物扱っていいのかよ！」

「それにしても霧島も大概反則だな」

相手の動き封殺とか鬼畜過ぎる。

一対一のタイマンだったら、相手の動き乗っ取りってから切腹というアホみたいなコンボしてくるからヤダ。高橋家で俺の召喚獣の首が何度吹っ飛んだことか。

『うわ……確かに酷いな』

『クロスで誤魔化していたみたいね』

『学園祭とは言っても、一応食べ物のお店なのに……』

って流石にマズいな。このままじゃ営業に支障が出ちまう。最悪姫路の転校は避けられなくなるけど……ハッ、このクラスがこれ位でくたばると思うなよ？

「坂本、お前はアフターケアを頼む。あの二人は俺が対処してくる」

「……分かった。おい秀吉、ちょっと用意してもらいたいものが……」

俺は制服を正すと、未だ騒いでいる坊主とモヒカンの元へ向かった。

「お客様。この喫茶店の代表代理の有野です。何かご不満な点でもございましたか？」

恭しく頭を下げながら、俺は努めて責任者ぶる。確か原作では演劇部のテーブルが利用されていたはず。とりあえず時間をかければ、殴り飛ばす必要もないだろ。

そう思っていた時期が、俺にもありました。

「あアン！？ 全部ご不満だっつーの！」

突然突き飛ばされ、尻餅をついた俺。

坊主の先輩 確か夏川だったか が、俺の胸板を踏みつけてくる。モヒカンの方はしゃがみこんで、俺の顔に覆いかぶさるような姿勢。

「それで、責任者さアン？ どう弁償してくれるんですかねエ？」

「なあ……あれ、いくらなんでもやりすぎじゃないか？」

『ああ。暴力沙汰もいいところだろ』

周囲にざわめきが走っている。ていうかこれ明らかに暴行でしょ。誰か助けようよ。

「お客様、ひとまずその足をおどけになられてください」

「うつせえんだよ、黙れ」

モヒカンに顔面蹴り飛ばされた。

『『『 ブチッ!』』』

キレた。俺じゃなくて、色んな人々が。

「お客様、当店の責任者に何か御用でしょうか？」

「ん？ 何か用って ゴペツ！」

姫路が登場と同時に坊主を殴り飛ばす。開放された俺はすぐさま立ち上がるが、すでに戦況は決していた。

「……悠夜の顔に傷をつけた。極刑。死刑。大喝采。」

「ちょッ、それなんか違うううぎやああああああああああ
!?!」

モヒカンが霧島にアイアンクローで持ち上げられる。うわ、霧島強工。

「お、おいっ!？ この喫茶店はこんな暴力を振るうウェイターばかりなのかふうっ!」

「邪魔者は強制排除。これが当店のルールですから」

笑顔で坊主頭に鉄拳を振るういるりちゃん。頬についた返り血は目の錯覚だと思いたい。

結果、6秒弱で常夏コンビ（坂本命名）は撃沈され、裏のゴミ捨

て場に廃棄された。

『流石にこれじゃ、食っていく気はしないな』

『折角美味しそうだったんだけどね』

『食ったら腹壊しそうだからなあ』

つたく、あの二人のせいで評判がガタ落ちだ。

と、客が一人席を立つ。一番最初に立ち上がったのは 竹原教頭。

「やあ悠夜君。営業の方の調子はどうかな？」

「上々ですよ。どっかの誰かさんが妨害してくれるまではね」

空気が剣呑なものに変わった。周囲のウェイターも、他のお客さんも、じつと俺と竹原教頭の会話に耳をすましている。

「……貴方の思い通りにはさせない」

「できるかい？ 君に、有野悠夜に」

「絶対防ぐ、守る。それだけだ」

その言葉に、竹原教頭は笑う 否、嗤う。

嘲るような口元の歪み方に、思わず俺は眉間にしわを寄せた。

「なるほどねえ。……育ての親を裏切るわけだ、君は」

『『『』』』』 ザワツッ！』』』』

そつだ。俺はこの人を裏切ることになる。

育ててくれた、笑顔をいっぱいくれたこの男を 父さん、を

「 そんなこと知るか。俺は貴方を叩き潰す」

「できるものなら、やってみるんだね」

それだけ言って、竹原教頭は立ち去っていった。

「……お客様。お騒がせして申し訳ありませんでした。こちらの手違いでこのようなテーブルを暫定的に使っておりましたが、たった今本来のテーブルが届きましたので、ご安心ください」

なんか俺を見る目が優しい。

チクシヨウ、なんか腹立つんだけど。

そこで俺は吉井と坂本がテーブル調達に向かうのを見て、お客様の方の方に視線を戻すと、できうる限りの笑みを浮かべた。

「 ゆっくりして行ってね! 」

鼻血が10ほど舞った。

第2回戦まで、喫茶店で接客（主に女性の）をさせられた俺は、ようやく特設ステージにたどり着いていた。現地集合と打ち合わせしていた霧島はすでに到着している。

「相手は……お前らか」

「まったく、ワシらも運がないのう、姉上」

「バカ、何言ってるのよ。ここで勝たなきゃ……悠夜と幸せに……」

「……させない」

相手は木下姉弟。姉のほうはさっきから何かブツブツと呟いていて危ない人にしか見えない。

「科目は英語です。準備はよろしいですか？」

「俺はいつでもどうぞ」

「……かまわない」

俺は手首を軽く振って、準備を整える。

「かまわないわ」

「それじゃあ、始めるとしようかのう」

あちらも準備はできたらしい。ならば。

「それでは、試験召喚大会二回戦を始めてください」

「『試験召喚！』」

「……試験召喚」

姿を現す4体の召喚獣。

なぎなたを持った、木下秀吉。

西洋風の鎧に突撃槍ランスを構えた木下優子の召喚獣。

霧島の召喚獣は、いつも通り日本武者。

そして俺の漆黒の召喚獣。武装は

「武器選択、『アサシンセット暗殺道具』ッ……」

黒いコートの中に、大量の暗器などを詰め込んだ最も使い勝手の良い装備。

《Fクラス	有野悠夜	&	Aクラス	霧島翔子	V S	Aクラス
木下優子	&	Fクラス	木下秀吉			
英語W	698点			512点		
376点			86点		》	

「行くぞ、木下」
「来なさい！」

小手調べに毒針を投擲するも、鎧にはじかれる。あちらは大して気にすることもなく、ランスを構え突進してきた。

「当たると思うな」

小太刀で切っ先を逸らしつつ、俺はすれ違いざまにもう一本の小太刀を抜刀し切りつける。が、強固な鎧の前にまたも弾かれた。

「チツ、さすがに威力不足か」

あの鎧は脅威だな。だが

「これならどうだ？」
『スタート・アップ 透過』

姿が掻き消えると同時に、俺は召喚獣を木下の召喚獣の下へ疾駆させる。

「ッ！ ゴビゴビ！？」
『エント・アウト 透過終了』

その漆黒の召喚獣が再び見えるようになった時には、手にした超

小型拳銃『デリンジャー』が、鎧の隙間に押し込まれていた。
引き金を二回引き、ゆっくりと引き抜く。木下の召喚獣はゆっく
りと崩れ落ちていく。

「……遅い」

「激戦じゃったな」

どうやらあちらは終わっていたらしく、日本刀を突き立てられた
木下秀吉の召喚獣が、ステージに横たわっていた。

「勝者、有野・霧島ペアです」

これで二回戦突破。さあ、こっからが本番だ。

〈清涼祭編〉 第30章 オリ主が傷つくと周囲のヒロインが異様にキレる謎（後

最近になってハーレム展開の難しさに気づいた。

高橋先生可愛いよ高橋先生。鞭さえ持っていなければ。

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力ください。

『喫茶店を経営する場合、ウエイトレスのリーダーはどのように選ぶべきですか？』

「？かわいらしさ ? 統率力 ? 行動力 ? その他」

また、その時のリーダー候補も挙げてください。

土屋康太の答え

『「？かわいらしさ」 候補……姫路瑞希&島田美波』

教師のコメント

甲乙つけがたいと言ったところでしょうかね。

吉井明久の答え

『「？かわいらしさ」 候補……島田美波』

教師のコメント

意外な回答に驚きました。いつの間にか島田さんと大分仲良くなっていたようですね。

有野悠夜の答え

『「？その他（怖いもの見たさ）」 候補……坂本雄一』

教師のコメント

ハイリスク・ハイリターンと言いますが、これはどう考えてもノーリターンです。

〈清涼祭編〉 第31章 オリ主はツツコミを大抵心の中で済ませる謎

「ただいまー、って……」

「遅かったな吉井。お前らがいない間にこの有様だ」

一足先に喫茶店に戻ってきていた俺は、肩をすくめて教室を見回した。ちなみに霧島はAクラスの方に戻っている。確かメイド喫茶だったか。

「土屋、こメイド喫茶はうなどんな風だった原因は？」

「……恐らく店の外での風評だと思われる」

「チッ、あの坊主とモヒカン一枚百円、特別を3枚頼むだな」

「……多分了解」

野口英世を一人と100円硬貨を土屋に握らせつつ、俺たちはさも議論しているかのように振舞う。

「……お主ら、本当に器用じゃのう」

「何のことだ？」

「……（フルフル）」

とぼける俺と否定のポーズを取る土屋。木下は大きいため息をついて、吉井に問いかけた。

「ところで明久、雄二の姿が見えんか？」

「うん。トイレに寄ってくるってさ」

何やら二人が話し始めた時、外から声が聞こえてきた。

『お兄さん、すいませんです』

『いや。気にするな、チビッ子』

『チビッ子じゃなくて葉月ですっ』

坂本と小さな女の子の声が聞こえてきた。

これは……島田葉月か。特に知り合う機会もなかったし、このイベントはスルーさせてもらおう。

『んで、探しているのはどんなヤツだ？』

扉が開き、坂本が姿を現す。島田葉月は、まだ彼の陰になって見えない。

『お、坂本。妹か？』

『可愛い子だな。ねえ、五年後にお兄さんと付き合わない？』

『俺はむしろ、今だからこそ付き合いたいなあ』

Fクラスの皆は女性に飢えているようだ。……なにそれひどい。まっ、すでに二人の女性を手籠め（表現に一部誇張があります、ご注意ください）にしている俺は圧倒的な勝ち組だがな！

懐から文庫本を取り出し、窓際で読みふける。

『あ、あの、葉月はお兄ちゃんを探しているんですっ』

『お兄ちゃん？ 名前はなんて言うんだ？』

『あう……。わからないです……』

『家族の兄じゃないのか？ それなら、何か特徴は？』

坂本の問いに、少女が答える。

『えっと……バカなお兄ちゃんでした！』

人類が持ちうる特徴の中で、恐らく最低ランクだろう。

『そうか……沢山いるんだが?』

そして坂本の口の悪さも最低ランクだ。

『あ、あの、そうじゃなくて、その……』

『うん? 他に何か特徴があるのか?』

『その……すつごくバカなお兄ちゃんだっただんです!』

『『吉井だな』』

さめざめと涙を流す吉井。すまんが俺もお前だと思っ。

「まったく失礼な! 僕に小さな女の子の知り合いなんて」

「あ、島原先生のスカートがめくれてる」

「何だって!?!」

俺が指差した方に音速を超えた速度で振り向く吉井。コイツ、後で殺す。

「あつ、バカなお兄ちゃんだっ!」

振り向いた先には島田妹。ここまでキレイに引つかかってくれると、逆に齒こたえがない。

「き、キミは誰? 僕には小学生の知り合いなんていないよ?」

吉井がこういった瞬間、涙目になる島田妹。

「島田妹。吉井がバカでごめんな。こいつのバカはもう二度と直らないほど深刻なバカなんだ」

「そうじゃな。バカなお兄ちゃんはバカなんじゃ。許してやってくれんかのう？」

ここまでバカを連呼された人間はそうはいないだろう。ていうかいたらビックリだ。コイツ以外で。

「でもでも、バカなお兄ちゃん、葉月と結婚の約束もしたのに」
「……アキ、どういうこと？」

背後に阿修羅を具現し、島田登場。ああ、これがギャグ補正ってやつか。最近シリリアス気味だったから忘れてたよ、こづいこの。

「ちよつと待って！ 結婚の約束なんて、僕は全然」
「ふえええんっ！ 酷いですっ！ ファーストキスもあげたのにっ！」

「アキ、トイレはすませた？ 神様にお祈りは？ 部屋の隅でガタガタ震えて命乞いをする心の準備はOK？」
「明久さらばだ。俺はお前を忘れない」

サラリと見捨てる坂本。涙目で親の敵の如く坂本をにらむ吉井。生徒から幼女暴行犯が出ました、なんて知れたら学園の恥だからな。

「つたく、島田。その辺にしとけ」

「ゆ、悠夜…… やっぱり君は僕の友だ」

「お楽しみ処刑は清涼祭が終わった後だ」

「それもそうね」

「この鬼畜めっ！」

バカが泣いているけど、アーアー聞っこえない。」

「そういえば葉月、ここに来る途中で色々な話を聞いたよ？」

「色んな話……？ 詳しく聞かせてくれないか？」

文庫本を閉じ、島田妹に歩み寄ってしゃがみこむ。視線を同じに合わせると、小さい子は心を開きやすいつて何かの本に書いてた。

「えっとね、中華喫茶は汚いから行かない方がいい、って」

その言葉に、無意識のうちに舌打ちをしていた。

原作通りではあるが、やられて気分のいいのものではない。

「ふむ……例の連中の妨害が続いてるいるんだろうな。探し出してシバき倒すか」

「断言するか」

「例の連中って、あの常夏コンビ？ まさか、そこまで暇じゃないでしょ」

それはどうだろうな、吉井。

あの妨害そのものが連中の仕事だったら、暇とは言えないぜ？

「どうだかな。ひとまず様子を見に行く必要があるな」

「そうだね。少なくとも、噂がどこから流れてどこまで広がっているのかを確認しないと」

下手したらもう学校中に広まっているかもしれない。

もしそうだとしたら手遅れだが……まあ、原作通り姫路と島田の宣伝さえあれば大丈夫だろ。

「お兄ちゃん、葉月と一緒に遊びにいこっ」

ぎゅっと島田妹に手を握られる吉井。いいな、あれが主人公補正
ってやつか。

「ごめんね、葉月ちゃん。お兄ちゃんはどうしても喫茶店を成功させなきゃいけないから、あんまり一緒に遊べないんだ」
「む。せつかく会いに来たのに」

不満そうにする島田妹の頭をなでながら、吉井はやわらかい笑みをこぼす。

……そうか。あれが『主人公』か。俺の前に立ちふさがる壁か。

「それなら、そのチビツ子も連れて行けばいい。飲食店をやっている他のクラスを偵察する必要もあるからな」

「なら、お兄ちゃんと一緒に行こうか」

「うんっ」

天真爛漫という言葉が体現するかのような笑み。癒されるなあ。

「ふむ。ならば悠夜と姫路と雄二も一緒に行くと良いじゃろ。召喚大会もあるじゃろっし、早めに昼を済ませてくると良い」

「そうか。悪いな、秀吉」

「恩に着る」

「いいんですか？ ありがとうございます。木下君」

「いいやつだ、木下秀吉。」

これでパーティーは5人。結構な大所帯だ。

「それで島田妹、さっきの話はどの辺で聞いたのか教えてくれるか？」
「えっとですね……短いスカートを穿いた綺麗なお姉さんが一杯いるお店」

その時俺たちに電流走るッ……！

「なんだって！？ 雄二、悠夜、それはすぐに向かわないと！」

「そうだな明久、悠夜！ 我がクラスの成功のために、（低いアングルから）綿密に調査しないと！」

「ふっ、その通りだ坂本、吉井！ Fクラス（の男子）のために、徹底的にリサーチしないと！」

デジカメ片手に走り出す俺。追走する坂本と吉井。

「アキ、最低」

「有野君、酷いです……」

「お兄ちゃんのバカ！」

背後から浴びせられる言葉も余裕で聞き流すほど、俺の心は狂喜乱舞していた。

《清涼祭編》 第31章 オリ主はツツコミを大抵心の中で済ませる謎（後書き）

予約掲載しようとしたけどめんどかったのでいつも通りいますぐ掲載。

アンケートというか質問。

ハーレムの人数として限界の許容範囲ってどれくらい？

「なあ吉井」

「何？」

「スター反則すぎじゃね？」

「トゲゾーを最終ラップまで温存する君に言われたくないよ」

「それは言えてるな」

「くっ、なんじゃこやつら……悠長な会話をしておるのに操作に無駄がない！」

「……………勝ち目ゼロ」

マ オカートって面白いね。

〈清涼祭編〉 第32章 オリ主が変態的言動をしても周囲が引かない謎

そしてAクラスである。

喫茶店の名前は【メイド喫茶 『ご主人様とお呼び！』】だ。

え、何この名前。客とメイド、どっちがどっち？

「悠夜、大丈夫か？」

「何がだ？」

心配そうに坂本が俺を見る。

「翔子に会うことになると思うんだが……」

「だからどうした。さっさと行くぞ」

そう言うって中に入ろうとした俺の目に、妙な生命体が映りこんだ。

「……………！！（パシャパシャパシャパシャ！）」

指が残像を伴うほどの速度でシャッターを切る土屋。

「おい土屋、何をしているんだ？」

「……………人違い」

手にしたカメラは小型のデジカメ。解像度はそこそこあるので、盗撮には持ってこいだらう。

「どう見ても土屋でしょうが。アンタ何してるの？」

後ろから追いついてきた女子グループが、喫茶店の看板を見上げ

ながら言う。

「……………敵情視察」

「いや、明らかに違うだろ」

「ムツツリーニ、ダメじゃないか。盗撮とか、そんなことをしたら撮られている女の子が可哀想だと」

「……………一枚百円」

「2ダース貰おう　可哀想だと思わないのかい？」

普通に注文してるぞ、吉井。

土屋は吉井に写真を渡し、教室の方に去っていった。いや、どこでプリントアウトしたんだよ。

「悠夜は買わなくて良かったの？」

「生ので見れるからいい」

「リア充弾ける　ハツ、僕は今一体何を！？」

こいつの脳内は予想外に侵食されているようだ。

ちなみに写真には男の足ばかり写っているので興味がない。

…いや、現物を見ることがもできるけどね？　は、ハツタリなんかじゃないぞ！？

「それじゃ、入るぞ。お邪魔します」

俺が一番手でドアをくぐる。そこにいたのはメガネをかけた知的なメイドさん。

「おかえりなさいませ、ご主人様」

「おう、ただいま」

軽いノリで挨拶し返す。

メイドさんこと佐藤美穂は、俺を見て二、三度目をパチクリさせ、顔を真っ赤にした。

「あ、ああああああああああああ有野君!？」

「有野悠夜。客だ客」

そついい捨てて俺は空いてるテーブルに向かって歩き出す。慌てたように吉井たちがついて来た。

「あ、悠夜」

「違うご主人様だ」

木下に話しかけられたので適当にあしらったが、今度は彼女まで首まで赤くして「ご、ご主人様……」と呟いていた。

「……悠夜」

「よっ。次の試合までは休もうぜ」

席に着きながら、近くに来た霧島と言葉を交わす。すると霧島はゴホンとわざとらしく咳をして、背筋を正した。

「……おかえりなさいませ。今夜は帰らせません、ダーリン」

原作で坂本がくらったセリフだった。この前は俺が帰らせなかったのだが、まあいい。やられっ放しじゃ気がすまない。同じテーブルに着席した吉井たちがギョツとしたように霧島を見たが、俺は負けじと口を開く。

「上等だ、一晚中ベッドの上で鳴かせてやる」

吉井が水を噴き出した。

「……優しくしてほしい」

「マジノリするな」

頬を赤らめながら身をくねらせる霧島。美少女じゃなかったら通報しているところだ。

「……では、メニューをどうぞ」

呆気にとられる吉井たちを差し置いて、霧島はメニュー表を人数分配る。

メニューは……ふむ、なるほど。

「霧島の下着は？」

「……ない」

「木下の下着は？」

「ゆ、悠夜！？何を言ってる」

「……あるはずがない」

「佐藤の下着は？」

「あ、有野君のためなら今ここで」

「……却下」

「高橋先生の下着は？」

「……もしもし、警察ですか？」

「すみませんでした」

音速でジャンピング土下座。命は大事です、ハイ。

「ウチは『ふわふわシフォンケーキ』で」

「あ、私もそれがいいです」

「葉月もー!」

女子グループは仲良くシフォンケーキ。

「僕は『水』で。付け合せに塩があると嬉しい」

吉井、それメニュー表にあつたか？

「んじゃ、俺は『モンブラン』と『カップコーヒ』を頼む」
「なら俺は」

「……ご注文を繰り返します」

坂本の言葉を聞いた後、俺に発言する機会すら与えず霧島が注文を読み上げる。

「……『ふわふわシフォンケーキ』を三つ、『モンブラン』を一つ、
『カップコーヒ』を一つ、『水』を一つ、『メイドとの婚姻届』
が一つ。以上でよろしいですか？」
「まったくよろしくないんだが」

と、いつの間にか霧島の横に並んでいた佐藤が口を開く。

「では何をご注文されますか？」

「そうだな、下着込みのメイド服とか」

「かしこまりました。しばらくお待ちください」

そう言って自分のメイド服に手をかける佐藤。

気づいてるかどうかは知らんが、下着とメイド服を脱いだら何も
なくね？ あれ、結構俺鬼畜なこと言った？

「って佐藤さん！？ こんな所で脱いたらダメだよっ！」
「そうよ！ ここにはケダモノが沢山いるのよ！？」

主に俺とかな。

「……………どうしたんだ佐藤。まさか……………ご主人様の言うことが、聞け
ないのか？」

ビクツ、と佐藤の肩が震える。

それを怯えていると受け取ったのか、姫路が俺と佐藤の間に割り
込んできた。

「あ、あんまりです、有野君！ こんなのは、酷すぎます！」

「へえ、俺の言うことが聞けないのか……………なら、お仕置きかな」

「（ビクツ！！）」

さらに震える佐藤。吉井までもが俺の前に立ちふさがる。

「悠夜、いくらなんでもやり過ぎだよ！」

さて、お前らの言い分は分かる。けどな。

「お、お仕置き……………？ ハアハア、ぜひ喜んで……………！」

一瞬の静寂。

『『『 佐藤さあああああああん！！？』』』

性癖露見。さあみんな復唱だ。

「なにこれこわい」

続きはWebで！（キリッ）

《清涼祭編》 第33章 オリ主はなぜか女装が似合う謎（前書き）

「くっ、メタグロス3連発なんて卑怯すぎる……！」

「どくどくだまとピクシーの組み合わせって、割とガチだな吉井」

「あの二人は何をやっておるのじゃ……？」

「……………休憩中」

清涼祭準備期間中の一コマ。

《清涼祭編》第33章 オリ主はなぜか女装が似合う謎

「それで、どうやってあいつらを処刑する？」

ひとまず俺もショートケーキを頼んだ後、大声で喚く常夏コンビをじっと見定めていた。

それぞれケーキを食べているが、視線は坊主とモヒカンに注がれたまま。

「このまま行つて逝かせても、身元がバレるだけだぞ？ ホツケーマスクでもかぶつてチェインソー装備で殺るか？」

「悠夜の勇気が世界を救うと信じて……！ って違う！ チェインソーだつたら死んじゃうよ！」

ネタに走つたな吉井。

俺は肩をすくめると、床下からロケットランチャーを取り出した。

「じゃあ木っ端微塵にするか」

「つて待てえええええ！ 悠夜、お前今どっからそれを取り出した！？」

「H A H A H A、何を言っているんだ坂本。床下からだ」

「有り得ないですよっ！？」

姫路、この世にはギャグ補正つてやつがあるんだ。

「じゃ、逝ってくるぜ」

「字が違つわよ悠！」

「じゃ、炒ってくるぜ」

「あの二人をどうするつもり！？」

木下の言葉に、俺は舌打ちをしながらロケットランチャーを床に降ろす。周囲の客は特に驚いていない。

「って何！？　これがオカシイと思ってるのは僕らだけ！？」

「世界じゃなくて、俺たちがおかしいのか……？」

「間違っていたのは世界じゃない、お前たちの方だ」

坂本の疑問に某チューリップ仮面が如く答える俺。

「霧島、メイド服を一つ頼む」

「……わかった」

「お前の着てる服じゃないからな」

「……わかった」

なぜか残念そうに去っていく霧島。

いや、お前のスタイルがいいのは分かってるから。分かってるどころかじっくり味わったから。

『あの店、出している食い物もヤバいんじゃないか？』

『言えてるな。食中毒でも起こさなければいいけどな！』

『二・Fには気をつけろってことだよな！』

チツ、わざとらしい会話だ。

「姫路に島田、櫛を持ってはいないか？」

ロケットランチャーを意図的に視界から外しつつ、坂本は女子組に声をかける。

「持っていますけど……」

「ちよつと貸してくれ。他にも身だしなみ用の物があれば全部」
「はぁ……」

姫路が上着のポケットから可愛らしいポーチを取り出した。
それを坂本に手渡すと、霧島が戻って来た。

「……悠夜、これ」

「感謝する」

「……貸し一っ」

「だ、そうだぞ坂本」

「わかった。礼として今度悠夜を一日自由にしてい」

「……ありがとう雄二」

「待て坂本。どうして俺が」

俺の言葉など耳に入れず、霧島は嬉しそうに立ち去っていった。

「で、これをどうするのさ、二人とも」

「着るんだ」

「吉井、出番だ」

坂本が俺を見ながら口を開いた。嫌な予感しかしないのでとりあ
えず吉井に投げる。

「何を言っているんだ悠夜。着るのはお前だ」

「なるほど、ロケットランチャー装備のメイドさんか。戦闘メイド
ってか？」

「大丈夫ですよ、悠夜君なら似合いますっ」

そういう問題じゃない、と思った。

男子トイレの中で俺と木下秀吉の二人つきり。

「今こいつに暴行を加えてもバレないかなと思うんだが」

「その時は雄二にもらったこのスタンガン（30万ボルトモデル）が火を噴くぞい」

「スタンガンは火を噴かねえ」

俺どんだけ信用ないんだよ。

「では着させるぞい」

「チツ。好きにしる。ただし……」

はあ、俺もここまでか。

「後悔しても遅いからな」

S i d e A k i h i s a - y o s h i i

「遅いね、悠夜たち」

「本気で秀吉を襲ってたりな」

雄二が何気なくそれを言った瞬間、周囲からすさまじい殺気が押し寄せた。

『襲つ……？ あの变态、男を本気で……？』
『……浮気は許さない』

木下さんと霧島さんが手元のフォークをへし折りながら、背後に赤黒いオーラを滲ませていた。

「ちよつ、雄二！？」

君の軽はずみな言動で親友が生命の危機に晒されているよ！？

「俺は何も知らない俺は何も見てない俺は何も聞いてない俺は何も感じない」

耳をふさいで必死につぶやく雄二。最後の言葉は罪悪感の無さを表しているんだろうか。

と、教室の外から声が聞こえてきた。

『の、のう、悠夜。お主、悠夜じゃよな……？』

秀吉が困惑してる。そんなに女装が似合ってるのかな？
そして次に聞こえてきた言葉は、僕らの度肝を抜いた。

『何言ってるの秀吉君。ボクは有野悠香ゆうかだよつ？』

誰それ？

ガラッ、と開いた扉の先には、メイド服姿の美少女。

「Hi! 明久君、元気してるー?」

「え、え、え?」

紺色のショートカット、綺麗な紅目。

スカートの下から覗かせるアスリートみたいに鍛えられた、けれども細い脚。

「き、君誰?」

結果、僕の口から出た言葉はすごく失礼な質問。

だけどその人は、嫌な顔一つせずに弾けるような笑顔で答えてくれた。

「だーから、ボクの名前は 有野悠香だよっ（はあと）」

だから君誰?

「つて、悠夜!? 何で、ええー……?」

と、いつの間にか近くに来ていた木下さんが呆然と呟く。反応からして、驚きっていうより若干引き気味みたいだ。

「……久々の悠香モード」

霧島さんの言葉に、雄二が頷いた。

「さて悠香。アレの排除、できるな?」

そう言っ指差した先には常夏コンビ。

悠夜……いや、悠香ちゃん(?)は床からロケットランチャーを
拾い上げた。

「OK。別に喫茶店ごとぶっ飛ばしちゃっても構わないんだよね？」

「ちょ、ちよつと待て悠香。そこまでしろとは言ってな」

「答えは聞いてない！」

ロケットランチャーの砲口が坊主頭に定められる。ってヤバイ！

「待つんだ悠夜 もとい悠香ちゃん！ もっと平和的に片付けよ
うよー！」

「何言ってるの明久君！ 悠夜の大切な人たちに酷いことしたんで
しょ？ だつたら天誅だ！」

「だからって重火器を持ち出すことないよ！」

なにこの子こわい。

「むーっ。どうして邪魔するかなー」

そう言って渋々ロケットランチャーを降ろす悠香ちゃん。頬を膨
らませて可愛 騙されるな吉井明久！ この子は男……だとい
なあ……

「……悠香」

と、音も無く霧島さんが悠香ちゃんの背後に佇む。なんか怖い。
今にも頬ずりしながら「……かぁいい。お持ち帰り」とかのたま
い
そっで。

「ここはセクハラで手を打ちましょう」

同様に突然現れる木下さん。ホント怖い。
ん？ セクハラ？

「……うん、分かったよ優子！」

「優子って呼び捨て……ああ幸せ……」

顔を赤らめて自分の世界にトリップした木下さん。事情を知らない人が見たら通報するほどアブナイ表情だ。

「お客様ー。足元をお掃除するので、少々よろしいですかあ？」

スタスタと歩み寄り、上目遣いでモヒカン先輩を覗き込む悠香ちゃん。
やん。

「お、おうっ」

顔を赤くしながら席からどく二人の先輩。坊主頭の方も悠香ちゃんに見惚れてるみたいだ。

「では、失礼しま　ッ……」

と、腰をかがめてどこからともなく取り出した箒でテーブルの下を掃除しようとした時、悠香ちゃんがツルツと滑った。

周囲のお客さん方も見ている中、とっさにモヒカン先輩が突き出した手が吸い込まれるように　悠香ちゃんの右胸に

「し、失礼しました……ッ……」

慌てて背筋を伸ばし、謝る悠香ちゃんだったけどすぐに涙を目じりに溜め、俯いてしまった。

「……悠香。どうかした？」

「あ、先輩……」

ここで霧島さん登場。あ、展開が読めた。

「……悠香？」

「……っつっ、っつううう……」

ボロボロと涙を流す悠香ちゃん。これで痴漢被害者一名の出来上がり。

「え、いや、俺はそのだな……えっと……」

そして一方痴漢容疑者（暫定）。

「そ、そんなつもりじゃくぶっ！」

「……悠香の清纯を奪った。許さない」

慌てて相棒の弁明をしようとした坊主頭の先輩は、天を衝くかのようなアッパーカットの前に轟沈した。

ていうかシチュエーションがシチュエーションなだけに、常夏コンビは言い逃れできない。

「なあ兄ちゃん。確かに、この娘の胸、もみしだいていたよなあ」

「確かにな」

「さすがに見過ごせないわね」

お客さんが次々と立ち上がる。それどころかメイドさんたちも各々得物を手にして殺気を迸らせていた。

「総員……突撃イー！」

『『『りようかああああああああい！！』』』

雄二の掛け声とともに、Aクラスは大多数vs常夏コンビの戦場となった。

結果、4・6秒で常夏コンビ両者逃亡。

S i d e o u t

気がついたら悠夜に戻れた。

トイレの中で、木下秀吉がふうと息を吐く。

「それにしてもお主すごいわ。あそこまで女になり切るとは……」

言い終わる前に、俺は思いっきり壁に拳を打ちつけた。

「いい加減にしろ、有野悠夜……！」

脂汗が床に滴る。

『どうしたの、悠夜。私は貴方で貴方は私じゃない。分かるでしょ？』

頭の中に女の声が響く。

こいつの名前は有野悠夜。そして自称、有野悠香。

『ほらほら、早く行かないとみんな心配してるよ？』

「黙れ……ッ！」

『うわ、怖いよー。私は寝るから。じゃあねっ』

「さっさと失せる！」

声が聞こえなくなる。

呼吸が荒い。早鐘のように打つ心臓がうるさい。

「悠夜、お主……」

心配そうに木下秀吉が俺を見てくる。

「そんな顔するなよ」

「お主、何を隠しておるのじゃ？」

鋭い視線に、俺は肩をすくめた。

「別に何も？俺はそんなに信用が無いか？」

「誰も下の名で呼ばん。つまり信じられる者が少ないというわけじゃない」

凶星だ。

思わず舌打ちをしそうになったが、極力無表情を装って誤魔化す。

「秀吉。これでどうだ？」

「……フン」

俺に真実を語る気がないと気づいたのか、木下　いや、秀吉はため息をついた。

「ワシも難儀な者を友にしたものじゃな」

「そういうなよ。秀吉、可愛い顔が台無しだぜ？」

「なッ……」

顔を赤くする秀吉。

俺はトイレのドアを開きながら、頑張って頑張って、俺が知る限りにおいて最高のキメ顔をする。

「信用できるから、下の名前で呼ぶんだぜ？」（バチーン

ウザやかスマイルにウィンクの組み合わせ。

「　ッ、は、早く行くのじゃ！　皆が心配してある！」

「りょーかい」

さすがにカッコつけすぎた。

心の中でそう焦りまくりながらトイレを出たので、俺は気づかなかったのだ。

「……なるほど、姉上が惚れ込むのも頷けるのう……」

秀吉がそんなことを、赤面しながら呟いていたなんて。

《清涼祭編》第33章 オリ主はなぜか女装が似合う謎（後書き）

まさかの秀吉陥落。

これは予想外だった。

今後の展開

?さらにハーレム増加

?そろそろ止めれ

?ここらでオリ主失踪

さあどねだ！

《清涼祭編》 第34章 オリ主はなぜか喧嘩が強い謎（前書き）

「さてと……夏川君、常村君。失敗は許されませんよ」

「わかってますよ先生」

「こつちだつて将来がかかっているんですからね」

「ならば話は早い。吉井明久と坂本雄二ペアをなんとしても倒すこと。そして……」

「そして？」

「続きは？」

「いかなる相手にも負けないこと。頑張ってください」

《清涼祭編》第34章 オリ主はなぜか喧嘩が強い謎

三回戦は特に知りもしない3年生だったので蹴散らしてきた。

やはり『狙撃銃』^{スナイプ}のフルオート乱射は鬼畜だ。その分点数消費が激しく、古典の点数はほぼFクラスレベルまで消費してしまったが。

「行くよ、『ダーク・アームド・ドラゴン』を特殊召喚！」

「リバースカードオープン、『昇天の黒角笛』！ 特殊召喚を無効化！」

というわけで、がらんとした喫茶店の中で、俺と吉井は絶賛決闘^{デュエル}中だった。

「『豊穡のアルテミス』の効果で1枚ドロ！ 永続罫『人造天使』の効果でトークンを召喚！」

「くっ、僕はカードを2枚セットしてターンエンド」

「吉井、このターンで終わりだ！ 俺は『オネスト』を通常召喚！

『キックバツク』で無効化！ 『人造天使トークン』を召喚！」

「自分のカードにカウンター罫を使った！？」

パーミッションデッキの恐ろしさを刻み込んでやる。

「カウンター罫を発動したことにより、来い！ 『裁きを下さす者ボルテニス』！」

俺のフィールドの天使3体を生贄に、断罪者が姿を現す。

「ボルテニスの効果を発動！ お前のフィールド上の2枚の伏せカードを破壊！」

「ぐうっ！」

「さらに墓地の『シャインエンジェル』と『豊穡のアルテミス』を除外し、『神聖なる魂』を召喚！ ボルテニスと神聖なる魂でダイレクトアタック！」

「ぐわああああああ！」

合計4800ダメージ。俺の勝ちだ。

「……坂本、それで喫茶店の方は？」

「これだけお客さんがいなくなっちゃったんだから、何かインパクトのあることをやる必要があるね」

デッキをケースに入れながら、俺と吉井は辺りを見回す。

空席ばかりではあったが、俺と吉井のデュエルを見に大半のお客さんが俺たちの周囲に集まっていた。

「坂本、何かアイデアはあるか？」

「それなら任せておけ」

そう言っただけ坂本は豪華な刺繍が施された水色と白のチャイナドレスを取り出した。

「なるほど。若干裾が短いような気もするが、これなら確かにインパクトはあるだろうな。これを宣伝用に」

「ああ。コレを 明久が着る」

インパクトがありすぎて心肺停止しそうだ。

「ちよっ……！ お願い、許して！ メイド服の次にチャイナまで着たら、きつと僕はホンモノだって皆に認識されちゃうー！」

「冗談だ。これは秀吉と姫路と島田に着てもらおう」
「ワシが着るのは冗談ではないのかのう……?」

秀吉がチャイナドレスを持ってため息をつく。

「たっだいま〜！ って悠、元に戻っちゃったの?」

「あ……残念です。可愛かったのに……」

「お兄ちゃん。葉月もう一回見たいな〜」

女子グループが戻ってきた。

ほのかに甘い香りがするけど、さては買い食いしてきたな?

「悪いが姫路に島田。クラスの売り上げに少しは貢献してもらおうか」

「み、皆さん……? なんだか目が怖いですよ……?」

「すごく邪悪な気配を感じるんだけど……」

チャイナ片手に、正面に立ちふさがる俺。さり気なく退路を断つ吉井。

「やれ、明久!」

「オーケー! へっへっへ、おとなしくこのチャイナ服に着替え痛みあつ! マジすんませんでした! 自分チョーシくれてました!」

「使えない奴め。ふふっ、悪いが観念するんだな。このチャイナ服に俺の前で着替えぐばあつ! 申し訳ありませんでしたっ! 私めが悪うございました代官殿っ!」

「弱いなお前ら」

殴られた心臓が痛む。女子組よ、ハートブレイクシヨットは3発も同時に叩き込んでいいものではない。リアルに死ぬから。

「店の宣伝と悠夜に興味だ。悠夜はチャイナドレスが好きだよな？」
唐突に話を振ってくる坂本。いや、好きだけど。嫌いじゃないけど。

「俺に嫌いなコスチュームなんてミニスカメイド以外にない！」

「これぞ真理だ！」

「お、お店のためですもんね！ 仕方ないですよね！」

俺の手からチャイナを音速で掠め取る姫路。

「吉井も好きだよな？」

「え、まあ大好 愛してる」

「最高だよお前。」

「う、売り上げのために仕方なく着てあげるわよ！」

「お兄ちゃん、葉月の分は？」

島田だけでなく島田妹まで吊り上げるフラグメイカー。島田妹は割りと必死にチャイナを着たがっている。

「仕方ない。」

「やるか、土屋」

「……………問題ない」

その場に座り込んだ俺たちの手には裁縫セツト。

「行くぞ『寡^{ムツリーニ}黙なる性職者』。血液の貯蔵は充分か？」

「……………輸血パックならある」

超光速で針を動かす俺たち。残像すら伴っている。

「ごめんね。気持ちは嬉しいんだけど、葉月ちゃんの分は数が」

「……………！！（チクチクチクチク）」

「ム、ムツツリーニに悠夜！？ どうしてそんなすごい勢いで裁縫を！？」

「……………俺たちの嗅覚を舐めるな」

「吉井、この世の理はすなわち速さだと思わないか？ 物事を早く成し遂げればその分時間が有効に使える。遅いことなら誰でも出来る！ 20年かければ馬鹿でもウエディングドレスが作れる！ 有能なのは月刊漫画家より週刊漫画家！ そしてこ 亀だ！ つまり速さこそ有能なんだ！ 文化の基本法則ウ、そして俺の持論だあつ！ …………… ああ…………… 2分20秒…………… また2秒、世界を縮めた」

原作よりはるかに早いスピードで完成するチャイナドレス。

「姫路に島田。これを今すぐ着てくれ」

「え？」

俺の言葉に、二人が口をポカンと開ける。

「つまり、チャイナ姿で召喚大会に出てくれてことだ」

坂本の言葉に、ようやく二人は事態を理解したようだ。

「二人とも、頼む」
「僕からもお願いするよ」

吉井と二人そろって頭を下げる。
これも姫路の転校を防ぐため。断じて観衆の前で二人のチャイナ服姿を視姦したいわけじゃない。

「明久、悠夜……。お前らは本当に　チャイナが好きなんだな……」

否定しない。

「もしかして二人とも、私の事情を知って」

「仕方ないわね。クラスの設備のためだし、協力してあげるわ。ね、瑞樹？」

「あ、ハイっ！　これぐらいお安い御用です！」

お安い御用だったら今後も頼んでみようか。

「確かお前らはこれから3回戦だったろ。すぐに着替えて会場に向かってくれ。所属クラスと喫茶店の宣伝も頼むぞ」

簡単な指示を出して、二人を外に出す。

俺は息を一つ吐くと、教室に散在するウェイターたちに力強く声をかけた。

「野郎ども、これから客が多く来るだろう。ガッツリ稼ぐチャンスだ！　気張っていけよ！」

『『『おおおおおおー！』『』』

決して下がることのないモチベーション。Fクラスの強みだ。
俺は自作の改造ウエイター制服を着込むと、ホールの方へ向かっていった。

あれから吉井がチャイナドレスを着た秀吉や島田妹を連れて回った結果、大分客が集まるようになった。

姫路と島田の試合が終わるころには、席がかなり埋まってきた。良い傾向だ。

「悠、土屋が呼んでたわよ」

「了解した」

戻ってきてすぐホール班に加わった島田から声をかけられる。

接客していた女性に笑顔（という名の薄っぺらい仮面）を振り撒きながら、俺は厨房に入る。

「どうした？」

「……茶葉が切れた。ストックは空き教室にあったはず」

「わかった。ひとまず行ってくる」

そう言って中華喫茶を出て、空き教室にたどり着いたはいいが。

「いくつ持っていけばいいんだ……？」

原作に数まで書いてあったか？ ダメだ、この頃勉強のし過ぎで原作知識が薄れてきている。

いや、待て。この展開は確か……！

「おい」

「……………」

心の中で舌打ちしながら、俺は後ろに振り向く。そこには俺と同年代の男三人。

「何か用か？」

「有野悠夜に用があるんだよ……………悪いが、ちょっとおとなしくぶげらあつ！」

原作とは違った展開だな。吉井じゃなく俺が相手とは。

運が悪かったな。

飛んできた拳を捌き、カウンターで掌底をあごに叩き込む。衝撃が脳まで伝わり、一人があっさり意識を手放した。

「なつ……………！話がちげえぞ！確かこいつは弱っちいガリベンじやなかったのか!?」

「昔は『怪力乱神』なんて呼ばれてたな」

そう言いながら、素早く距離をつめて頭突きを二人目にお見舞い。

「ぐあつ　　ッ、に、逃げるぞ！こんなバケモノ相手にしてられるか！」

「あ、ああつ！」

残りの二人が一人を引きずりながら逃げていく。さすがに頭突きじゃ仕留められなかったか。

「悠夜？ 今の人誰？」

遅れて吉井が入ってきた。俺は「知らない人だ。道案内をしてやっただけだよ」と大ほらを吹きながら、茶葉と餡子を抱えて喫茶店へと戻っていった。

〈清涼祭編〉 第34章 オリ主はなぜか喧嘩が強い謎（後書き）

先走りすぎた遊戯王ネタ。

パーミツシヨンは作者のリアルでのデッキ（未調整）。

本来は明久が使っていたダークモンスター主体のビートダウンが一軍。

最近になってこの小説のPVアクセスが45万オーバーであることに気づいた。

感謝感激。今後もよろしくお願いします。

「御巫君、協力してくれてありがとうございます」

「いいよ天光院。これぐらいお安い御用さ。それにしても、有野は愛されてるんだなあ」

「な、何言つてッ!? / / ベベベ別にそんなわけじゃッ!? / / /」

「ははは……まあ、あいつは競争率高いからがんばれよ」

「……その話、詳しくお聞かせ願えないかしら?」
「後でな。だから胸倉から手を離せ」

「す、すみません。取り乱してしまいました」

「別にいいって」

「……あの、御巫君。やっぱり貴方は霧島さんのことが……?」

「ああ、好きだ。悪いか?」

「い、いえ。ですが、霧島さんは……」

「……わかってるよ。別に、恋は叶うためにあるモンじゃない」

「良いのですか?」

「失恋上等。けどなあ、男の子には 意地があんだよ」

そんなこんなで一時間が過ぎ

「吉井。後1時間で出番だぞ」

「え？ もうそんな時間？」

俺は女性客に愛想笑い（という名の薄っぺり）を振りまいた後、
厨房裏でケータイをいじっていた。

「ふーん、わかった。それと悠夜、しばらく休んでいていいよ。僕
らがカバーするから」

「そうか、悪いな。じゃあ俺も少しは楽しんでくる」

ヒラヒラと手を振りながら、俺はその場を後にした。

なんとなく来てしまった校門前。

ここで吉井はクラス分けテストの結果をもらい、晴れてFクラスの
メンバーとなったわけだ。

「暇……だな……」

ウェイターの制服の第一ボタンを開け、青空を見上げる。

うーん、少し休憩したら戻るかな。

そう思って俺は校庭に引き返した。確かベンチがあったはずだ。

「お、あった」

ペンキ塗りのベンチに座ろうとして、ふと桜を見上げた。
すでに緑色の葉ばかりだが、やはり綺麗なものは綺麗だ。

さあっ、と風がふいて、葉が落ちる。

ふと振り向けば、ベンチには先客が居た。

「……………」

舞い散る葉桜。

高い位置で一つに結ばれた黒髪。

制服越しにもわかる、細くスラリとした手足と引き締まった体型。

「……………綺麗だ」

だからだろう、俺がそんな言葉を呟いてしまったのは。

「……………え？」

今の声が聞こえてしまったのだろうか。だとしたらすごく恥ずかしい。

「隣、失礼しますね」

「あ、ハイ」

女性の横に座る。制服はウチの学校のものだが、顔に見覚えがない。

えっと、かなり美人さんの部類に入るな。

美人なのに見覚えがないってことは、多分学年が違うのだろう。

「あの、失礼ですが……3年生の方ですか？」

「え、ええ。そうです……貴方は？」

「俺は2年生です。Fクラス所属の有野悠夜」

自己紹介を済ませ、美人さんの顔をマジマジと見つめる。

「私は3年Aクラス所属、小暮葵こぐれあおいと申します」

全身を悪寒が駆け抜けた。

こ、小暮葵って、確か土門が調教されかけたDSの先輩……？
この美人さんが、だと……！？

「へ、へえ……」

慌てて避難準備をしながら、俺は相槌を打つ。
腰を浮かせ、いつでも逃げ出せるようにする。

「こ、小暮先輩はここで何を……？」

恐る恐る尋ねてみると、彼女は憂鬱そうにため息をついた。

「いえ、少し悩み事が」

「悩み事？」

浮かせていた腰が止まった。

「それって？」

「いえ、初対面のあなたに相談するのも何でしょう？」

「……そんなこと、ないですよ」

腰を再びベンチに下ろし、俺は彼女の瞳を見つめる。

もう先ほどまでの焦りや恐怖はなくなっていた。 表現に差異有

「少なくとも、一人で抱え込んでしまうよりはマシです。人は誰かに助けを求めなきゃ、壊れちゃいますから」

俺みたいに。

その言葉をかろうじて飲み込んで、俺はじつと小暮先輩を視線を
通わせた。

「……………」

葉桜が舞い、俺の視界を一瞬遮った。

「……………わかりましたわ。少しだけ、話してみます」

緑色の壁が取り払われた先には、呆れた表情の小暮先輩がいた。

「わたくし、今現在茶道部に入部しておりますの」

「茶道部……………ああ」

確かに茶道部はあったな。

校庭の隅っこにあるプレハブ小屋で活動していたはずだ。

「それで、その……」

「……？」

二次創作物だったらこういう時、相手が何を悩んでるのかカッコよく言い当てたりするんだらうけど、あいにく俺に彼女の知識はない。

「実は、他にもやりたい部活がありました……」

ああ、なるほど。

「時間がないなら逆転時計をオススメしますよ」

「私わたくしはハーマイ ニーではなくてよ!？」

おおう、いいツッコミだ。

俺はベンチから立ち上がり、葉桜を見上げながら口を開く。

「ま、貴女のやりたいようにやればいいんじゃないですか？ 高校生活って、前にも後にも一回しかありませんし……後悔のないよう過ぎさなきゃダメですよ？」

転生する前の高校生活は、家族の死によって一変した。

俺は一日の大半を家に引きこもって過ごすようになり、友人も次々と減っていき、ついには一人になった。

ずっと一人。永久に独り。

そうなってしまった分岐点は、やはり高校だ。
もしあの時、誰か一人でも支えになってくれるやつがいたら
もしかしたら俺は。

医学の道を志さなかったかもしれない。

バカテスなんて興味を持たなかったかもしれない。

転生なんて、しなかったかもしれない。

「有野、君……？」

……いかんいかん。何シリアスモードに突入してんだ俺よ。

「とにかく、貴女がしたいことをするだけでしょう？」

そつと彼女に歩み寄り、右手をポンと小さな頭の上に置く。

「貴女が信じる貴女を信じてください。俺に言えるのはこれだけですよ」

「あ、……ええ。そうですね」

何か吹っ切れたのか、小暮先輩は俺を見上げる。

その憂鬱さを振り切った瞳を直視し、俺は思わず空を見上げた。

俺を萌え殺す気かああああああっっ！

自分を必死に押さえつける。

「あ、有野君……?」

なでなで。

「やつ、そんな、撫ですぎ……」

なでなでなでなで。

「う、ううう……」

なでなでなでなでなでなで（ry

ふと見れば、先輩は顔を真っ赤にしていた。

「って、もうこんな時間か」

第4回戦がもうすぐ始まる。

「先輩、俺、今から召喚大会に出てきますね」

そう言って頭から手を離す。

こら、そんな名残惜しそうな表情しない。

「み、見に行ってもいいでしょうか?」

後ろを向いたとき、背中にかげられた声に、俺は振り向き、伝説のあの台詞を吐き捨てる。

「見ていてください……俺の、召喚！」

いやお前どこのオダギリだ、と心の中でツッコミを入れつつ、俺は特設ステージに向かった。

そして第四回戦。科目は三回戦からブロック別になっている。Bブロックは物理だ。確か吉井たちが戦うDブロックは古典だったか、坂本が島田対策で決定していたんだよな。

隣には霧島。メイド服のままなので、観客がどよめいている。そういえば三回戦から観客がいたな。普通に一瞬で蹴散らしてしまったので味気ないものではあったが。

「霧島、油断してたら一瞬で殺られると思え」
「……わかってる」

敵は 学年最強ランクコンビ。

天光院美月と御巫晶。みかなきあき

「よう、天光院。調子はどうだ？」
「まあ、そこそこですね」

最近あまり話せていなかったもので、天光院の顔がほころぶ。そしてその隣に立つ男、御巫は、ずっと険しい表情で俺を睨み付けていた。

「……有野」

「ん？」

御巫が口を開く。

「Fクラスとの試召戦争の時、姫路さんがこう言っていた」

漆黒の髪を風が掻き揚げる。その表情は、敵意と敬意。

「好きな人のためなら、がんばれる」

そこまで言い切って、彼は自分の召喚獣を出現させた。

「その通りだって、今日思った　試^{サモン}獣召喚！」

天光院も真剣な表情で俺に向き合う。

「有野君、代表。私には目的があります。他の誰でもない、私が私のために望むことが。そのためにも、負けるわけにはいきません
試^{サモン}獣召喚！」

「……それは私も同じ。絶対に勝つ……！……試^{サモン}獣召喚」

霧島と天光院が同時に召喚獣を呼び出す。

イヤイヤ、皆さんマジになり過ぎでしょう！？　なんか殺気が迸ってますよ！？

「……悠夜、早く」

「お、おお」

まあいいさ。どうせマジにやるんだったら、こっちもそれなりに

対応しなきゃな。

「^{サモン}試獣召喚、武器選択『^{サムライ・ソード}日本刀』」

そして点数が表示された。

《Fクラス 有野悠夜 & Aクラス 霧島翔子 VS Aクラス
天光院美月 & Aクラス 御巫晶
物理 628点 550点
562点 640点》

天光院と霧島の召喚獣が向き合い、互いの得物を構える。

俺の召喚獣はいつも通りのコスチュームに身を包み、手には日本刀を握っている。

そして御巫の召喚獣は、剣闘士のように鋼の鎧に身を包み、両手に短い剣 グラディウスを構えていた。

「奇遇だな、御巫晶。俺も大切な人のために戦っている」

俺と御巫は視線を合わせると、ニヤリと口元を吊り上げた。

「だから、俺が勝つ！」

『それでは、第四回戦を始めてください』

古典担当の竹中先生の声が響くと同時、4体の召喚獣がステージを駆け抜けた。

《清涼祭編》 第35章 オリ主はナデボなんて物騒なものを搭載している謎（後

御巫君が書いていくうちにどんどん主人公キャラに。

今度彼が主役の番外編とか書いてみようか。

一ノ瀬零さん、御巫君をありがとうございました。

〈清涼祭編〉 第36章 オリ主は説教が得意な謎（前書き）

「よし、ワシは2じゃ」

「……………3」

「4」

「おっと悠夜、手札を盗み見ようとするなよ。5だ」

「雄二も器用だねえ。じゃ、6」

『『『ダウトオオオオオツ！』『』』

「なぜ僕だけっ！？」

「いや冷や汗たらしすぎ」

〈清涼祭編〉 第36章 オリ主は説教が得意な謎

御巫の点数は俺を上回る640点。しかしこいつはいまいち召喚獣を扱いきれていない。

だからこそ、勝機がそこにある。

「点数の差が、戦力の決定的な差じゃない！」

グラディウスを刃で弾き飛ばし、がら空きの胴に蹴りを叩き込む。御巫の召喚獣はよろめきつつも、カウンターでもう一方のグラディウスを横へ一閃。

慌てて召喚獣を屈めさせて回避、バックステップで距離をとる。

「チッ」

「はぁ……はぁ……」

思わず舌打ちをしながら、『日本刀』を構えなおす。点数的には俺が不利。しかし息切れしているのは御巫の方。

「ハッ、どうした御巫。お前の想いはそんなものか？」

うわっ、我ながらイタい台詞。

それを真顔で吐き捨てる俺も、いい加減この世界に染まってきているのだろう。

「……まだ、まだあつ！」

「そこなくつちな」

突撃を仕掛けてくる剣闘士風の召喚獣に、俺は真っ向から刀を振

り下ろす。

片方のグラディウスと俺の刃がぶつかり合い 俺たちは同時に
その場から飛びのいた。

「『エクスカリバー約束された勝利の剣』!!!」

「あつぶねえ！」

「くっ！」

食らえばオーバーキル確定の光の奔流が、ステージを真っ白に塗りつぶした。

残ったのは消えかけの点数表示。

《Fクラス 有野悠夜 & Aクラス 霧島翔子 VS Aクラス
天光院美月 & Aクラス 御巫晶
物理 254点 67点
140点 235点》

霧島がヤバイな。ひとまず体勢を立て直すか。

「武器破棄、選択……『ガンニカタ二丁拳銃』」

両手に持った拳銃で適当に弾幕を形成しつつ、霧島を後ろに下がらせる。

「霧島ツ、天光院をツ！」

「……『カウチ掌握』！」

俺の掛け声に合わせて、霧島の召喚獣の腕輪が黄金に輝く。

「ッ!? う、動かない!?!」

動きの止まった天光院の召喚獣へ、フルオートで拳銃を乱射する。

「えっ、ちょ、卑怯」

「だ、そっだぞ霧島。お前の腕輪卑怯過ぎだつてさ」

「……問題ない」

「問題ないわけが　　きゃあああああつ！」

天光院の召喚獣が蜂の巣になり、戦死する。

「忘れてもらっちゃ困るな！」

「チイツ、……霧島!？」

俺に向けて、御巫がグラディウスを投擲する　　が、寸前で割り込んだ霧島の召喚獣に突き刺さった。

ちょうど左胸を貫き、霧島の持ち点がゼロになる。

「……悠夜ッ！」

「わかってる。武器破棄、選択」

「させるかっ！」

再び武器を取り出そうとしたところで、御巫に切りかかれ思考を中断。

その場から飛びのいて刃を避けながら、俺は脳内から選り抜いた武器を引っ張り出す。

「くっ、すまない霧島さん。倒してしまって……」

「……あなたが謝ることじゃない」

心底申し訳なさそうに謝る御巫に、首を傾げる霧島。

「おい御巫、まさかお前……」
「ああそうさ。悪いか？」

こいつは、多分、霧島のことか……

「ハツ 上等オ。武器選択、『サムライ・ソード日本刀』！」
「来いよ。真っ向から切り捨ててやる！」

向かい合う俺と御巫。御巫は舌なめずりをし、俺はスナップを利かせて軽く手を振る。

「獲物を前に舌なめずりか。三流のすることだな」
「三流でいいさ。熱い三流なら上等だ……！」

その言葉を交わし、俺たちの召喚獣は同時に踏み込み、刃を煌かせた。

一陣の風がステージを吹き抜ける。

ふと見た観客席の最前列には、小暮先輩がいて、胸の前で手を組んで祈るように目を閉じていた。

ああ、イイ女だよ。本当に

「ドSだなんて認めたくないくらいに、な」

俺の召喚獣の右腕が地に落ち、御巫の召喚獣の首が宙を舞う。

《Fクラス 有野悠夜 VS Aクラス 御巫晶

物理 120点

0点

》

特設会場が拍手と歓声に沸く。
俺は呆然とする御巫に声をかけた。

「俺の勝ちだ」

「ッ……ああ、そうだな」

俯き、拳を握る御巫。

俺はふと頭上を見上げる。

ずっとずっと引つかかっていたんだ。

もう二度と過ごさずのなかった時間。

「御巫、恋はいいよな」

突然の言葉に、会場が静まり返る。

「自分の純粋な欲望のために、自分の足で走り抜ける。大いに結構。自分の力で自分のために自分の道を切り開くからこそ、人生は面白い」

あり得ない二度目の人生。

創作物の世界への転生。

それらを通して、俺の過去が変わるわけじゃない。

「御巫、恋に生きる。青春を突っ走れ。目の前に壁があるならば壊せ。敵がいるならねじ伏せる。青春は一度しかない。失敗は成功になり、成功は更なる成功になる。経験に無駄なんてない。お前が

今体験していること全てが、いずれお前の血肉となる」

そこまで言い切って、俺はくるりと後ろを向きながら、御巫に告げる。

「走れ青年。時間を無駄にして、冷めた奴になつたりするなよ。
俺みたいにな」

ステージを去る俺に、拍手は届かなかった。

〈清涼祭編〉 第36章 オリ主は説教が得意な謎（後書き）

難産でした。

今回の説教は、前に前回の人生で青春を無駄に過ごした悠夜君からの説教でした。無理が多少ありますが大らかに見てやってください。

そろそろ竹原先生と悠夜君の因縁の対決です。お楽しみに！

〈清涼祭編〉 第37章 オリ主はキレると口調が変わる謎（前書き）

「フフフフツッ！ 悠夜、これであなたの勝ちはなくなったわ！」

「さあ。木下、デュエルするのは最後まで諦めないのがミソだぜ？」

俺のターン！ 来た！」

「……姉上、勉強会という名目で悠夜といい感じのムードになる予定ではなかったのかのう」

「シンク口召喚、ダーク・ダイブ・ボンバー！」

「なっ！？ 禁止カードじゃない！」

木下家での一コマ。

〈清涼祭編〉 第37章 オリ主はキレると口調が変わる謎

喫茶店に戻ってウェイターとして働いていると、吉井たちが帰ってきた。

「明久。戻ってきたようじゃな。どちらが勝ったのじゃ？」

チャイナドレス姿の秀吉が俺の横を通り過ぎ、吉井たちの方へ歩いていく。男性客たちの視線もつられて動いていくが、団子を口に運ぶ手は止まらない。うわ土屋スゲエ。

「雄二、かな？」

「そうね。坂本の一人勝ちね」

「ですね」

「？ 明久は同じチームなのに負けじゃったのか？」

「秀吉。この世界には知らなくていいことがあるんだよ」

そういうもののかう、と首をひねる秀吉。なにこれかわいい。

「……アレ？ 悠夜いつのまに秀吉のこと下の名前で」

「じっくりお話ししましょうか、有野君？」

「姫路、ちよつ、目のハイライトが消えてる」

「大丈夫ですよ？ オヤシロモードじゃありませんよ？ ヤンデレ化でもありませんよ？」

「じゃあ一体……」

「種が割れてるだけですから」

「あ、死んだ」

開放された後、俺には秀吉のチャイナドレスが天使にしか見えな

かった。……抱きついたら男性客全員から物を投げられたけど。

「それじゃ、準決勝に行ってくるね」

「はい。頑張ってくださいね」

「アキ、負けたら承知しないからね!」

「吉井、絶対に勝てよ」

「わかってるって」

準決勝で吉井たちが戦うのは工藤愛子とモブAキャラのコンビ。
今回は土屋のダミー召喚を使って瞬殺するらしい。

「じゃ、俺も行ってくるわ」

「勝ちなさいよ!」

「……ああ、絶対に、勝つ」

対戦相手 常村勇作・夏川俊平コンビ。

立会人、竹原教頭。

本当に、悪夢みたいな組み合わせだ。

『それでは、今から準決勝戦を始めます。選手は入場してください』

竹原教頭のアナウンスにうながされ、俺（ウェイター制服）と霧島（メイド服）はステージに上がる。対するはソフトモヒカン頭と坊主頭の先輩方。

「よう2年の秀才クン。人前で自分のクズみたいな点数さらすの覚

悟で来たんだよなア？」

「ハッ、誰に物言ってるんだ？ 人生ドロップアウトした負け犬どもが」

「 ンだと？」

二人とも顔を赤くして俺を睨み付けてくる。

「あんたらの勝手な都合で俺らの青春を邪魔するな。学園祭は二度とないんだ」

こいつらは許せない。原作読んでて何度も思った。

「ハッ、高2が何暑く人生に語っちゃってくれてんだよ」

恐らくさつきのことの戦いのことを言っているのだろう。

観客席にいるFクラスメンバーや小暮先輩、天光院は固唾を呑んで俺と先輩方の会話に耳を傾けていた。

「俺は俺の人生のためにやってんだよ。これって青春だろ？ お前が言ってた二度と戻らない時間を俺は実に有意義に過ごしてるよなア？ どうしたよ、秀才クン。家族死んだときから頭イカれちゃったか？」

……今のは、ちょっと、カチン、と、きた。

「 」「 」「ちやちやうっせえんだよ、三下どもが……！」

俺の怒号が特設会場中に響き渡る。

「頭イカれたつてかあ？ ああそつだよ。俺は家族亡くした時から狂ってるよ。それでもなあ、分かることがあんだよ」

こいつらは。

「諦めなきや、世界なんてどうにでもできる！ けど、自分以外に迷惑かけるやりかたしたらお終いだ！ 自分の力でやりとげてこそ、人生つてのは意味があるんだ！」

こいつらだけは。

「テメエらみてえな三下が俺の人生を愚弄するんじゃないやねえ！」

絶対に、絶対に

「許さない。有野悠夜として、一人の人間として 絶対に許さないー！」

拳を強く握り、俺はそう宣言した。

「行くぞ、試獣^{サモン}召喚！」

「ツチ、どうせ負けるんだから、せいぜい吼えとけよ……試獣^{サモン}召喚」

「ああ、まったくだな。試獣^{サモン}召喚」

「……悠夜の敵は私の敵。試獣^{サモン}召喚」

そうして召喚獣が呼び出される。

《Fクラス 有野悠夜 & Aクラス 霧島翔子 VS Aクラス
常村勇作 & Aクラス 夏川俊平
古典 86点 386点
256点 262点》

世界が、凍った。

「古、典……？」

おかしい。ありえない。古典は、3回戦にもう行われていたはず。
どうして

「……ッ！ まさか」

思わず竹原教頭を凝視すると、ニヤリと笑い返してきた。

間違いない、あの野郎が設定を弄ったんだ……！

「……卑怯者！」

霧島の罵倒も、常夏コンビには届かない。

「ハッ、お前じゃ絶対に勝てねえよ」

「ぐっ……！」

3倍近くの点数差。

落ち着け……落ち着くん……！ 3回戦ですでに古典勝負は行
われている。つまりその戦いを見ていた人がいれば気づくはず！

だけど。

「どござして、誰も気づかない……!?!」

誰一人として違和感に気づきはしない。吉井たちの辺りがざわめいてはいるが、他の観客は疑問に感じていない。

「まさかッ……!」

思わずスクリーンを見る。

《Fクラス 有野悠夜 & Aクラス 霧島翔子 VS Aクラス
常村勇作 & Aクラス 夏川俊平
化学 86点 386点
256点 262点》

俺たちに見える点数表示とは科目が違うッ!
改ざんしたのか……くそッ、やられた!

「……アンタって人はあつ!」

「……それでは、準決勝戦を始めてください」

竹原教頭のコールと同時に、相手の召喚獣が獲物を構え突っ込んできた。

〈清涼祭編〉 第37章 オリ主はキレると口調が変わる謎（後書き）

予約掲載が予想以上に便利。

次回は悠夜君奮闘の回。

ちょっと長めになるので乞うご期待！

そして気づけば主要メンバーがほとんど決闘者デュエリストになっていく。そうか、これが孔明の罫か。

〈清涼祭編〉 第38章 オリ主は壊れると凄い事になる謎（前書き）

注意

主人公壊れます。マジです。

バカテスのバの字もありません。ギャグなんて1%もないです。

ひたすらに主人公が壊れます。

原作キャラ空気です。

そこをご了承ください。

〈清涼祭編〉 第38章 オリ主は壊れると凄い事になる謎

「はあああああッ！」

「チイツ！」

突撃してきたモヒカンの召喚獣を半身に受け流し、慌てて距離を取る。

武器は『二丁拳銃』ガンニカタを選択しているが、点数が低すぎて話にならない。

「霧島、『掌握』は!?!」

「……相手が動き回っていて、使えない……!」

チクシヨウ、これじゃ手詰まりじゃねえか!

「オラオラオラッ! どうした、ビビッて反撃もできねえかア!?!」

「うっせえんだよ!」

大振りに剣を振るわれたところをいなし、わき腹に蹴りを叩き込む。が、逆にこっちの召喚獣が弾かれた。

蹴りを弾き返されたので思わずよろける。防ぎようのないタイムラグ。

「しまった!?!」

「隙だらけだぜっ!」

霧島と斬り合っていた坊主頭が一瞬の隙に俺の召喚獣へと飛び掛る。

が、霧島が素早く投擲した刀に行く手を阻まれた。

だからなんだ。

『どうした転生者 母と妹の敵討ちは、しなくていいのか?』

あいにく、俺はアイツに勝つまで、誰にも負けるつもりはない。

「いいぜいいぜいいぜ!! かかってこいよ悪党ども!! 相手に
なつてやる!!」

ああ、俺は本当にコワれてるんだな。

なら、コワれてるなりにやらせてもらおうか。

後悔、するなよ?

S i d e · o u t

「おらあっ」

横に振るわれたモヒカン
の場で召喚獣を倒れさせた。

常村の召喚獣の剣に対し、悠夜はそ

「よし、呼びに行こう」

「けど、どこにいるんですか？」

姫路さんがそう聞くと、雄二は一瞬黙った後素早く指示を出した。

「明久と島田は新校舎を、俺とムツツリー二は旧校舎を、秀吉と姫路は屋外を探してくれ！ 連絡は明久と俺と姫路だ。急げっ！」

僕たちはすぐに特設会場を後にし、島原先生を探し始めた。

だからこそ、僕たちは見ることがかなわなかった。漆黒の召喚獣が凶悪な刃を掲げ、親友が狂気の雄たけびを上げているのを。

S i d e - o u t

回る回る回る廻る廻る廻る。

有野悠夜の周囲の光景が、ひたすらに変わり続ける。

動く人間の屍を切り倒していく有野悠夜。

日本刀で錬鉄の英雄と切り結ぶ有野悠夜。

魔法を用いて英雄、千の呪文の男と戦う有野悠夜。

崩れる崩れる壊れる壊れる。

有野悠夜の心象風景が、ひたすらに壊れ続ける。

ノイズ越しに響く最愛の人の悲鳴。

地球外生命体の中でも兵士級ソルジャーと呼称されるものに食われていく仲間。
問。

視界を埋め尽くす死体、始まる『零崎』。

苦笑ではない。嘲笑でもない。冷笑でもない。

狂笑。

「おレハ　アリノウウヤ、呪わレタ存在だヨッ！！」

言葉とともに、チェーンソーを縦に振り抜く。夏川は慌てて召喚獣を横に飛びのかせたが、一瞬遅ければ頭から真っ二つになっていただろう。

「いつもいつもいつもいつもセカイは俺を見ステる！　すべての悪をオレになスリつけル！　俺がナにヲした！？」

悠夜の脳裏に描かれるのは、幾多もの世界。

地球外生命体　BETAと戦う人類。

時空管理局と呼ばれる組織が統括する世界。

幼い英雄の息子の放つ魔法。

ありえない記憶が、悠夜の脳内で氾濫する。

「な、何わけわかんないこと言つて……」

「VAAAAAAAAAAAAAAAAA！！！！」

「！！！！」

もはやそれは人間の言語ではない。

有野悠夜は、人の限界を超えた。

Side Akihisa-yoshi

「どう!? 見つかった!?」

廊下を疾走しながら、雄二に問いかける。一通り教室を見回ったけど、島原先生の姿はどこにもない。

『ムツツリーニが今、倉庫の鍵を開けてる! 中から声がするから、きつとここだ!』

「了解! 姫路さんに伝えておくよ! 美波、行こう!」

僕は走り出す。それが親友のためになると信じて。

「これは……」

倉庫の中には、ガムテープで体中をぐるぐる巻きにされた島原先生が横たわっていた。

目がしっかりと開いていて、意識はある。

「早く外さないと!」

僕は手早くガムテープを外す、テープのしたからは、普段通りのスーツが姿を現した。

「大丈夫ですか!? 怪我とかは!?!」

「ええ、多分大丈夫よ」

顔色は少し悪いけど、どうやら無事なようだ。酷いこともされて
いないみたいだし、良かった。

「ありがとう。でも、なんでここだよ？」

「ムツツリー二が、先生の声を聞きつけたんだよ」

「……………一般技術」

それはありえない。

「そうだ先生！ 悠夜がピンチなんだよ！」

「……………教科の不正が行われた。違う？」

その言葉に、僕は驚いた。教科の不正と断定できるわけじゃな
いけど、多分何か裏がある。

「まったく、ゆう……………有野君には予知能力でもあるのかしら」

そう言って彼女が懐から取り出したのは、A4サイズのコピー紙。

「パターンB。何らかのかたちで教科のすり替えが行われた場合…
…なるほど、対処方法は分かったわ」

啞然とする僕らを尻目に、先生は強い視線を僕らに向けた。

「私を有野君の所まで連れて行って」

「……………言われなくても！」

雄二が先陣切って走り出す。僕らはそれを追いかける形だ。

「先生！ さっきの紙は一体……………!？」

「見てみなさい」

走りながら、手渡された紙を見る。

すごい、召喚大会だけでなく清涼祭中のトラブルに対しての対処法が全部網羅されている！

本当に予知能力でもあるんだろうか。

「イヤアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!」

その時、僕らは悲鳴を聞いた。

「今の声は 天光院じゃな!」

「何かあったのか!？」

「……………急ぐ必要あり」

と、唐突に島原先生の表情が険しくなる。

「……………行くわよ!」

「え、え、えっ?」

瞬く間に先生は雄二を抜いて先頭に躍り出た。そしてそのまま会場へと向かっていく。

僕らも慌てて、先生の後を追った。

S i d e - o u t

「ドゥshita? そんなあホヅrageテ」

すでにそれは人間ではなかった。まるで言葉の発音を忘れてしまったかのような声に、ただ観客たちは呆然とする。

「イ……イヤアアアアアアアアアアアツ！！」

観客の最前列にいた天光院美月が、絶叫とも言える悲鳴を上げた。悠夜の顔には、見るだけで悪寒を催すような薄く気味悪く歪んだ笑み。

「悠夜君ツツ！！」

そんな中、一人の女性、島原いるりが、特設会場に駆け込んできた。

走ってきたのか、額から汗が滴り落ちている。

「悠夜！？」

後から走ってきた吉井明久らは、ステージ上の光景を見て絶句した。

そこに居たのは、否、在ったのは、親友 だったモノ。

「あh a h、ヨシいじゃn eーカ。ドウシたよ、そんな顔しte」

漆黒の召喚獣の顔には、赤いラインが刻まれていた。つい先ほどまではなかった、目の下に刻まれたそれは、まるで赤い紅い朱い血の涙のよう。

「サモン試獣召喚」

いつの間にかステージに上っていた島原いるりが、自らの召喚獣を呼び出した。

《Fクラス副担任 島原いるり VS Fクラス 有野悠夜
古典（化学） 972点 86点
》

「常村君、夏川君、少しの間下がっててください」
「せ、先生!？」

驚いたように吉井たちが声を上げるが、いるりは悠夜から目を離さない。

「早く!」
「ハ、ハイ!」

その剣幕に、二人は思わず返事をした。

「霧島さんも、少し引いて!」
「……ッ」

唇を噛んだまま、霧島は俯く。

「あree〜? 『いるりちゃん』、ドウしてこんナトコにいら
の?」
「私は……」

いるりはキツと視線を上げると、喉を震わせた。

「私は、貴方を止めに来た!」

召喚獣の武器は、長く鋭く煌く双剣。

「クククク……イィネえ！ 『いるりちゃん』、サイkooダ
よ！ サア来イよ！！ 俺をうt.i.タオしてミセロ！！ トメてみ
seろ！！」

再び、チエーンソーが狂気の音とともに回転を始める。

「……行くわ！」

獲物を構え、いるりは自分の生徒へと、そして大切な家族へと駆け出した。

〈清涼祭編〉 第38章 オリ主は壊れると凄い事になる謎（後書き）

悠夜君よりいるりちゃんの方がカツコイイ件。
ガンバレいるりちゃん。負けるないりちゃん。

〈清涼祭編〉 〈宿命編〉 第39章 そして俺は世界を渡る(前書き)

別にディケイド的展開じゃありません。
その内バカテスに戻ってきます。

〈清涼祭編〉 〈宿命編〉 第39章 そして俺は世界を渡る

GYUイイイイイイイイイイイイイイイイイイ!

「あhaハハhaはハhahaは!! タノshiiネエ! yu
カイダねえ!」

縦に一閃された凶悪な刃を、いるりの召喚獣は白と黒の双剣で受け流す。

剣の名は『干将・莫耶』、かの錬鉄の英霊も愛用した至高の逸品。

「あre、そしてたしかエミヤのジャンka! ハはハ、ナツカshiiいなア!」

「悠夜君、貴方は 分かってるはずよ!」

斬斬斬斬斬斬!

目で追うことすらできない速度で振るわれる双剣を、最小限の動きですべて避ける悠夜の召喚獣。

隙を見つけてはチェーンソーで得物ごといるりの召喚獣を叩き切るうとはしているが、あまりにも早い動きを捉えきれない。

「貴方は、貴方は独りなんかじゃない!」

「……? 『いるりちゃん』、ナニヲ言ツtellの?」

「分かるでしょう!? 貴方を想う人が、貴方の傍には必ずいる!

ここは、この世界は、貴方を裏切らない!」

その言葉に、悠夜の表情が変わる。

「煩いウルサイurusai煩いウルサイurusai!! ダマレ黙れdamareダマレ黙れdamare!!!」
「貴方の居場所は『この世界《此处》』よッ!!!」

言葉と言葉、刃と刃がぶつかり合う!

白き剣の一振りがチェーンソーの刃を吹き飛ばし、黒き刃の一閃が駆動部を叩き壊す。

「いい加減にしないで! そうやって貴方一人が泣き叫ぼうとも喚こうとも、世界は変わらない!」

いるりは双剣を悠夜の召喚獣の足元に投げつける。
悠夜はいるりの言葉をかみ締めるように、顔を俯かせた。

「変わらない……? 俺一人じゃ、カエラレナイ……?」
「そうよ。だからこそ、貴方には仲間がいる」

そして、といるりは息を吸った。
家族を解放するために。
大切な人を救うために。

「大丈夫。私がついてるから。 『壊れた幻想《ブロー
クンファンタズム》』」

刹那、漆黒の召喚獣の足元に突き立っていた二振りの剣が、爆ぜた。

内包する神秘の変わりに点数を爆薬とし、それは周囲に破壊の嵐を巻き起こす。その範囲約半径2メートル。

そして爆煙が晴れた向こうには、漆黒の衣装を身に纏う召喚獣がポロポロの状態で倒れ付していた。

《Fクラス 有野悠夜 古典 2点》

シン、と会場が静まり返る。

「悠夜君、私は『この世界《此処》』にいる」

いるりは召喚獣を消しながら、悠夜に近づく。

「それは、『転生者《貴方》』も同じよ」

その言葉に、ハッと悠夜は顔を上げた。
表情に浮かぶは不安、疑念、そして恐怖。

「な、んで。いるりちゃんが、そのこと」

「貴方は、」

ステージ上で、いるりは両腕を悠夜の背中に回すと、ギョッと抱きしめた。

「貴方は、『私の傍《此処》』にいます。それだけで、十分でしょう？」

体から力が抜ける。そのまま、悠夜はステージ上で膝をつき、いるりの胸の中で意識を失った。

夢を見ていた。

懐かしくて、二度と見ることはない夢。

「武、さん」

「武、俺は最後まで戦うことにしたよ。お前はがんばった、お前が世界を救ったんだ」

「……さようなら、ガキ臭い救世主さん」

変えられなかった結末。

もう二度と合うことのない／できない仲間たち。

「貴方を愛しています」

「なんで俺が英霊だったのかは知らんが、楽しかったぞ、エミヤ」

召喚され、ひたすらに戦い続け守り続けた日常。

騎士王とともに消え行く／次に渡り行く俺。

「僕は絶対に、父さんに会います……!!」

「その心意気だ。絶対に、その夢を手放す、な……」

「……だから、貴方もいつか、超えて見せます……」

立派な魔法使いを目指す少年とともに過ごした世界。
大切な人を庇って散らした／守った命。

思い出すはずのなかった／体験したことのない、記憶。
二度と会えない／会ったことのない、人々。

「俺は……何なんだ？」

それらのビジョンを見て、俺は自分に問いを投げかけた。

答えは、なかった。

「……………だったら、自分で見つけ出すか！」

珍しく、俺にしては前向きだよな。

そんなバカなことを考えながら、俺はふと後ろを振り返る。

「お兄ちゃん！」

「へぶごあー！」

腹に頭突きを食らった。

「ごぼっ、ごぼっ……………って、え？」

「どっしたのお兄ちゃん？」

目の前にいたのは、紺色の髪を肩の辺りまで伸ばした赤目の少女。

「俺の、部屋……？」

「転生前の俺がいた、それなりに大きい部屋。」

「な、んで……」

わけのわからない俺に、さくらの笑顔だけが眩しく映った。

《清涼祭編》 《宿命編》 第39章 そして俺は世界を渡る（後書き）

名護さんのキャラが美味しすぎて困る。

イクササイズしたけど意外に楽しくてハマった。753Tシャツ超欲しい。

次回からはダーク展開な感じ。

バカテスは

《戦争編》 《清涼祭編》 《強化合宿編》 ……

みたいな感じで、適当な間に贖罪編とか宿命編とか変な名前のヤツを突っ込む。

正直転生オリ主モノへのアンチ的な表現ばっかなので注意。
作者の個人的意見とかばっか。

あとマブラヴの影響モロに受けた説明があるのでそこも注意。

とにかく、次回をお楽し（ry

50万PVアクセス突破記念 く在りし幻想の日々く (前書き)

要するに悠夜君の性格改変モノです。
あとは伏線ばっかです。

50万PVアクセス突破記念 〱在りし幻想の日々〱

「またここか」

「文句言わないの、お兄ちゃん」

無駄に大きな屋敷の中、俺とさくらは作者の前に座っていた。相対する作者は憮然とした表情でコーヒーを啜っている。

「……で、どうした作者」

「うんうん。帰ってお兄ちゃんとイチャイチャしたいんだけど？」

「……さくら、それならここでもできるだろう？」

「お、お兄ちゃん……」

妙に密着する二人、さくらは頭を悠夜の肩に乗せた。

「……突破したんだよ」

と、突如展開された桃色空間ラゼフォード・ワールドのせいで空気になりかけた作者が、突然何かをつぶやいた。

「何言ってるんだ？」

「……50万PV、突破したんだよツツ!!」

ウオー、と両腕を掲げ雄たけびを上げる作者。正直奇奇怪怪極まらない。

「というわけで、記念短編やります!」

「そーいえば、リアルの方の友達に頼まれたんだっけ？」

さくらの疑問に、作者は我が意を得たりとばかりにニヤけた笑顔で返す。

「そう、『有野家がもし全員一緒に転生していたら』というifだ」「へえー」「」

対して興味がわからない俺たちは、再びラブラブ空間^{A Tフィールド}にこもる。

「……やれやれ。まあ書き上げたんだしやりますか！」

そんなことを言って、作者は目の前のデスクパソコンに向き直った。

50万PVアクセス突破記念

if、バカとテストと転生者

〜在りし幻想の日々〜

「お兄ちゃん！ 起きろー！」
「ぐはぁー！」

よう、俺の名前は有野悠夜。フリーの学生さ（キラッ………）
………すいません、調子乗りました。ハイ。

「ほら悠夜、早くしなさい」

ロリ母にも叱咤され、俺はベッドから起き上がる。

さて、我が家はちょっと特殊な事情を抱えている。それは、一家全員が一度死んでいる、ということだ。

「おい！ 悠夜、まだあー！？」

「今行くー！」

扉の外から響く、親友こと吉井明久の声。

「じゃあ、行ってきますー！」

「行ってきまーす！」

「行ってらっしやい」

俺とさくらは母さんにそう言うと、勢いよくドアを開け放った。

「明久、今日は珍しく早いな！」

「まあ、昨日は特にやりたいゲームもなかったしね」

「そうか……オルタ、やる？」

「是非やらせていただきます悠夜様」

二人してニヤニヤと笑う俺たち。ハイそこ、不審者とか言わない。

「お、雄二じゃんか」

「ん？ なんだ悠夜とバカか」

「出会いがしらにそれかい！？」

と、向こうの道から坂本雄二がやって来た。余談だが、さくらが所属するFクラスの代表である。アレ？ 何で俺とさくらが同学年

ってことになってるんだ？　　ご都合主義です。

もっとも俺はAクラスだがな！

「ああそれと悠夜、この英語教材DVD良かったぞ」

「そうか、気に入ってもらえたなら何よりだ」

「特にアンリミテッド編がな」

そう言っつて坂本は俺にディスクを渡す。

あくまでこれは英語の教材だからな。

「……嘘。18禁ゲーム『マブヴ』」

「H A H A H A、翔子、朝から人の背後取っつておいてそんな面白いじょうだイダダダダダ！　　ちよっ、マジ痛いから！　　さくら痛い痛い痛い！　　右腕が干切れちゃうウツツ！！」

翔子の密告によって右肘の関節を破壊された俺。満面の笑みで肘をさするさくら。いやそこぶっ壊したのお前だから。

「……うう、密告なんて裏切り者」

「……あんなゲームする悠夜が悪い」

拗ねたような表情でそっぽを向く翔子。結構可愛い。

「お前ら、今日は珍しく早いな」

と、校門前には西村先生、通称鉄村先生が仁王立ちしてらっしやった。

「鉄村じゃない！　　西村だア！」

「アツパアアーー!?」

朝一で昇竜拳を食らい星になる俺。周囲はポカンと口を開けたまま空を見上げた。

「ーーーうううあああ!? 良い子のみんなは真似するべボツ!?」

万有引力の法則に則って、俺はめでたくアスファルトと情熱的なキスをするのだった。

「うう……朝から散々だ」

放課後、俺はシステムデスクに突っ伏しながらさめざめと泣いていた。あれから朝は何もない所でけっ躓いて高橋先生の胸にダイブするし、天光院美月と体がぶつかってあいつが倒れるのを抱きとめたら胸に手が言っている場で他の生徒に殺されかけたしペン回したらシャーペンが優子の胸に当たってセクハラ扱いされるし体育の時間に工藤愛子と人体の不思議について熱く語ってたら高橋先生と優子にボコられるし。

「俺が何をした……つーか優子のあれはセクハラには入らんだろう。どこにも膨らみが見当たらんぞ」

「へえ……それは驚きの情報ね」

「……………ああ、死んだな」

ベキゴシャメキヨグシャギヤアアアアアアアアアアアア!!

「で、甲斐甲斐しく処置してくれたのは美月だけだったと」
「ええ、まあ」

オレンジ色の夕日が沈む中、俺は天光院美月とともに通学路を歩いていた。

「悪いな、いつも世話になって」

「い、いえ。これぐらい……その、彼女としては当然ですよ」

「……ハハツ、そう、か」

顔が赤い自分でもわかる。肌が火照って暑い。そしてむずがゆい。

何を隠そう、俺の横を歩いている女子生徒、天光院美月は俺の彼女である。普段はツインテールにまとめている長髪も今は下ろして、普段とは雰囲気全然違う。

「まあ、今日で1ヶ月目だしな」

「始まりは悠夜君ですよ？」

悪戯気な笑みとともに、美月がこちらを見る。……なんだ、こいつも顔赤いじゃんかよ。

「まあ、告白したのは俺だからな」

「う、そ、そんな大きな声で言わないでください……」

すると美月はすぐに小動物みたいに小さくなった。なにこれかわいい。お持ち帰りしちゃっていいですか。

「そ、それですね。1ヶ月記念と言ってはなんですけど……今日、

お父さんもお母さんもお出かけなんです」

思わず生唾を飲んだ。

待て待て待て、今この子は何を言おうとしている？

「そ、それで……ウチに泊まりませんか？」

ハハツ、つたく。

そんな不安げで可愛い表情されたら、答えなんて一つしかない
るだろ。」

「 ああ、喜んで」

その晩の出来事を機に、俺たちの距離はより一層縮まった。

いや、夜中限定でゼロだったけどな。どことどこがとか言わない。

ちなみにこの件が露呈して、美月のファンクラブにボコられるか

と思いきやさくらと翔子に真っ先に殺されかけたのは、まあ笑い話だ。

「……どうしたんだお前」

「……何も言っな」

薄暗い部屋にて、作者と黒ずくめの男は向き合っていた。

「つーかお前最近出番ないよな」

「殺されたいか？」

「すみませんでした」

部屋中に充満する凄まじい殺気に即ジャンピング土下座を敢行する作者。実に反射神経の無駄遣いである。

「で、この《宿命編》とやらはどれほどで終わるのだ？」

「ああ、宿命編は5話ぐらい。で、その後に清涼祭終わらせて《結社編》挟んで強化合宿やって……」

「……おい、今サラツとネタバレしただろっ貴様」

「うるさい黙れ」

やれやれと肩をすくめながら、男は席を立ち上がる。

「もう帰るのか？」

「ああ」

「じゃあな。いつ来てもいいぜ、有野悠夜君」

その言葉に、男は不愉快そうな表情をした。男の髪は紺色、目は真紅。

その外見は、奇しくも一人の少年に酷似していて。

「間違えるな。俺は有野悠夜なんて上等なものじゃない。その『成れの果て』だ」

それだけ言うと、彼の姿は闇に溶けて消えた。

作者はそれを見届けると、画面に向き直る。たった今書き上げた、50万PVアクセス突破記念の短文。

「……良かったじゃねえか、オリジナル主人公さん」

誰にも気づかれないうほど、小さく笑い。

「この文章の中じゃ、天光院美月は幸せみたいだぜ」

誰にも見えないほど、小さな涙を零した。

50万PVアクセス突破記念 く在りし幻想の日々く（後書き）

改変点

- ・ 悠夜君超明るい。Aクラスのムードメーカー
- ・ 皆のこと下の名前で呼ぶ
- ・ 天光院の彼氏
- ・ 変態度激減

本来の性格に戻った、という感じですよ。

トラウマなどさえなければ、彼はこんな性格になるはずでした。

伏線モドキ

- ・ 《結社編》……2、3話で終わる程度の小話。
- ・ 『成れの果て』……言葉の意味のまんま。
- ・ 「この文章の中じゃ、天光院美月は幸せみたいだぜ」……じゃあ、本編の中では？

わかるか？ これは……天光院ヤンデレフラグだ！

〈宿命編〉 第40章 そして俺は世界を疑う（前書き）

難産でした。

次話で宿命編は終わりそうです。

いい加減清涼祭編を終わらせたい……！

《宿命編》第40章 そして俺は世界を疑う

「さく、ら……？」

ヤバイ、意味がわからない。俺はさっきまで、文月学園で召喚大会に出ている……それで……

「ッ……！」

思い出そうとした瞬間、脳みそをナイフで掻き回されたような痛みが頭に走った。

痛い痛い痛い痛い痛い！

《思い出しちゃダメ！ 絶対に思い出さないで！ 思い出しちゃダメ！》

声が響く。誰の声かすら分からない。

「お兄ちゃん……？ 顔色、悪いよ？」

「あ、ああ……大丈夫」

そう言つと、俺はさくらに背を向けて部屋を出る。

もし、もしも、本当に……戻ってきているとしたら……

「悠夜……！？」
「飯よ……！」

……は、はは。
本当に、俺は

「戻ってきた……！」

「いただきます」

ご飯をパクつきながら、俺はチラリと家族の顔を盗み見た。
さくらも母さんも、記憶の中の姿とまったく変わらない。本当に、
いつも通りと言っている。

「朝から肉じゃがって……」

「べ、別にいいじゃない」

まあ文句はないけど、と言ってから一口ほお張る。

「……ッ」

「悠夜？」

「この味だよ。ああ、そうだ。この、ずっとずっと追いかけてきた、
懐かしくて……」

「ゆ、悠夜！？」

「お兄ちゃん！？ 何で泣いてるの！？」

そう言われて気づく。自分の目からボロボロと流れ落ちる涙に。

「う、ああ……………」

狂うほどに愛おしい。壊れるほどに抱きしめたい。

「う、めん……………」

そう言って、二人を抱きしめる。温かみが、服越しに伝わる。

「ちよつ、え、ええ……………!?!」

「はっ、はわわわわわ!?!」

顔を真っ赤にしてテンパってる二人の耳元で、俺はそっと、詠うように呟いた。

「……………ただいま」

「ほーら、どうしたのー? こんな問題も解けないのかしら?」

時間は経って午前11時。

顔を真っ赤にしたままさくらは俺を置いて登校し、俺も母さんから追い出されるように家を発った。

現在物理の授業中。担当先生はサディストで女王様キャラで有名な女教師だ。

「え、えつと……わかりません」

シユンとした表情で席に座る男子。まあ先生のルックスが絶世の美女って言っても言い分、ダメージはデカイよなあ。

「ふーん、つまんないの。じゃあ、有野。答えてみなさい」

指名されて、俺は席を立ち上がる。

「はい。まずこの問題は先生が研究中の燃素が存在することを仮定した上で作られた問題です。よって俺たちの物理科目知識ではとてもではありませんが答えられません。仮に燃素の存在を肯定した上で解いてもこの実験方法ではFe……鉄の融点に達しないため期待通りの結果は得られません。よってこの問題の答えは何の変化も訪れない、が正解です」

長々と説明した後、俺は先生を見やった。

先生は呆然と俺を見ている。周囲も同様。アレ？　なんかハズした？

「……せ、正解、だけど……」

明らかに挙動不審な先生。

あ、ここって不正解のほう良かったのか？

けど周囲が霧島とかいるりちゃんとか異常に頭良い人ばっかだったからなあ……流されるように勉強した末の結果がごらんの有様だよ！

「ていうか先生、これ明らかに高校の範囲じゃないでしょ？」

「うるさいわね」

ムツとした表情でそっぱを向く先生。地味に可愛い。

「……悪い、鏡ない？」

「え？ あ、うん」

隣の女子に手鏡を借りる。それを使って教卓近くのドアを見て、反射先を見た。

「黒」

「へ？」

「……………？ ………………！！！」

疑問の声を上げる女子と、しばらくした何かに気づいたかのような先生。顔真っ赤にして可愛い。やっぱイジリがいがある。

「こ、この変態！」

「高校にそんなの穿いて来てる先生の方が変態でしょ」

「うるさいうるさいうるさい！」

なんか色々と経験しすぎたせいかな、我ながら異様に達観してる。

耳まで赤く染めてチヨークを投げつけてくる先生。それらすべてを見切って叩き落としながら、俺は鏡一つで部屋の中を自在に掌握できる術を教えてくださいたどこぞのムツツリに感謝した。

『お、おい……あの『絶対零度女王』が照れまくってるぞ』

『有野のやつ、妹だけでなく教師にまでフラグ立てやがって……！』

『夫婦漫才、有野君と……先生、うらやましい……！』

ざわめく教室の中、響いたチャイム音がやけに耳に残った。

昼休み。

「俺のターン。バイス・ドラゴンを特殊召喚、ジャンク・シンクロを通常召喚。ジャンク・シンクロンの効果でチューニング・サポーターを守備表示で特殊召喚。バイス・ドラゴンとジャンク・シンクロンをシンクロ、レベル8のレッド・デーモンズ・ドラゴンを召喚」

「うげ、出たよ有野お得意の高速シンクロ」

現在デュエル中。相手のフィールド上にはラビエルが一体のみ。伏せカードがない時点で俺の勝ちは確定している。

「さらに二重召喚を発動。救世竜セイヴァー・ドラゴンを召喚、シンクロ」

レッドデーモンズ レベル8

セイヴァードラゴン レベル1

チューニングサポーター レベル1

「合計レベルは10。セイヴァー・デモン・ドラゴンを召喚」
「げ」

「効果によってラビエルの効果を無効化、さらに攻撃力を上乗せする」

「ATK8000って……」

ラビエルを攻撃して4000のダメージ、時間がなく4000ラ
イフデュエルだったので終わりである。

「くっそー、また負けた!」

「お兄ちゃん、私ともやろう!」

「あら面白そうじゃない、アタシも混ぜなさい」

「なんで先生まで混ぜてるんですか……」

「あらあ、ダメかしら?」

「全力でお相手させていただきます」

その後。

「ふふっ、私は光神化を発動、効果でデッキからアテナを2体特殊
召喚するよ!」

「(。(。(。(」

「血の代償の効果でアタシはもう一度通常召喚を行える。オベリス
クの巨神兵を召喚。あら、三幻神並べるのに7ターンもかかっちゃ
ったわね」

「(。(。(」

「私はパーシアスでクリッターを攻撃! 効果で一枚ドロー! 天
使族だったからテテユスの効果でもう一枚ドローするね。ドロー、
オネスト。ドロー、ムドラ。ドロー、ネオパーシアス。ドロー、ス
ペルビア。ドロー、アテナ。ドロー、ドロー、ドロー、ドロー……」

「アタシのターン、速攻魔法ディメンション・マジックを3枚発動。
効果で手札からブラック・マジシャンとブラック・マジシャン・ガ
ールとカオス・マジシャンを召喚。3体をリリースして神王獣バル

バロスを召喚。効果でアンタのフィールド上のカードを……」

「もう……やめてください……」

この虐殺^{デュエル}は、昼休みが終わるまで続いたのだった。

放課後。

俺は一人、教室に佇んでいた。

ずっとずっと思っていた。

ずっとずっと感じていた。

ずっとずっと気づいていた。

「悠夜君」

俺の後ろから、いるりちゃんの声が聞こえる。

いるはずのない彼女の声。

振り向けば、いるりちゃんとさくらと物理科教師が立っていた。

「……………なあ」

俺の中の考えを、確認する。

そうであってほしい？

そうじゃないほうがいい？

分からないけど、このままじゃいけない、そう漠然と感じた。

「……………」

きっと最後の希望にすぎないように、俺は必死に言葉を紡いだんだろ。

きっと現実を受け止めきれなくて、俺は必死な表情のままだったんだろ。

「……………」

「……………」

島原いるりは、黙って頷いた。

《宿命編》第40章 そして俺は世界を疑う（後書き）

非処女のヒロインってアリですか？

唐突過ぎました。すみません。

プロットつめてる途中で、ヒロイン（原作キャラかどうかはご想像にお任せします）を非処女にするといいんじゃないかって考えがよぎったんですけど……

ああ、相手は主人公ではありません。無理やりに奪われてるってことです。

ために話を書いてみましたがマジで反吐が出るどころでした。

とりあえずのアンケートもどきです。上のような事情があるので、意見をください。お願いします。

さて、次回で宿命編を終わらせ、その次からようやく清涼祭編復帰です。竹原教頭が強すぎて視界が滲みます。勝ち目ありません。

《教頭 竹原結城 日本史 1806点》

下の名前はオリ設定です。

何この点数……4桁ってありえないだろ……

と、とりあえずは有野君の愛の力にご期待ください！

〈宿命編〉 第41章 そして俺は世界を壊す(前書き)

次からようやく清涼際編に。

母さん空気化注意。どうしてこうなった・・・orz

〈宿命編〉第41章 そして俺は世界を壊す

「……そっか」

一つため息をこぼし、俺は天井を見上げた。

「驚かないのね」

「驚いてほしかった？」

「ええ」

すぐに返ってくる言葉に、思わず苦笑を漏らす。

「もしも、もしもだけど」

「何かしら？」

「俺が永久にここ夢の中にいるって言い張ったら、どうなる？」

「……あなたがそういった瞬間、現実本当の悠夜君は生命活動を停止するわ」

深刻そうな表情で告げるいるりちゃん。

まあ、俺に答えなんて一つしかないんだけどな。

「ちくちく」

「……お兄ちゃん、行っちゃ、ヤダよ？」

愛しい妹を抱き寄せて、頭を撫でる。さくらは俺の腰に手を回すと、ギュッと抱き締めてきた。

「ちくちく」

「……………」

俺はゆっくりと口を開くと、そのまま言葉を紡ぐ。

「俺はさ、こう思うんだ。どんなに悲しい思い出も、どんなに辛い出来事も、それらすべてが積み重なって、人間ってのを形成してるんじゃないかって」

「……………」じゃあ、お兄ちゃんは、私とお母さんが殺されたからこそ、今のお兄ちゃんなの？」

「ああ」

「……………」それは、詭弁だよ。そんなの、私たちからすれば一方的な押し付けだよ。死んだからそれを糧にして生きるなんて、望んでない」「それでも、残されたやつはそうするしかない！」

「いやだよ！ もっと苦しんでよ！ 私を思い出して、私を想って、私を願ってよッ！！」

ギョツ、と俺を抱きしめる腕に力が入る。

「忘れないでよお……………」捨てないでよお……………」私のこと、思い出なんかにしないでよお……………」

ああ、そうか。俺は絶対にしちやいけけない勘違いをしてたんだ。

「そっか……………」そうだよな」

「……………」お兄ちゃん？」

俺は思わず天井を見上げて、呟いた。

「さくらは、死んじゃったんだな……………」

どこかで思ってた。さくらはまだ生きてる。俺の中で、って。

けど、そんな幻想ありはしない。

「……………そうだよ。お兄ちゃん、私は 死んだんだよ」

きっと心の中にあるのは、さくらの『成れの果て』。さくらの身代わり。

本物のさくらは、もういやしない。

だから。

「……………多分、君も俺の中にいたさくら。その成れの果て。違うか？」
「……………そうだ、よ」

一拍の沈黙。

「……………きっと、俺はいつかさくらのこと思い出せなくなるんだろっ
な」

「え？」

「頭ん中いくらひっくり返しても、『有野桜』って存在を、忘れて
しまっただと思っ」

「……………い、いやぁ……………なん、で……………？」

「人って、そういうもんなんだよ」

「だけど、と俺は続ける。」

「頭が忘れても、心は忘れない。ずっとずっと、どんなに昔のことだろうと、心は、絶対にお前を忘れない」

理屈なんて抜きで、俺はそう言った。

さくらは俺の目をじっと見つめた後、ふいに顔を俺の胸につづめる。

「……なあ」

「……何？」

「……母さんの誕生日、祝えなかったな」

「……ケーキ、もったいなかったね」

ポタリ、と俺の服に雫が落ちた。

「……これで最後、なのかなあ」

「……たぶん、きっと。そうだ、よ」

ポタリ、ポタリ。服にしみが増えていく。さくらの涙だけじゃなく、俺も涙も流れていく。

「もう、会えない、のかなあ」
「たぶん……ね」

ああ、そうか。

もう、会えないのか。

「さくら」

「何？」

「愛してる」

直球だった。

我ながらなんてどの口下げてそんなこと言えるんだろう。

「……私もだよ」

それだけ言っつて、さくらは俺をそつと突き放した。

「……アンタ、あつちの世界では後悔しないようにね」
「言われなくても、わかってますよ」

先生と言葉を交わし、俺はいるりちゃんに向き直る。

「教えてくれいるりちゃん。俺は、どうやったたら……」

一拍、息を吸う。

「 どうやったたら、この世界を抜け出せる? 」

その言葉に、いるちゃんは少しだけ微笑んで、さくらを見る。

「 さくらちゃん 」

「 ……はい 」

「 すごそと、さくらがポケットから何かを取り出した。

出てきたのは黒いリストバンド。無地にもかかわらずどことなくオシヤレだ。

「 これは? 」

「 お兄ちゃん、これは、切り札ジョーカーだよ 」

「 パイルバンカーのことかあッ! 」

「 こんな状況シリアスでもネタに走れる先生はすごいと思う 」

ちなみに受け取ってみるとすごく重くて泣けた。空の修行じゃねえんだからさ、重量いらねえつつの。つけた左手がちよっと痺れてんぞ。

「 白金の腕輪の派生版みたいなもんか? 」

「 ううん。これが原型。正式名称は『黒金の腕輪』かな 」

「 アタシたちは『切り札ジョーカーの腕輪』って呼んでるけどね 」

「 厨二乙 」

「 いるりちゃんキャラ違う! 」

聞くところによれば、吉井の『二重召喚型』や坂本の『代理召喚型』、俺の『即時召喚型』のようにこの腕輪にも名前がある。

『能力複写型』、それがこの腕輪の名前だ。

その名の通り、相手が腕輪を使用可能な場合、その能力を視認することでコピーし自分が使用できるようにするという悪魔みたいな能力を持っている。

もっとも腕輪を手に入れるぐらいの高得点者にしか使えないって
いう欠点があるが。

「……ありがとな、さくら」

「えへへ」

なでなでなで。

「それ完成させたの一応アタシなんだけど……」

「……ありがとうございます、先生」

「キャッ、ちよっと、何してるのよ……」

なでなでしてみると、顔を真っ赤にして手を振り払われた。

「……悠夜君、そろそろ帰ろっか？」

「うん、わかったからいるりちゃん目のハイライト消さないで」

「大丈夫。種弾け「そのネタ使い回しすぎ」……チッ」

「舌打ちかよ!？」

と、そんな風にふざけていると教室の風景が薄れ始めた。

「あとはアンタ次第よ」

「どうにかして扉を見つければ、ここから出られる」

「私は先に戻っておくから、早くしてね」

そう言っているりちゃんが手をかざすと、瞬時に光景が変わった。

『またいつか、会いましょう』

『絶対絶対、約束だよ、お兄ちゃん!』

最後に聞こえた声に、俺はフツと笑って咳く。

「……当たり前だろ」

世界が暗転した。

……ここは、どこだ？

目を開けば、俺は何もない、ただ真っ白な空間に佇んでいた。

前も後ろも、上も下もわからない。ただ、地に足が着いているのはわかる。

「……なあ、俺は」

ポケットに両手を突っ込み、自分が向いている方向へと進む。

「……この道を選んで良かったんだよな？」

『……ヴヴヴヴヴ』

後方から聞こえる獣のうなり声。振り向けば、黒い犬のようなかたちをした『何か』がそこにいた。ざっと見ても、数は10はくだ

らない。

「上等、やる気か？」

獣が雄たけびを上げて襲い掛かってくる。がその前に、俺の右腕につけられた白金の腕輪が光り輝いた。

「クイック
即時召喚」

《Fクラス 有野悠夜 総合科目 6587点》

まだ科目ごとにバラつきはあるが、このペースなら高橋先生に並ぶ成績を得るのも時間の問題だろう。

選択武器は『サムライ・ソード日本刀』だ。

「でえええいつ!」

刃を横に一閃、獣はあっさりとそれを避ける。

その隙に他の獣が一斉に飛び掛ってくるが、すんでのところで屈み、バックステップで距離を取った。

なんだ……? こいつら、異常に動きが良い。

と、その時俺の目に何かの点数表示が映った。瞬時に自分の目を疑った。

《UNKNOWN x 15 総合科目 平均5500点》

「嘘だろオイっ!?!」

「何こいつら!? てつきり噛ませ犬な雑魚キャラかと思つて余裕ぶっこいてたよ!?」

「くっ、一撃が重過ぎるだろ……ッ!」

猫パンチならぬ犬パンチをモロに食らい、俺の召喚獣が吹っ飛ぶ。

「チィッ……!」

この状況を打開しなきゃまずいな……何か、使えるものは?

思わず辺りを見回した後、俺は自分の左の手首につけられたリストバンドを思い出した。

頭の中で瞬間的に戦術を組み上げる。

「よし、これなら!」

召喚獣を起き上がらせる。

同時に切り札の腕輪を起動する。コピーするのは……自分の腕輪!

「チェック複製開始 メイト完了」

オリジナルの腕輪と、コピーした腕輪の二つが召喚獣に取り付けられる。そしてそれらが同時に輝きを放った。

「スタート・アップ二重作動、『スタート・アップ透過』!!」

透過に付与された若干の加速。そのスピードは、二回同時に行うことによって本来の2倍、いや2乗のスピードをたたき出す!

「お前らには 速さが足りてない!」

召喚獣が一瞬のうちに姿を消し、そして獣たちの背後に現れた。

「『エンド・アウト透過終了』」

言葉と同時に、すべての獣が腹や頭が切り裂かれ消し飛ぶ。

「これが、『デュアル・ステルス二重透過』だ！」

ビシリとポーズを決めながら、かつこつける俺の前で、すべての獣が地に倒れ伏した。

「さてと、こっから出るには……簡単、だな」

ふと思いついたアイディアに、我ながら単純だと笑う。

「武器破棄、選択 『ビームランチャー荷電粒子砲』！」

白銀の刃が消え、代わりに黒光りする、無骨なデザインの巨大な銃器が召喚獣の手に握られた。

周囲のイオン粒子などを取り込み、砲口が青、白、そして白銀に輝く。

「俺歯を食いしばれよ、目覚まし夢エ！ この現実_{目覚まし}は、ちつとばっか響くぞッー！！」

引き金を引く。放たれた白銀のレーザービームは何もない空間に突き刺さり、引き裂き、蹂躪し、押し広げ。

ピシリ。

世界そのものにヒビが入る。

ピシリ、ピシリ。

破片がそこらに落下する中、俺は一度、もう一度だけ、後ろを振り向いた。

「……またね、お兄ちゃん」

「がんばりなさいよ、悠夜」

「こつちにきたらアタシのえらい授業聞かせてやるわよ」

最後に見えた笑顔が、憂いも悲しみも、喜びも楽しみも、絶望も希望も含んでいたに気づき、悠夜は自嘲するように口元をゆがめた。

「今後こそ、間違えるもんか」

世界が砕け散る。鏡の破片のようにキラキラと輝くシャワーの中、俺の意識は暗闇に沈んでいった。

〈宿命編〉 第41章 そして俺は世界を壊す（後書き）

前回あった非処女うんぬんの話はボツになりました。参考意見（と
いっても一つだけですが）ありがとございました。

黒金の腕輪については色々問題点もあるでしょうけど、基本的には
自分も味方も敵もコピーできるってことで一つ。

〈清涼祭編〉第42章 オリ主は死にません！（前書き）

お久しぶりです。

なんとか頑張つて、学業の合間合間を縫って書き上げました。
量的には不十分ですが、お楽しみいただければ幸いです。

〈清涼祭編〉 第42章 オリ主は死にません！

「そこを」

声が遠くに聞こえる。ああ、俺は何を……していたんだ？

「……悠夜君、聞いているかしら？ あ、目は開けないで」

ぼつっとする意識の中、静かに響く女性の声。

「……リ ソフォース？」

「私は小林沙苗じゃないから。イメージC.V.的にはそうらしいけど、俺が言えたことじゃないけど、そんなメタ発言していいの？」

女性 いるりちゃんにそう質問すると、実に辛らつな答えが返ってきた。

「知ったこっちゃないわ」

「うわ素が出た」

「で、今からあなたには劇をしてもらっわ
「はい？」

唐突な命令に、思わず聞き返す。

「役回りは、強烈な説教をかます熱血漢。要するには上条さんね」
「どの幻想をぶち壊せばいいんで？」
「とりあえずそのアニメ脳で」

アホらしい会話を続けながらも、俺は彼女の言葉を噛み砕く。
つきつめると、あれか。よく考えたら俺大暴れしたわけだから、
それを誤魔化せってわけか。

「……………あれ？ それ言い出したのって」

「そうよ、君が言い出したの」

そう言えばそうだった。トラブルが発生した時のために作っておいたマニュアルには、『召喚大会中、何らかの理由（ただし非道な手段を用いられた場合に限る）で有野悠夜が敗北しそうになれば、演劇に見せかけてリセットする』なんて書いたな。

それを利用したのか、いるりちゃんマジパネエっす。

『有野君は……………やらせません！』

『何の武器も持たないお前が何言ってるんだ？』

ん……………？ 何か聞こえた。

少しだけ目を開けてみると、そこには俺と常夏コンビの間に割り込むようにして佇む天光院の姿があった。

「……………なんでさ」

「彼女は素でやってるわ。アッチのお二人も、劇じゃないはずなのに悪役にピッタリなセリフばっか言ってるわよ」

視界を動かすと、真上にいるりちゃんの顔が見えた。どうやら膝枕をされているらしい。

『……………通しません！』

『ハッ、通させてもらっぜ！』

俺はいるりちゃんとし目線を合わせ、頷いた。
全身のバネを使って、その場で跳ね起きる。

「まだ……俺は……終わってない」

なんとなくカッコつけてみる。劇だしいいよね？

「ッ、有野君!？」

「天光院……待たせたな」

気分は伝説の傭兵だ。

さながら某蛇のように宣言する俺に、会場が沸いた。

「主人公帰ってきたー!」

「有野君カッコいいー!」

「兄ちゃん、やっちゃんえー!」

様々な歓声が飛び交う中、俺は軽く手首を振って、不敵な笑みを浮かべ、握った拳を突きつける。

「満を持して……俺、参上!」

『『『『『フアアアアアッ!』』』』』

やっべえ、俺も盛り上がってきたんだが。

「そこまでだぜ、先輩方。天光院は……俺が護る」

「あ、有野君!?!」

ノリノリで宣言する俺。恐ろしいほどハイになっている。

「行くぜ、即時召喚!」
クイック

《Fクラス 有野悠夜 日本史 502点》

横で竹原教頭が何か言う前に、白金の腕輪を起動させる。

召喚フィールドが形成されたことに気づいたのか、常夏コンビは
ご無体な笑いを浮かべた。

「おうおう、戻ってきたと思ったらヒーロー気取りかア?」

「うっせえんだよ。ごちゃごちゃ言ってるねえで召喚しろ」

選択した武器は『サムライ・ソード日本刀』。点数的にいえば他の武器で瞬殺する
のが適当だが、今回はヒーローっぽくしなきゃいけないのでこの装
備に。

「サモン試獣召喚!」

向こう側もすぐに召喚。武装はプレートアーマーとシンプルな諸
刃の剣。見る限りでは上質そうだが、点数的には俺のほうが上回っ
ている。

《Aクラス 常村勇作 & Aクラス 夏川俊平
日本史 209点 197点》

「チエック複写開始………メイト完了」

相手の点数を目で確認しつつも、「切り札^{ジョーカー}」を起動して自分の腕輪をコピー。俺の召喚獣の腕に新たな黄金の腕輪が装着された。

「なッ!?!」

「これが、俺の新しい力だ」

明らかに厨二溢れる台詞をぶちまけながら、そのまま召喚獣に前傾姿勢をとらせる。常夏^{あつしゅう}コンビも慌てて迎撃の姿勢をとるがもう遅い。

「『デュアル・ステルス
二重透過』!」

俺の新たな必殺技　こう言うと正直幼稚かつ安直で厨二っぽいよね　を発動。二つの腕輪が同時に黄金の光を放つ!

「全てを、振り切るぜ!」

残像すら振り切り、超高速でステージを駆け巡る。

右上からモヒカンの方へ袈裟切りに刃を振り下ろし、右腕を切断。そしてそのまま離脱。

一旦着地した後反動を利用してすぐさま突貫、今度は坊主頭の左足を根元から叩き切り、返す刃で首を真上へ跳ね上げた。

「なッ……!?!」

続いて膝をモヒカンの顔面に叩き込む。よろけたところで逆袈裟切りに左腕を切り飛ばした。

そして軽く跳躍、落下の勢いをこめて剣を地と垂直に一閃。

《Fクラス 有野悠夜 VS Aクラス 常村勇作 & Aクラス

夏川俊平

世界史 302点

0点

0点 》

「9・8秒……それがお前達の絶望へのタイムだ！」

ビシリ！ と人差し指を突きつけ大声で宣言。いやタイムとか計ってないけどさ。

『『『うおおおおおおお！』』』

沸き立つ観客。ステージの幕が徐々に閉じ始める。と、袖からいるりちゃんがひよこつと顔を出した。

(悠夜君、悪いけど最後のシーンお願いできる？)

(最後のシーン？ 正直台本ないんでキツいんですけど)

(ツギ、モンクイッタラ、ユウハンヌク)

「マジすんませんでした」

超怖い。何あのオーラ。後ろに阿修羅像が具現してるんですけど。

(で、何すればいいの？)

(簡単。天光院さんと適当にイチャついて)

(了解)

(あれ？ なんか普通に了承された？ って、ちょっと悠夜君！

冗談だって！ ちょっと！)

いるりちゃんが何か必死に訴えていたが、俺は気にせず天光院に歩み寄る。

驚いた表情

まあ突然復活して厨二全開な発言をしまくったん

だから無理もないが　をする彼女の前髪をそつと掻き上げると、軽く口元を歪める。微笑んでるつもりです。

「天光院、大丈夫だな？」

「へ？　は、あ、あああ、はい……」

呆けたような返答に、ついつい笑みがこぼれる。

「ごめんな、俺、弱くて……」

「　ッ！　そんなこと、全然ないです！　有野君は、いつだって強くて……何にだって負けない、カッコいいヒーローじゃないですか」

そう言っではじける様な笑みを見せる天光院。なぜだか、その美しくて儂げで、壊れてしまいそうな笑顔が　さくらにダブツた。

「俺は、弱いよ」

「え？」

瞳を真っ直ぐに見つめながら、俺はやんわりと口を開いた。

「夢を見た。ずっとずっと、幸せが続く夢。皆笑ってて、いなくなつた人も傍にいて、大切な人が誰も欠けてない、夢」

そして、俺が壊した世界。

「幸せの意味も分からず暮らしている人を見た。幸せを唐突に奪われ、絶望に叩き落された人も見た。理想と現実の境目は、きつと本人じゃないと決められないんだと思う。俺が夢を見たのは、きつと理由があるから。理想と現実の境界を、俺自身が決めなきゃいけない

いんだ」

今なら分かるよ。皆は幸せの意味が分かっていない。俺はそれを奪われた分、大切さ、貴重さ、そして失った時の喪失感を知っている。

だからこそ、あんな理想を、夢を見た。

「^{境界}答えは得た。大丈夫だよ天光院。俺は、これから頑張っていくから」

幕が閉まっていくなか、だんだんと俺と天光院の顔が近づいていく。どちらからというわけではない。磁石のように、互いに引き寄せられているだけだ。

「天光院……」

「有野君……」

そして。

『あんな所にモバイルスーツが』 (ボソツ)

「なんだって!?!」

〈清涼祭編〉第42章 オリ主は死にません！（後書き）

今後も不定期ではありますが、細々と更新は続けようと思いつた佐遊樹です。

なぜか天光院の影がひどく薄かったので、次は天光院のターンの方向性です！

他にもご要望があればどしどしご応募（？）ください！

では、今後も応援よろしくお願いします！！

〈清涼祭編〉 第43章 オリ主は大抵リードが上手い謎（前編）（前書き）

前中後編と三つに分けました。

天光院可愛いよ天光院。

あと鉄人と悠夜を絡ませると恐ろしいほど会話が進む。

多分明久グループとは合流しない。

清涼祭一日目って原作だと姫路たちが誘拐されてたけど、この小説ではそれまでが長い。ひたすらに長い。誰か助けて。

《清涼祭編》第43章 オリ主は大抵リードが上手い謎（前編）

体は欲望でできている。

おさわり有りで、覗きは鉄板。

幾たびの修羅場を越えて無罪。

ただの一度もしり込みはなく。

ただの一度も理解されない。

彼の者は常に独り、自室の中で女体に酔う。

故に、生涯で妻はなく。

その体は、きつと欲望でできていた。

「とういわけで申し訳ありませんでした」

「意味が分かりません……」

もうすでに空はオレンジ色に染められており、清涼祭一日目は残すところ数時間となっていた。

体育館裏で天光院に土下座する俺。いや、ホントいるりちゃんが何もしなかったらスキューン！ っっていったね。

「いや、ホントごめん」

「いえ……ああいったことは、ムードに流されてすることじゃないですもんね」

正論にぐうの音も出ない。

俺ががっくりと落ち込んでいると、天光院はクスリと笑って、俺の手をとる。

そのまま海から引つ張りあげるように立たされた。

「じゃあ、責任をとってください」

「責任……」

思わず天光院のつま先から頭のとっぺんまでを見て、ぐくりとつばを飲み込む。

「たあっ」

「ぐはっ」

唐突にチヨップを食らった。痛えなオイ。

「なんですかそのいやらしい視線は……」

「いや、責任って……なんか俺が《ズキューン!》したみたいじゃん」

「堂々とわいせつ発言しないでください!」

自分の胸を隠すようにして顔を赤くする天光院。

なんていうか、あれだ。うん。本当に……可愛い。

「じゃあさ、責任、取るよ」(キリッ

「ぶえ!?!」

「今から、清涼祭行こうぜ」

彼女の左手をそつと握って、俺は屋上を後にする。

「え、え？」

「罪滅ぼしってわけじゃないけど、一緒に回らないか？」

夕暮れでよかった。耳が熱い。きつと顔も耳も真つ赤だ。

「……………はい」

振り返れば、同じように、オレンジ色の顔の天光院がいた。

清涼祭において、原作でピックアップされていたのはFクラスの中華喫茶とAクラスのメイド喫茶ぐらい。

だが、実際にはもっと多くの出店がある。

「それで、なんでアンタはそんな暑苦しい格好をしているんだ」

「さあな。時代の流れだろう」

やけにハードボイルドなセリフを吐き捨てるのは、ハチマキに半そでの白いシャツ、上から青いエプロンという姿の鉄人。鍛え上げられた肉体が（比喻表現抜きで）目に毒だ。

「アンタは何のために、焼きそばなんて作ってるんだ？」

「俺は生徒のためにヘラを握っている。……………いいか、つまらん三文芝居に付き合うのはあれで終わりにしろ」

「……俺は、どうすればいいんだ？」
「やるべきことなど、自分で探せ。そして、明日の自分に伝えるんだ」

鉄人マジパネエ。何このインスタント人生相談。

「あの、有野君？ さっきから何の話？」

「いや、ちよっと……な」

「はあ」

よくわからない、という風に首を傾げる天光院。普通的女子高生がやってもドン引きするだけだが、美少女がやるから画になる。

「そつだ、焼きそばでも食っていくか」

「はい、そうですね」

「……一つ300円だ」

お手ごろプライス。財布から1000円札を取り出し、焼きたてと作り置きを一つずつ頼む。

「あの、有野君？」

「いい。こういう時は、男が払う。一般教養だ」

天光院をなだめつつ、俺は鉄人を見やった。

「焼きそばを買ったな。焼きそばは空腹を満たす最高の食物と言える。清涼祭を楽しむ必需品だ」

「そつなのか？」

「勿論だ。焼きそばに小腹を満たされたという学生は古来より数知れない」

「みんな……これを食べってきたのか？」

「当たり前だ。焼きそばをいかに食い尽くすが清涼祭の成否を決定するといっても過言ではないだろう」

「……………」

「ただし、いかに焼きそばといえど生ものだ。落としたりするとすぐ駄目になるぞ。とにかく焼きそばは大事に運べ。丁寧に扱えば焼きそばもきつとお前に応えてくれる。真心をこめて食べるんだ。必要なのは焼きそばに対する愛情。粗略な扱いは許さんぞ。いいな」

なんだろう、宇宙から別作品の電波を果てしなく受けた気がする……いや、気のせいか

「ところで雷電……すまん、悠夜だったな」

「何と間違えたア!？」

明らかに蛇だろうがテメエ! さてはそのハチマキは無限バンダナの代用品か!

「……………なんでコント?」

「違う天光院、これは俺^{オリ主}にとって切実な問題だ」

いくら喧嘩慣れしているとはいえ、所詮は一般人。軍人とガチでやりあうなんて、勝負にすらならない。

嘘だろ……? この小説、バカテスだけじゃなかったのかよ……

「何をたそがれているんだ?」

「アンタに分かってたまるか!」

天光院の手を引いてさっさと歩き出す。

近くのベンチを見つけると、ドカッと座り込んだ。

「うー、あー、どうしよ」

「？」

「マザーベースにミサイル撃ち込んで……いや迎撃されるか……へりて特攻？ 勝てるわけねー」

「なんかすごくアブナげなことブツブツ言ってますか!？」

むう、イカンイカン。天光院に心配をかけてどうする。

「まあ……とにかく食おうぜ」

「あ、はい」

作り置き焼きそばを口に運ぶ。……悔しいが、旨い。

むう、やはりあの男は超常的な廃スペックだ。勝てる気がしない。

「ふうー。ふうー」

焼きそばを冷ましてから食べる天光院。恐ろしいほどに可愛い。

髪が邪魔らしく、時折手でかき上げている辺りもいかん。これはけしからん。

「髪、邪魔だろ？」

「ふえ!？」

長い金髪を高い位置で一つに束ねてやる。チラッと見えたらうなじが綺麗だ。髪もサラサラしていて絡まない。

非常に好ましい。理想的だ。

といかだな、うん。髪を結ぶためにベンチを立ち上がって後ろに

回りこんだんだがな、あれだ。制服を押し上げている胸部の二つの
ふくらみがくつきりと見えているわけでした。

「Dか」

「はい？」

いやいや、なんでもないのだよ天光院君。

とにもかくにも、清涼祭はまだまだ終わりそうにない。

《続く》

《清涼祭編》第43章 オリ主は大抵リードが上手い謎（前編）（後書き）

> 体は欲望でできている。
正義の味方に謝って来い。

> 「じゃあ、責任をとってください」
腹が膨れていたら悠夜君はゲームオーバー。世間的に。

> 「いや、責任って……なんか俺が《ズキューン！》したみたいじゃない」

> 「堂々とわいせつ発言しないでください！」
何を言ったかって？ ご想像に（省略されました）。

> 「じゃあさ、責任、取るよ」（キリッ
悠夜君渾身のキメ顔。台詞が台詞だけにちよい締まってないけど乙女フィルターで問題なし）。

> 「アンタは何のために、焼きそばなんて作ってるんだ？」

> 「俺は生徒のためにヘラを握っている。……いいか、つまらん三文芝居に付き合うのはあれで終わりにしろ」

> 「……俺は、どうすればいいんだ？」

> 「やるべきことなど、自分で探せ。そして、明日の自分に伝えるんだ」

どこの蛇だ。ていうか悠夜君が雷で（略

> 「焼きそばを買ったな（ry
だからどこの蛇（ry

> 「さてはそのハチマキは無限バンダナの代用品か！」

違う、出てくるのは弾丸じゃなくて焼きそばの材料だ。

>非常に好ましい。理想的だ。

美少女育成に興奮を覚えてる変態ですね分かります。

>制服を押し上げている胸部の二つのふくらみがくつきりと見えて
いるわけでした。

「おかーさん、二つのふくらみってなーに？」

「シャラップ」

>「Dか」

何がかはご想像にお任せします。

《清涼祭編》第43章 オリ主は大抵リードが上手い謎（中編）（前書き）

天光院とのデートもどきは終わらない。

原作知識が3・5巻までしかないため、読者は知っいても彼が知らないキャラがたくさん。

三上可愛いよ三上イイイイイイイイイイイイイイイイ！！

〈清涼祭編〉第43章 オリ主は大抵リードが上手い謎（中編）

焼きそばも食べ終わり、俺と天光院は再び出店の集落を訪れていた。

「あ、射的がありますね」

見れば、二年Dクラスが主催で射的の出店をやっている。

景品にはぬいぐるみがたくさん。天光院の目が釘付けになっている。視線の先には、小ぶりな熊のぬいぐるみ。

「おっ、有野じゃんか。やってくか？」

「平賀か。いいぜ、いくらだ？」

「5発200円のトコ、7発200円でどうだ？」

笑顔で値下げをしてくれるDクラス代表、平賀源二。

俺よりも明るい紺色の髪で、顔立ちも整っている。

見ればかなりのイケメンで、周囲の女子生徒も笑顔で彼を見ている。……死ねばいいのに。

「じゃ、200円」

「よし、これ使え」

二枚の硬貨と、一丁の遊戯銃を交換した。顔を銃身に寄せ、狙いを定める。ターゲットは、さっきから天光院がガン見している熊のぬいぐるみ。

「チッ」

一発、続けて二発と引き金を押し込むがどちらの弾丸も熊の頭上を通り過ぎていった。

むう……予想外に難易度が高い。

「下方修正して、つと」

三発目。右足を直撃するも、倒れない。続けざまに四発目、五発目　右にそれた。

「おいおい有野。なつてねえなあ」

「……コツでもあるのか？」

ニヤニヤと口元を歪めながら、平賀がちこらへ歩いてきた。

「いいか、まず上体を倒す」

「匍匐ほふく射撃ってやつだな」

「頭は銃口と同じ高さ」

「ふむふむ」

「あごを引いて、狙いを少し下につける」

「なるほどな」

後は撃つだけだ、と平賀が男らしい笑みで言った。マジ、イ

ケメン死んでくれないかな？

引き金を引く。六発目と七発目は熊の顔面を穿ち、柵の奥へと弾き飛ばした。

「おつ、おめつとさ〜ん！」

「……商売になるのかよ」

平賀はまあいいってことよと笑って誤魔化す。こいつの誤魔化し

パターンは笑顔しかないのか。

「そついえば、Eクラスが面白そうな出し物やってたぜ」

「本当か？ 色々とすまないな」

「またもや清清しい笑顔で「別にいいさ」と言う平賀。」

と、天光院がチヨイチヨイと俺の制服の袖を引っ張ってきた。

「……私も、やりたいです」

上目遣い＋首傾げ 俺のライフはマイナスになった。

「平賀、古来より女性の涙は最強の武器だと思わないか？ 女を泣かせた瞬間、その男は最低最悪のレッテル、『女泣かせ』という称号を頂戴することになる。それを踏まえて考えると、近年創作物でよく見られる涙目で上目遣いというのは非常に強力なウエポンなんだと思うんだ。もちろんそれを故意に使っている悪女もいれば、自覚なしに使っている天然もいる。そして今現在俺たちの目の前にいるのはその絶滅危種とうたわれつつある天然種。無論これは保護すべきだよな？（倍速音読）」

「正直何言ってるのかサツパリ分からんが、お前が正しいと思ったことをやればいいと思うぞ！」

互いにグツとサムスアップ。なんか青春っぱさのベクトルを激しく間違えている気がするが、気にするな。俺は気にしない。

「それじゃ、200円」

「毎度あり」

無論俺が払う。天光院が不服そうに俺を見るが、気にする（ry

「平賀」

「あーあー、いらっしやいませ！ 悪い有野、こっちは忙しいからお前が教えてあげといてくれ。あーお姉さん！ この銃を使うんですよ！ 持ち込みは不可ですよ！」

ニヤつきながら接客へと向かう平賀。……イケメン＋エアリーディング力高しって、リアルにハイスペックだなオイ。

「いいか天光院。まず上体を伏せる」

「はい」

台に伏せる天光院。お尻が無意識に突き出され、道行く男子の視線を釘付けに

「ソレイジヨウミルナラ、ブチコロスゾ」

『『『すいまつせんしたー！』』』

ライフル銃で上空のカラスを撃ち落しながら言うと、みんな土下座して謝ってくれた。

「？ どうしたんですか？」

「いいや。……銃が火を噴かなくて良かった良かった、ってことさ」

そのままレックスン続行。

俺の手を天光院の手に沿え、同じように体を倒して密着する。

「はえっ！？」

「次に銃口と視線の高さを揃える……どうし、た？」

天光院の顔が赤い。眉毛の一本一本が見える。肌荒れもなく、キレイだ。

「次に、あごを引く。そして狙いを目標より少し下につけて 引き金を引く」

彼女の右手を握り、指の一本一本を重ね合わせる。鼓動が伝わり、汗と汗が混ざる。

「きゃっ」

唐突に引き金が引かれた。引いたのは天光院。弾丸は真ん中の段に置いてあった、シンプルなデザインのペアネックレスを向こう側へ叩き落した。

「おっ、上手いねー！ 彼氏さんに手伝ってもらったおかげかなー？」

「か、かかからかわないでください！」

なぜか過剰に反応する天光院。俺を振りほどき、店番の女の子に詰め寄る。

あれ？ 今気づいたら、俺メツチャ恥ずかしい格好だったじやね？

瞬間、顔が焼け付くかと思った。耳まで熱い。うわっ、ちょっと待て待て待て待てままままっつって

「て、天光院！ エクラス！ エクラス行こう！」

「へ？ あ、ちょっ、有野君ー！？」

天光院の腕を掴み、大急ぎで引きずるようにして連れて行く。後ろから聞こえた、「お二人さん、お幸せにー」なんていう平賀の言葉が、余計になぜか体温を上げる。けれど、嬉しい。

わけが分からないけれど、掴んだ腕から、天光院の温もりが俺に移ってきているような気がした。

そしてEクラス屋台前。

根っからの体育会系であるこのクラスは、その運動能力を生かし、あるうことか校舎の壁を利用した超大規模ストラックアウトを開催していた。

ルールは簡単、数種類あるボールの中から一つ選び、それを投げて蹴つてもいいから、壁にぶつけるといふもの。複数人による協力プレーも可。

屋上に設置された的は最も点数が高くなっており、窓を割ると減点だ。

「ていうか、これちゃんと学校側の許可得てんのかよ」

「その点については問題ないわ！」

思わず感想を漏らすと、バーン！ という効果音とともに、一人の少女が声を上げた。

「あ、中林だっけ」

「はい、中林なかばやしひろみ宏美。Eクラス代表です」

俺の言葉に、天光院が補足をつける。

なるほど、Eクラス代表ねえ……原作では未登場キャラかな。ひよっとしたら3・5巻以降に出てるのかもしれないが。

「よし、一回やってみるか」

「百円で三球よ」

受付の女子が、俺が差し出した百円玉を愛想なく受け取る。
名札を見ると、『三上^{みかみ}』と書いてあった。

「ボールにはどんな種類があるんだ？」

「一応、野球ボールやピンポン玉、大きめのでいえばバスケットボールやラグビーボールね」

おおう、愛想がないと思っていたら、予想外に丁寧な解説じゃないか。

「三上さん、三球というのは、三種類のボールを選んでもよいのですよね？」

「ええ、構いませんよ」

そっぽを向きながら、興味なさそうな三上。

……すまん、外見がストライクゾーンど真ん中を撃ち抜いているんだが。

やべえ。マジやべえ。こんな萌えたの久しぶりだね。黒髪っていう時点で好感が持てるのに、ゆるく一つに束ねた短い後ろ髪、アク

セントになる前髪につけられたヘアピン。
アメジストのような色調の瞳は若干吊り気味で、眉もそれになら
って上がりがちだ。

俺……萌え死んでもいいですか……？

「三上、悪いが一球で十分だ」

何の根拠もなく言い切る俺。言い終わった後にどれだけ迂闊な発
言であったかに気づく。

「……は？」

対する三上は呆れたような表情で俺を見ていた。

上等、もうここまでできたら腹括ってやるよ！

「なあ三上」

屋上に設置された最高得点の的を見上げつつ、俺は某弓兵がごと
く言い放った。

「別に、的を打ち抜いてしまっても構わんのだろ？」

ポカンと三上の口が開く。俺はそれを見て満足気に笑みを浮かべ
ると、硬式の野球ボールを手にとって挑戦者の立ち位置に向かった。

「天光院、ちょっと手伝ってくれ」

「え？」

立ち位置からの的を見上げつつ、俺は天光院に声をかける。

「け、けど私、足手まといに……」

「天光院」

言葉をさえぎり、ボールを押し付けた。

そして、アニキを気取りながら堂々と言い放つ。

「俺はお前を信じる。だから、お前もお前を信じる。俺が信じるお前を信じる」

天光院は、少し考えた後、コクリと頷いた。

俺も黙りながらバッターボックスに入り、三上からさつき受け取った金属バットを握り締める。

「……夢を抱きしめる」

そばにしゃがみこんだ天光院が、ボールをためらいがちに、放り投げた。

短い放物線を描きながら、それはストライクゾーンに入る。

「そして、どんな時でもバッターの誇りは手放すな……！」

バットを振り抜く。片足を踏み込み、全体重を乗せて、鉄の棍棒を小さな白球に叩きつける

> ターゲットは、さっきから天光院がガン見している熊のぬいぐるみ。

彼女の趣味は意外とファンシー。まあ当初はフランケンシュタインがごとくつぎはぎの人形にする予定でしたが。

> マジ、イケメン死んでくれないかな？

つまりお前も死ぬが構わないんだな？

> 「あーあー、いらっしやいませ！ 悪い有野、こっちは忙しいからお前が教えてあげといてくれ。あーお姉さん！ この銃を使うんですよ！ 持ち込みは不可ですよ！」

彼はエアリーディング1級相当のようです。

ていうかお客のお姉さん、銃持ち込もうとしたんすか。

> ライフル銃で上空のカラスを撃ち落としながら言うと、みんな土下座して謝ってくれた。

え？ 実弾は入ってない？

こまけえことは気にすんな！

> あれ？ 今気づいたら、俺メツチャ恥ずかしい格好だったじやね？

だったんじゃね？ が正解。

『ん』が抜けてるのは、すでに悠夜君がテンパってるからです。

> 「はい、中林宏美。Eクラス代表です」

もし悠夜君が7・5巻を読んでたら顔を合わせた瞬間嘔き出していたでしょう。

> …… すまん、外見がストライクゾーンど真ん中を撃ち抜いているんだが。

悠夜君の趣味〃作者の趣味

> 「そして、どんな時でもバッターの誇りは手放すな……！」

クラウドよりザックスが好きなんだぜ。悪いか!?

鈴村サイコ（以下、検閲により削除されました）

次回で終わる予定が、なぜか（終編）なんて書いてた。
天光院とのデートは次回まで。（終編）はその後の話。

着々と近づく、運命の対決……！

うちのオリ主のメンタル面はあんまり強くないことが判明。誰か助けて。

《清涼祭編》第44章 オリ主は大抵リードが上手い謎（後編）（前書き）

前回までのあらすじ

てんこーいん は めいんひろいん になっただぞ！

〈清涼祭編〉第44章 オリ主は大抵リードが上手い謎（後編）

白球が、空高く舞い上がる。

なんだ、今のは。

白球が、一直線に飛行する。

なんだ、今の感覚は。

白球が、屋上へと到達する。

なんだ、今の動きは。

白球が、立てられた的を撃ち抜いた。

今のは、一体何なんだ！？

体が、自然と動いた。

まるでどうすればいいのか知っているように。

まるでその動作をあらかじめ知っていたかのように。

頭が、自然と考えた。

どれほどの勢いで打てば、屋上に到達するのか。

どれほどの角度で打てば、的に当てることができるのか。

四肢が、自然と動いた。

いつもより強大な腕力で。

いつもより強靱な脚力で。

今のは、本当に俺か。

今、ボールを打ったのは、本当に『有野悠夜』なのか？

分からない。分からない、分からない、分からない分からない分からない分からない分からない
カラナイワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイワ
カラナイワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイワ
カラナイワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイワ

「有野？ 顔色悪いわよ？」

「うおっ、三上か」

いつの間にか、近づいていた三上が俺の顔を覗き込んでいた。

確かに脂汗をかいていて気持ち悪い。多分血も引いているだろう。

「ほら、これ」

「ん、悪いな」

三上から受け取ったハンカチで額の汗を拭く。なんだか世話になりっ放しで申し訳ない。

「あれ、そういえば天光院は？」

「あの子なら景品を受け取ってるわよ」

指差された先には、大きなサンドバックをもらって引き攣った笑みを浮かべている天光院の姿が。

「……………あれ、何？」

「……………景品よ」

苦笑いする三上。俺は思わず嘆息した。

さすが体育会系のクラス、とでも言えばいいのか？

「まあ、重そうだし手伝ってくる」

「彼女さんでしょ？ 大切にしなさいよー？」

「うりゃうりゃ、と肘でつつついていく三上。

密着できるのは非常にハッピーだが、天光院からどことなくキツめの視線が送られてくるのはアンハッピーだ。

「そんなんじゃない」
「あらそう。意外ね」

あっさりと引き下がる三上を見て、俺はふと気づく。

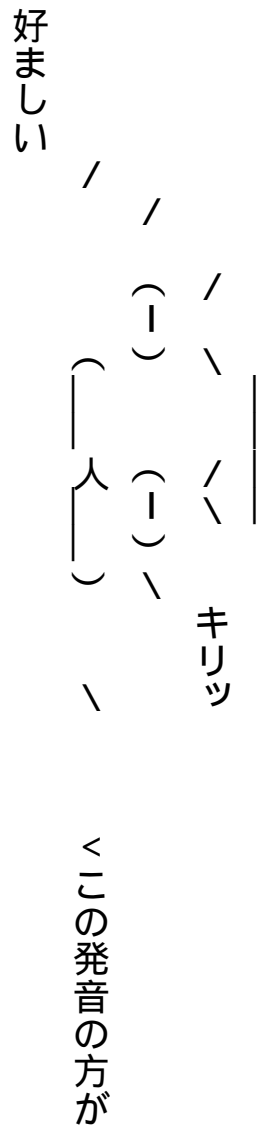
「そういえば、お前下の名前なんだっけ？」

「私？ 私は美子よしこっていうのよ」

ふんふん、美子ねえ……

「じゃあ美子と……うん、俺としては、この発音の方が好ましい」

イメージ図



ポント、と小さな爆発音とともに、三上 いや、美子の顔が真っ赤に染まった。

「？ どうかしたのか？」
「……別になんでもない」

プイとそっぽを向いている美子。異常にかわいい。

「有野君………？」
「あべし！」

突然サンドバックが飛んできた。真横から投擲されたそれに反応できず、俺はモロに食らって吹き飛ばされた。

「だ、大丈夫！？」
「問題ない………ちょっと“不運”と“踊”^{ハードラック} つちまっただけだ………」^{ダンス}

校舎に叩きつけられ、痛む体を引きずりながら俺は何とか立ち上がる。ていうかあの質量の物質を投げつけてくるって、どんな馬鹿力だ。

「あ、天光院さん？」
「何でしょう、みいかあみいさん？」
「ちよっ、怖っ」

背後に紅蓮のオーラを立ち上らせて、実にいい笑顔をする天光院。全力でビビる三上。

いやはや、恐ろしいことこの上ない。

「俺は問題ない」
「私に問題があるんです」

男としてこれだけは譲れない！

「……………はい？」

胸を張って堂々と宣言した俺に、周囲の空気が凍りつく。

誰が……………誰が魔法使いなんぞになるかッ……………！

「どうした天光院。顔が赤いぞ」

「あつ、あなた最低です！」

メメタア！ と俺の頬に天光院の拳が絶妙な捻り加減で叩き込まれた。あ、なんかボキッって逝った（誤字にあらず）気がする。

「なあ天光院。今の俺は普段とは一味違うぜ？ 今なら《ピー！》しながら《ズキューン！》を弄んだり、《見せられないよ！》もできると思っんだ」

「むっ、無表情でなんてこと言ってるんですか！？」

エロイこと言ってる。

「とにかく天光院、今日は今から ふじっ」

「ほらっ、あっちあっち！ Bクラスの方へ行きましょう！」

チョークスリパーをキメつつ、俺の体を引きずって進む天光院。若干意識が落ちつつある俺は、暗闇に染まっていく視界の中、三上のポカンとした表情を見て思わず笑った。

ぞまぁみろ。

世界が暗転した。

「そんなに女装がしたいのか、アンタはっ！」

「うるさいっ！ 誰がこんな服好き好んで着るか！」

所変わってBクラス屋台。

天光院に引きずられた後らしく、制服の所々に汚れがついた俺は、綿菓子在必死に作る一人の男子と言い争いをしていた。

「なぜ女装だし」

「好きでやってるわけじゃないと言っただろう」

「はいはいワロスワロスww」

「舐めてるのがゴラァーッ！」

現在わたあめ製造中な男子生徒、根本恭二 愛称『卑怯者』は、
元気に女装していた。

「女装とかマジウケるんですけどww」

「おいお前、それ以上バカにしてみる」

「あがー」

「ぶん殴る……って話の途中で茶々を入れるなッ！」

「うwは今更ツッコミ気取りとかwマwジwウwケwるw」

「さつきからうっとうしいな『w』って！ やかましいー！」

「wwww」

「だから止めるって！」

「wwwwwwww」

「ねえ止めて！ ていうかどうやってしてんのソレ!?!」

「WWWシネWWW」

「入った！ 間になんか入ったって、怨霊的なものが！」

と、根本いぢめ（断じていじめではない）はここまでにして、俺は少し真剣な表情になって屋台の中へと入る。 いや、入る前に携帯電話を懐から取り出した。

「あーもしもし？ 匿名希望でいいですか？ はい。 えっとですねえ、立ち聞きしてしまったんですけどお、文月学園ってトコの近くのカラオケボックスなんですが」

通話終了。 詳しくは、今後のお楽しみってわけだ。

俺はケータイを閉じると、屋台の中の女子に声をかける。

「あ、君。 ちょっと俺が入っとくから休んでいいよ」

「えー？ けど、有野君他のクラスなのに……」

「別にいいさ」

そう言つと、根本と一緒に店番をしていた女子は笑顔で頷き、店の裏へと駆けていった。

根本の正面にある屋台（Cクラス）では、代表である小山と天光院が何やら言い争っている。それが嫌でここに逃げてきたわけだが。

「なあ根本」

「あアン？」

「小山と、別れんのかよ？」

『ええいつ、カラーチョコなんて飾りよ！ 偉い人にはそれが分らないのよ！』

『違います！ チョコバナナにとってカラーチョコは見栄えを良くするための切り札です！』
リーサルウェポン

小山と天光院の子供じみた言い争いが、耳に響く。

屋台の中がわたあめ製造機の作動音しかない分、余計にそれらが大きく聞こえた。

「……別に、どうしようも俺の自由だろ」

「じゃあ、あいつのことは好きか？」

これは、俺が原作を読んで気になっていた一つの結末。

原作では、根本は完全な悪役として扱われていた。

姫路の純情な気持ちを弄び、卑怯な手段でFクラスを追い込もうとし、最終的には正義の味方達 主人公サイドによって敗れ去った。

さらに清涼祭編では彼女に自らの女装写真をバラされ、関係断絶の危機に陥っている。

俺も一読した後は、ざまあみろ、と思った。

けど、それで良いのか？

文章中で表現されていない、たわいもない日常の中での根本や小山の姿 こいつらのごくごく一面しか知らないくせに、勝手に彼らを悪役と、一方的にラベルを貼ってしまったていいのか？

無論、『空想』上の登場人物だから、感想を抱くのは各々の自由だろう。

だが、俺の目の前で展開されているのは『現実』だ。根本も小山も、一人の人間として存在している。

故に俺は、彼らのすべてを見て、それらを基に個人的主観と偏見に基づいて彼らとの付き合いを決めるだけ。

姫路の気持ちを弄んだのは非情だ。許せない。

だが、彼はもう、十分な罰を受けたんじゃないか？

「……有野、それを聞いてどうするつもりだ？ ついさつき別れ話を吹っかけられた俺を笑うつもりか？」

「噂だと小山はスイーツが好きらしいな」

「？」

唐突に話題を変える俺。怪訝そうに俺を見てくる根本だが、俺は懐から一枚のクーポン券を取り出した。

「少し前にオープンした喫茶店の割引券だ。カップルご優待、総額から30パーセントオフになる」

場所は木下の家の近く。前にいるりちゃんと行ったことがあり、その時に券をもらった。

「有野……」

「偶然余っていて、偶然すぐそばにお前がいて、偶然券を取り出したから、偶然渡すだけだ。他意はない」

そっぽを向きながら言い放つ俺。

男のツンデレとか本気で引く。現在進行形でやらかしてるところだ
けど。

「すまない」

「なぜ謝る」

「……お前が、見返りを求めないからだ」

オイ完全にキャラ違うだろ。卑怯者の『ひ』の字すらないぞ。い
つの間にこんな主人公キャラになってんだ。

あれか、平賀といいコイツといい各クラス代表はみんな主役の素
質でも持ってるのか？

「ところでなんだが有野」

「何だよ」

「こんな券もらっているということは、お前以前にもこの店に女の
子と……」

「明日への逃走ッ！ 現実からの逃亡ッ！」

根本が禁句を言い放つ瞬間、屋台を飛び出し目にも留まらぬ速さ
で校内を駆け抜ける俺。気分はリアル鬼ごっこ。

『有ア野君くウウウウウウウウウウウウ……………？ じつくり

O H A N A S H I しましょうね……………？』

『ちよつ、天光院さん！？ なんで釘バットなんて持って走り出し
てるんですか！？』

「ええい！ くそっ！ くそっ！ あーもうちくしょー不幸すぎま
すーっ！！」

誰か、俺の後ろから追いかけてくる幻想を殺してくれーっ！

なんとか天光院^鬼から逃げ、なだめ、殴られ、土下座し、生命の危機に瀕した俺は、屋上から沈み行く太陽を眺めていた。

「天光院、楽しかったか？」
「はいっ」

笑顔で頷く天光院。良かった、その笑顔が見ただけでも俺としては十分だ。

「ホラ、これ」
「ふえ？」

首から後ろに手を回し、天光院が射的で手に入れたペアネックレスをかけてやる。

「じゃ、じゃあ、有野君も」
「お？ お、おう」

今度は天光院が背伸びしてネックレスをかけてくれた。なんか顔が近い、吐息が当たる。ドキドキする。

「……幸せか？」
「……はいっ」

俺の愚直な質問に、彼女は弾ける様な笑みで答える。

シルバーネックレスが揺れ、夕日に輝いた。

〈清涼祭編〉第44章 オリ主は大抵リードが上手い謎（後編）（後書き）

実はこれで当分サヨナラです。

今も学校から授業中に投稿しています。意味がわかるな？

そう 母親がPCを撤去しやがった。

俺に何をしろと！？ え、勉強？ あ、すみません。

というわけでしたらサヨナラ。一応キリのいいところだったので勘弁してください。

次の更新は 年内は無理でしょう。

というわけで、しばらくお別れです！

天「えっと、ご愛読ありがとうございました！」

霧「……別に連載終了するわけじゃない」

姫「まあまあ、いつか戻ってくるから大丈夫ですよ」

明「と、いうわけで」

雄「みんなでせーの、」

「こっから連載再開までは一方通行だア！」x5

悠「……オリ主は進入禁止ってなア」

新作予告

『スキルアウェイケン
とある最強の能力講座』

能力指数レベル4である御坂美琴はその日、『最強』に学んだ。

能力指数レベル5である麦野沈利はその日、『最強』を拾った。

能力指数レベル0である佐天涙子はその日、『最強』と出会った。

『最強』とヒロインが交差する時、チャット物語は始まる

「行くぞアクセラレータ一方通行！」

「ああ、検索は終了したぜエ。ちやちやっと終わらせよつや、三下ア！」

『ベクトル！』

『フォックスワード！』

「「変身！！」」

『ベクトル！ フォックスワード！』

SOGEBU:…つてのがあったらいいよな

hitokata:あ、それ分かるぜエ

oreikemen:…どうしてだ……どうしてこうなった……

投稿予定日：未定。

主人公：一方通行。

ヒロイン：未定。

S O G E B U : 某上条さん

h i t o k a t a : 某白モヤシ

o r e i k e m e n : 某メルヘン

乞うご期待……？

〈清涼祭編〉 第45章 オリ主は大抵リードが上手い謎（終編）（前書き）

久々の更新です。多分3月ぐらいまで次の更新はありません。
前回予告した禁書ssは某所にて投下中。詳しくは活動報告で。

〈清涼祭編〉 第45章 オリ主は大抵リードが上手い謎（終編）

『悠夜ッ！ 大変だ！』

屋上で天光院と二人で談笑していると、KY^{吉井}が俺のケータイに電話をかけてきた。

「ん？ どうかしたのか？」

『美波たちがさらわれたんだっ！』

ついに来たか。

清涼祭のエピソードで最も考慮すべき事件。

ウェイトレス 姫路瑞樹、島田美波、島田葉月、木下秀吉が誘拐され、カラオケボックスに監禁されるというもの。

「わかった。心当たりがあるから、すぐに向かう」

『気をつけて！ うちのクラスの人だけじゃなく、霧島さんと秀吉のお姉さんもさらわれたみたいだから！』

今、吉井はなんて言った？

「すまない吉井、ワンモアプリーズ」

『？ だから、悠夜を探しに来ていた霧島さんと木下優子さんも一緒にさらわれ』

俺がまともに話を聞いていられたのは、その時までだった。
集合場所として学校から近くのカラオケボックスを指定された後、
通話を切る。

「どうか、したのですか？」

「天光院……霧島と木下が誘拐された」

その言葉に、天光院はポカンと口を開けた。

俺は他にも姫路らが連れて行かれたことを伝えたと、素早く屋上
を駆け下りる。

「気をつけてくださいねッ！」

「ああ、もちろん！」

後ろからかけられた気遣いの言葉を受け取り、そのまま走り出す。

カラオケボックスには、すでに警察が向かっているはず。

原作では吉井と坂本が突入して撃退していたが、あれは非常に危
険な賭けだ。綱渡りに等しい。

仮に坂本より腕っ節の強い奴がいれば？

仮に土屋の潜入が気づかれていれば？

仮に吉井が倒され、人質になっていたら？

IFの話をするればキリがない。だが、それら一つ一つを吟味する
必要が俺にはある。

俺が原因で変わってしまう世界を、俺の手で、俺が正さなければ

ならない。

それが、転生者の宿命とでも言うのだろうか。

「頼むから、ここばかりは変な改変がありませんように……！」

スニーカーがアスファルトを砕かんとばかりに踏みしめる。

カラオケボックスはもう見えている。

一歩、弾けるように飛び出す。右足が地に着くと同時再び踏み込み、それを繰り返す、繰り返す、繰り返す。

ただ走っているだけのはずなのに、どうしてこんなに動悸が激しい？

ただ走っているだけのはずなのに、どうしてこんなに汗が出てくる？

「頼む……！ 俺から、俺からもう……！！！」

何も奪わないでくれ。

悲痛な叫びを喉の奥底に閉じ込め、再び踏み出す。先行していた吉井たちの背中が見えた。

「吉井ッ」

「悠夜！」

声をかければ、あちらも焦った様子で俺に振り返ってきた。

「ムツツリーニが今潜入してる。僕らはまだ様子見だ」

「大丈夫だよな……？ 間に合ったよな……？」

「しつ。盗聴器から何か聞こえる」

小型スピーカーに耳を傾けつつ、俺たち三人はエレベーターに乗り込んだ。

『さてどうする？ 坂本と 吉井だったか？ そいつら、この人質を盾にして呼び出すか？』

『待て。吉井つてのは知らないが、坂本は下手に手を出すとマズい。今はあまり聞かないが、中学時代は相当鳴らしていたらしいからな』
『坂本つて、まさかあの坂本か？』

『つてことは、まさか有野つてやつもついてくるじゃないのか……？』

『有野……！？ まさか、あの怪力乱神か！？』

『マズいな……坂本だけでも手一杯なのに、有野なんてこられたらこっちが壊滅しちゃう』

『気持ちはわかるがさうもいかないだろ？ 依頼はその二人を動けなくすることなんだから』

音楽に混ぜつてかろつじて聞き取れる言葉から、俺と坂本は推測を組み上げていく。

「依頼……つてことは、どうやらこいつら以外に黒幕がいるっぽいな」

「悠夜、心当たりが？」

「ある」

恐らく、俺の予測が正しければ……つまり原作どおりであれば、黒幕は

ピンポン、と気の抜けた音とともにエレベーターが目的の階に

ついた。

盗聴器本体との距離が近づいたからか、音質が急にクリアになる。

『お、お姉ちゃん……』

『アンタ達、いい加減葉月を放しなさいよ!』

ふむ、やはり島田（妹）を人質にされているか……霧島もつかつに手が出せないだろうよ。

『お姉ちゃん、だつてさ! かつわいいー!』

『ギャはははは!』

チンピラどもが何か言う度に不快感が増していく。隣の吉井も、拳を硬く握って震わせていた。

（待つんだ吉井。まだ様子を見たほうが）

（? どうしたの悠夜）

背筋を悪寒が駆け抜けた。

『でさー、この黒髪のオネーチャンどうする? あんまりにも抵抗するからぶん殴ったら気絶しちゃったけど』

『結構美人だし、マグロでもいいんじゃないかね?』

『お前そんな趣味だったのかよ……んじゃ、俺はこの双子の子達をドンブリで』

『うわっ、ずりー!』

『うるせえ。お前はその黒髪の子とでもやってるって』

バキン、と奥歯の割れる音がした。

ギシリ、と心が碎ける音がした。

握った拳。あまりの圧力に爪にピシリとひびが入る。

『……………ッ!』

『あれ、オネーチャン目覚ましちゃったぜ?』

『うわっ、滅茶苦茶美人じゃんか! 俺やつぱその娘がいいー!』

『ふざっけんな、もうこの娘は俺が予約済みですー』

(悠夜……………?)

(おいっ、落ち着け!)

落ち着く? 何を言っているんだ。俺は落ち着いているじゃないか。

霧島が扉の向こうにいる。

木下が扉の向こうにいる。

姫路が、秀吉が、島田が、その妹が、向こう側に

『……………みんなを、放して……………!』

『霧島さん……………』

『ギヤはははは! 何この温い友情! マジウケるんだけど!』

『っーかホント可愛いな。ねえ、ちょっとこっち向いてよ』

『……………早く、みんなを……………』

『あアン? うっせえな、それしか喋れねえのかよ!?』

ドン、という音。何かを踏みつけたかのような音。

(おい、悠夜!)

(悠夜、目が)

刹那、視界が真っ赤に染まった。

『おいガキ。身体貸せ』

『あいつら、俺らの敵なんだろ？』

『俺らは、あいつが憎いんだろ？』

『俺に任せろよ。こつ見えても戦場を渡り歩いた、人殺しのプロだ』

『素敵に愉快にブチ殺してやるぜエ？』

視界が、色を変える。

赤から黒へ、反転。暗転。堕ちてゆく。意識が堕ちて、落ちて、切れて。

思考回路が停止する。感覚神経が麻痺する。運動神経が消し飛ぶ。何も考えられない。……何も感じられない。……何も、できない。

いや。ただ、一つの感情だけが、そこにはあった。

人が独りで背負うにはあまりにも重く。

人が独りで背負うにはあまりにも多く。

人が独りで背負うにはあまりにも大きく。

人が独りで背負うにはあまりにも深く。

人が独りで背負うにはあまりにも 暗い。

果て無き絶望が、俺の頭へと流れ込んできた。

Side Akihisa-Yoshi

それは一瞬のことだった。

突然悠夜の様子がおかしくなりだした　　と思えば。

赤眼の親友は、黒目の虐殺者に変わり果てていた。

瞬間的に飛び出し、悠夜は扉を蹴破る。いや。蹴破るなんて生ぬるいものじゃない。文字通り、扉を折った。

「なっ!?　誰だデメエ!」

「紺色の髪に……黒目!?　おい、こいつ有野ってやつじゃねえぞ!」

違う。それは、それは僕らの友達の有野悠夜だ。……そのはずだ。けれど、それを声に出せない。

彼が放つ尋常じゃない殺気に押され、口が動かない。

「う、あ……………」

隣で雄二が呻いた。中にいる店員さん　　ムツツリーニも固まっている。

『『『おい、お前ら』『』』

ゾクッ!!!　まるで氷でできた針を体中に刺されたような感覚。

まるで頭の中にドライアイスを丸ごとぶちこまれたかのような感覚。

『『『今から殺されても、文句ないよなア？』』』』

チンピラたちはしゃべらない。しゃべることを、息をすることすらできないだろう。

彼の後ろにいる僕らでさえもが、ヒュウヒュウといやな音を立てながらかるうじて呼吸できるのだから。

『『『安心しな、痛みは一瞬なんかじゃねえ』』』』

声が響く。一人の口から出ているとは思えないほど、多くの音が重なった声だ。

『『『炎で焼かれるように、剣で串刺しにされるように、銃弾で蜂の巣にされるように』』』』

目の前にいるのは、有野悠夜のはず。
なのに。

誰だよ。

君は、誰なんだよ。

『『『包丁で刺されるように、海に沈められるように、戦車砲で吹き飛ばされるように』』』』

こんなの。こんなのは、違う。違う。

『『『魔法で胸を貫かれるように、エイリアンに食い殺されるように』』』』

有野悠夜なんかじゃ

『『愉快爽快ツーカーにぶツ殺シテヤルヨ!!!』』

一人、宙を舞った。

不良のみぞおちに悠夜の拳がめり込んだ、かと思えば、すでに悠夜は別の男に飛び掛っている。

『『オオオオオオオmtEoooo63WnujooooLgr2
ooooooooj52agoooooooo!!!!!!!!!』』

死神が無慈悲に腕を振るう。

死神が冷淡に拳を振るう。

死神が死の鎌を振るう。

散る、散る、血が血が怒りが怒りが赤赤赤赤

「止めるおおおッッ!!!」

気付けば叫んでいた。

もう止めてくれ。これ以上は止めてくれ。

お願いだから、もう、それ以上は止めてくれ。

これ以上、僕の親友を壊アリノユウヤさないでくれ。

必死に悠夜を羽交い絞めにし、耳元で叫び続ける。自分でも意味の分からない言葉の羅列を。

止める。なんで。なんで君が、こんな。

けれど、悠夜は少しずつ大人しくなっていく。

ガシリ、と誰かも悠夜の腕を掴む。霧島さんだ。霧島さんが、悠夜の右手を握っていた。

弾かれたように木下さんも立ち上がり、悠夜の左腕を掴んだ。

「おいっ、さっさとずらかるぞ！」

「こ、殺される！」

まだ悠夜の攻撃を受けていなかった外道たちが部屋から逃げ出そうとして 雄二の拳とムツツリー二のスタンガン投擲を受け床に沈んだ。

「オラオラッ！ 明久ア、こっちは止めてやるから、絶対に悠夜を抑えてくれよ！」

「……………頼んだ！」

親友たちの声援を受けて、僕は悠夜を羽交い絞めにする力をさら

に増す。

……頼む、頼む！ 止まってくれお願いだからッ！

有野悠夜の動きが止まる。ゆっくりとつつむぎ、そのまま 涙を流し始めた。

僕らも思わずへたりこみ、深く深く息を吸う。

……悠夜の涙は止まらなかった。

S i d e o u t

意識が覚醒する。

「……………ッッ？」

頭の中が揺れている。脳みそがシェイクされた後みたいだ。

なんだ？ 俺、なんで、あれ？ 何を、ああ あk s d s
が？

「なんで一人何だよ、俺」

さつきまで、みんないたはずなのに。
体を起こせば、どうやら学校の保健室らしい。

何で一人なんだ？ 俺は、確か、カラオケボックスで、みんなを
助けようと、して

『『愉快爽快ツーカイクツ殺シテヤルヨ！！！！』』』

「う……あ……」

思い出した、俺は、俺の中の『俺たち』に体を渡して。
ふと視線をめぐらせれば、机の上に一枚のメモ帳が置いてあった。

『今日は帰ります。』

明日、話を聞きます。

吉井明久』

なぜだか、俺はそのメモ帳を握りつぶしていた。

時刻は22時半。

天光院は無論、生徒は全員帰宅している時刻。

俺は家に帰らず、職員用駐車場で、ある男を待っていた。

車を見る限り、残っているのは学園長と鉄人と高橋先生。そして

「来たか……」

ゆっくりと、人影が近づいてくる。

待ちに待った。血が沸騰しているんじゃないか、と思うほどに体中が熱い。

「待ち伏せか……ずいぶんと過激なコミュニケーションだね、悠夜ちゃん」

「……………クククク、クハハハハハハハ！ 待ってたぜええええええッ！ 結ウウウウウウウ城くウウウウウウウウー！」

すべての音が寝静まった、暗闇の中。

親子『だった』者たちが、相對した。

《清涼祭編》第45章 オリ主は大抵リードが上手い謎（終編）（後書き）

次回からは悠夜君vs竹原先生。

この世界での悠夜の過去も明かされる予定です。

いるりちゃんの予定も過去編で度々有り。

分類的には《清涼祭編》じゃなくて《贖罪編》になります。

ねえ、なのは小説書きたい。

〈贖罪編〉 第46章 蒼き疾風、黒の暴風（前書き）

私立突破記念。次は公立だ！

〈贖罪編〉第46章 蒼き疾風、黒の暴風

「待ちくたびれたよ、先生」

歪んだ笑みを浮かべながら、有野悠夜は告げた。

普段のあまり表情を表に出さない彼を知る者なら、今現在の悠夜を見ても『アリノユウヤ』とは信じないだろう。

「随分不愉快に笑うんだねえ……そんな子に育てた覚えはないよ」
「ハッ、良く言うよ」

悠夜は口を吊り上げる。相對する文月学園現教頭 竹原結城^{ゆづき}は、かつて自らが義理の父親として面倒を見ていた少年を見やった。

「君との付き合いは、もう4年ぐらいになるのかな」
「あア、そうなんじゃねえの？」

忘れもしない、あれは6月の12日。

竹原はその日、自らの運命を祝福し、同時に呪った。

有野悠夜は、空ろな目をして部屋に座り込んでいた。

両親が死んだ。もう5日経った。学校には行っていない。

中学2年生の彼にとって、それがどれほどのショックだったか
親戚や近所の人々は、そう口々に言った。

けれど現実はずう。

彼は、心を壊していた。

親族の『二度目の』死を受け入れられずに。

「有野君……？」

「……アンタ、まだいたのか」

部屋の扉が開いた。そちらに顔を向けるのさえ、おっくうになる。
中に入ってきたのは、この所ほとんど住み込みで悠夜の面倒を見
ている女子大生、島原いるり。

手にしたマグカップから、ホットココアの湯気が立っていた。

「あの、あったかい飲み物だけど……」

「……それ、俺用のじゃない。父さんが使ってたやつだ」

「ッ、ごめんなさい」

慌てて頭を下げるいるり。悠夜は何の感慨もなく、その柔らかい
栗色の髪を見つめていた。

「なあアンタ、何でこんなことしてるんだ？」

「そ、それは……あなたのこと、放っておけないからよ」

そう言って、やるせなさそうに微笑む彼女の顔を見て、悠夜は思案する。

「おい。アンタ、俺の言うこと、聞いてくれるか？」

「？ 聞ける限りなら聞くけれど……」

その返答を聞き、悠夜は満足げに表情を歪めた。

「じゃあさ、俺を慰めるよ」

「……………え？」

あまりに予想とかけ離れた言葉に、一瞬いるりは言葉に詰まった。

「女なら、できることがあるだろ？」

そう言って、悠夜は壊れた笑みを顔に貼り付けた。

島原いるりは逡巡する。この少年は、一体何を望んでいるのか。何を求めて、何に餓えているのか。

「……………分かったわ」

「あれ？ 了承しちゃうんだ」

依然として壊れた笑顔のまま、悠夜はいるりを見る。

「じゃあシャワー浴びて。俺さっき浴びたばっかだから」

コクリと頷き、いるりは風呂場へと歩いていく。
悠夜はぼうつとした思考回路を引きずり、ベッドへと横たわった。

ピンポン、と気の抜けた音がした。

いまだ体に染み付く惰性を振り払いつつ、いるりは泥のような眠りの淵から目覚める。

インターホン。来客だ。腕時計で時間を見ようとし　自分が裸であることに気づく。

「
」

顔が赤くなる。まさか人間として『はじめて』を奪われる相手が中学生だとは思ってもみなかった。

まったく、後で知り合いにバレた時、なんて言われるか分かったものではない。予定外にもほどがある。

ピンポン、再びチャイム音。慌てて上下のスウェットを着て、いるりはインターホン越しに来客を確認した。

「どちら様ですか？」

『……？ 私は、有野悠夜君の叔父に当たるものですが……あなたこそどちら様で？』

思わず逡巡する。

心に傷を負った中学生（ ）とそれを慰める大学生（ ）、片やスウェット、片や全裸。

「……神様、助けてください」

いるりは己の迂闊さに頭を抱えた。

「……即時召喚クイック」

悠夜の肉声コードと同時に、周囲に召喚フィールドが形成される。即時召喚型の腕輪が展開するフィールドは、一度展開してしまえば教師のフィールドすらも一方的に消滅させることができる、『最優先フィールド』。

故に、竹原は不敵で素敵な笑みを浮かべた。

「……試獣召喚サモン」

刹那、具現する竹原結城の召喚獣。

全身に青いタイツを着たかのような外見と、その手に握った紅い槍。

《Fクラス 有野悠夜 VS 教頭 竹原結城
総合 6080点 8780点 》

「へえ、随分と速そうな召喚獣だね」

「……まあ、この学園だったら最速なんじゃないかな」

「俺にも追いつけるかい？」

「悠夜君ごとき、追いつけるどころか一瞬で抜き去るよ」

軽口を叩き合いながら、二人はじつと互いの召喚獣を見つめ、

「『刺し穿つ死棘の槍』！」

「『透過』！！」

影と影が交錯した。

一瞬なんて生ぬるい時間を遙かに超越した速度で、夜闇に無数の金属音が響き渡る。

悠夜が選択した武器は『アサシンセット暗殺道具』。リーチは短い、だからといって槍の投擲速度についていけないわけではない。

（ツツ！？ この槍、追尾してくる！？）

高速移動で回避しようとナイフの刃で弾こうと、それは獲物を追う蛇がごとく悠夜の召喚獣に食らいつく。

「チツ、その腕輪……ゲイ・ボルグなんてふざけた名前じゃないな！？」

「無論。僕が勝手に名乗ってるだけさ」

エント・アウト透過が終了し、漆黒の召喚獣が姿を現す
と同時、上空に巨大な影が出現した。

「『シップ・オブ・ザ・ヤマト大和型戦艦』」

ダウンフォール堕ちろツ！！」

そしてそのまま、悠夜はその巨大な鋼鉄の塊を竹原の召喚獣へ叩きつける！

下手を打てば校舎が倒壊するような狼藉だが、悠夜は止まらない。チツ、と軽く竹原は舌打ちをし、

「回収、
『ゲイ・ボルグ突き穿つ死翔の槍』！」

槍を、全力で投擲した。

朱の槍はあまりの速度に、大気との摩擦で赤く紅く朱く発光する。そのまま上空の戦艦の艦首へと突き刺さり、内部深くまで進入すると、爆ぜた。

爆音と轟音が大地を揺らす。

「くっ、武器破棄！」

あわや大和の残骸が校舎に落下、というところで悠夜は武器を破棄したが、すでにほとんど戦闘能力は残っていない。

「チツ、
『スタート・アップ透過』」

「甘い……分かるんだよ！」

いったん距離を取り、武装を『ビームランチャー荷電粒子砲』に変えようとしたが、その瞬間朱色の槍が悠夜の召喚獣の右手を貫いた。

その槍は、『透過』しているはずの召喚獣を、正確に貫いていた。

「な……ッ!？」

「言っただけだ。分かるんだよ。君はいつも、武器を変えるときに『透過』している。つまりその間はウィークポイント……おそらく

姿を隠さなければならぬほど無防備」

図星。

あまりに正確な推理に悠夜は口をつぐむ。その様子に満足げな笑みを浮かべ、竹原は言葉を続けた。

「僕は昔から棒術とかの古武術を習っていてね。風の動きや、風を切る音で分かるんだよ。君の召喚獣がどこにいるのか！」

なんだそれは、と悠夜は絶句した。

（なんだよそれ！ 俺なんぞよりよっぽどチートじみてんじゃねえか！）

腕輪は通用せず、点数も心もとない。万事休すかと悠夜が唇をかみ締めた時。

『だいじょーぶ！ お兄ちゃんには、私がついてる！』

ああ、と悠夜は笑った。

ああそうだな。なんで今の今まで忘れてたんだろうな。

「チェック複製開始 メイト完了」

左手首につけた黒いリストバンド。相手の腕輪をコピーする『切り札の腕輪』が、牙を剥く。

悠夜はキッチンに佇んでいた。
来客用の安っぽい紅茶をテキストに注ぎながら、リビングの様子をのぞき見る。

(すっげえカオス)

やって来た男性はソファーに座って落ち着かなさそうに辺りを見やり、島原いるりも同様にして周囲をキョロキョロ。

キョロキョロ。

キョロキョロキョロキョロ。

「……アンタら大人なんだから、とりあえず落ち着いたらどうだ？」
「ひゃあっ!?!」

無音でリビングに侵入し、ウェイターがごとく紅茶をテーブルに無音で置く悠夜。

潜入スキルでも備えているのか、よどみない動きでさっさと退散。

「いや、君の話なんだけど」

「むー、メンドイからパス。島原さんどうぞ」

「え、えっと……その幻想をぶち殺す!」

「会話の一方通行乙ww」

「……ごめん調子に乗りました」「」

三人とも何か激しく大宇宙からの電波を受信した。

「で、有野悠夜君。ご両親の件は非常に悔やみいるよ」
「……それで、本日はどのようなご用件で？」

悠夜の言葉に、竹原はテーブルに置いていたカバンから一冊の力パンを取り出した。

「……文月学園案内書？」
「うん、来年から僕が勤めることになる学校だ」

教頭としてね、と竹原は付け加える。悠夜は手に取ったパンフレットをパラパラとめくり、ふと目をとめる。

(召喚獣……ああ、原作の舞台になる高校だったっけ)

それすらどうでもいいと、悠夜は思った。
竹原はいるりを一瞥し、一つ咳払い。

「僕は君をここに推薦したい」

教頭の権限をフルに活用すれば、生徒一人ぐらい余裕でねじ込める。彼はそう言った。無論なんの協力がなくても悠夜の学力ならば合格できるだろう。

今の悠夜は、と聞かれれば別問題だが。

「……悠夜君」

「島原さん、大丈夫」

怯えたように身を縮こませ、いるりは悠夜を見やった。

「で？ 俺をその学校に通わせたいんですか？」

「うん、ここなら僕がいると面倒を見れるしね」

そうですか。悠夜は一拍置いて。

「だったら自分の力でいきます」

「言っと思ったよ」

竹原はそうつぶやいて、ソファから立ち上がった。

「……どうしてそう思ったんです？」

「君の父親が、頑固者だったからさ……君は本当に、アイツに似ている」

この世界での父親と、自分が似ている。悠夜は転生前の世界での父を少し思い出した。

幼い頃事故で死んでしまったが、その大きな背中だけは覚えてい
る。よく負ぶってもらっていたことも、覚えている。

母親とさくらと自分の三人で暮らしていた『前の世界』。

母親と父親と自分の三人で暮らしていた『この世界』。

どちらも壊された自分に何があるのか。

「なあ」

「……何だい？」

カバンを手に持ち、ソファアを立つ竹原。
悠夜はパンフレットを一瞥し。

「よかつたらここに住まないか？」

有野悠夜の目が見開かれた。

「な、ッ」

放った8発の弾丸。『追尾』の腕輪効果が付加されたそれらは、
朱い槍の一振りであっさりと弾き飛ばされた。

一瞬そらした意識の隙をかくぐり、瞬時に竹原の召喚獣が肉薄、
槍で一突き。

「がッッッ！！！！」

すぐさま意識を戻した悠夜は歯を食いしばり、すんでのところで
召喚獣を飛びのかせた。槍の切っ先が黒いコートを浅く斬る。

(今なら、やれる　　ッ！)

「!?!」

直後。漆黒の召喚獣がとつた動作に、竹原の喉が干上がった。
がしっ、と。

小さな戦士は、しっかりと、槍を掴み取っていた。ブシュツと手のひらから鮮血が噴き出すのも構わず、その手は離さない。

「バカな、素手で……」

「バカだからこそできるんだよ」

ニヤリと笑ってみせる悠夜。

《Fクラス 有野悠夜 VS 教頭 竹原結城
総合 2300点 4500点
》

「アンタの腕輪、『追尾』なんかじゃねえだろ」

「……そんな安っぽいものなはずないだろう」

「だったら、今度こそ、完璧に!」

「だからこそ、君は、勝てない!」

親子だったものが咆哮を上げる。決着のときは近い。

「……ここでの接触は予定通りだねえ」

「しかし、悠夜が『切り札の腕輪』を有しているのは予想外でしたね。一体どうやって手に入れたのやら」

「別にいいじゃないさね。『暗部』アンブに墜ちてくれた時の手土産になる」

「そう簡単に墜ちますか？」

「墜ちるよ。あわよくば、教頭も」

「一教師としてはイヤですがね」

「シークレファン……せいぜい今のうちに平和を味わっておくんだね、シークレ護衛担当者』第一候補、有野悠夜」

〈贖罪編〉第46章 蒼き疾風、黒の暴風（後書き）

悠夜君 vs 竹原先生。

ちなみに悠夜君の点数は大和型戦艦に大半をもっていられました。

最後の会話はババアと鉄人です。口調が把握できないんだぜ……！

〈贖罪編〉 第47章 文月に単食う闇（前書き）

HEY！ 一体何ヶ月ぶりなんだってばよ！

不定期になって申し訳ないです。

けど受験受かったよ！ やったね！

〈贖罪編〉第47章 文月に巢食う闇

「完璧に、^{チエック}複写……^{チエック}複写……^{チエック}複写！」
「やれるものならあつ！」

槍を掴んだ右手を思いつきり引き、悠夜と竹原の召喚獣は密着するよくな至近距離まで接近する。

それを操る本人たちも敵意をむき出しにした視線をぶつけ合い、互いに吼えた。

「あ、ああああああああああああああ、嗚呼アアああア嗚呼ああaaa嗚呼アア、ア……！」

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおツツ……！！！」

両者の気迫が拮抗、炸裂した。

悠夜の『切り札の腕輪』が鈍く発光、超至近距離での解析を始める。解析解析予測演算解析解析解析予測演算予測予測推測推測演算修正解析解析演算演算修正修正予測修正演算修正演算解析推測創造創造創造創造修正創造修正創造創造創造
ツ！

！！！！！！

頭の中で何かが崩れる音がした。有野悠夜のすべてを結集させ、腕輪を解析する。限界を超えた集中が万物の理を破壊し尽くした。

そして。

悠夜の召喚獣の腕につけられた『追尾』の腕輪が、新たに上書きされた。

【解h97ep析fus結果2@jif:『必中』23qtu@0】

文字化けした表記に一瞬の空白が開く。次の瞬間、表示された解析結果が上から塗りつぶされた。

【解析結果：『必殺』】

バギッ！音を立てて『追尾』の腕輪が碎け散る。否、表面が突然剥がれ、いくつにも裂けたのだ。破片が宙を舞い月光に光る中、姿をあらわにしたのは一回り小さな金色の腕輪。

その名は『必殺』書いて字のごとく、相手を必ず殺す腕輪。

「……『必殺』？」

「この腕輪は……！」

効果を確認し、悠夜は戦慄した。

放った攻撃は必ず相手に命中し、点数をゼロにする。

(なにこれこわい)

武器がつけられるように変化する。二丁の拳銃が光の粒子と化し飛

び散り、すぐに再結集。輝く光の粒は別の、もっと大きな銃器をかたどった。

旧式のマスケット銃。

映画にしか出てこないようなそれを握り、漆黒の召喚獣は槍ごと相手を突き放す。

「ク、ツ。僕の腕輪はそんなものじゃない　ッ！」

「ああ、アンタの腕輪は『必中』……相手に必ず攻撃を当てる腕輪
それをコピーし、劣化したのが『追尾』。
もう一度コピーし、完成したのが『必殺』。」

(オリジナルを、超えたっていうのか……!?)
「何故君がソレを持っている……!」

召喚獣の体勢を立て直しながら竹原は齒噛みする。悠夜はマスケット銃の狙いを蒼い召喚獣に定めると　そのまま硬直した。

「……アンタが悪いんだ、アンタがこの学校を裏切るから……!」
「君に何が分かる!?　この学校は腐りきっている!　君たち生徒を実験台にするようなことは、教師としてあつてはならない!」
「そのためにこの学校を潰すつてのか!?　この学校の生徒の日常を壊してまで!　自分の立場は保証して!」
「そんなこと　僕はしていない!」

必死の糾弾に、悠夜の動きが止まった。

「だったらどうして!」

「言っているだろう！ この学園が召喚獣システムを採用しているのは『実験』のためだ！ 君は知らないだろうけど、禁じられたある実験を懲りずに続行しようとしているんだ！ 僕は教師として、何より人間としてそれが許せない！」

その叫びが耳を打つ。

それでも、と悠夜は引き金を引こうと。

「それでも、俺たちの日常は俺が護り抜く 父さんを倒しても」

弾丸は閃光。時間は刹那。

進った光が寸分違わず竹原の召喚獣の胸を貫く。数秒空中で硬直してから、それはゆっくりと落ちていく。

はずだった。

「何が何でも守ってやる。俺がどんな想いで此処にいるのかアンタは知らないだろう。俺からすれば、世界が滅ぼうが俺に無関係な人が死のうが辛かるうが知ったこっちゃんないんだ。アンタの個人的な感情だって、俺にはどうでもいい。……ただ」

光は放たれなかった。

「その『実験』ってヤツについて聞かせてもらおう。もしそれが俺たちに危害を加えるものなら遠慮なく叩き潰すからな」

銃口はブレない。

いつでも竹原を撃ち抜くことができる。……そう、竹原の召喚獣

巨人の動きが止まったかと思えばピシリと硬質な音が響いた。やがてゆっくりと、巨人の上半身と下半身がズレていく。まるで鋭い刀で一閃されたようななめらかな切り口に竹原は目を剥く。

《生徒指導担当 西村宗一 総合科目 0点》

「なんとまあ」

「アンタらさあ、俺が『武器破棄』とか肉声で発音しなきゃ発動しないと思ってんだろ。違う違う、全然違うよお。頭の中でイメージするだけでホントはできるんだよ。なんで今まで発音してたか？ こういう風に、肉声が必要だと油断して突っ込んできてくれるバカをハメるためだっつーの、引つかかってくれてアリガトウ西村せんせエー！」

すでに漆黒の召喚獣の武器は『二丁拳銃《ガン＝カタ》』ではなく『^{アサシンセット}暗殺道具』に変わっている。辺りには鋼鉄のワイヤーが張り巡らされており、下手に動けば人間の首だって吹っ飛びかねない。そんな中、悠夜は堂々と歩く。当然だ。彼がワイヤーを張り巡らせたのだから位置などすべて把握している。

「さあさあ父さん。さっさと教えてもらえないかな？ かな？ なんちってな。アハハハハ！！」

「……………君は、本当に」

壊れてしまったんだね。

同情するようなその言葉に笑いを引つ込め、悠夜は激情を隠そうともせず頬を引きつらせた。

「ああ！？ 何ですか、いまさら同情とかしてんじゃねえだろうな
あ！？ 自分も原因の一つだっていう自覚は！？」

「……君を壊したのは僕じゃない。けど、君が壊れてしまったのは、
僕のせいだ」

沈痛な面持ちで語る竹原。よく見れば首筋には数本のワイヤーが
ピッタリと張られており、少しも動くことのできない状態となつて
いる。

「答える。『実験』とは何だ？」

「それは」

刹那。

轟！ と突如烈風が吹き荒れ、鋼鉄の糸がまとめて引きちぎら
れた。

「……………ハハツ、オイオイオイオイオイオイ
イオイオイオイ。何ですかそりゃあ。アンタはさつき倒したはずで
しょうが」

「お前はすでに正常な判断力に欠いている さて。この状況を理
解しきれるか？」

《生徒指導担当 西村宗一 総合科目 8407点》

それは西村の召喚獣が力任せにワイヤーを引きちぎった音だった。

「フン、拳などの硬い部分はさすがに斬れないようだな」

「トコトン化け物だな……」

ごっごつした逞しい肉体が肩をいからせながら悠夜に歩み寄る。

「オーケー。死なねえってなら死ぬまで何度でも殺してやるさ」

「一つ勘違いしているようだ。きっちりと一度死んだぞ？」

何？ と悠夜が聞き返すと同時。

ブチッ！ と硬質な音が響き、辺りに張り巡らされていたワイヤーの包囲網がもろくも崩れ落ちた。

「は、ははは……マジかよ」

「ああそうさ大マジだ」

拳が唸りを上げる。

回避をしようとして、悠夜は西村を見やった。

面倒くさそうに。余裕を持って、楽勝だと言わんばかりに、迎撃しようとして。

殺^やられる

「装填完了。発射

ナインライフズ・ブレイド・ワークス
是・射殺す百頭」

瞬間、悠夜の召喚獣はその場で細切れとなった。

「あ……？」

「敗者は不要だ。敗北を噛み締めてその場に沈んでいろ」

途切れ途切れになる思考が最後に感じたのは、振りかぶられた西
村の拳だった。

〈贖罪編〉第47章 文月に巣食う闇（後書き）

別サイトの禁書ssや最近投稿したファンタジーもあるので更新は遅くなるかと。

けれどこんな後味の悪いままではまずいので近々更新します！

それでは変わらぬ応援の方よろしくお願いします！

〈贖罪編〉第48章 私があなたを肯定する

学校の駐車場に大の字に寝転んでいる。体中が痛い。

話は変わるが、夢というのはその日経験した出来事を整理するために見るものらしい。

ならば自分が今見ているものはなんだ、と俺は思う。

「綺麗だ」

視界に映る星空が。

「綺麗だ」

その黒い海に浮かぶ月が。

「本当に、綺麗だ」

そしてそれらを押しつけて目を奪う、白銀の翼を背負った島原いるりが。

嗚呼、本当に 綺麗だ。

世界は美しい。特に真つ赤に染まつた世界は。
血だ。

夕焼けだ。

臍物だ。

赤赤ああああああああああああああああああああ

ああああああああああああああああああああkkkkkk

kk

kk

「有野悠夜」

凜とした声が響く。

「苦しいですか」

苦しって何だ。

「辛いですか」

辛いつてなんだ。

「泣きたいですか」

なくつてなんだ。

「死にたいですか」

死ぬつてなんだ。

違う違う違う。知っている。俺は死ぬということを知っている。

「うん、死にたい」

何を言っている。あんなに痛かったのに。あんなに熱かったのに。あんなに苦しかったのに。

「そう、ですか」

いるりちゃんがあんなに悲しそうじゃないか。俺が死にたいって言ったからだろ。

ああ畜生なんだなんだよ今の俺は！ 倒れたままワケ訳わかんねえコトくつちやべりやがって！

「私は……」

いるりちゃんがゆっくりと顔を下げる。前髪が垂れ、表情が見えなくなる。

そして顔を上げる。目が合った。

「あなたのこと、私は全部知ってる」
「ひよつとして、いるりちゃんは『あっち側』なの？」
「ええ」
「じゃあ、神様？」
「違うわ」
「じゃあ、天使？」
「少しハズレね」
「へえ、当たらずとも？」
「遠からず、つて訳ね」

沈黙。

「私は天使じゃないわ、大天使よ」
「……………？」
「ラファエル。聞いたことぐらいはあるでしょう？」
「ああ、よく聞く。ルシフェルと同じぐらいよく聞く」
「なら背中から生えている翼にも納得がいく。」

「俺を転生させた人の部下？」
「いえ、『あんなもの』の下に就くわけがないでしょう」
「なんと、神様を『あんなもの』扱いか……」

「神様より大天使の方が偉いの？」
「あれは神様なんかじゃないわ。下級の天使よ」
「マジ？」
「ええ。よくいるのよ、面白半分で人を転生させる大馬鹿者が」

そりゃあ初耳だ。

「まあ、アナタは例外なんだけどね」

「？ 何か言った？」

「いえ何も。それより、立てる？」

いるりちゃんに手を引かれ、その場に立ち上がる。距離を殺して見れば、翼は薄く輝いていた。

こういうのを、神々しいって言うんだろうな。

「俺は……」

「？」

自分の手を見る。先ほど俺は、西村先生に敗北した。完膚なきまでに叩きのめされた。

「強くなりたい」

ダメだ。こんな強さじゃ、ダメだ。

存在意義が二度と揺るがないくらい。

ここにいていいという意識が確定するくらい。

「……私はね」

と、いるりちゃんが顔をうつむかせた。何かを葛藤するかのよう
に表情をゆがめ。

顔を上げた。

「私は、あなたを強くするために派遣されたの」

は？

そう言い、いるりちゃんは俺の顔を見る。

「あなたの識別名称は『無限の可能性（アンリミテッド・ポッシビリティ）』」

ワケの分からない単語の羅列。それが自分を指すのだということ
を理解するのに、少しかかった。

「あなたは神にも魔王にも、救世主にも天才にも虐殺者にも低脳にも
万能にも凡人にも、あらゆるものになれる。そういう可能性を秘
めて生まれてきた」

「……どういう、ことだよ」
「これは仕方のないことなの。あなたは観察対象であり餌でもある
の」

一切合切、表情がない。
俺は途方もないめまいを感じながら、恐る恐る問う。

「じゃあ、俺は」
「あなたは私の観察対象」

瞬間、足元の地面が崩れたような錯覚に見舞われた。
嗚呼。嗚呼、嗚呼。この世界ってヤツは。

「今回の戦闘で、ある程度のデータは得られたわ。私はそれを集める
のが仕事」

もういやだ。聞きたくない。聞きたくない！

「それが、仕事。なのに……………私は」

いるりちゃんの声色が変わった。

まるで何かを責めるような、何かを悔やむような声。

「私はね、あなたと一緒に居たいと。そう思ってしまったの」

「え？」

思わず呆けた声が出た。

「仕事を放棄してまでも、私はあなたの傍に居たかった。本来の役目を無視してでも、私はあなたと居たい。あなたの存在を肯定したい」

「あ、あ、ああ」

何よりも欲しかった言葉がかけられる。

足元の地面がより強固に、より堅固になる。

「例え世界があなたを否定しても。私が何よりも誰よりもあなたを肯定する」

そう言って笑い、彼女は、俺の家族は手を差し伸べてきた。

翼がはためき、白銀の羽が辺りに飛び散る。
幻想的な光景を目の当たりにし、思わず言葉を失う。

「握って」
「……………うん」

その手は暖かく、柔らかかった。

こうして俺はいるりちゃんの本当の姿を知り、本当の家族を再び
得た。

明日の決勝戦

俺と主人公^真が戦う時、きつとこの物語の方向は決定するのだろう。

けれど、今は。

今はこの温もりを握り締めよう、そう思った。

〈清涼祭編〉第49章 二日目・朝（前書き）

とりあえず優子イベントは貴重だよね。

げる。数人引つかかってくれたが、一部の生徒はありえないほど俊敏な動きで避けやがった。

「チイツ、なんか無駄に素早いんですけど……！」

出し物などの準備でにぎわう人ごみを駆け抜ける。

朝っぱらから何でリアル鬼ごっこに興じなきゃいけないんだよチクシヨウ！

「！ つとと……？」

校舎を駆け回っていると、唐突に腕を引かれた。そのまま真横の教室に引きずり込まれる。

「有野君、大丈夫ですか？」

「佐藤……どうしてここに」

引きずりこまれたのは空き教室。腕を掴んでいたのはAクラスきつての変態、佐藤美穂だった。

やれやれと呆れたように彼女はため息をつく。

「あんな大騒ぎしてたら誰だって来ますよ」

「野次馬かよ」

「救世主と呼んでほしいですね。あ、救援部隊が来ましたね」

佐藤が窓を指差す。ガラスの向こう側には、腰にロープを巻きつけた木下優子が笑って手を振っていた。

「……佐藤。Aクラスはいつの間に常識を捨てたんだ？」

「さあ？ 少なくとも、ガンシップを持ち出さないだけまだマトモ

な気がしますけど」

有野悠夜、連行されますた。

「……はッ……」

「……メイド喫茶」

『『『ご主人様とお呼び!!』』』

目の前にはメイド服を着込んだ多くの美少女がズラリ。桃源郷か、ここは。

「……いつは、どういうことだ？ 俺を萌え殺す気か？」

「……違う。少し、頼まれてほしいだけ」

霧島がぼそつと俺の隣でつぶやく。

「……一つだけ、メイド服が破れた」

そう言っつて霧島が俺に差し出したメイド服は、なるほど確かにスカートが縦に裂けていた。これじゃあとてもお客さんの前には出られない。いや、マニアックな趣味の持ち主なら大歓迎しそっだが。

を売っているのか!？」

「ぎゃあぎゃあ」と喚く俺に、おろおろとしながら天光院が話しかけてくる。

「え、えっと、どうしてそんなに嫌がるんですか？」

「決まっているだろう!？」メイドというものは主人に対してあくまで献身的に尽くすものだ。そのためにはお淑やかな外見、落ち着いた言動、その他すべてにおいて主人よりも成熟していなければならぬ! ロリメイド? NO! ツンデレメイド? NO!! そんなメイドさんがミニスカなんて挑発的な格好をするわけがないだろうがあああああああああ!!」

言っちゃった後だけど、どうしよう。この長台詞の中でこの出店の存在を否定しちゃった気がするんだが。

「……あ、あの。有野君」

「ん?」

珍しく天光院が強い視線を送ってきた。何事?

「私、着てみたいです」

「は?」

今、何だった?

清楚系純粋派ヒロイン、天光院美月が。

ミニスカメイドを着てみたいだっ?

「ふ、ふぎげんな。いくら俺でもできることとできないことがあるんだよ」

「イヤです。着ます。死んでも着ます」

落ち着け。落ち着くんだ俺。

「あのなあ……」

「絶対に着ます。さもないと」

壮絶に嫌な予感。

「有野君にメイド服を着て接客してもらいます！」

「OK裁縫道具はどこだ！ 開店前に仕上げてやるぜベイビー！」

「キヤラ崩壊甚だしいわよ、アンタ」

木下の辛らつな言葉を受け流し、佐藤が取り出してくれた裁縫セツトを取り出す。

スカートを上上げる以上、それもミニとあらば絶対領域を作るのは当然。ガーターベルトを加えればとりあえず見栄えはいいか？

天光院の性格に合っていないのは分かっている。だが、それでもやらなければならない ツ！

「また、また俺は世界を縮めた……ッ！！」

「……なんというか、あれですね。ホント複雑ですよ、こういうの」

俺の心境を読んでくれたらしく、いつの間にか霧島がガーターベルトを持ってきてくれていた。

天光院は着替えるため奥に引っ込み、働きのお駄賃だろうか、テーブルの上にストリートティーが一つ置かれた。

「お、サンキュ。いい香りだなー。ブランドモノ？」

「……そのスーパーで、特売で売っていた」

空気が凝結する。恥ずかしいッ！これはあまりにダセエぞ、俺！

「有野君も、お茶目なんですね」

「まったくフオローになつてねえぞ佐藤……」

なんだか死にたくなってきた。やっちまったとかそういうのではなく、なんていうか、こう、死にたい。

「着替えましたよー」

「お、お目見えだね」

そう言つて工藤が天光院を呼び寄せる。さてさて。どんなもんに仕上がつて

「お、お待たせしましたー……」

『『『ふおおおおおおおー……っつ！……！……』』』

俺だけでなく、他のAクラス男子や廊下を歩いていた生徒までもが、思わず叫んでいた！

「な、なんて破壊力……」

木下が目を押さえてよろける。

そのメイドさんはかなり際どいところまでスカートが上がつてお

り、見えるか見えないか……というギリギリのライン。

ガーターベルトは学生には似つかわしくないほどの淫靡さをも
し出しており、おどおどしい態度がなんだか計算されているように
感じてしまう。

「これは……想像以上の完成度だね」

「……ここまでやるとは。油断できない……ッ！」

工藤が絶句し、霧島がなぜか拳を握っていた。

俺とて無事ではない。これは、俺の意見を修正する必要がある。

ミニスカメイド、大いにアリだ。

この俺の意見を無理やり変更させるとは……天光院、恐ろしい子

……ッ！！

「ん。そういえばそろそろFクラスも準備しなきゃな」

「……分かった。また、後で」

「おお」

軽く手を振り合いながら、教室を出て行くこととする　　が。

ピタリと動きが止まった。

シャツの裾がつままれていた。視線を上げると、あんぐりと口を
開いた木下が。

「……どうした？」

「え、えっと、あの、あのね。私は……」

すーはーなんてゆっくりと深呼吸を繰り返し、木下はゆっくりと、
恐る恐る、言葉を吐き出した。

「私は……悠夜がどんな人でも……悠夜が私を守ってくれたって……、そのことには変わりないって、そう思ってるから」

不意打ち、だった。

彼女の後ろを見る。霧島が、「今回は引いてやる」と言わんばかりに木下へ視線を向けている。

「だ、だからっ！勝手に自分を傷つけたり、勝手に重いもの背負い込んだりしないでよって言いたいのだよ！だって、だって悠夜は」

「ごめん」

その言葉を聞いてやるわけには、いかなかった。

最後まで聞いてしまえば、俺はきつと泣いてしまう。最後まで聞いてしまえば、俺は今の俺を保てなくなる。

「俺、行くから」

「……………」

「ごめんな」

木下は俯いた。俺は背を向けると、そのまま立ち去る。

ごめん

ごめん

ごめん

「ホント、ユウは人を心配させる天才よね」

「……………無事ならば、それで良い」

次から次へと。矢継ぎ早にみんな声をかけてくれる。

「……………つたく」

俺はまだ弱い。

今この場にいる皆を守りきれぬほど、強くない。

だから。一つ一つの勝負に勝っていく。そして、力をつける。

皆を守りきれぬぐらい。世界にだって打ち勝てるぐらいに。

その為なら。

その為なら俺は。

「吉井」

今日は、負けない

そう言って拳を突き出す。

一瞬呆気に取られた吉井は、すぐに笑い、同じように拳をぶつけてきた。

「いいや。勝つのはこっちだよ！」

もう学園の防衛などは関係ない。俺と霧島が常夏コンビを下した
時点で解決済みだ。

ここからは純粹な勝負。

イレギュラー？ 知るか。

原作ブレイク？ 知るか。

俺は俺の道を往くだけだ。

「 そらっ！ もうすぐ客が来るぞ！ 全員準備しろ！」

『 『 『 応っ！』』』

俺の号令にクラスメイトたちが返す。

決勝が始まるまで、後4時間

《清涼祭編》第49章 二日目・朝（後書き）

次々回ぐらいから決勝戦です。

オリ主VS原作主人公のガチバトルって、避けては通れない気がします。

さて、明久は勝てるのか。……勝てる気がしないなあ……

〈清涼祭編〉 第50章 二日目・午前（前）（前書き）

ひとまず小暮先輩イベント。次回は皆さんお待ちかね天光院さんの
ターン！

〈清涼祭編〉第50章 二日目・午前（前）

「今更ながら緊張してきた」

「……本当に今更ね」

俺のつぶやきに、隣に座っていた小暮葵先輩が呆れたようにつぶやいた。

現在、俺はネクタイを外し、黒いスーツ生地ベストもボタンは全開。俺の業務はすでに終わっており、後もう少しすれば召喚大会の決勝戦だ。

「にしても、学生なのにレッチリって……」

「いいんじゃないすか？ ベース糞下手ですけど」

軽快なリズムの演奏だが、低音部を務めるベースが若干ずれていった。

不愉快とまではいかないが、なんとなく気に食わない。

先日根本が彼女さんとイチャイチャしながら作り上げていた特設会場は、まあベースなんて置いといて異様な盛り上がりを見せていた。

「なんかお腹空いたな……」

「あら、すぐそこに美味しい中華喫茶があるらしいわよ？」

「……分かってて言ってますよね、先輩」

「ふふふつ。胡麻団子、期待してるわ」

若干手玉に取られた感が否めないが、まあ美人だから許す。熱気冷めない会場を、俺と小暮先輩はそつと後にした。

「いきなりバンドのライブ誘われた時はビビりましたよ……」
「誘いたかったのが、あなただけだったからね」
「一応言つときますと、そういう発言はこのクラスでは致命傷になりかねません」

Fクラス中華喫茶。浴びせられる数多の視線やカッターナイフを気にも留めず、俺は胡麻団子を先輩にご馳走していた。

さつき回避し損ねたカッターが頭に刺さりっぱなしたが、まあ問題はないだろう。

「で、どうですか？（ブシャアアアア）」

「とりあえず救急車を呼ぶことをオススメするわ」

「いえ、俺のコンディションではなくてですね、団子の……ほお……

……ですうう……（ブシャアアアアアア）」

「誰か救急車！ ホント今すぐ！ 死んじゃう、有野君が死んじゃうー！」

「……騒がしい」

と、厨房から土屋が出てきて、手早く俺の頭部に止血処置を施した。

手早いとかそんなチャチなレベルじゃねえ。さすがプロ、自分の止血で鍛えた応急処置の腕前は伊達じゃない。

「……でね。有野君。決勝戦はどうするの？」

「はい？」

「勝てるかどうか聞いているのよ」

おかしいな、2巻でこの人は関わってきていたか……？

いや、そもそも俺という存在もイレギュラーなわけだし、多少の変化は仕方ないか。

「勝ちますよ。それ以外の結果なんてあり得ません。勝率100%です」

「この世界に絶対なんて言葉は……」

「なくても俺は絶対的な結果を求めます。そして叩き出して見せますよ」

そう言うと、小暮先輩は呆れたように俺を見た。団子は最後の一個。迷うことなく手に取るうとし

普通に小暮先輩と手が重なった。

「あら」

「ん」

お互い取り乱さず、そのまま手を引く。同時に周囲の連中も構えていたカッターナイフを引いた。

フツ……貴様ら忘れたのか？俺は内心どれだけ取り乱しても、表面には滅多に出さないんだぞ？最近結構出てる気がするけどな！

「すみません」

「いえいえ」

小暮先輩も大人な対応。

けどやべえ手がすべすべだったんですけど温かかったし綺麗だしやばいまだ温もり残ってるうわ恥ずかしいけど感触気持ちいいわああああああああああ

(まずいわ手が遅しかったんですけど温かかったし男なのに綺麗だしやばいまだ温もり残ってるうわ恥ずかしいけど感触気持ちいいわああああああああああ)

「じゃあこれ頂きますね」

「ええ、どうぞ。代わりに勝つてよ？」

「……なんでそこにこだわるんですか」

「優勝したら学校最強のタッグよ？ その片割れが私の所有物だなんて、素晴らしいカードになると思わない？」

俺はいつの間にかこの人の所有物になったのだろうか。

「じゃ、期待してるわよ」

「へいへい……」

妖艶な笑みを残し、小暮先輩は立ち上がった。

俺も同様に席を立とうとし、がしりと腕を誰かにつかまれる。

「あん？」

「何か忘れておらんかの？」

秀吉だ。忘れてるもの……？

「あ、小暮先輩。会計」

「ちよつと京都に行つて宇治茶を極めてくるわ」

先輩が視界から消え去るのには2秒もかからなかった。

「……秀吉。こんな言葉知ってるか？」

「何じゃ？」

「有史以来、世界が平等であつたことは一度もない」

「それは残念じゃつたな。では財布を」

「明日への逃走！ 運命からの脱却！」

ちなみに食い逃げ犯（俺）は木下によつて轟沈させられました。

〈清涼祭編〉 第50章 二日目・午前(前) (後書き)

決勝戦に向け英気を養う悠夜クンでした。

ヒロイン数多すぎ！

特にクローズアップして欲しいコがいればどうぞ。

《清涼祭編》 第51章 二日目・午前（後）（前書き）

短いですけど、ひとまず更新です。

「うん、そのピュアさに有野君は目がくらみます」
「?????」

人ごみを切り抜けて購買から離れる。グラウンド傍にある少し大きめの木の下に二人で座り込んだ。

菓子パンを広げ、持ち込んだ紙パックジュースにストローを突き刺す。

「ん、食わないのか？」

「えっと……あまりお腹が空いていないので」

「ひょっとして普段から小食？」

「まあ、そうですね」

そうだったのか。全然知らなかった。

ははっ、俺、なんだかんだで天光院のこと何にも知らな

ズキン。

どこか、胸の奥が疼いた。

「……………」

「有野君？　どうかしたんですか、なんだか辛そうですよ？」

「いや、何でもない」

なんだ、この痛みは。

なんだ、この悲しみは。

ガキか、俺は。

幼稚な独占欲だ。もう天光院のすべてを知った気になってもなっていないのか。

今時中学生でも、もっとマトモな考え方だぞ。

「ああそうでした、有野君」

「？」

パンを口から離す。あんパンはもう半分程度しか残っていない。

「決勝戦、がんばってください」

みんなそう言う。

以前の俺なら、まず大会に参加すらしていないだろう。
原作を極力刺激せず、無難な道を選ぶはずだ。
そうしないのは、その道を選ばないのは、

何故だ？

「戦ってるときの有野君は、とてもカッコいいんです」

俺は本当は。

「だから、今回もカッコいい有野君を見せ付けてください」

明確な答えは出ていない。

けれど、確かに俺は『変わった』。理由が、もう手の届く場所にある。ここに在る理由が。

それを見つげるためにも。そして何より、

「ああ、勝ってくる……絶対に」

「はい。がんばってください」

目の前にいる女の子を失望させないためにも、この手で主人公を
倒してみせる。吉井明久

〈清涼祭編〉 第51章 二日目・午前（後）（後書き）

前回のアンケート（もどき）の結果、優子がかなり人気だったので番外編みたいなものを書こうと思います。

希望があればどうぞ。できる限りはそれに沿ってやっていこうかなんて考えているので。

人、これを丸投げと言う。

ではでは、次回からやっと決勝戦。お楽しみに！

〈清涼祭編〉 第52章 二日目・決勝戦（序）（前書き）

なんかスラスラと書いてしまったので投稿。サブタイトルで丸わかりですが、決勝戦は3部に分ける予定です。

……テスト期間中に何やってんだかなあ、俺。

〈清涼祭編〉第52章 二日目・決勝戦（序）

決勝戦特設会場。

昼過ぎという時間帯も相まってか、会場は満員だった。壁に背を預け立っているお客さんもいる。

「……緊張してる？」

「まさか。いつも通り、ベストコンディションだ」

舞台袖にて、俺と霧島待機中。

点数も世界史は悪くない。少なくとも腕輪付きは狙えるだろう。
400点オーバー
そうなれば、吉井の相手は容易くなる。

「お前こそ日本史の調子はどうだったよ。学年主席らしく腕輪はちやんと確保してくれれば助か」

「……日本史？　なんで今、日本史の話をするの？」

「………はい？」

「え、いやだって、決勝戦って日本史勝負」

「………決勝戦は、世界史勝負」

「嘘だろオイ」

「何でえええッ!？」

「寄りにも寄ってこの間消費した教科を狙い撃ちするの!？」

「さ、流石は元神童……先読みが神がかってるぜ」

「………よく分からないけど、もう出番」

わーきゃーとざわめく会場に、霧島が真っ直ぐ歩いていく。

「まあ……天光院のためにも、勝たなきゃな」

「……どうしてそこで美月の名前が出るの」

「あぎゃあつ！ 俺の関節が一つ増えちゃう……ッ！」

訂正。俺の呟きに反応し、即座に引き返してきた。そのまま肘を極め寝技に持ち込もうとする霧島　　ってハイ！？

「待て待て待て！ 四の字固めとかマジ勘弁！」

「……なら、こっち」

「いや、ちよっ……フローリングで柔道は」

瞬間、円を描くような軌道を描いた後、俺はめでたく床と情熱的なハグを交わすこととなった。

その時響いた音で真向かいの坂本がすべてを知り、合掌していたのは、まあどうでもいい余談である。

閑話休題（ホント汎用性高いなコレ）。

ステージに立つ者が五人。

日本史担当の先生は背筋を伸ばしてしっかりと構えている。晴れ舞台に相応しい立派なスーツだ。

吉井&坂本ペアは何やら会話しながら、こちらの様子をつかっている。戦術を改めて確認しているのだろうか。

俺と霧島も何か話すべきなのか、コレ。

「それでは、只今より召喚大会、決勝戦を開始致します」

と、ブザーと共に高橋先生のアナウンスが流れてきた。今更ながら先生方の席を見てみるが、竹原教頭の姿はない。

観客席。天光院、FクラスやAクラスの面々。よく見ると小暮先輩や三上もいた。

やべっ、こんな大観衆の中じゃ無様に負けられないな。……まあ、もつとも、ハナから負ける気なんてないが。

「それでは、行きます」

ッ、余計なことは考えるな。霧島には坂本の相手を頼んでいる。

俺は吉井をぶちのめすだけ。

あちらの点数はせいぜい200前半。こちらに腕輪がなくとも対処は可能だ。

召喚フィールドが展開された。

「「「試獣召喚ッッ！！！！」」」

全員の召喚獣が姿を顕す。俺の装備は『サムライ・ソード』だ。

すでに準備は万端。ベストを尽くせなくてもいい。兎に角、俺は

吉井に負けたくない！

「それでは、決勝戦を」

「　　ッッ！！」

「たあああッッ！！」

アナウンスを半分無視して、俺は吉井に刀を振りかぶって突撃した。なんか立ち会いの先生が目を丸くしてる。

しかし考える事……『開始瞬間の奇襲攻撃』という発想は同じだったらしい。あちらも同様に木刀で斬りつけてきた。

「上等！」

「まだまだあッ！」

俺の斬撃は空を斬り、吉井の一撃は横にずれていた。

当然、ここで攻撃の手を緩めるワケがない。すぐさま床を蹴り、右足を吉井の胸にぶち込む。

カウンター気味に振るわれた木刀が脇腹を穿ったが、今はどうでもいい！

反動で俺は少し滞空し、吉井は後ろへ吹き飛んだ。

「そこだ！」

「……させないッ！」

空中で隙だらけの俺めがけ坂本が飛びかかってきた。さすがにアイツの一撃は受けたくない。

そこで霧島の絶妙なフローだ。ヤツの拳を刀で逸らすと、そのまま掴み合いの力勝負に持ち込んだ。こうなれば霧島は滅多なことでは負けない。何せ学年主席だ。

「ナイスだ霧島！　　って、は？」

俺の召喚獣の足が地に着いた後、例を言おうとした時、霧島は弾き飛ばされてきた。

「……、力負けした」

器用に空中でバランスを取り、霧島は着地をキメてみせた。いや、そんなことはどうでもいい。

学年主席である霧島が、真正面の力比べで負けた？

坂本は余裕の表情でモニターを見やる。

初手から攻防が激しすぎて見る余裕がなかったが、点数は

《Fクラス	有野悠夜	&	Aクラス	霧島翔子
世界史	302点			358点
《Fクラス	吉井明久	&	Fクラス	坂本雄二
世界史	312点			389点
				》

俺、最低得点でしたっ

〈清涼祭編〉第52章 二日目・決勝戦（序）（後書き）

誰か俺に周期表の覚え方を教えてくれ。アルカリ土類とかハロゲンとかややこしくてかなわん。後の結合系はそこそこいけるのにこれがダメってどうなってんだ俺。

愚痴から始まってしまい申し訳ありません。

今回からやっとな決勝戦になります。そろそろ9・5巻が発売されるというのに2巻がまだ終わらない。誰か助けて。

6 / 25

とりあえず言い訳を。

5巻読みながら執筆したから日本史と世界史がごっちゃになっちゃったよ！

原作の決勝戦での科目は日本史でした。なので悠夜の発言がおかしなことに。

とりあえず第42章から修正したので、ご勘弁ください。

悠夜が消費したのは『世界史』で、原作では本来『日本史』のところをなぜか『世界史』になっていた、ということですよ。

〈清涼祭編〉第53章 二日目・決勝戦（覇）（前書き）

久々の予約掲載です。

序破急 序覇救と、なんか痛々しい感じに。

では吉井無双をご覧ください！

〈清涼祭編〉第53章 二日目・決勝戦（覇）

「やべえ、吉井に点数で負けたとか、マジ泣けてくる」

「止めてよね悠夜。そんなに誉められたら照れちゃうよ」

「100%誉められてないからな、それ」

得点が明らかになったが、ぶっちゃけ俺がドベだった。ちよっと泣きそうだがガマン。

しかし霧島は不調だったのだろうか、得点が低い。いや、霧島の調子を差し引いても坂本と吉井の得点は異常だ。

つまり、考えられることは。

「この教科に絞ってやがったな……ってコトは、Fクラスに配ったトーナメント表の教科は」

「当然ダミーだ」

この辺の会話は聞かれるとマズいので、かなり声量を落とす。

しかし原作との違いが如実に表れたか……間接的に俺が原因とはいえ、原作との違いが俺の意図しない所で発生したのは、Aクラス戦以来じゃないだろうか。

教科の変更だけではない。吉井の得点の増加。

まるで『何かの事情が無理矢理にやる気を引き出させた』ような変化だ。

そこまでして勝ちたい理由が、吉井にはあるのだろうか。

「まあ、そんなことはどうでもいい」

ダンダンッ！ と床から跳んで壁を蹴り、吉井の召喚獣の頭上を

取る。

「!?!」

「お前を倒すだけだ!」

電光石火の唐竹割りには、しかし吉井の咄嗟の回避によって床を叩くだけにとどまった。

だが、これで終わりじゃない。

「そらっ、気を抜いたらゲームセットだぞ!」

「な!?!」

瞬時に武器破棄、新たに顕現するのは『二丁拳銃』ガンニカタ。
狙いを定めて撃つ、撃つ!

「そんなんっ、無言で武装を変えた!?!」

「誰が声を出さなきゃ出来ないなんて言った!」

さすが観察処分者、この攻撃にも反応し、横っ飛びに避けてみせた。だが、完璧には回避しきれていない。

「左肩か……できれば足は持って行きたかったんだが、なッ!」

休む間も与えず『アサシンセット暗殺道具』に装備を変更、ワイヤーの鞭と毒針を同時に複数投擲した。

これで決まりだ。と、そう確信したのだが。

「おいおい、俺を忘れてもらっちゃ困る」

横合いから割って入った坂本の召喚獣が拳で毒針を弾いた。次いで、ワイヤーは吉井が木刀で素早く払う。

「チツ、さすがホモツプル。連携は抜群だな」

「誰がホモツプルだああああっ！！」

俺が一旦退くと、これまた絶妙な連携（強調）で二人が襲いかかって来る。

けどなあ！

「頼れる相棒がいるのは、こっちも同じなんだよ」

「……公私共に相棒^{パートナー}。または嫁とも言っ」

言いません。

「くっ、このまま押し通る！」

吉井は俺がカウンターで吹き飛ばし、坂本は霧島がメリケンサックと日本刀の鍔迫り合いに持ち込んだ。乱戦の中でも的確に坂本を狙いに行っている……ホント頼れる相棒だ、まったく。

一歩も譲らない押し合いの中、坂本が叫ぶと、霧島も応えた。

「……残念、ここからは通行止め」

「生憎、一方通行でなあ！」

ガギイツ！！ と、とんでもない音がした。

坂本の背後から飛び込んできた吉井が加勢し、霧島の日本刀が真っ二つにへし折れたのだ。

「ヤロウツ！ やってくれるじゃねえか！」

すかさず追撃する吉井を『二丁拳銃』ガンニカタで牽制、少し退いた所に毒針の雨を降らせる。

一方、霧島は。

「……雄二」

「……何だ」

「……だから言った。通行止めだって」

「クソ……野郎ッ」

霧島は坂本が俺の介入によって一旦下がる際、隠し武器ともいえる脇差で斬りつけたようだ。

あれの存在は恐らく、学年でも俺と高橋先生ぐらいしか知らないだろう。高橋先生の個人講座であれが使われた時はホントにビビった。

坂本の召喚獣には、右わき腹から斜め上に痛々しい切り傷があり、そこから多量の血が溢れ出ている。

どうでもいいケド、こんなグロ映像本当に一般公開していいもんだろうか。

「霧島、一気に片をつける。坂本を頼んだ」

「……了解」

パン、と互いに拳をぶつけ合い、それぞれの相手に向き直った。

同時に平行し、頭の中に『ある武器』を描く。

基礎設計、後付け装備、外見、大きさ重さ顕現位置すべてに思考を巡らせる。

いつでも出せるように。」

「往くぞ主人公吉井いいいい!!!」

距離を引き離しながら拳銃を乱射、転がりようにして避け続ける吉井を狙い撃つ。

「くっ……いくらなんでも僕ばかり狙い過ぎじゃない!？」

初撃の左肩に続き、確実に吉井の召喚獣は被弾し、動きが遅くなっている。このまま吉井にとってアウトレンジから銃撃を続けていれば勝てるだろう。

だから。

「当然だろう!? 主人公お前は転生者俺にとって最も超えるべき壁なんだ! 誰よりも何よりも!

俺はお前を越えなくちゃいけないんだあッ!!!」

「何を……ッ!？」

「分からないだろうな! 分かってもらおうとも思わない!

ただ俺は、この胸の衝動を、意地を、かき消したくないだけだ!」

だから、俺は、『蓋』が緩んでいたのだろう。

激情を自分の中に押しとどめる、『蓋』が。

「目障りなんだよッ、オマエ!

いつでもどこでも幸せそうに笑いやがって! 幸福自慢大会にで

も出場してるつもりか!？」

当て付けにしか見えねえんだよ!」

「……………」

狙いがさつきからムチャクチャだ。全然違う方ばかり撃ってる。ほら見る、吉井の召喚獣なんていつの間にか棒立ちなのに、全然当たってねえ。すっかり狙えよバカ。

霧島と坂本も唾然としながらこつちを見ている。あーこりゃ観客にも聞こえてんじゃねえかな？

まあ、そんなこと、どうでもいい。

武器を破棄、サムライ・ソード『日本刀』に切り替える。大上段に構えながら突撃。

縦一閃。

吉井は危なげなく、半歩ズレただけで避けてみせる。

超至近距離で睨み合う二つの召喚獣。吉井は素早く下がって距離を取る。

ここだ。

このタイミングを待っていた。

頭の中で常に展開していた設計図を現実につ引張出す。

瞬時に武装が切り替わった。日本刀がかき消え、代わりに、右腕全体にそれが顕現する。

『ビームランチャー
荷電粒子砲』

右腕そのものに取り付けられた、というよりも、その巨大な銃器に右腕を突っ込んでいると言った方が正しいだろう。

ジエネレータ

内蔵型電力機を覆う銀色の装甲は引き金にまで及び、腕や手はまったく見えない。

召喚獣の背丈をかなり上回る長さの銃身は顕れた時から吉井に向けられており、すでに銃口から白銀の光が漏れ出している。

「終わりだッ！」

引き金を引いた。

チャージは不十分。しかし、銃口と吉井の召喚獣はほぼ零距离。直撃すれば一撃死は免れない。

ゴッ！！ と、空気を引き裂き世界を引きちぎる音。

余りの輝きに、思わず俺は目を覆った。反動で吹き飛びそうになる召喚獣をその場に維持し、光の奔流が収まるのを待つ。

まあ、収まる頃には吉井の召喚獣なんて跡形もなく消し飛んで

「甘えるなよ、有野悠夜あああつ!!」

横合いから繰り出された拳に、『荷電粒子砲』を構えた俺の召喚獣は呆気なく殴り飛ばされた。

吹っ飛んでいく俺の召喚獣。それを尻目に、俺は呆然と相手の召喚獣を　いや、その奥を見た。

吉井明久が、そこにはいた。

戦意の失せていない、ギラギラとした瞳の男が　そこにはいた。

〈清涼祭編〉 第53章 二日目・決勝戦（覇）（後書き）

あら不思議、なんだか執筆がスイスイ進む。
あはは、楽しい楽しい。うれしいなあ。

テスト期間中じゃなかったらねえ！

〈清涼祭編〉第54章 二日目・決勝戦（救）

吉井明久　ファミ通文庫出版のライトノベル、『バカとテストと召喚獣』における主人公。

重度のバカであり、学力は最底辺。他人の心情にも鈍く、好意に中々気づかない。

そして、俺の親友。

その親友は拳を握り締め、俺の前に立ちはだかっている。

「吉井……」

「甘えるなって言ってるんだ！　このバカ悠夜！」

吹き飛んだ俺の召喚獣がもぞもぞと動く。立ち上がろうとしているのに、意識が定まらず、立てない。

甘えてる？　誰が？

俺が、か？

「　何ふざけたこと抜かしてやがる、バカ野郎ッ！」
「バカはそつちだよ大馬鹿あああ！」

飛び起き、『ビームランチャー荷電粒子砲』を再び敵に向ける。

しかし引き金を引く直前に、砲口に木刀が滑り込み、突き立てられた。

「しまっ
」

破棄する間もなく武器がボン！ と爆発。破片が俺の召喚獣を貫く。

《Fクラス 有野悠夜 VS Fクラス 吉井明久
日本史 221点 201点 》

そう差はないが、いつの間にか点数は逆転していた。

「誰が甘えてんだよ……」

「悠夜は甘えてるよ。自分自身に」

これで吉井は武器を失った。

やはりコイツはバカだ。俺はいくらでも武器を出せるが、コイツは違う。

あの木刀は唯一の武器だ。しかしそれはもう半分ほど今の爆発で消し飛び、とても武器としては使えそうにない。

武器を自ら失うなんて、愚の骨頂だ。

なのに 怖い。目の前の男が、怖い。

冷静に戦えば勝てる。理性はそう囁いた。

このまま戦っていいのか。感情はそう問いかけた。

距離を取って戦え。理性はそう分析した。

このまま距離を取るとは、逃げた。感情はそう糾弾した。

勝利するための最適な行動を取れ。理性はそう下した。勝利以上に大切なものが見つかりそうなんだ。感情はそう吠えた。

俺は

「悠夜は、自分を憐れんでる」

吉井はそう静かに語った。

「……何だった？」

「悠夜は不幸な自分に酔ってる。僕が幸福自慢してるなら、君は不幸自慢ばかりだ。いい加減鬱陶しいんだよ！」

「テメエ……ッ！ 悪いかよ！？ ああそつさ、俺は俺に酔ってる！ けど、それ以上に、お前らが羨ましいんだよッ！」

いつでも笑ってるお前らが、楽しそうなお前らが妬ましい、羨ましい！ 壊したくなるくらいに！

幸福な日常の価値も知らないくせに！

大切な人の重みすら知らないくせに！！」

「そんな押し付けがましい理屈、通ってたまるかあああッ！」

もう、武器がどうのこうのなんて考え、吹っ飛んだ。

召喚獣に拳を握らせる。

精密な動作が必要なインファイトでは『観察処分者』たる吉井が優位だろう。だが、今は。

「テメエだけは、この拳で倒おおおす！」

「うあああああッ！」

俺の行動は矛盾している。

拳を逸らされカウンターのアッパーをもらいながら、呆然と思考した。

俺は、勝ちたかったはずだ。そのために俺はここにいる。

ミドルキックを腕でガードし、膝蹴りをわき腹にぶちかます。

そのはずなのに、体は確実な方法を取らない。

俺は……きつと。

「……悠夜っ！」

「明久！」

蚊帳の外だった霧島と坂本が、それぞれ吉井と俺に武器を向ける。

「邪魔をするなああああああっ！！！」

瞬時に『ガンヒカク二丁拳銃』を呼び起こし、片方を吉井に投げ渡す。俺は最速で狙いをつけ、坂本の召喚獣の眉間をぶち抜いた。

「んな……っ！？」

「……悠夜……！！？」

《Aクラス 霧島翔子 世界史 0点》

《Fクラス 坂本雄二 世界史 0点》

《Fクラス 有野悠夜 VS Fクラス 吉井明久
世界史 52点 69点 》

あちらも同様に一撃で仕留めたらしい。
にしても……敵に武器渡すとか、俺ホントバカ。

まあ、使うかどうかつつと。

「続けるぞ」

「当然」

使うわけがないんだがな。

互いに拳銃を投げ捨てる。こんなもの不必要だ。

「おおおおおッ!」

「あああああッ!」

同時に踏み込み、同時に拳を振るう。無論クロスカウンター狙いだ!
だ!

バゴッ! と嫌な音がして、どちらの召喚獣もたたらを踏んで引き下がった。

吉井がパンチの前に、思いつ切り俺に頭突きを食らわしたのだ。

「……今、仕切り直した理由は何だ」

「まだ、言いたいことがある」

じりじりと距離を調整。恐らく吉井は本気で、言葉と拳、どちらも叩きつけに来るだろう。

「不幸自慢って言った。あれは嘘じゃない。鬱陶しいのも嘘じゃない。」

「……けど。鬱陶しい理由は、まるで悠夜がこの世界にいることそのものが不幸みたいにしてるからだ」

「……は？」

「悠夜は、僕たちと出会ったことも不幸だと思ってるの!？」

僕は、悠夜と出会えて良かったと思ってる!

これは本当だ! 僕は君と出会えて良かった!

そんな君が自分勝手に自分を責めてるから、僕はそれが許せなかった! そんな悠夜には負けたくなかった!

だから必死に勉強して、悠夜に負けたくなくて、ここまで来た!

悠夜は!?! 悠夜はどうなんだよ! 僕と、僕たちと出会ったこと、どう思ってるんだよ!?!」

嗚呼。これだ。この、今の感覚だ。

拳を構える。吉井も釣られて拳を握った。

これだから、俺は。

「本当は」

「?」

「本当は俺、楽しんでるんだと思う」

「なに、を?」

「生きることを。妬むことすら、羨ましがることすら。」

誰かが傷つき倒れる事すらも。

俺は楽しんでるんだ」

「悠夜……」

原作シナリオが崩れるのも。俺イレギュラーが与える影響も。
何もかもを、楽しむ。

「俺は……こんな最低なクズ野郎だ。
誰かに。いや、みんなに否定されて当然のヤツなんだ」

「だから何だって言うんですか！」

声が、観客席から突き刺さった。
弾かれるようにそちらを見る。

「天光院……」
「そんなの、そんなの当然じゃないですか！ 一度しかない人生な
んですから、出来事を楽しむのは当然です！」

一度しかない人生……違う。俺は二回目だからこそ楽しんでる。
「人が傷つき倒れることだって！ いつかは笑い話にできる日は来

るんです！ みんな当たり前のようにしていることですよ、そんなの！」

糾弾、というよりは、まるで手を差し伸べてくるかのような言葉。

「まったく。お主は自嘲には定評があるのう」

「……………そして自分勝手に、自分を否定する」

「ユウは自分を嫌ってるのよね。他人よりも、自分を嫌ってしまっている」

「け、けど。みんなは有野君のこと、大好きですよっ」

Fクラスの連中。

「勝手に自分に幻滅しないでよね。周りの評価だって、少しは大切にしなさい」

「そうそう、優子の言う通り。ボクだって有野君のこと、嫌いじゃないよ？ ねえ、佐藤さん」

「当たり前です。嫌いになんか……………なったり、しません」

Aクラスの人たち。

「拗ねた子供じゃないんだから、少しは自分に自信を持ちなさい」
「開き直ればいってもんじゃないでしょうが、まったく……………」

小暮先輩に三上まで。

「俺は、お前のこと、嫌いじゃない」

「同感だ。僕も君のことは高く評価している」

「ふん。勝手に落ち込みやがって……誰がお前を否定するって言うんだ」

「はははっ、ほら見る、みんなお前のこと大好きじゃないか」

御巫や久保、根本と平賀も。

「やれやれ、本当に手の掛かる子だ」

「だからこそ環境が大切なんだろう？ アイツを肯定できる環境が」

いつの間に来ていたのか、竹原教頭に西村先生も。

「私は貴方の言っていることの半分も理解できません……けれど、自分で自分を追い詰めてしまったなら。私は貴方の力になってあげたい」

「高橋先生のおっしゃる通りよ。私たちは貴方の力になりたい」

高橋先生に在りちゃん。

「けつ。お前らしくもない。今ここに有野悠夜はいるだろうが。お前を否定するヤツなんざいねえよ。いたとしても俺がぶっ飛ばす！」

坂本が言う。

「……悠夜。ここには、貴方の味方がいっぱい」

霧島さえも同意する。

「ここは……いえ。ここ『が』！ 有野君の居場所です！！」

天光院の力強い言葉に弾かれるように、俺の召喚獣は駆け出した。全力で踏み切り、渾身の一撃を打つ。

吉井も同様にステージを駆け抜け、全力の一発を打ち込んできた。

交錯は一瞬。

《Fクラス 吉井明久 日本史 32点》

《Fクラス 有野悠夜 日本史 0点》

「悠夜」

「……何だよ、バカ」

「今この世界は、楽しい？」

「……ああ。そこそこに、な」

吉井は召喚獣を消すと、そのまま歩んできた。

……まだ、イマイチ、負けたという実感が湧かない。

「例え」

「？」

「例え世界が君を否定しても」

そこで吉井は会場を見渡した。

「『僕たち』は君を否定しない。……そうさ」

視線が、再び、俺に来た。

「『僕たち』が君を肯定するッ!」

……ったく。

どっかで聞いたような言葉だなあ、オイ。みんな言うことは同じなのかよ。

「……ありがとう、『明久』」

「へ?」

「俺、お前に……ううん。」

『お前ら』に会えて、良かったよ」

それでも俺は その言葉に救われたよ、この大馬鹿野郎。

言葉を紡いだ時、果たして俺は笑えていただろうか。

清涼祭召喚大会決勝戦、勝者、吉井明久 & amp · 坂本雄二ペア。

〈清涼祭編〉第54章 二日目・決勝戦（救）（後書き）

またまた予約掲載でした。

ひとまず転生者VS原作主人公の戦いはこれにて終了。

次回からとても大切なイベントが入ります。

吉井、ここまで成績を上げてくるなんて恐ろしい子……ッ！

狙撃銃「^{スナイプ}解せぬ」

〈清涼祭編〉 第55章 二日目・後始末（前書き）

これまた予約掲載ですので、感想に返せてないかもです。

〈清涼祭編〉第55章 二日目・後始末

優勝者への賞状と賞品の贈呈。

賞品である白金の腕輪は原作通り、『同時召喚型』は吉井……いや、明久に、『代理召喚型』は雄二の手に渡った。

「アウエイクン起動！」

「ダブル二重召喚ッ！」

「どうしよう。便乗して『即時召喚！』って叫びたい。

そんなこんなで簡単なデモンストレーションを終え、俺は教室へ戻っていた。

応援してくれた人たちには申し訳ないが、今回は負けて正解だった気がする。

ちなみに天光院とは後夜祭で待ち合わせの約束をした。非常に楽しみです。

「悠夜。お疲れ様」

「おう。負けちまったが、得たものは大きかったぜ、『明久』」

こうして、境界線は取り除かれた。もう溝などない。

「んじゃ、喫茶店の手伝いに戻るとするか！」

「そうだね。まだ一般公開は終わってないわけだし」

「俺たちの接客はこれからだ！」

「決勝戦を終えたからって打ち切りフラグを立てないでよ！」

そんな馬鹿騒ぎをしつつ、俺と明久は教室へと歩いていった。

「……雄二。試召戦争とは違って、すごい得点だった」

「ハッ。よく言っぜ。お前だって世界史には手が回らなかっただけで、総合は5000台に乗せたって悠夜から聞いたぞ」

「……理由は、雄二と同じ」

「ああ。あの黒野郎をぶっ潰すため、だろ？」

「……雄二は、あの時点数が低かった」

「ん、勉強する理由がなかったからな。仮に何らかの必要が、勉強を迫られる必要があれば必死こいて勉強してたさ。今の状態みたいにな」

「……吉井も？」

「まあな。あの日以来、虚仮の一念ってヤツか、かなり勉強に没頭してた。世界史は俺もアイツも集中的に上げたな」

「……いくらなんでも上がりすぎ。下手すればAクラスの中でも上位に食い込める」

「当たり前だ。姫路が言ってたセリフ丸パクリだがなあ……」

「大切なヤツのためなら、頑張れるんだよ」

「……そう」

「ああ」

「……それは、雄二と吉井にの場合でも？」

「まあ……本意ながら、そうだろうな、多分」

「……つまり、吉井は」

「？」

「……吉井は、雄二がいれば何でもできる」
「オイヤめろ」

「誰だノワールさんデイスったヤツは！ 分かってねえよお前ら！
けど俺の中では吉田さん一択です」
「突発的に何を叫んでおるのじゃ……」

時はながれ一般公開終了。

決勝戦出場者の4分の3がFクラスだったこともあってか、かなりの盛況ぶりだった。結構稼げただろうと期待してる。

「待つて！ 二人とも考え直すんだ！ カムバアーツク！」
「ふむ。ならばワシも」
「させるかっ！ せめて秀吉だけは着替えさせない！」
「なっ！？ 何をするのじゃ明久！」

さて、そろそろ俺も動きますかね。
今の俺は機嫌が非常に良い。だから、

「あ、西村先生。ちょっと付き合っただけですけどー」
「ん？」

だから、かるく揉んでやるよ、常夏コンビ。

しばらくの後。

p i p p i p i ! と俺の携帯が鳴り響いた。西村先生が咎めるような視線を送ってくるが無視。

『悠夜ツ！ 手伝って欲しいことが』

「分かった。引き受けよう。ただしセカンド幼なじみの出番を増やしてくれるならな」

『ごめん僕フアース党だから……』

「テメエも『鈴は二組』とか抜かすクチかつ！ 篝さんマジ空気状態のクセに！」

『あーあ言っちゃった！ 言っちゃいけないこと言っちゃったよ言っちゃったね悠夜！ 今から殺しに行くから待ってて！ ……ってそうじゃない！』

「遅えよ。つか常夏コンビのことだろ？ 任せろすぐに来る」

『は、はあっ？ 何言って』

一方的に通話を切る。やはり常夏コンビは暴走したか。それもそうだろう、ついこの間までは、受験しなくても済むなんてエサをぶら下げられていたのに、急に竹原教頭から『もう推薦状を書く気はない』なんて言われても納得はいかない、ブチ切れて当然だ。

どうせすべてを公表した後に『契約を履行しろ』とか言う気だろ、多分。

まあ、こちらの準備は万端だ。

「下らん会話をしすぎだ」

「すみません」

「ファーストだの二組だの、そんなに大切なことか」

「譲れないことがあるんです、男の子には」

「フン。なぜやまやの良さが分からん」

「えっ？」

「ハッハア！ コイツを流せば俺たちの勝……ち……」

「……お、おい夏川。どうなってんだ」

「あ、ああ」

やっと来たかカス共め。

ここは新校舎の屋上へ続く階段。残念なことに、今限定で、行き
着く先は地獄だな。

西村先生が一步前が出る。

それに構うことなく、常夏コンビは俺たちの顔面を凝視して叫ん
だ。

〈清涼祭編〉 第55章 二日目・後始末（後書き）

次からは原作で行われていたのかどうか知りませんが後夜祭に突入。キャンプファイヤーを囲んで男女がフオークダンスとかマジリア充。現実を見る！ まず学校でキャンプファイヤーなんてあり得な（r
y

〈清涼祭編〉 第56章 二日目・後夜祭(公) (前書き)

予約掲載ですので感想返しはできていません。
感想来てなかったら意味ゼロですけどねえ！

〈清涼祭編〉第56章 二日目・後夜祭（公）

「リア充は死ね……ッ」

「まあ待て。ひとまずそのチェインソーを下ろせよ。あいつ等は『動く人間解体機』と呼ばれた俺が仕留めて来るから」

「落ち着けっつーの。そういうことは『カップル殺しの申し子』と呼ばれたかったこの俺に任せとけ」

「『それただの願望じゃねーか！』」

後夜祭。もう響きからして非リアお断りなのだが、やはりカップルが多い。

まるで、体育館を利用して、大規模なパーティーが開かれてるみたいだ。バイキング形式であちこちにテーブルと食べ物置かれていて、そこから自由に食べ物を皿に取っていくことになる。

「にしても人多いな……」

「ですね。ダンス会場はまだ使えないみたいですし」

隣にちよこんと立っている天光院が、俺の呟きに解説を加えた。ひとまず、席を探すとするか　　と。

「あそこ空いてるな」

少し中央から外れた場所に、誰も座っていない小さめのテーブルが一つあった。

うかうかしていると埋まってしまうので、さっさと座ろうとしたのだが。

「バカなお兄ちゃん、こっちです！」

「もう、待ってよ葉月ちゃん！」

「こら葉月、走らないの！」

疑似家族がやって来やがりました。

島田妹がまだいるのはご愛嬌。帰りたくない駄々をこねた結果、島田が根負けしたのだ。

「えっ、何あいつら学生なのにできちゃった結婚でもしたのか？」
「端から見ると否定できないのが怖いですね……」

だとしたら島田は何歳であの子を生んだのだろうか。大体17-10で七歳……明久の社会的な死は免れないぞコレ。

「あれ、悠夜に天光院さん？」

「おう」

「こんばんは、吉井君」

ぺこりと頭を下げる天光院。礼儀正しいその態度に、思わず明久と島田の背筋も伸びる。

「あ、うん。……ひょっとしてこのテーブル、狙ってた？」

「ああ、そんなこと気にしないでいいぞ。お前は将来のために、疑似家族体験を楽しんでおけ」

「??？」

「ちょ、ちょっとユウ!？」

訳が分からない、といった表情の明久と、顔を真っ赤にして掴みかかってくる島田。俺の言った意味を理解できてないのは、明久と島田妹ぐらいだ。

「カハハハッ、まあ楽しめ楽しめ。人生いつ何が起こるが分かんねえからな」

「……有野君って、どことなくあれですよ。達観してますよね」

一応22+17で39歳ですから。

（けど悠夜）

（何だよ明久）

（仕事に就くことなくもうすぐ40歳って、かなりヤバい領域の二トなんじゃ）

「放せ天光院！ このバカの首をへし折ってやるんだ！」

「お、落ち着いて下さい有野君っ！ まずその手に持った釘バットを捨てて下さいっ！」

そんな馬鹿騒ぎをしながらも、結局明久のトコの隣のテーブルが空いたので、そこに座る。

和洋中なんでもござれなメニューの中、天光院が持って来たのは、

「何だそれ」

「馬刺です。馬のお肉」

「……フグとかねえのかな」

「さつき、あっちの方になりましたよ」

「マジであんのか」

ホントこの会場何でもあるんじゃない？

とりあえず席を立ち、適当にスパゲティやら鮭のムニエルやらを皿に盛る。

テーブルに戻ると、天光院は美味しそうに馬刺を食していらっしやっつた。

可愛い。

「……あ」

クラスの人々やら明久のバカ伝説やらの話題で話していると、唐突に天光院が声を上げた。

「なんと、それで明久が捕まえていたチュパブラがな。……どうした？」

「い、いえ。何でもないです」

乾いた笑みを浮かべ、天光院は食事に戻る。

ふと先ほどまで天光院が視線を向けていたであろう方向に目をやると、霧島と木下がこちらを見ていた。

彼女たちは慌てて俺から目を逸らす。

……やっぱり、放置したままはまずかっただろうか。

特に霧島。嫉妬で俺を十七の肉片に変えてきそうで怖い。バカテスで刃傷沙汰とかマジ勘弁。

『それでは只今より、ダンス会場にて、フォークダンスパーティーを行います。参加する生徒の皆さんは……』

おっ、もうそんな時間か。食事も一段落したし、折角なので天光院を誘ってみよう。

「なあ天光院」

「はい？」

「Shall We Dance?」

こういう時はカッコつけないとな。

手を差し伸べ唐突に言語を変えてきた俺に、天光院は目をぱちくりとさせると、薄く微笑んで、その手を取った。

「喜んで」

『ぐうつ……！ この光景は目に堪えるぜ……！』

『まあ、相手居るヤツはいいよな。どうせ僕らなんて……』

『僕らってなんだ俺を巻き込むな。俺には一緒に踊ってくれる美佳ちゃんがいるんだよ。今からダンスと一緒に勉強するんだよ』

『その前に美佳ちゃんを画面から引っ張り出す方法を考案しような』

『『『……オセロでもするか』』』

お前ら三人でどうやってオセロするんだよ、オイ。

それはともかく、校庭のど真ん中に置かれた巨大なキャンプファイヤーは、赤い炎を巻き上げながら轟々と燃えていた。

ダンス会場と言っても所詮学校の校庭だ。本格的なダンスホールでもないし、気軽に楽しめるだろう。

そう思っていた時期が、俺にもありました。

「ダンス経験は?」

「まったくありません」

「奇遇だな、俺もだ」

会場に出たはいいが、皆さんダンス上手くて混ざれない。なんだよ。どうしてそんな完璧にステップ踏めるんだよ。

「どっするおっ」

「……ちょっと提案があるんですけど、いいですか？」

そうやって俺に囁かれた言葉は、非常に素晴らしく、また、俺の心を否が応でもドキドキさせるものだった。

〈清涼祭編〉 第56章 二日目・後夜祭（公）（後書き）

後夜祭は公私別、ということ（公）と（私）に分かれます。
テストなんて滅べばいいんだよ！

〈清涼祭編〉第57章 二日目・後夜祭（私）

「うっわ、これまたどエライベストスポットだな」

思わずそんな声が漏れるほど、天光院が提案してくれた場所
旧校舎の屋上から見る景色は美しかった。

夜空に浮かぶ月も、その下で揺らめく炎や踊る人影も、幻想的に
淡く映る。

「百万ドルの景色とか目じゃねえな、コレ」

「でしょう？ 前々から目を付けてたんです、ここ」

新校舎の屋上みたく放送機材があるわけでもなく、ただっ広いス
ペース。

フェンスに寄りかかりながら、俺と天光院は二人だけの時間を満
喫していた。

「おっ、見るよ。明久と島田が踊ってるぞ」

「ふふふ、あれで付き合っていないなんて不思議ですね」

「まったく。しかし明久は後で姫路の折檻が怖いだろうな」

「……？ どうしてそこで姫路さんが出てくるのですか？」

「え？ だって姫路って」

「あ、もういいです。大体分かりました。……これだから有野君は」

何やらブツブツと呟きながら、天光院はそっぽを向いてしまった。
……俺、なんか気に障るようなこと言っただろうか。

「あー……ほ、ほら。霧島と木下がいる。誰か探してるみたいだな」
「……………（ピクッ）」

お、反応あり。

これはあれか、下の状況を実況するばいいのか。

「姫路もいるな。なんかキョロキョロしてる」

「……………」（ピクピクッ）」

「あ、姫路のヤツナンパされてら。…………おっ、いるりちゃんが止めに入ってる。あいつもモテるね！。しかし皆拳動不審だな。…………誰か探してるっぽいけど、誰を探して」

「いい加減にしてくださいっ！！」

唐突に天光院がキレた。

「さつきから代表に木下さんに姫路さん、拳げ句の果てには島原先生！ 女の子の話ばかり！ ワザとやってるんですか！？」

「お、おい、天光院？」

「あーそうでしょうねワザとじゃないんですよね！ 有野君は『そういう人』ですから！」

何！？ 随分やさぐれてるけど、何に対してご立腹なの！？

「な、何が言いたいんだよ」

「だーかーらー！」

そこまで言って、一呼吸置き、

「私の前で、私以外の女の子の話をしないでって言うてんですよ！」

.....は？

天光院は顔を真っ赤にして、ゼーハー荒い息をついている。

「いや、ちょっと待て。えっと.....ええ？」

は
い、いくら俺でも今のは察するぞ！？ 今のって、つまり、これ

「.....気づいちゃいました？」

「あ、いや、ええっと。ちが、俺」

テンパリすぎな俺にそっと近づき、天光院はその頭をポンと俺の胸に預けた。

そのままその細い両腕を俺の背中に回してくる。

お腹の辺りで二つの柔らかい感触が色々俺の語彙ではもう表現しきれないカオスな感じになってうわああああああああ

「私は」

混乱を無理矢理鎮める。

落ち着け。

落ち着いて言葉を聞け。

ぎゅっと、天光院が俺を抱き締めた。

「私、天光院美月は、有野悠夜君のことが好きです」

沈黙。

フォークダンスの音楽が耳を撫でる。

風すら吹かない。

ただひたすらに、沈黙。

「有野君がどんな人でも、私、アナタが好きです」

「……俺は」

「誰かと付き合う資格なんてないってのはナシですよ」

断り文句を潰され、言葉に窮する。

「……話を、聞いてくれ」

「はい」

「俺は一度死んだことがある」

「……はい？」

洗いざらい話した。

前回の世界のこと。

あちらでの家族のこと。

黒い男のこと。

召喚大会で暴走した時のこと。

さすがにいろりちゃん＝ラファエルってのは伏せといたけど、もう秘密は無きに等しい。

すべてを語ったとき、天光院は俯いていた。

「……天光院？」

顔が上がる。

「おい……なんで泣いてんだよ」

「だって、だって、こんなのあんまりじゃないですか！」

そう言って彼女は激昂した。俺に対してではない。そう、世界に對して。

「二回も家族が亡くなるなんて！ そんなのって、ありませんよ！」

俺の身の上話なのに、まるで自分のことのように憤っている。

ああ。

だからなのか。

幼稚な独占欲。

あれは、ここから来ていたのか。
俺、よく鈍感って言われるけど、こりゃ重症かもしれんな。
自分の気持ちすら分かっていなかったって、今時小学生でもなかなかないぞ。

「天光院」

「はい？」

覚悟を決めろ。

話をした時点でもう巻き込んだんだ。

「俺、」

決意を固めろ。

自分に正直になれ。

「俺も、」

存在を固定しろ。

世界に楔を打て。もう離れないように。

この日、俺は。

「俺も、お前のことが

好きだ」

この日、俺は。

彼女と存在意義を重ねた。

「……え？」

「なにその表情。ひよっとして、信じてない？」

「え、これ、夢じゃないですよね」

「当たり前だろ」

「え、いや、だって、代表とか木下さんとか美人だし、姫路さんも可愛いし、島原先生だって」

「あーもう、他の女の話してんのはどっちだよ」

天光院を抱き締め返す。ビクリと驚いたように固まったが、そのままおらずと顔を上げた。

「俺が好きなのはお前だ」
「……………ッ」

そっと、顔を近づける。

天光院はぎゅっと瞳を閉じた。俺もそれに習い目を閉じ、そして。

月明かりの中、影が一つに重なった。

〈《清涼祭編》 FIN 〉

《天光院美月編》第58章 I t r u s t Y o u (前書き)

お久しぶりです。

ひとまず新賞の導入ということでは。

「おはよーさん」

「おはようございます」

清涼祭が終了し、しばらく。

制服の移行期間 要するに今は夏服も冬服もどちらでもOKという期間だ に入り、通学路には白いシャツを着た人影もちらほら見える。

そんな中、俺と、隣を歩く天光院は、揺らぐことなくブレザーを着たままである。

「大分暑くなってきたな……」

「ええ。今日の最高気温は29 ですよ」

「もう夏じゃねえか。強化合宿も近づいてるし、勉強にも本腰入れてくかな」

言いながら考える。天光院は何故か学年主席の霧島に匹敵する得点を叩き出すことができる。これは合宿で明久たちの覗きの成功率が著しく減少することを意味するだろう。

俺がああ覗き騒動に参加するかどうかと言えば、無論NOである。誰が好き好んでババアの裸を見に行くんだ。

「ゲッ、そついや今日昼飯持って来てねえや」

「……『悠夜』君。今日は私が当番ですよ？」

「？ ……ああ。そついえばそつだったっけ」

慌てた自分が恥ずかしい。

「にしても、家に防刃ベストがあつたのは僥倖だな」

「防刃ベスト……？ そんなの、何に使うんですか？」

「そうだな、強いて言えば俺の命綱。ここんとこ毎日が戦争だよ」

首を傾げる天光院。お前はそのままピユアでいてくれ。間違つてもFクラスには染まらないで欲しい。……いくらかもう手遅れな気もするケド。

下足から上履きに履き替えて、天光院と昼休みに待ち合わせをして別れて、Fクラスの前に立つ。

ブレザーを着ているのは下に着込んでいる防刃ベストを悟られなため。

ポケットからスタンガン（二十万ボルト）を引っ張り出し、カバンから中華鍋を取り出す。

左腕に盾代わりの鍋、右手に剣代わりのスタンガン。

さあ、覚悟はできたか？ 俺はできてる。

「（ガラッ）おッはよおおじいさまあああああすッッ！」
『Yeah! Let's party!!』

繰り返す。

毎日が、戦争だ。

今日も俺VSFクラスという頭のおかしな戦力比の死闘は、鉄人の登場によって中断と相成った。

というか姫路や秀吉は参加しないと信じていたのに、裏切られた。背後からいきなり卓袱台の雨を降らされてはたまらない。その時打撲した左肩がまだ痛い。連中、本気で俺の命を刈り取りに来てやる。

「いいか、そろそろ体育でプールの授業に入る。各自水着等を用意しておけ。学校推薦のメーカーのものを購入したいものは後ほど俺のところ」

『『『……………』』』』

Fクラス一同、西村先生の話をもて無視である。

妙に殺気立っているというか、うん、いつでも飛び出せるように身構えていらっしやっただ。狙いは無論この俺。

『俺がひとまず教卓側の出入り口を固める。お前は窓を頼む』

『おうよ、しくじるなよ』

『へっ、そっちこそな』

これがスポーツ関連の会話なら、いかにも青春を謳歌しているように聞こえる。しかし残念ながら練っているのは人殺しの計画。

事情を知らない第三者が聞けばどんなにみずみずしい青少年に見えるのやら。

「……………はあ。貴様ら話を聞かんのは自由だがな」

呆れたような声を漏らす西村先生。まあ、普段常識人の姫路や秀吉まで参戦してるといふのは意外なのだろう。

ここは教育者らしくビシッと行ってもらわなければ。

「先生！ 今朝からクラスメイトが俺に暴行を加えてきます！ 全員殺人未遂です！」

「……………」

あれ？ なんか珍しく西村先生が表情を苦々しくしてる。

「お前ら、一応言っておくが」

と思っただけど気のせいかな。やはり教師は誰に対しても平等に、

「悠夜は卓袱台如きでは死ななぞ。殺すならチェーンソー辺りが必須だ」

アンタそれでも教育者か！？

『チェーンソーだと……そんなデカい得物手元にねえよ』

『落ち着けよ。コッチには最大の武器があるじゃないか』

『ああ。Fクラスを代表すると言っても過言ではないアイツ』

「そう！ この僕だね！」

『『『 島田がな』』』

立ち上がった明久がソツコーで出鼻をくじかれてた。

というかアイツは確かに『観察処分者』なだけに、召喚獣を出されたら対処がキツイ。二重召喚されたら生身での戦闘は勝ち目なしだ。

地獄の底から響いてくるような声なんて気にしない。
気にしないっいたら気にしないんだからね！

昼休み 嗚呼昼休み 昼休み

有野悠夜、魂の一句。

無事死線を潜り抜け、俺はめでたく昼食時間をとっていた。

周囲の男子の目から嫉妬と言う名の怪光線が突き刺さってくるが、
無視。

姫路がなんか言いたそうにしてるけど、無視。廊下の窓からそつ
と覗いてきてる霧島も木下も、珍しく一人で俺の方ガン見しながら
サンドイッチ食ってる秀吉も無視！ 全部無視！！

……上の文を見直せば、我ながら非常に痛々しい人間である。

「今日は豚のしょうが焼きです」

目の前に座っている少女 長い金髪を普段は二つに束ねている
が、今は下ろしている が微笑む。 天光院美月。

俺の、彼女である。

もうこの一文ですべてを察しる。『テメエこれからの展開どうすんだ!?』みたいな天の声など無視。シラネ。俺は俺の道を往くだけなんだよバーカバーカ!

「ほい、ミルクティー」

「ありがとうございますっ」

前もって購買で買っておいたジュースを手渡す。
チツ、と周りからの舌打ち。

「つと、そういえば次の古文の予習が途中だったな。悪い、ちょっとスペース使うぞ」

ただでさえ狭いちゃぶ台の上に、ノートと教科書、おまけに弁当箱二つ。

死ぬほど狭いが我慢。ひとまず箸を置いてシャーペンを手に取る。書いていると芯が勝手に回って文字が太らない、便利なアレだ。

「あつ、ああああ有野君。お口を開けてください」

「?」

そういえばこうすると手がふさがってメシ食べねえジャンとか思っていると、天光院が弁当から卵焼きを箸でつまみ出し、俺に差し出してきた。

意味合いを察し、思わず周囲を見る。

『……………(ギリギリギリギリ)』

『……………(ガツガツガツガツ)』

『……………(ゴンゴンゴンゴン)』

よし、バカばっかりだ。

「んっ」

ぱくつと一口。うめエ。

「よかった、お口に合いましたか」

「ああ」

そう言っつて笑顔を作る彼女はとても美しくて。

「私、今度あの映画見ようと思うんですけど」

周囲の視線も悪意もすべて凍って。

彼女がいれば何でもできると、俺はそう思える。
だからこそ。

夕暮れの日差しを目を細めながら、校門を出る時にいつも思う。

「それじゃあ、また明日」

「おお、帰ったらメールするわ」

何故。

何故彼女の笑顔はこんなにも儂く感じるのだろうか。

「、」

彼女が去っていく。

「なあ！」

「!?!」

突然大声をあげた俺に、天光院は驚いて振り向いた。

「俺は、お前を信じる」

「.....」

「だからお前も、俺を信じてくれ」

そう、継るように言った。

彼女は少し間を置いて、

「何言ってるんですか。私はもう、悠夜君のこと十分信用してますよ」

そう言って笑った。

時々、ズレを感じる。
彼女と俺のズレ。

彼女と周囲のズレ。
彼女と世界のズレ。

彼女の笑顔は何かがおかしい。
彼女の笑顔は何かが足りない。
彼女の笑顔は何かが欠けている。

このズレが致命的な亀裂を生むまで、もう間もないことを、俺は知る由もなかった。

〈天光院美月編〉第58章 I t r u s t Y o u (後書き)

【注意】

この章は読後感重視の人は著しく不快感を催す可能性があります。

この章は『バカテスらしさ』を非常に欠いたお話となっております。

平たく言えば微鬱要素がありますので、ご注意ください。

《天光院美月編》第59章 血闘は誰が為に（前書き）

時間かかりすぎでしたね。すみません。

《天光院美月編》第59章 血闘は誰が為に

「話をしよう」

「あれは今から36万……いや、1万4000回前だったか」

「まあいい、私にとっては過去の出来事だが、彼にとっては多分未来の出来事だ」

「彼には72通りの名前があるから、なんて呼べばいいのか」

「確か最初に会ったときは、
、そうあいつは最初から
言う事を聞かなかった」

「私の言うとおりにしておけばな、まあいいやつだったよ」

世界が回るのは

人が呼吸をするのは

大地が鳴動するのは

海がさざめくのは

空が澄み渡るのは

トウゼンだろう？

なら。

『当然』のごとく不幸になる人がいるのは『当然』か？

有野悠夜は覆す。

一週間の間に世界は激変する。

彼自身が変わる。

いよいよクライマックスとなる戦い。残念ながら俺はこの後プー
ル掃除までつながることを知っているので、とりあえず二人が武器
にしそうな炭酸飲料に加えこっそりとメントスも買ってきた。これ
で勝つる。

「っしやあああ！」

「ぐっつ！ 雄二なんか……っ！」

決着はついたらしい。どうやら明久の負けのようだ。

「お疲れさーん。とりあえずメシ食おうぜ」

激闘を終えた二人は、俺の言葉にほーいと軽く返事をする。

先ほどコンビニで買い出しに行ってきた時のレジ袋3つの中身を
テーブルにぶちまける。

明久のレジ袋 ペプシ、かんてん、ラー油サンドウィッチ（空）

雄二のレジ袋 レモンスカッシュ、ポテチ（空）、和風ステー

キ弁当大盛り（空）

俺のレジ袋 コーラ、ポッキー（空）、夏のスタミナ レバニ

ラ弁当（空）

「貴様アアアアアアアアア！」

「気づいてなかったのかよ……」

言いつつ全員同時に得物を手に取った。ここからはコンマゼロ秒
の世界、一瞬の遅れが命取りとなる！

明久と雄二は即座にペットボトルを振り始めたが、動作的には俺
の方がレスポンスが短い。キャップを開けてメントスをぶち込むだ

けで 武器は完成するのだから。

「お前らには、速さが足りてねえ!!」

「ぐあああああああ!!」

「目が、目がアアアア!!」

WIN、俺。

代償として吉井家の床をコーラ浸しにしてしまったが、まあ勝利のための尊い犠牲ということだ。

と、俺マジ勝ち組などと胸を張っていると、視界やらが回復したらしくペプシとレモンスカッシュが同時に襲い掛かってきた。

しかたねえ、ちよっくらブチのめしてやんよ。

「カッコつけてたワリには一番濡れたの間違いなく悠夜だよ」

「うっせー」

「何気に回避行動取り慣れてないよなお前」

「慣れてるお前らがオカシイんだよ」

その後、ベトベトになった体を洗うため学校のプールに侵入し、めでたく鉄人に捕縛され罰としてプール掃除を言い渡されたのは、まあご存知の通りの展開である。

くよくあさっ！〜

「ていうわけでな、災難だったぜ」

「イヤ、総合的に見てもお主らの自己責任だと思っのじゃが……」

「…………… 妥当な処置」

めでたくプール掃除の罰をいただき、俺はもの見事にふて腐れていた。

「まあ掃除の後には自由にプールを使えるらしいから、ひとまずは天光院でも誘おうかな」

「死ねこのリア充」

「土屋、キャラが崩壊してるわよ」

ありがたい怨嗟の声を背中に浴びつつも、俺はウキウキとしながらAクラスへ向かう。

ようやく天光院の水着姿が見れる…………… ツ！ 俺にとっても読者にとっても、やっとのサーブシーン！ いや挿絵ないケドさ！

「俺の 全身から 溢れ出る 天光院への ラブ！」

奇妙奇天烈なことを叫びながら廊下を疾駆する。

んで。

「ことわられてきました」

「「「えっ」「」」

「なんか、いろいろじじょーがあるみたいでした」

「ちゃぶ台に突っ伏し、再起動不可になった俺の姿が、数分後に確認されましたとき。」

《天光院美月編》第59章 血闘は誰が為に（後書き）

サブタイ見てシリアスだと思ったか？

残念！ 結局は所詮バカテスってことだよ！

ちなみにメントスコーラはリアル噴水ができあがるのでご注意ください。

《天光院美月編》第60章 プール・ジェノサイド（前編）（前書き）

夏休みが気づいたら終わってた。
現在リアルポルナレフ状態。

〈天光院美月編〉第60章 プール・ジェノサイド（前編）

「うーっす。どうしたよ有野。お前から電話なんて珍しい」

『悪いなこんな時間に。少し頼まれてほしいことがあるんだ』

「お前からの頼みごとか……イヤな予感しかしねーけど、まあいい。言ってみるよ」

『プール洗ってくれ』

「ただしお前も来い」

『ですよー』

「……本気でサボる気だったのか、コイツ。信じられん」

『まあいいじゃねえか。あ、代わりと言っては何だがな』

「あん？」

『 島田も来る。島田が水着に着替える。意味は分かるな？』

「任せておk」

『保険』も準備して、プール掃除当日。

校門前に集合と参加メンバーに伝え、俺はイマイチ上がらんテンションのまま校門に寄りかかっていた。さっきからこっちを見ている野良猫とメンチの切り合いをしながら、他の連中が来るのを待つ。

「……やんのかコラ」

「みー」

「調子こいてんのか三毛。かかって来いよ」

「ふみやあ〜」

「……………」

「ふみやっ!?! フシヤアアアアア!?!」

軽く石ころを放り投げてやると、もの見事に鼻へヒット。
驚いた三毛猫は毛を逆立て、俺を睨み付けてきた。

「シヤアアアア!」

「フシヤアアアア!」

「みやああああ!」

「みやああああ! みやああああ!」

「あ、あのー……………有野君?」

「みやあああ、ああ、あ……………」

いつの間にか隣に姫路が居ました。あはっ、気づかなかったぜ

「……………」

「あの……………今のは、一体」

「鍵借りてくる」

「あ、ちよっ!?!」

熱くなった顔を隠しながら、後者へ向けて全力疾走! ヤバイ、
多分耳まで真っ赤だ……………うあああああああ!!

「 迸る青春のリビドーを開放するために鍵をお借りします」
「 待て悠夜、正直今のセリフは突っ込みどころが多すぎて困る」

鉄人は流石にボケを流してくれず、先日のISキャラ人気決定戦
(参加者：俺、鉄人、以上)を髣髴とさせる激闘となった。

「 生徒相手にブラジリアンキックとかマジ教育者失格だろ」
「 話聞く限り当然だろ……」

鉄人から結局フルボッコにされた。鍵を渋々ながら手渡された後、
職員室から出ればイケメンのご登場だ。

「 早いな、武御雷^{たけみかずち}」
「 俺が来た時にはもう大体揃ってたんだがな……」

制服と大分着崩した(ネクタイに至っては付けてすらいない)格
好のこの男。名は武御雷^{さい}砕という。

ギチギチと、油の差されていないブリキみたいな動きで視線をずらす。

「悠夜、お前……」

「ヘイヘイなんですか皆さんその視線。痛いよ痛い」

視線でもうおなかいっぱいだよお！

そんなこんなで、プール掃除、スタート。

《天光院美月編》第60章 プール・ジェノサイド（前編）（後書き）

最近はISの方に時間かけてます。

禁書といいなんで最近のは設定だけで満腹になるヤツばかりなんだ……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6143k/>

バカとテストと転生者

2011年9月12日12時48分発行